

千葉県八千代市

仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書

—西八千代東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査—

1 9 9 6

西八千代東部土地区画整理組合
八千代市西八千代遺跡群調査会

序 文

本市は、首都及びその近郊都市への通勤圏として昭和30年代から市の南部を中心にベッドタウン化が進行し、一方市の北部では一級河川である新川を代表とした中小河川の地の利を受けて、農産物の栽培や牧畜等が営まれており、比較的緑地の保全が図られています。

都心へのよりスピーディな交通手段として、第3セクター方式による東葉高速鉄道株式会社が設立され、西船橋と勝田台間を結ぶ鉄道の建設計画が進められました。八千代市内では4駅の設置が決まり、今回の発掘調査の契機となる八千代緑が丘駅周辺の土地区画整理事業が計画されました。調査に至る経緯については後段でその詳細を述べますが、関係者との度重なる協議の結果発掘調査による遺跡等の記録保存を講ずることになりました。

調査の結果、対象となった5遺跡より旧石器時代、縄文時代、平安時代の遺構・遺物について貴重な資料を得ることができました。特に縄文時代前期中葉～後半の資料についてはこの時期の人々の暮らしを考察するにあたって良好な資料と考えられます。

本書が刊行されるにあたり、資料を公表できる喜びをかみしめると共に、八千代市の先史・有史を考古資料を通じて考える一助になって頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで御指導・御協力をいただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課、八千代市教育委員会、西八千代東部土地区画整理組合をはじめ、関係諸機関の皆様方に対して深く感謝いたします。また、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた調査補助員の方々にもあわせてお礼申し上げます。

平成8年12月15日

八千代市西八千代遺跡群調査会
会長 村 越 利 光

例 言

- 1 本書は、西八千代東部土地区画整理事業の実施に伴い事前に調査した仲ノ台遺跡・ライノ作遺跡・芝山遺跡・ライノ作南遺跡・八幡藪遺跡・仲ノ台遺跡b地点の以上6遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西八千代東部土地区画整理組合の依頼を受け、八千代市西八千代遺跡群調査会が実施した。
- 3 発掘調査は、昭和61年6月12日から昭和63年12月3日まで数次にわたり行った。
- 4 整理作業は、平成6年5月17日から平成6年12月22日まで行った。
- 5 発掘調査は、秋山利光、森 竜哉が担当し、整理作業は、森 竜哉が担当した。
- 6 本書の編集、執筆及び遺物写真撮影は、森が行った。
- 7 本書の作成・刊行に際しては次のように分担して業務にあたった。
遺構図版作成・トレース 落亀昌子 淵上妙子
遺物実測・トレース 遠藤玲子 落亀昌子 小橋禎子 寺島稲子 淵上妙子
遺物拓本 森 竜哉 植田正子 落亀昌子 寺島稲子 見神光恵
組図版作成 岩井治枝 遠藤玲子 落亀昌子 小橋禎子 寺島稲子 淵上妙子
- 8 本書使用の挿図は八千代都市計画基本図（1/2500）及び西八千代東部土地区画整理組合作成の西八千代東部土地区画整理事業現況図（1/500及び1/1000）を基に作成している。
- 9 出土遺物、実測図等は、八千代市教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査から整理作業、原稿執筆にいたる過程において、内外の方々に御指導、御協力いただきました。記して感謝いたします。特に縄文土器については山武郡市文化財センターの中野修秀氏に、石器の石質鑑定には同センター吉田直哉氏に御教示いただきました。あわせて感謝いたします。

凡 例

- 1 本書の遺構番号は、現地発掘調査時において使用した番号を使用した。
- 2 各遺構に表示した標高は、東京湾における平均海水面を基準としている。
- 3 遺構、遺物の挿図は、下記の縮尺で統一している。
住居跡 1/60 土坑、ピット、カマド 1/30
土器 1/3 大、中型石器 1/3 小型石器、石鏃等 2/3
鉄製品、土製品、土錘、土器片錘 2/3
- 4 遺構、遺物の挿図におけるスクリーン表示は、次のとおりである。
遺構 住居跡；炉、カマド（袖部） - - -（床硬化面）
土坑等；焼土、火熱硬化面、貝分布範囲
遺物 繊維土器、須恵器、鉄器の断面

目 次

序文

例言・凡例

| | |
|-------------|-----|
| 第1章 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2章 調査の概要 | 4 |
| 第1節 仲ノ台遺跡 | 4 |
| 第2節 芝山遺跡 | 4 |
| 第3節 ヲイノ作遺跡 | 4 |
| 第4節 ヲイノ作南遺跡 | 4 |
| 第5節 八幡藪遺跡 | 5 |
| 第3章 各遺跡の概要 | 6 |
| 第1節 仲ノ台遺跡 | 6 |
| I 旧石器時代 | 10 |
| II 縄文時代 | 17 |
| a. 住居跡 | 17 |
| b. 土坑 | 35 |
| III 歴史時代 | 63 |
| a. 住居跡 | 63 |
| b. 土坑 | 72 |
| IV 遺構外出土遺物 | 73 |
| V 小結 | 76 |
| 第2節 八幡藪遺跡 | 78 |
| 第3節 芝山遺跡 | 80 |
| I 縄文時代 | 80 |
| a. 住居跡 | 80 |
| b. 土坑 | 86 |
| II 歴史時代 | 91 |
| a. 住居跡 | 91 |
| b. 土坑 | 91 |
| III 遺構外出土遺物 | 94 |
| IV 小結 | 96 |
| 第4節 ヲイノ作遺跡 | 97 |
| I 縄文時代 | 97 |
| a. 住居跡 | 97 |
| b. 土坑・ピット | 103 |
| II 遺構外出土遺物 | 111 |
| III 小結 | 114 |

| | | |
|-----|---------|-----|
| 第5節 | ヲイノ作南遺跡 | 115 |
| I | 縄文時代 | 115 |
| a. | 住居跡 | 115 |
| b. | ピット | 133 |
| II | 遺構外出土遺物 | 140 |
| III | 小結 | 141 |

調査抄録

付 篇 仲ノ台遺跡 b 地点

写真図版目次

遺跡全景

- 図版 1 仲ノ台遺跡東側地区全景
図版 2 仲ノ台遺跡西側地区全景
図版 3 芝山・ライノ作遺跡全景
ライノ作南遺跡全景

仲ノ台遺跡

- 図版 4 01～03住全景
図版 5 04住全景・04住カマド全景
図版 6 05住遺物出土状況・土器出土状況
05住全景
図版 7 06住全景・石七出土状況
石斧出土状況・土器出土状況
図版 8 07住全景・08住遺物出土状況・08住全景
図版 9 09住全景・10住遺物分布状況・10住全景
図版10 12住遺物出土状況・12住全景
13住全景・14住全景
図版11 01遺物集中地点・02遺物集中地点
図版12 01～04土坑・07～09土坑・11土坑全景
図版13 10土坑遺物出土状況・10土坑全景
12・13・15・17・20・22土坑全景
図版14 23・26・27～30・32・34土坑全景
図版15 35～42土坑全景
図版16 43・44・48～52・58土坑全景
図版17 59土坑遺物出土状況・59土坑全景
八幡藪P-01全景
図版18 01住出土遺物
図版19 02住出土遺物
図版20 03住・04住出土遺物
図版21 05住出土遺物
図版22 06住出土遺物
図版23 07住出土遺物
図版24 08～10住出土遺物
図版25 12～14住出土遺物
図版26 01・02土坑出土遺物
図版27 土坑内出土遺物
図版28 遺構外出土遺物(1)
図版29 遺構外出土遺物(2)

図版30 01遺物集中地点出土遺物

図版31 02遺物集中地点出土遺物

八幡藪遺跡

図版32 トレンチ出土遺物

芝山遺跡

図版33 01住全景・01住カマド全景
02・03住全景 03住遺物出土状況

図版34 02～09土坑全景

図版35 01住・03土坑出土遺物

図版36 02住・03住出土遺物

図版37 遺構外出土遺物(1)

図版38 遺構外出土遺物(2)

ライノ作遺跡

図版39 02住遺物出土状況 02・03住全景

図版40 03住遺物出土状況 蜂ノ巣石出土状況
浅鉢出土状況

図版41 02・05～09土坑全景

図版42 P-01・02・04～06全景

図版43 02住出土遺物

図版44 03住出土遺物

図版45 P-01・02出土遺物 09土坑出土遺物

図版46 遺構外出土遺物(1)

図版47 遺構外出土遺物(2)

ライノ作南遺跡

図版48 01～03住全景

図版49 05住遺物・貝出土状況 05住全景

図版50 P-02・11・13・16～18・20・21全景

図版51 01住出土遺物(1)・(2) 02住出土遺物

図版52 03住出土遺物(1)

図版53 03住出土遺物(2)

図版54 03住出土遺物(3)

図版55 05住出土遺物(1)

図版56 05住出土遺物(2)

図版57 05住出土遺物(3)

図版58 ピット内出土遺物 遺構外出土遺物

挿 図 目 次

| | | |
|------|-----------------------|----|
| 図 1 | 事業範囲及び各遺跡の位置 | 2 |
| 図 2 | 仲ノ台遺跡全測図 | 7 |
| 図 3 | 仲ノ台遺跡（東側地区）遺構配置図 | 8 |
| 図 4 | 仲ノ台遺跡（西側地区）遺構配置図 | 9 |
| 図 5 | 東側地区下層トレンチ設定図 | 11 |
| 図 6 | 01遺物集中地点出土状況 | 12 |
| 図 7 | 01遺物集中地点出土遺物実測図(1) | 13 |
| 図 8 | 01遺物集中地点出土遺物実測図(2) | 14 |
| 図 9 | 02遺物集中地点出土遺物実測図 | 16 |
| 図 10 | 01住遺構平面図 | 18 |
| 図 11 | 01住出土遺物実測図 | 19 |
| 図 12 | 02住遺構平面図 | 20 |
| 図 13 | 02住出土遺物実測図 | 21 |
| 図 14 | 03住遺構平面図・出土遺物実測図 | 22 |
| 図 15 | 05住遺構平面図 | 23 |
| 図 16 | 05住出土遺物実測図 | 24 |
| 図 17 | 06住遺構平面図 | 25 |
| 図 18 | 06住出土遺物実測図 | 26 |
| 図 19 | 07住遺構平面図 | 27 |
| 図 20 | 07住出土遺物実測図(1) | 28 |
| 図 21 | 07住出土遺物実測図(2) | 29 |
| 図 22 | 08住遺構平面図 | 30 |
| 図 23 | 08住出土遺物実測図 | 30 |
| 図 24 | 09住遺構平面図 | 31 |
| 図 25 | 09住出土遺物実測図 | 32 |
| 図 26 | 10住遺構平面図 | 33 |
| 図 27 | 10住出土遺物実測図 | 33 |
| 図 28 | 11住遺構平面図 | 34 |
| 図 29 | 01土坑遺構平面図 | 35 |
| 図 30 | 02・03土坑遺構平面図 | 37 |
| 図 31 | 04・06・08・09・11土坑遺構平面図 | 38 |
| 図 32 | 07土坑遺構平面図 | 39 |
| 図 33 | 12・13・15土坑遺構平面図 | 40 |
| 図 34 | 14・18土坑遺構平面図 | 41 |
| 図 35 | 17・19・22土坑遺構平面図 | 43 |
| 図 36 | 20・23・24・25土坑遺構平面図 | 44 |
| 図 37 | 26・27土坑遺構平面図 | 45 |

| | | |
|------|--|----|
| 図 38 | 28・29土坑遺構平面図 | 47 |
| 図 39 | 30・32・33土坑遺構平面図 | 48 |
| 図 40 | 34・35・36・37土坑遺構平面図 | 49 |
| 図 41 | 38・39・40土坑遺構平面図 | 51 |
| 図 42 | 41・42・44土坑遺構平面図 | 52 |
| 図 43 | 43・45土坑遺構平面図 | 53 |
| 図 44 | 46・47・48土坑遺構平面図 | 55 |
| 図 45 | 49・51土坑遺構平面図 | 56 |
| 図 46 | 50・52土坑遺構平面図 | 57 |
| 図 47 | 53・54・55・57土坑遺構平面図 | 59 |
| 図 48 | 56・58土坑遺構平面図 | 60 |
| 図 49 | 01・02土坑内出土遺物実測図 | 61 |
| 図 50 | 05・07・09・11・14・15・23・26・28・30・31・43・44・45・46・50 土坑内出土遺物実測図 | 62 |
| 図 51 | 04住遺構平面図 | 64 |
| 図 52 | 04住カマド平面図 | 64 |
| 図 53 | 04住出土遺物実測図 | 65 |
| 図 54 | 12住遺構平面図・カマド平面図 | 66 |
| 図 55 | 12住出土遺物実測図 | 67 |
| 図 56 | 13住遺構平面図 | 68 |
| 図 57 | 13住カマド平面図 | 68 |
| 図 58 | 13住出土遺物実測図 | 69 |
| 図 59 | 14住遺構平面図・カマド平面図 | 70 |
| 図 60 | 14住出土遺物実測図 | 71 |
| 図 61 | 10・59土坑遺構平面図・出土遺物実測図 | 72 |
| 図 62 | 遺構外出土遺物実測図(1) | 74 |
| 図 63 | 遺構外出土遺物実測図(2) | 75 |
| 図 64 | 八幡藪遺跡全測図・遺構配置図 | 77 |
| 図 65 | P-01遺構平面図 | 79 |
| 図 66 | 八幡藪遺跡トレンチ内出土遺物実測図 | 79 |
| 図 67 | 芝山遺跡全測図 | 81 |
| 図 68 | 芝山遺跡遺構配置図 | 82 |
| 図 69 | 02住遺構平面図 | 83 |
| 図 70 | 02住出土遺物実測図 | 84 |
| 図 71 | 03住遺構平面図 | 85 |
| 図 72 | 03住出土遺物実測図 | 85 |
| 図 73 | 01・02・09・10土坑遺構平面図 | 87 |
| 図 74 | 04・05土坑遺構平面図 | 88 |
| 図 75 | 06・07・08土坑遺構平面図 | 89 |
| 図 76 | 02・04・05・06・07・10土坑内出土遺物実測図 | 90 |
| 図 77 | 01住遺構平面図・カマド平面図 | 92 |

| | | |
|------|----------------------------------|-----|
| 図 78 | 01住出土遺物実測図 | 93 |
| 図 79 | 03土坑遺構平面図・遺物実測図 | 94 |
| 図 80 | 遺構外出土遺物実測図 | 95 |
| 図 81 | ヲイノ作遺跡（北側部分）全測図・遺構配置図 | 98 |
| 図 82 | ヲイノ作遺跡（南側部分）全測図・遺構配置図 | 99 |
| 図 83 | 02住遺構平面図 | 100 |
| 図 84 | 02住出土遺物実測図 | 101 |
| 図 85 | 03住遺構平面図 | 102 |
| 図 86 | 03住出土遺物実測図(1) | 102 |
| 図 87 | 03住出土遺物実測図(2) | 103 |
| 図 88 | 01・02・03・04土坑遺構平面図 | 105 |
| 図 89 | 05・06・07土坑遺構平面図 | 106 |
| 図 90 | 08・09・10土坑遺構平面図 | 107 |
| 図 91 | P-01・02・03遺構平面図 | 108 |
| 図 92 | P-01・02/02・03・04・05・07土坑内出土遺物実測図 | 109 |
| 図 93 | 09土坑内出土遺物実測図 | 110 |
| 図 94 | 遺構外出土遺物実測図(1) | 112 |
| 図 95 | 遺構外出土遺物実測図(2) | 113 |
| 図 96 | ヲイノ作南遺跡全測図 | 116 |
| 図 97 | ヲイノ作南遺跡遺構配置図 | 117 |
| 図 98 | 01住遺構平面図 | 118 |
| 図 99 | 01住出土遺物実測図 | 119 |
| 図100 | 02住遺構平面図 | 120 |
| 図101 | 02住出土遺物実測図 | 120 |
| 図102 | 03住遺構平面図 | 123 |
| 図103 | 03住出土遺物実測図(1) | 124 |
| 図104 | 03住出土遺物実測図(2) | 125 |
| 図105 | 03住出土遺物実測図(3) | 126 |
| 図106 | 05住遺構平面図 | 128 |
| 図107 | 05住出土遺物実測図(1) | 129 |
| 図108 | 05住出土遺物実測図(2) | 130 |
| 図109 | 05住出土遺物実測図(3) | 131 |
| 図110 | 05住出土遺物実測図(4) | 132 |
| 図111 | P-02・09・10遺構平面図 | 134 |
| 図112 | P-11・13・14遺構平面図 | 135 |
| 図113 | P-16・18・19遺構平面図 | 136 |
| 図114 | P-17・20・21遺構平面図 | 137 |
| 図115 | ピット内出土遺物実測図(1) | 138 |
| 図116 | ピット内出土遺物実測図(2) | 139 |
| 図117 | 遺構外出土遺物実測図 | 140 |

第1章 調査に至る経緯と調査方法

調査に至る経緯 八千代市大和田新田地先において、現八千代緑が丘駅（東葉高速線）周辺の土地区画整理事業が組合施工により計画されるにあたり、埋蔵文化財について調整が必要となった。

昭和59年10月、野村不動産株式会社から照会された該地の埋蔵文化財の所在について、県教育委員会、市教育委員会では現地踏査、承諾地内の試掘により遺跡が所在する旨回答した。その後、西八千代東部土地区画整理組合設立準備委員会の発足により、昭和61年2月再度照会文書が提出された。事業面積は約51haである。野村不動産株式会社の照会時において、未承諾地については試掘後遺跡の有無について回答するという県教育委員会の指導があったため回答が数回に亘っていた。今回それらをまとめて回答することとなった。遺跡の種類、面積は、「縄文式土器・土師器散布地」、「縄文時代・平安時代集落跡」等の6か所で124,260㎡である。それら遺跡等の取扱いについては協議の結果、記録保存を講ずることとなっていたため、八千代市西八千代遺跡群調査会の発足後順次発掘調査を実施していった。

調査方法 各遺跡毎に確認調査を実施したのち、遺構密度、遺物量を考慮して調査範囲を設定し、本調査を実施した。遺構密度によっては確認調査のなかで遺構調査を実施し、発掘調査を終了した場合もある。

調査区の設定については、公共座標に平行して20m方眼の大グリッドを設定し、その内部を5m方眼の小グリッドとして16区画に分割する。グリッドの呼称は東西方向にアルファベット、南北方向に数字を20mピッチでふり、小グリッドを最小単位として例えばA1区1～16グリッド（A1-1～16G）とした。この小グリッド内に2m×4mのトレンチを設定し、確認調査を実施した。本調査においても同様とした。

遺構調査については、住居跡は土層観察用土手を十字に設定し掘り下げを行った。遺物は柱状に残し図面化して取り上げた。カマド、炉は、床面精査後個別に調査した。ピット、土坑は、平面形が円形の場合は半截、楕円形の場合は落とし穴状遺構は短軸方向で半截、他は長軸方向で半截し、土層堆積状況を観察した。下層の旧石器時代については、台地上平坦部に20mピッチで2m×2mのトレンチを設定し、Ⅶ～Ⅸ層を目安として確認調査を実施した。遺物の出土状況をみながら随時拡張した。また、遺構のプラン確認時において石器等（旧石器時代）遺物が出土した地点については、Ⅳ～Ⅴ層を目安として確認調査を実施した。

遺物包含層については、確認調査時の知見において縄文早期の遺物量が極端に少量である点、前期の遺物は遺構とともに主体を占めるため小グリッド毎で各層の一括取り上げとした。

基本層序は、1層 茶褐色土（根等によるカクラン層）、2層 黒色土（腐食土層）、3層 褐色土（新期テフラ層）、4層 暗褐色土、5層 ソフトローム（Ⅲ層）となる。遺物の出土層位は、奈良・平安時代の土師器、須恵器等は2層中で、縄文時代早～後期については3層下位～4層中位となっている。よって遺構の確認面は、奈良・平安時代では3層中で、縄文時代については4層中においておこなった。

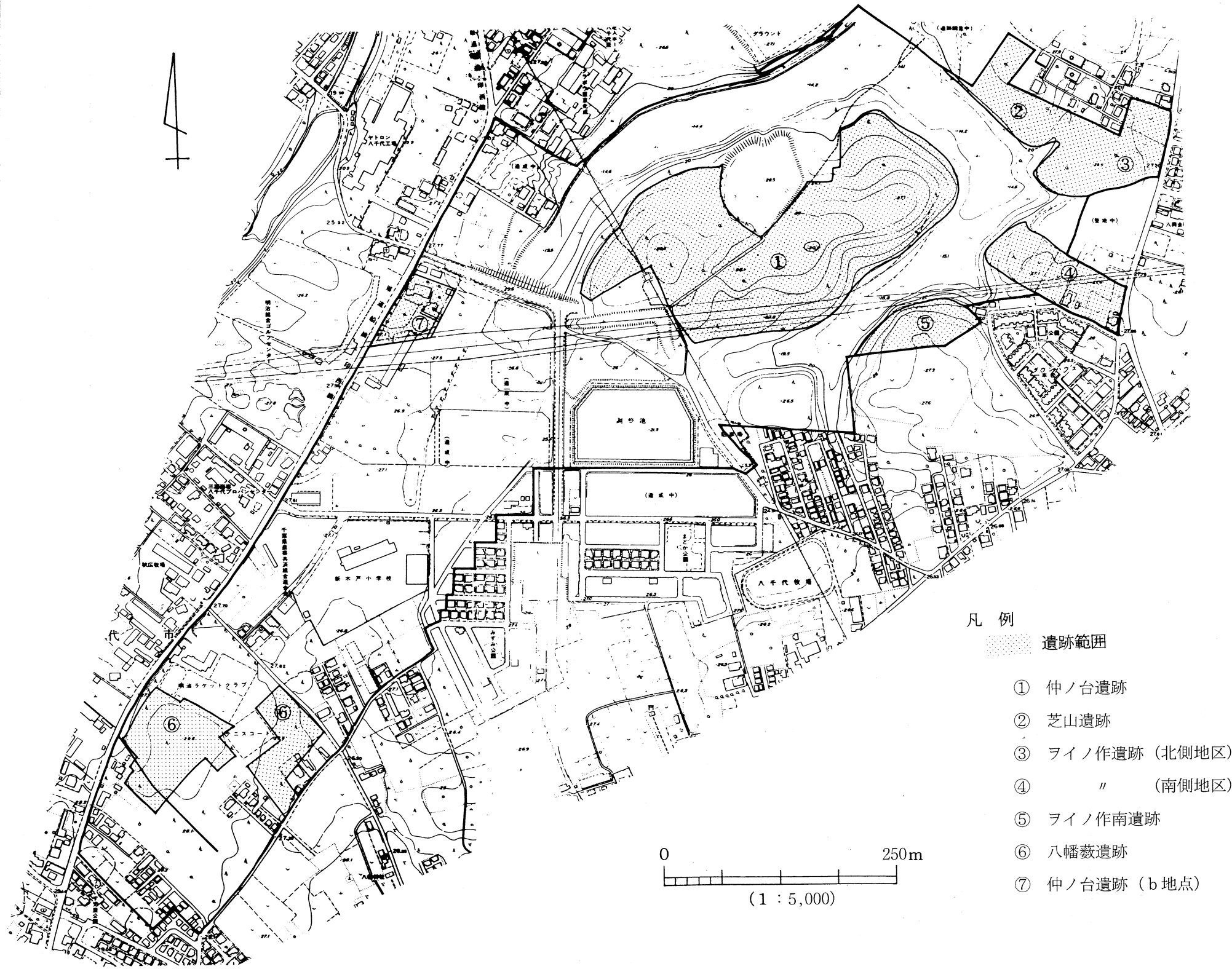


図1 事業範囲及び各遺跡の位置

第2章 調査の概要

第1節 仲ノ台遺跡

- ① 所在地 大和田新田字仲ノ台1192番地他
- ② 確認調査期間 昭和61年6月26日～昭和61年9月18日（東側地区）
昭和62年8月3日～昭和62年11月27日（西側地区）
- ③ 確認調査面積等 28,000㎡の内2,800㎡ 本調査対象面積 14,600㎡（東側地区）
37,000㎡の内3,700㎡ 本調査対象面積 11,000㎡（西側地区）
- ④ 本調査期間 昭和62年1月19日～昭和62年5月1日（東側地区）
昭和63年1月11日～昭和63年3月23日（西側地区）
- ⑤ 検出遺構 旧石器時代遺物集中地点 2ヵ所 縄文時代前期住居跡 10軒
縄文時代土坑 53基 平安時代住居跡 4軒 平安時代土坑 2基

第2節 芝山遺跡

- ① 所在地 大和田新田字芝山899番地他
- ② 確認調査期間 昭和61年10月6日～昭和61年12月3日（ヲイノ作遺跡含む。）
- ③ 確認調査面積等 31,630㎡の内3,163㎡ 本調査対象面積 3,500㎡（芝山遺跡のみ）
- ④ 本調査期間 昭和62年5月8日～昭和62年6月30日
- ⑤ 検出遺構 縄文時代前期住居跡 2軒 縄文時代土坑 9基
平安時代住居跡 1軒 平安時代土坑 1基

第3節 ヲイノ作遺跡

- ① 所在地 大和田新田字ヲイノ作900番地他
- ② 確認調査期間 昭和61年10月6日～昭和61年12月3日（芝山遺跡含む。）
- ③ 確認調査面積等 31,630㎡の内3,163㎡ 本調査対象面積 1,800㎡（ヲイノ作遺跡のみ）
- ④ 本調査期間 昭和62年7月1日～昭和62年7月31日
- ⑤ 検出遺構 縄文時代前期住居跡 1軒 縄文時代後期住居跡 1軒
縄文時代土坑・ピット 16基

第4節 ヲイノ作南遺跡

- ① 所在地 大和田新田字ヲイノ作911番地
- ② 確認調査期間 昭和62年11月30日～昭和62年12月10日
- ③ 確認調査面積等 5,700㎡の内570㎡ 本調査対象面積 2,000㎡
- ④ 本調査期間 昭和63年5月6日～昭和63年6月18日
- ⑤ 検出遺構 縄文時代前期住居跡 4軒 縄文時代ピット 12基

第5節 八幡藪遺跡

- ① 所在地 大和田新田字八幡藪1029-3他
- ② 確認調査期間 昭和63年6月29日～昭和63年9月2日
- ③ 確認調査面積等 19,600㎡の内1,960㎡ 本調査対象面積 0㎡
- ④ 本調査期間 確認調査のみ実施。ピット1基は拡張後調査。
- ⑤ 検出遺構 縄文時代ピット 1基

周辺遺跡の参考文献一覧

- 落合章雄 「八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡」
(財)千葉県文化財センター 1989
- 大鷹依子 豊田秀治 「八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡 他」
(財)千葉県文化財センター 1994
- 八千代市教育委員会 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告」平成6年度
八千代市教育委員会 「八千代市埋蔵文化財調査年報」一平成6年度一
八千代市教育委員会 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告」平成7年度
八千代市教育委員会 「八千代市埋蔵文化財調査年報」一平成6年度版一

第3章 各遺跡の概要

第1節 仲ノ台遺跡

本遺跡は調査会設立後の最初の調査である。東側部分は当初伐採の予定がたたなかったため、下草刈りを実施したのち確認調査を行った。層序の項で若干ふれたが、表土下に疑似ロームと思われる新期テフラ層の堆積が10～15cm程度確認された。奈良・平安時代の遺構はこの層を明らかに掘り込んでいたので確認調査時においては新期テフラ層中で一度とめ、遺構の有無を確認して再度ソフトロームまで掘り下げて縄文時代の遺構確認を実施した。なお、トレンチの掘り下げは人力で行った。また、本遺跡中央北側の空白部分は当初北からの谷が入っていたが、残土処理の目的で谷を埋めたという経緯があり、調査範囲から除外された。

トレンチ出土の遺物の分布状況は北側緩斜面及び東側台地先端部で20～150点程度と多い。台地平坦部中央から南側に至っては0～3点程度と極端に少ない状況である。この分布状況と遺構配置とを照らし合わせてみると、住居跡では近接したトレンチでもやはり多い状況である。土坑についても密生している範囲では遺物点数が多く、包含層の存在が想定される。

本調査では重機による表土除去について、新期テフラ層上面と暗褐色土下層のおおむね2回にわけて遺構確認を実施した。奈良・平安時代の住居跡は15～20cm程度と掘り込みが浅かったため、ソフトローム層上面では遺構が消失してしまう可能性があった。これとは別に重機による新期テフラ層中掘り下げ段階で縄文前期の遺物が集中して出土したため、ここでいったん止め人力により掘り下げを行った。結果は遺構は検出されなかった。

検出された遺構は旧石器時代(VII～IX層)の遺物集中地点2ヵ所、縄文時代の住居跡10軒、土坑53基、平安時代の住居跡4軒、土坑2基である。

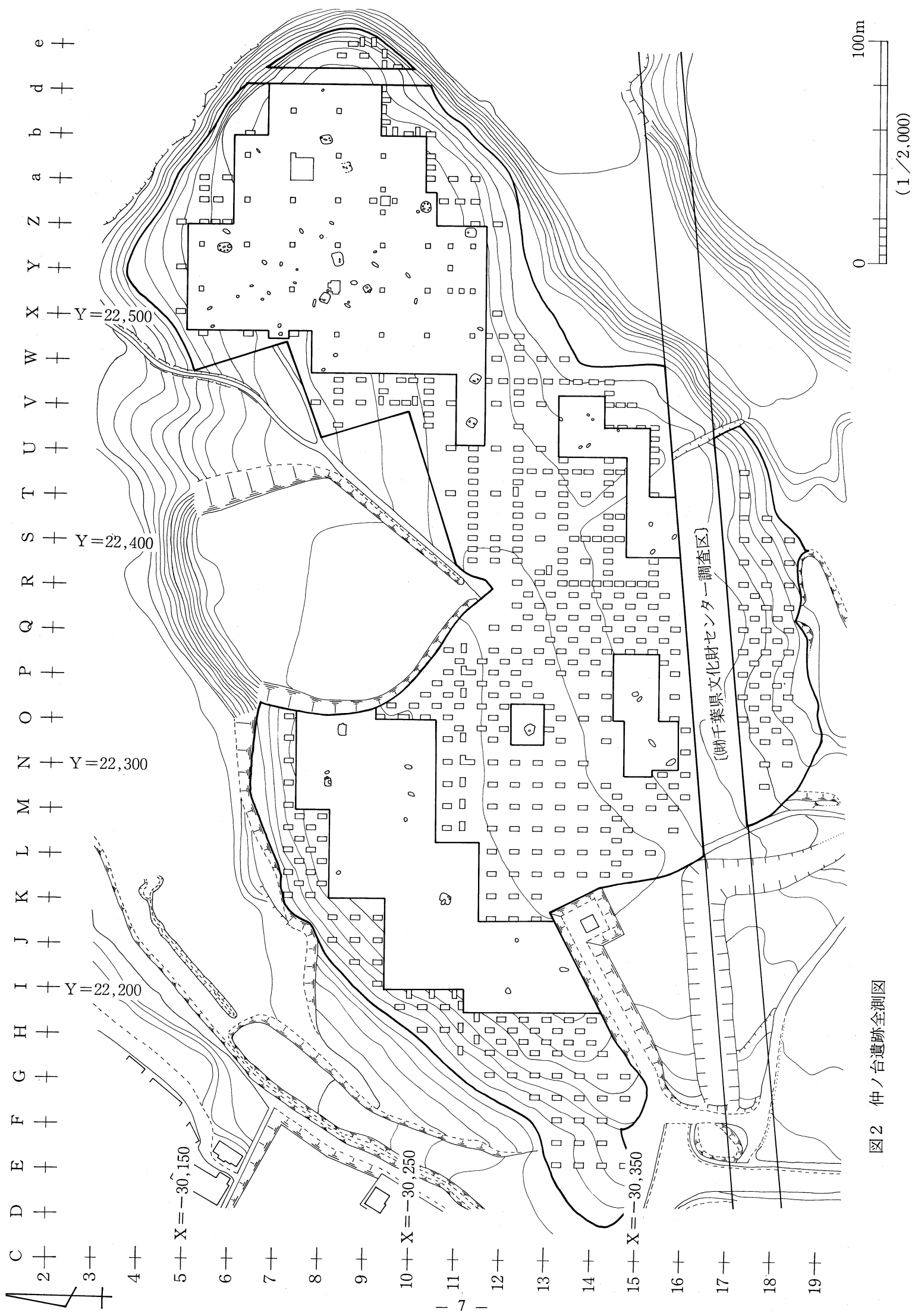


図2 仲ノ台遺跡全測図

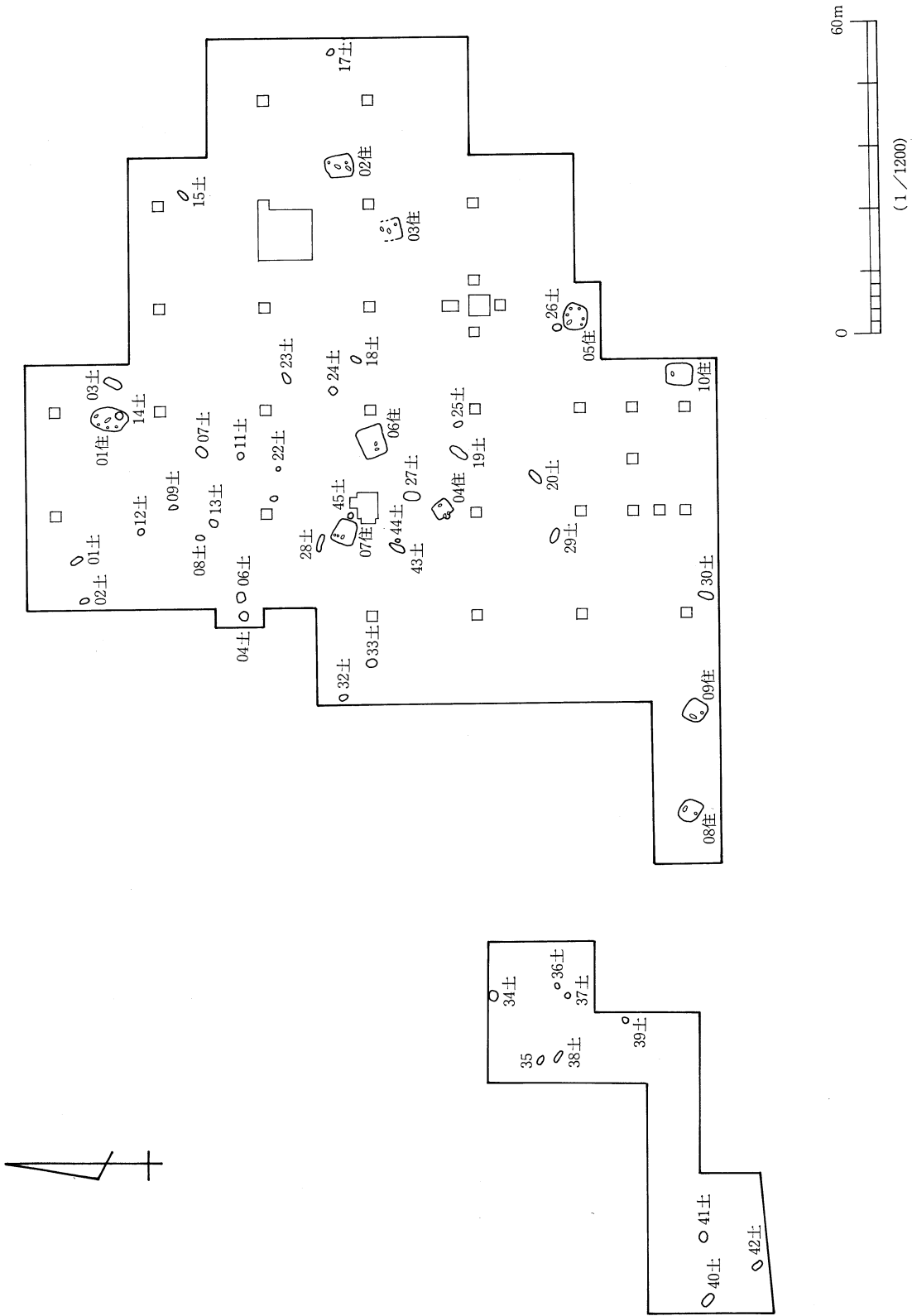


図3 仲ノ台遺跡（東側地区）遺構配置図

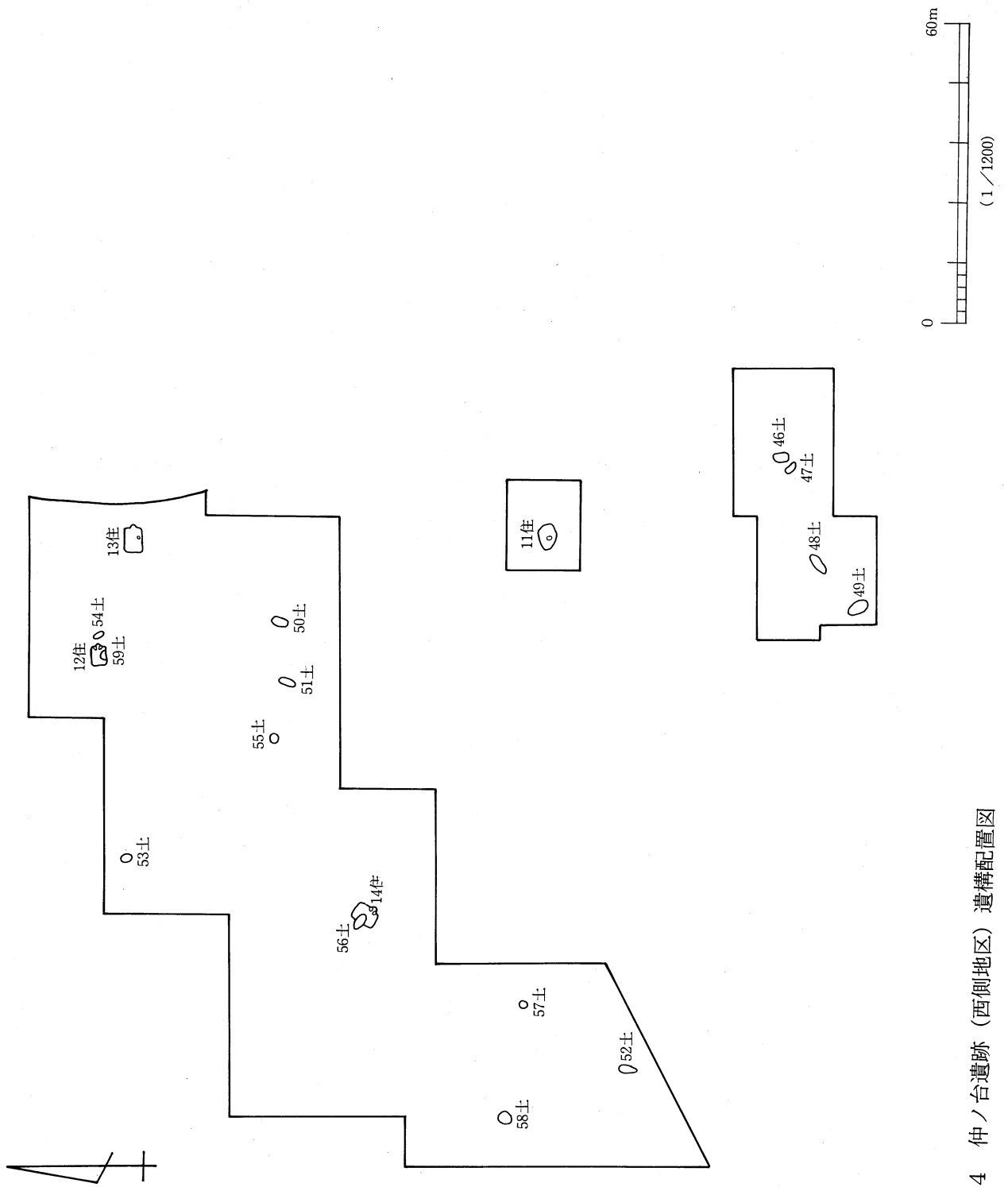


図4 仲ノ台遺跡 (西側地区) 遺構配置図

I 旧石器時代

概要 当初遺構のプラン検出作業段階において、ソフトローム直上層から槍先形尖頭器が出土したことが端緒となっている。図5に示すa7拡張区がその部分だが、IV～V層上面まで掘り下げたが剥片等遺物は皆無であった。更に調査区を20mピッチで設定し下層の確認調査に努めた。南側台地縁辺部には若干密に設定した。VII～IX層を確認面とする遺物集中地点2カ所を検出した。なお、調査者の力量不足により西側調査区については、下層確認調査を実施できなかったことをお詫びしたい。

01遺物集中地点（図5～8 図版11・30）

出土状況 VII層～IX層上層を出土層位とする。位置はX8-9、13、14Gにかけて分布する。遺物は細長く分布しており、長い方で3.6m、短い方で1.5m程度の規模をもつ。総遺物点数は20点を数える程度と少ないが、北及び西側にはトレンチを設定していないため、範囲としては広がる可能性が考えられる。

出土遺物 図示し得た点数は18点で出土したほとんどを含んでいるが、製品と思われるものはなく全て石核ないし剥片である。

| 挿図 番号 | 器種 | 石質 | 計測値 | | | 備考 |
|----------|----|------|--------|--------|-------|--------------|
| | | | 長 (cm) | 幅 (cm) | 重量(g) | |
| 1 | 石核 | 珪質頁岩 | 5.7 | 5.3 | 49.7 | |
| 2 | 剥片 | 〃 | 4.5 | 3.8 | 20.0 | 下辺に使用痕あり。 |
| 3 | 石核 | 〃 | 3.9 | 3.4 | 25.8 | |
| 4 | 剥片 | 〃 | 4.0 | 1.6 | 1.5 | |
| 5 | 剥片 | 〃 | 3.8 | 3.1 | 11.5 | 上辺、右辺に使用痕あり。 |
| 6 | 剥片 | 〃 | 3.5 | 2.4 | 5.9 | |
| 7 | 剥片 | 〃 | 3.7 | 3.4 | 7.1 | 左辺に使用痕あり。 |
| 8 | 剥片 | 〃 | 3.0 | 2.0 | 2.8 | 下辺に使用痕あり。 |
| 9 | 剥片 | 〃 | 2.8 | 2.1 | 2.4 | |
| 10 | 剥片 | 〃 | 2.3 | 2.6 | 2.7 | |
| 11 | 剥片 | 〃 | 4.0 | 1.3 | 3.3 | |
| 12 | 剥片 | 〃 | 2.2 | 2.2 | 2.2 | |
| 13 | 剥片 | 〃 | 2.6 | 1.4 | 1.0 | |
| 14 | 剥片 | 〃 | 3.2 | 2.2 | 1.5 | |
| 15 | 剥片 | 〃 | 3.0 | 1.6 | 2.3 | 右辺に使用痕あり。 |
| 16 | 剥片 | 〃 | 1.1 | 1.8 | 0.5 | |
| 17 | 剥片 | 〃 | 2.3 | 1.5 | 0.8 | |
| 18 | 剥片 | 〃 | 2.3 | 1.3 | 1.6 | |

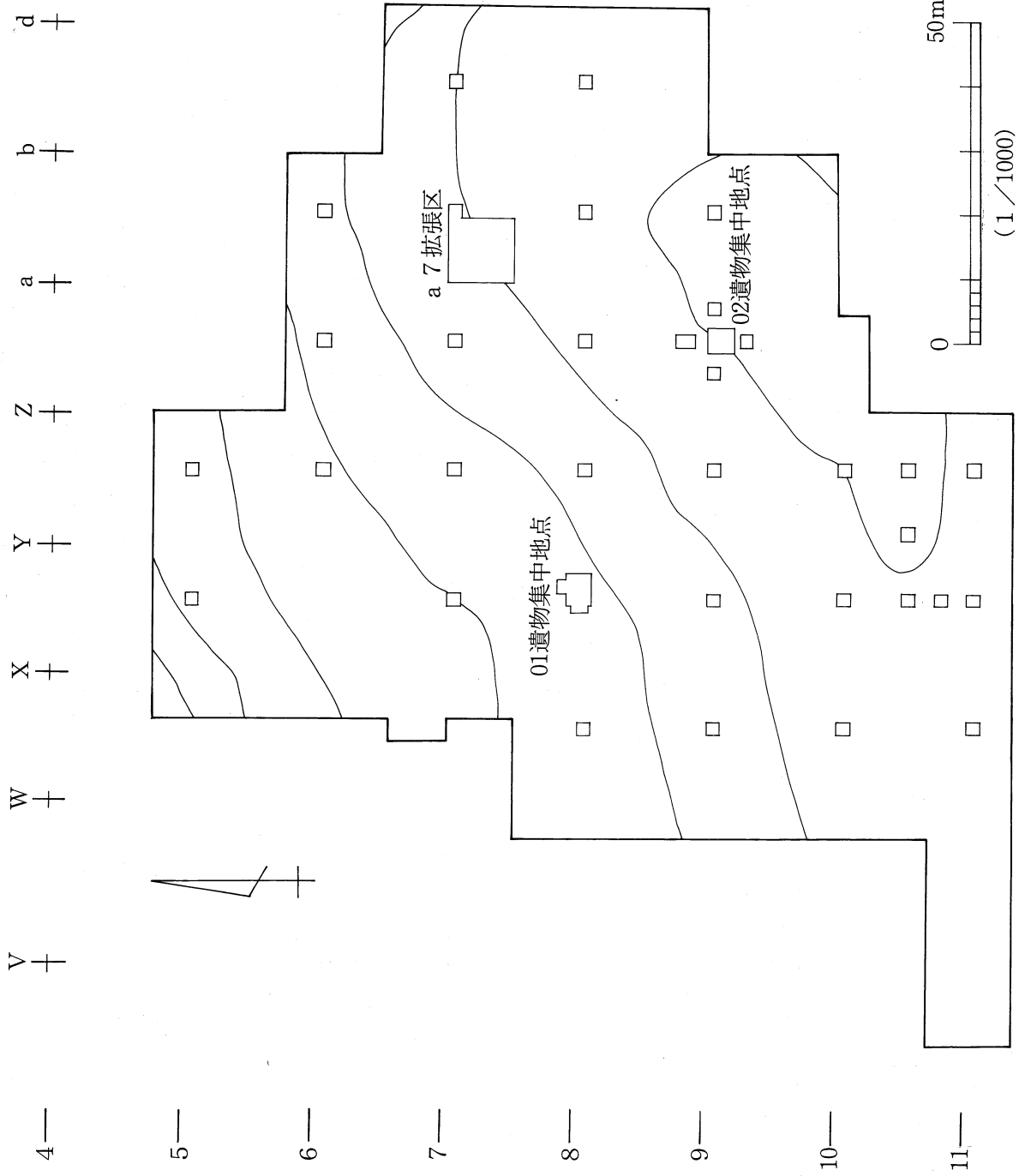


図5 東側地区下層トレンチ設定図

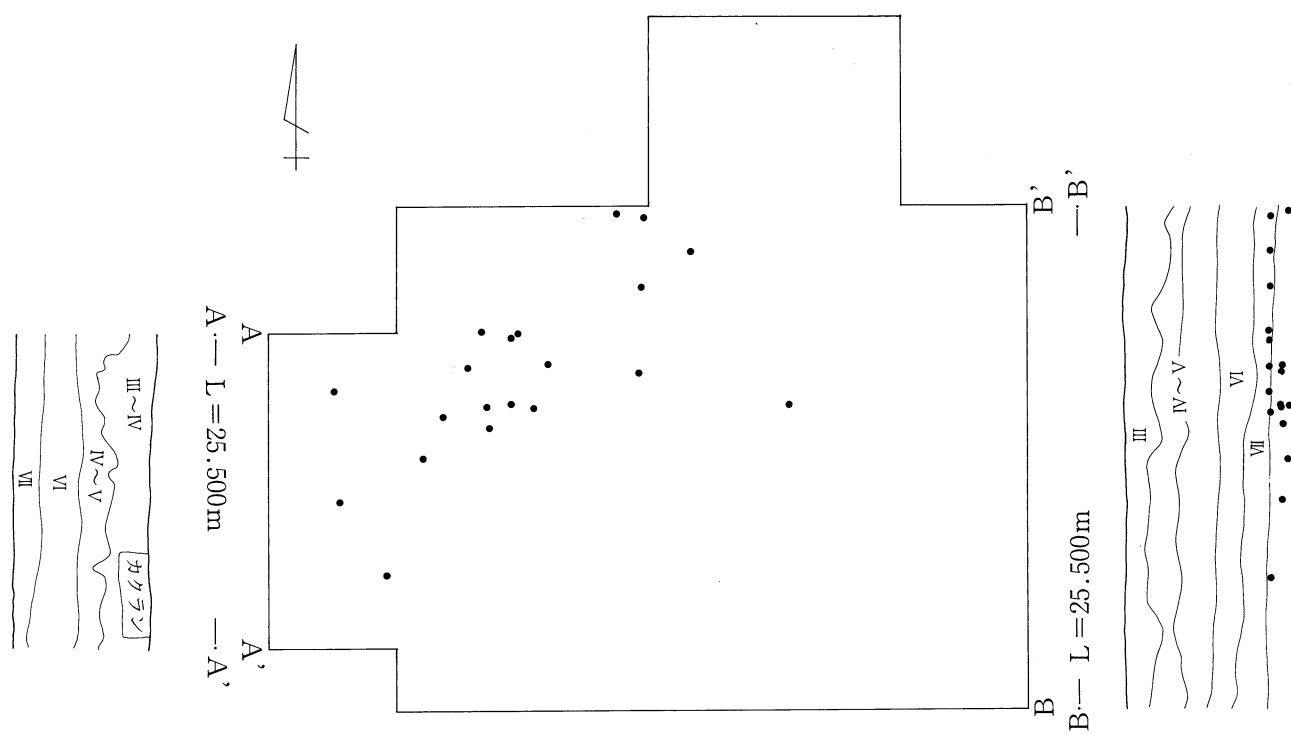


図6 01遺物集中地点出土状況

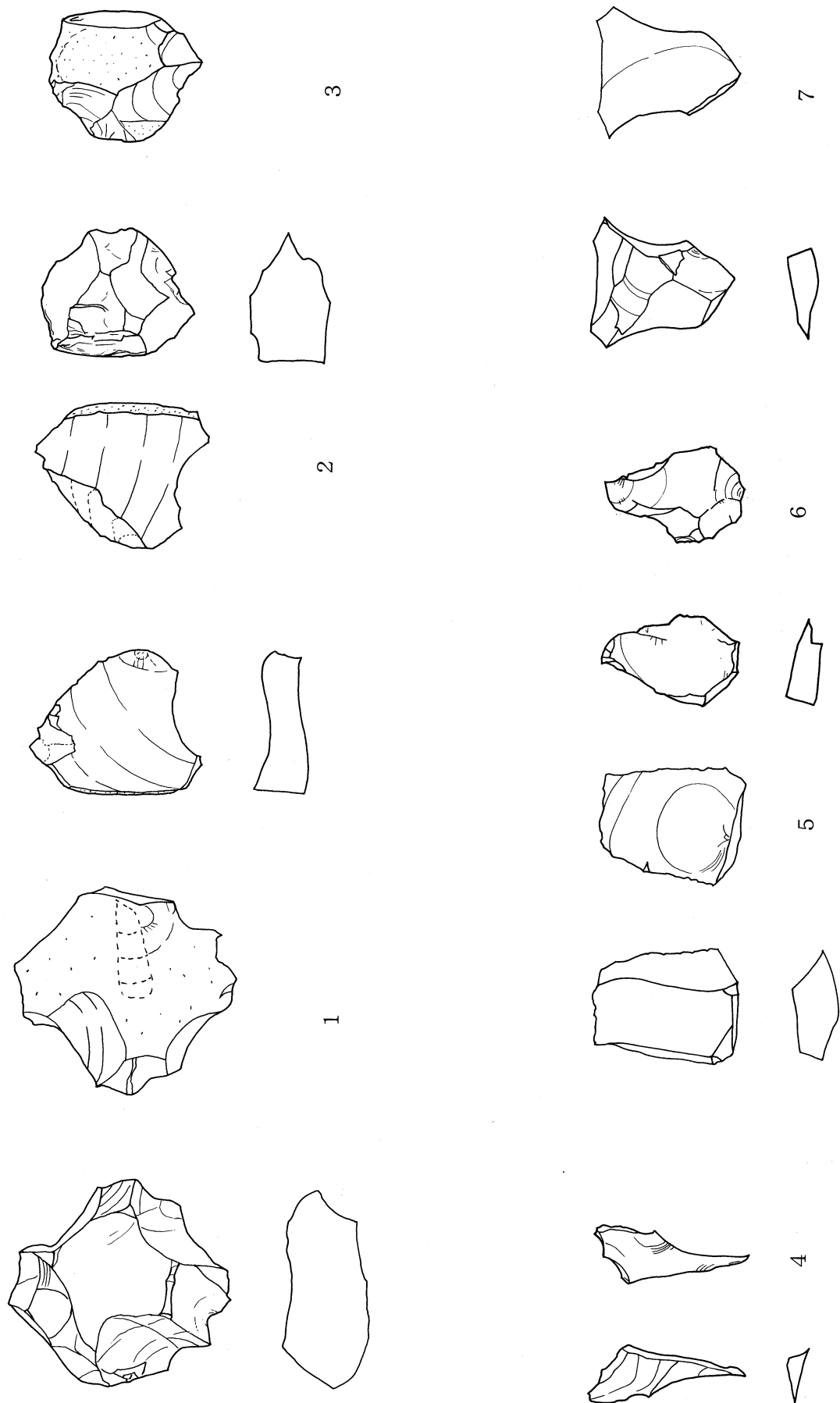


图7 01遺物集中地点出土遺物実測図(1)

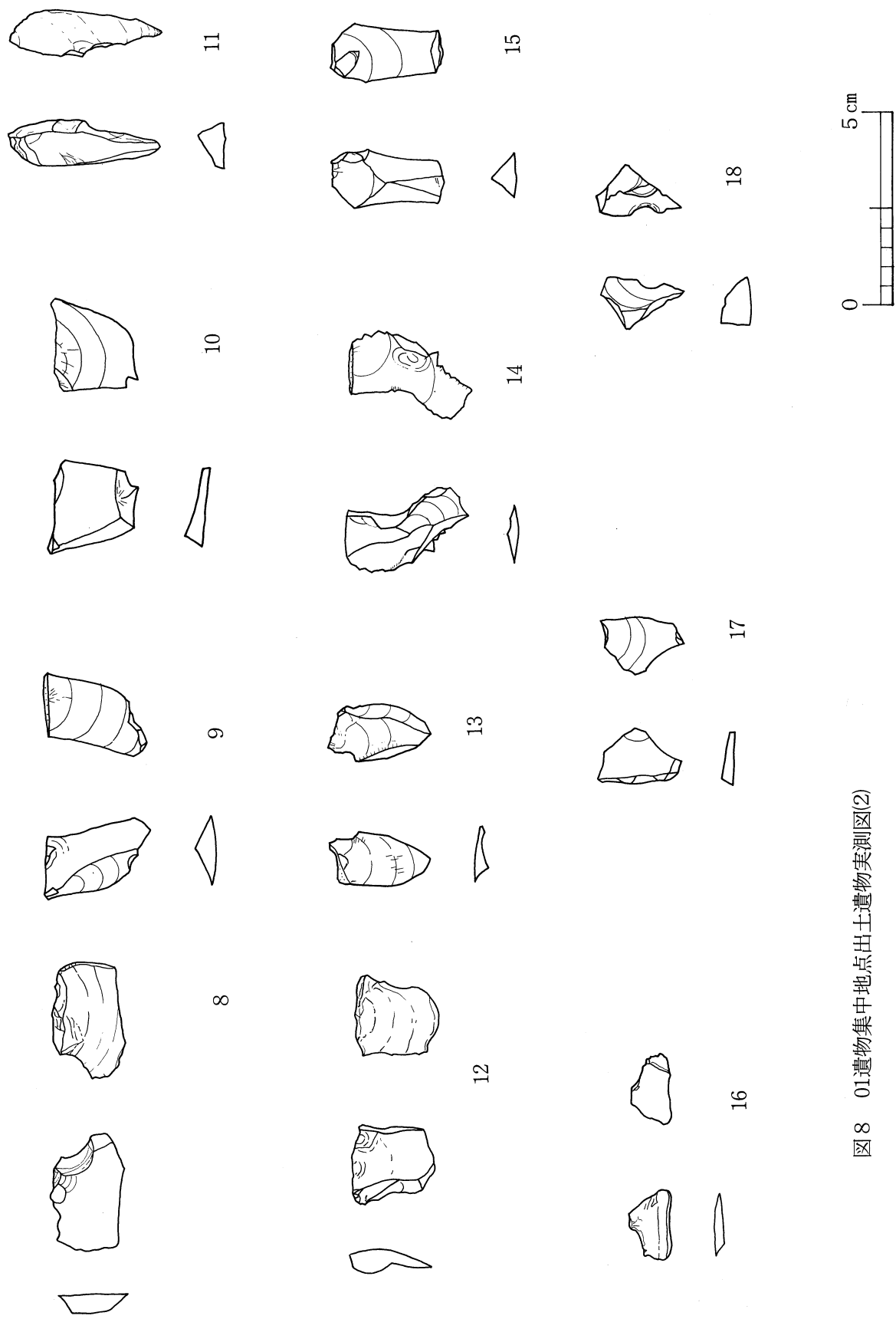


图8 01遺物集中地点出土遺物実測図(2)

02遺物集中地点（図5・9 図版11・31）

出土状況 VII層中～IX層上層を出土層位とする。位置はZ9-9G付近に分布する。遺物は分布図不明のためはっきりしないが11点程度か。4方向に確認トレンチを設定し掘り下げたが広がり確認されなかった。

出土遺物 図示し得た点数は11点で出土したほとんどを含んでいるが、製品と思われるものはなく石核ないし剥片である。

| 挿図 番号 | 器 種 | 石 質 | 計 測 値 | | | 備 考 |
|----------|-----|------|--------|--------|-------|-----|
| | | | 長 (cm) | 幅 (cm) | 重量(g) | |
| 1 | 剥 片 | チャート | 5.6 | 3.9 | 34.6 | |
| 2 | 剥 片 | チャート | 4.3 | 4.1 | 23.4 | |
| 3 | 剥 片 | チャート | 5.4 | 2.3 | 16.1 | |
| 4 | 石 核 | チャート | 3.6 | 2.6 | 16.7 | |
| 5 | 剥 片 | チャート | 4.1 | 2.3 | 7.7 | |
| 6 | 石 核 | チャート | 2.9 | 2.6 | 7.5 | |
| 7 | 剥 片 | チャート | 2.5 | 3.4 | 6.2 | |
| 8 | 剥 片 | チャート | 1.7 | 2.4 | 3.0 | |
| 9 | 剥 片 | チャート | 1.9 | 1.3 | 0.5 | |
| 10 | 剥 片 | チャート | 1.4 | 1.3 | 0.6 | |
| 11 | 剥 片 | チャート | 1.8 | 1.7 | 1.0 | |

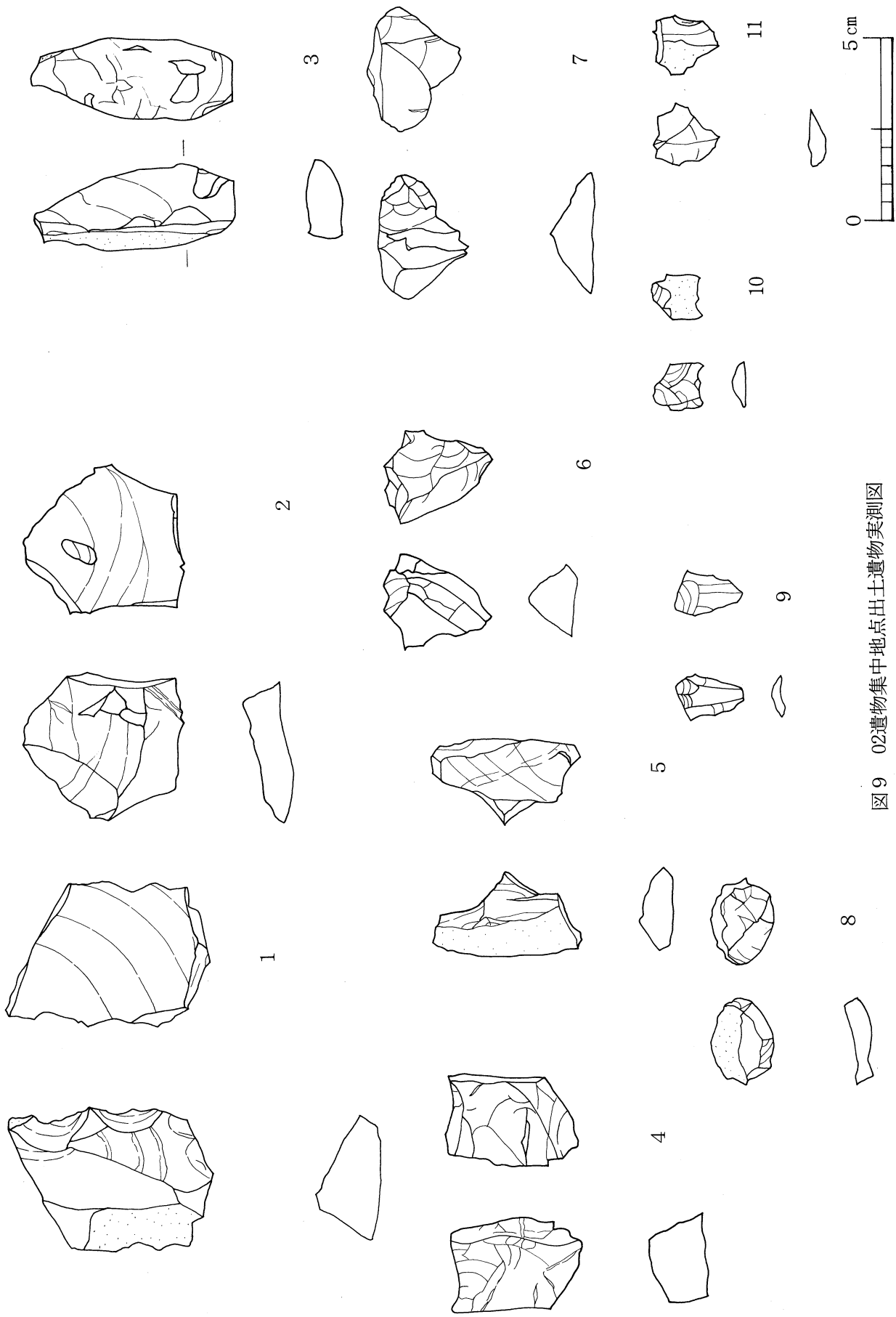


图9 02遺物集中地点出土遺物実測図

II 縄文時代

a. 住居跡

概要 遺構のプラン検出作業段階においては、覆土が黒褐色土であり明確にプランを確定することができた。確認調査の結果から前期中葉～後半の遺物が主体を占めていたので、この時期の遺構が展開することは予想された。ただ新期テフラ層の堆積により覆土が褐色土に近いのではないかという思い込みがあったため、当初はしみ状のものや遺物が集中的に出土している箇所も遺構として調査したといいきさつもあった。結果として前期の住居跡10軒を調査した。

01住 (図10 図版4)

位置 Y5-6、7、10、11Gに位置する。14土坑を切ってつくられている。

規模 6.5m×4.8mの不整楕円形を呈する。主軸方向 N-8°-E。

壁高 北壁0.05m・東壁0.06m・南壁0.08m・西壁0.05mと極めて浅い。

床面 ソフトロームを地床としているが全体的に軟弱である。

施設 炉 中央やや北寄りに位置する。床面を2～3cm程度掘り窪め底面としている。平面は楕円形で0.62m×0.44m。底面は北側で部分的に焼土ブロック化しているが、焼土の堆積も薄く使い込まれている状況とは言えない。

柱穴 径0.22m～0.28m、深さ0.05m～0.23m。規格的な配列は見られず主柱穴は不明。

遺物 全体で300点程度出土している。出土地点は炉の南側から南壁にいたる部分に多い。出土した高さは全体的には床面から0.05m～0.15m浮いた状態で出土している。個々の遺物の文様施文の割合は2に代表される縄文施文のものが総体をしめ、その他は1、2点程度の客体的出土となっている。

01住出土遺物 (図11 図版18)

1は床面から4cm浮いて出土した土器で、口縁から胴部上位にかけて $\frac{1}{8}$ 程度遺存する。現存高は13.7cmを測る。器形の特徴は胴部から内湾ぎみに立ち上がり口唇部において直立している。口唇部は断面コの字状を呈し、平坦部が擦られている。文様施文は口縁から胴部上半にかけて半截竹管による鋸歯状文を二段施し、その間に同工具による沈線文を配している。胴部中位から下には目の細かい単節縄文が施される。胎土は繊維を多量に含み若干ぼそぼそした感じである。器面外面はよくなで整形されている。色調は外面暗褐色、内面明褐色を呈する。2は床面上から出土した土器で、口縁部が若干遺存する。口縁部上半から口唇部にかけてやや直立ぎみに立ち上がる。口唇部は1と同様断面コの字状を呈する。文様施文は単節の羽状縄文が器面をおおう。胎土は繊維を少量含むが焼成がよく堅くしまっている。色調は外面明褐色、内面淡橙褐色を呈する。3は床面上から出土した土器で、口縁部が若干遺存する。口唇部は先端部が細いU字状を呈する。文様施文は、棒状工具による刺突のようにみえるが詳らかではない。胎土は砂粒、繊維を含みしまっている。焼成はおおむね良好である。色調は外面暗褐色、内面黒斑を呈する。内面の磨きは非常に丁寧である。なお、補修孔が見られる。4は5cm程度浮いた状態で出土した土器で口縁部が若干遺存する。文様施文は、密な撚糸文のようにみえる。繊維を多量に含むが、焼成も良くしまっている。5はU字状の口唇部で、無節の斜行縄文を施す。6は口縁部が若干遺存している。口唇部は先端部が細いU字状を呈する。文様施文は口縁部上半において4条を単位とした櫛歯状工具による沈線文、下半において無節の斜行縄文を施す。繊維を多量に含むが、内面の磨きは非常に丁寧で焼

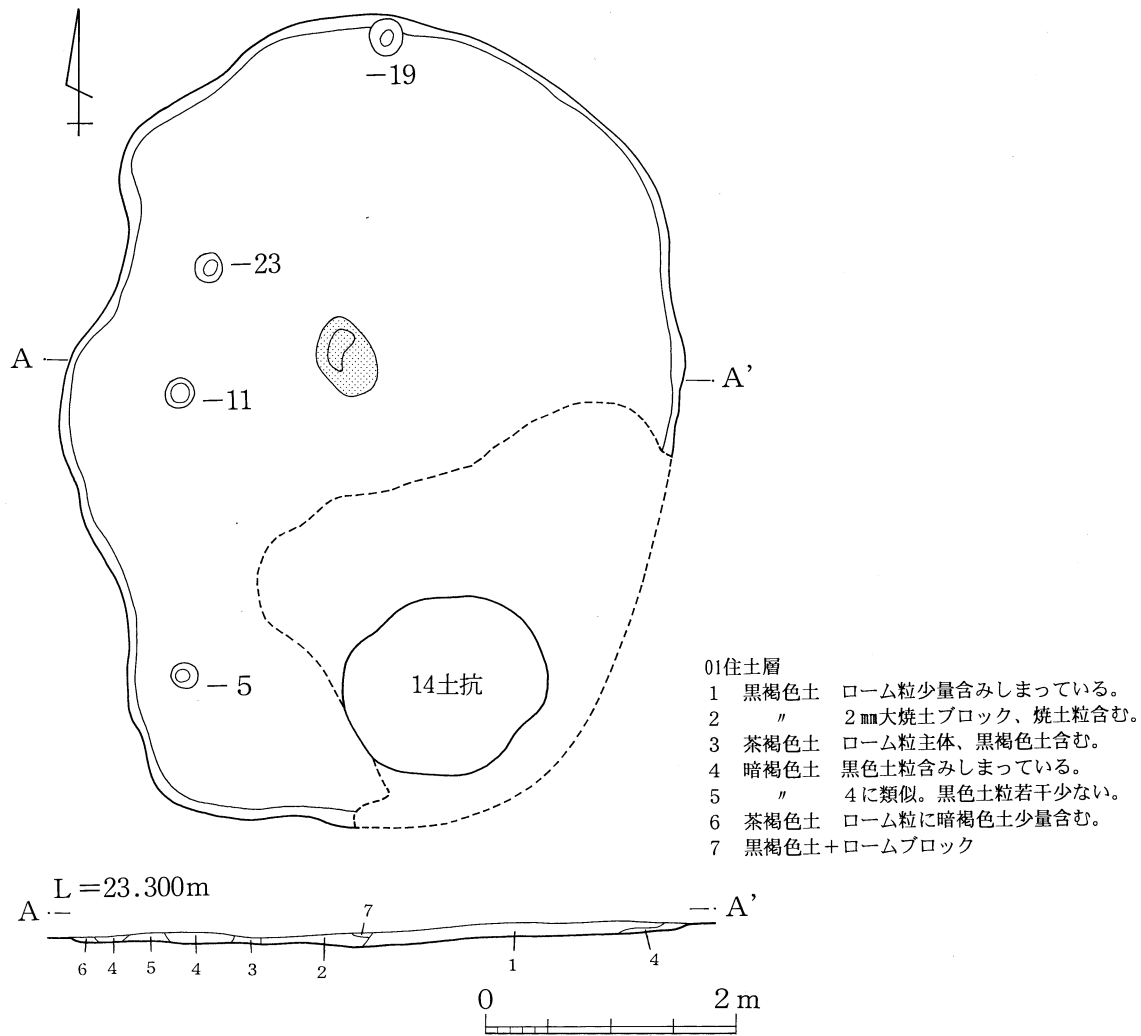


図10 01住遺構平面図

きもしっかりしている。7はゆるい頸部部分が遺存している。文様施文は、上部において棒状工具による刺突、その下に単節と無節の縄文を組み合わせると菱形文を施す。胎土は砂粒、繊維を多量に含み、ぼそぼそした感じである。焼成もやや不良の感がある。8も頸部から下が遺存している。上部は半截竹管による抉りによって凹みをつくっている。その隣接下部に無節縄文を施文している。下部は単節縄文で被われる。9は貝殻腹縁文を縦方向に施文した胴部片で底部付近に近い。胎土は繊維を多量に含み、砂粒も少量混入する。外面はよくなで整形されている。10は半截竹管による横方向の沈線を間隔をおいて施文している。胎土は砂粒、繊維を多量に混入する。焼成はやや不良である。内面の磨きは丁寧に施されている。11は8に類似した文様構成をとる土器で、大きく屈曲する頸部の上下が遺存する。頸部外面に抉りによって凹みをつくり、その上部に単節斜行縄文、下部に無節の斜行縄文を羽状を意識しているように施文している。胎土に繊維を多量に含むが、内面は丁寧にやで整形されている。焼成も極めて良好である。12は粘板岩製の磨製石斧である。全長5.1cm、刃部幅4.1cm、重量368gを測る。乳棒状石斧の欠損部を再加工して手斧として使用したものと思われる。裏側は4面を意識した調整が行われているが、荒い加工である。表側は使用の際の歯こぼれが見られる。

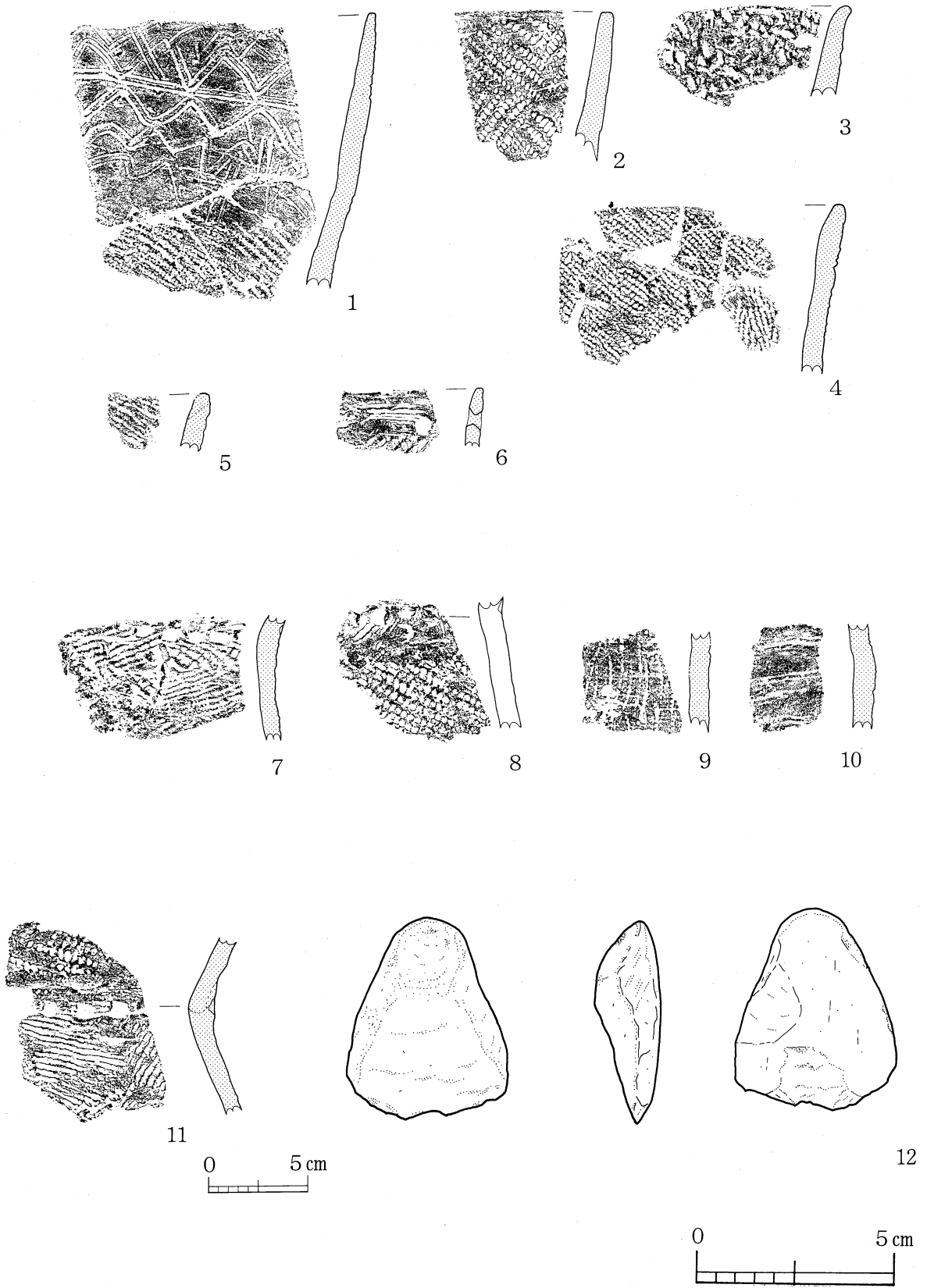


图11 01住出土遺物実測図

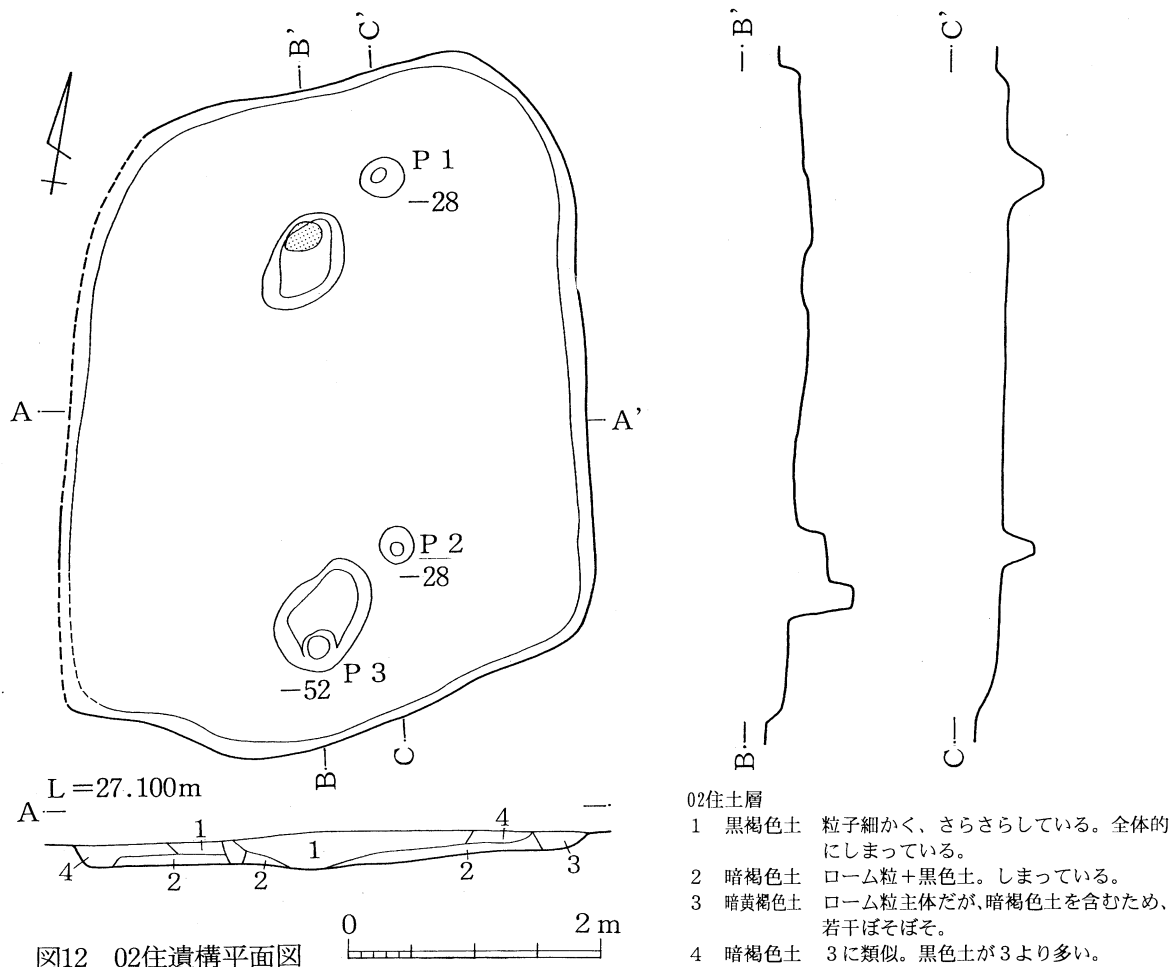


図12 02住遺構平面図

02住 (図12 図版4)

- 位置** a 7-15、16Gに位置する。西側を浅いカクランに切られる。
- 規模** 4.9m×4.2mの不整長方形を呈する。主軸方向 N-10°-W。
- 壁高** 北壁0.09m・東壁0.14m・南壁0.13m・西壁0.16m程度で浅い。
- 床面** ソフトロームを地床としているが全体的に若干軟弱である。
- 施設** 炉 中央やや北寄りに位置する。床面を4~7cm程度掘り窪め底面としている。平面は楕円形で0.88m×0.57m。底面は北側で部分的に焼土ブロック化しているが、焼土の堆積も疎らで使い込まれている状況とは言えない。炉のプラン確認段階でも覆土は暗褐色土を主体とした土層であった。
- 柱穴** 径0.30m~0.32m、深さ0.28m~0.52m。規格的な配列としてはP 1、2が線上に並ぶが両者とも深さは0.28m程度と浅い。
- 遺物** 全体で35点程度出土している。出土地点は炉の南側から南壁にいたる部分に多い。出土した高さは全体的には床面から0m~0.17m浮いた状態で出土している。また、遺物全体をみると、1、5に代表される縄文施文したものが総体をしめ、他は1点のみで客体的である。

02住出土遺物 (図13 図版19)

1は床面から17cm浮いて出土した土器で、口縁から胴部下位にかけて $\frac{1}{8}$ 程度遺存する。現存高は30.0cmを測る。器形の特徴は胴部下位からやや内湾ぎみに立ち上がり口唇部において直立している。口唇部

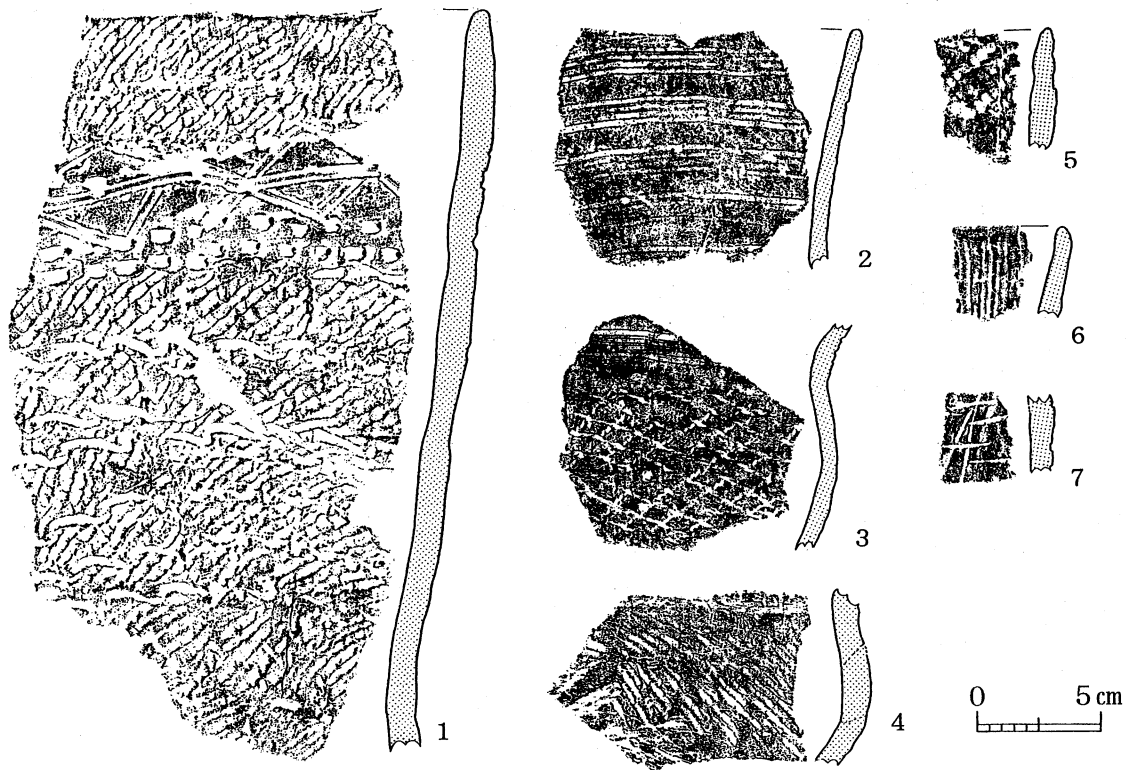


図13 02住出土遺物実測図

は細いU字状の先端部を截ってコの字状にしている。文様施文は無節縄文を地文として、上から竹管状工具による円形刺突文、その下に半截竹管状工具による2段の鋸歯状文と間をさく形で同工具による沈線文が施こされる。さらに下には、半截竹管状工具で刺して剥ぐという方法で連続凹文を2段、部分的に縄文原体の末端がなめくじ状にのこる。施文は胴部下半については乾燥が進んだ段階だが、口縁から胴部についてはしっかりと刻まれており施文を意識しているように見える。胎土は砂粒はほとんど含まず、繊維は多量に混入する。焼成は非常に良好である。**2**は床面から6 cm浮いて出土した土器で、口縁から胴部にかけて遺存する。器形の特徴は、単位は不明だがゆるい波状口縁で欠損した胴部下方にむけて緩やかに外反する。胎土は繊維、小石粒を含み若干ざらざらした感じである。文様施文は竹管状工具に刻みを入れた4本を単位とする沈線文を間隔をおいて施文している。**3**は床面から4 cm浮いて出土した土器で緩いS字状のカーブをもった胴部片である。胎土は繊維、小石粒を含む。文様施文は2に類似した竹管状工具による沈線文と網目状撚糸文を施す。**4**は床面から5 cm浮いて出土した土器で緩い湾曲をもった胴部片である。器面全体に無節斜縄文が施文される。繊維が多量に混入されるが焼成は良好である。特に内面の磨きは密で丁寧に調整される。**5**は9 cm浮いて出土した土器で単節斜縄文が施文される。砂粒、繊維を含んでいるため、若干ぼそぼそするが焼成は良好である。**6**は4 cm浮いて出土した土器で幅4 mm程度の板状施文具により縦方向に押し引きしている。竹管状工具とは明らかに異なる。胎土に雲母、長石、繊維を混入する。**7**は2 cm浮いて出土した土器でへら状工具による縦横方向の沈線を施す。胎土は繊維、砂粒、長石を混入する。

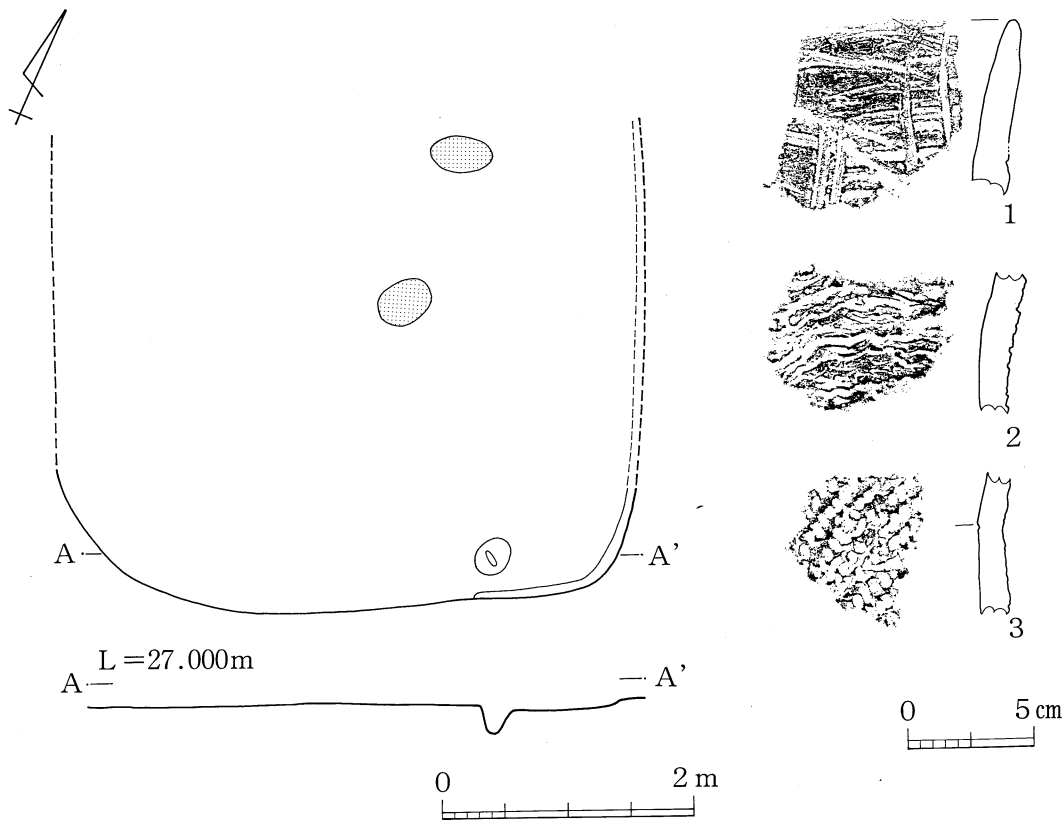


図14 03住遺構平面図・出土遺物実測図

03住（図14 図版4）

位置 a 8-1、2、5、6 Gに位置する。南壁のみ遺存する。

規模 南辺4.5m、東西辺3.9m以上を測る。主軸方向 おおむねN-24°-W。

壁高 南東コーナーで0.03mと浅い。

床面 硬化範囲等は確認していない。

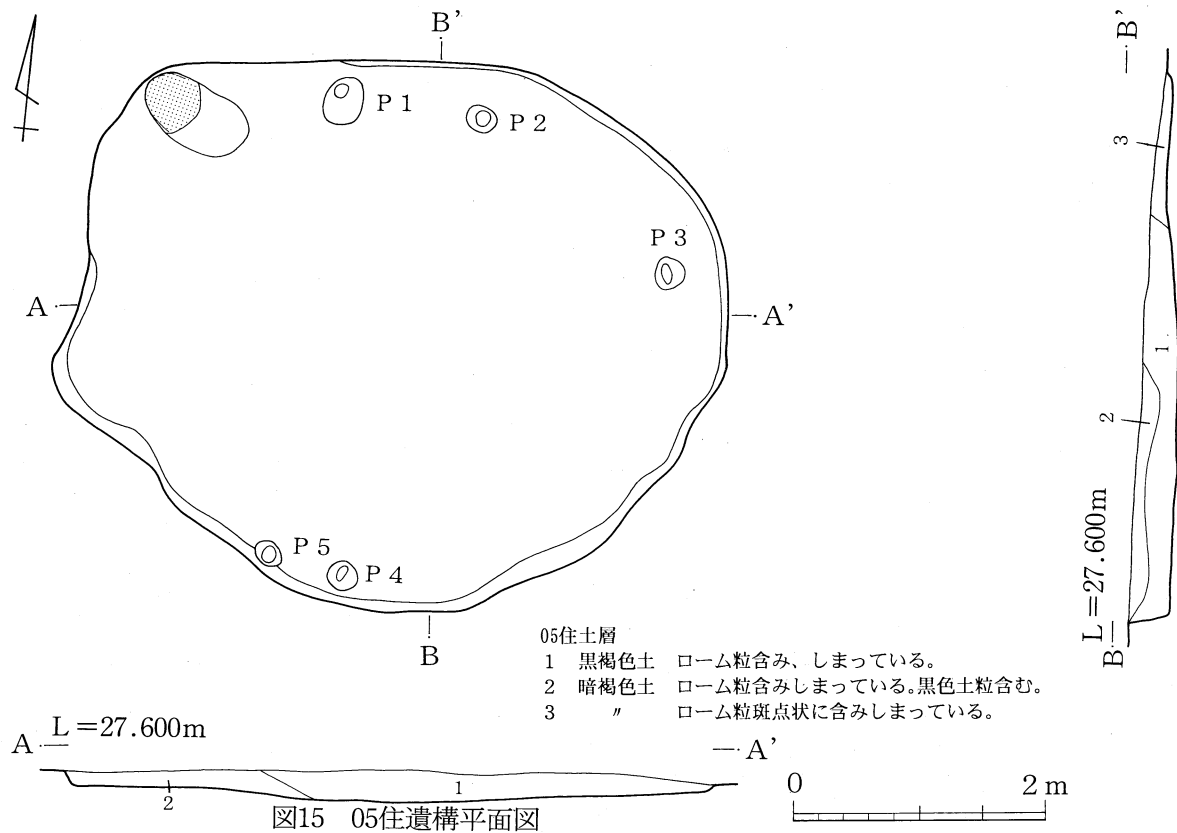
施設 炉 北寄りに位置する。ロームが焼土化している範囲を2か所検出している。

柱穴 径0.30m、深さ0.24m。ピットはこの1ヵ所のみで柱穴となりうるか疑わしい。

遺物 全体で4点程度しか出土していない。出土地点は南西壁部分にかたまっている。

03住出土遺物（図14 図版20）

1は口縁部が若干遺存する。口唇部は内傾した細いU字状を呈する。文様施文は口縁から胴部について竹管状工具による縦横方向の沈線文を施す。胎土は繊維、粗砂粒を多量に混入する。色調は内外面とも暗橙褐色を呈する。2は緩やかな頸部付近が若干遺存する。文様施文は櫛歯状工具による波状沈線文を施す。胎土は繊維を多量に含む。器面内面はよく磨かれており滑らかである。色調は内外面とも暗橙褐色を呈する。3は胴部が若干遺存する。文様施文は単節の斜縄文が遺存部をおおう。胎土は繊維、長石を混入する。器面内面はよく磨かれておりしまっている。色調は外面暗褐色、内面暗橙褐色を呈する。



05住 (図15 図版6)

位置 z 9-8、z 10-5 Gに位置する。

規模 5.1m×4.3mの不整形を呈する。主軸方向 凡そN-45°-W。

壁高 北壁0.03m・東壁0.11m・南壁0.24m・西壁0.06m程度で特に北西コーナーで浅い。

床面 ソフトロームを地床としているが全体的に若干軟弱である。

施設 炉 北西コーナー付近に位置する。床面上を底面としておりほとんど掘られていない。平面形は楕円形を呈する。北側で焼土ブロック化したロームが見られるが焼土の堆積も少なく使い込まれている状況とは言えない。

柱穴 径0.25m~0.45m、深さ0.14m~0.5m。規格的な配列としてはP 1、3、4が深さ0.25m~0.5mと深い。

遺物 全体で151点程度出土している。出土地点は南壁付近に多い。出土した高さは全体的には床面から0m~0.1m浮いた状態で出土している。また、遺物全体をみると、縄文施文したものが総体をしめ、条痕、竹管文を施したものが数点出土している。なお、図示し得なかったが土器片錘が2点出土している。

05住出土遺物 (図16 図版21)

1は床面から3cm浮いて出土した土器で、口縁部が遺存する。文様施文は単節縄文を全面に施す。胎土に繊維を多量に混入する。2は11cm浮いて出土した土器で、口縁部が遺存する。文様施文は無節縄文を施す。胎土に繊維を中量混入する。3は12cm浮いて出土した土器で、口縁部が遺存する。文様施文は撚りの異なる単節縄文を上下に施す。胎土に繊維、雲母、長石を混入する。4は1cm浮いて出土した土

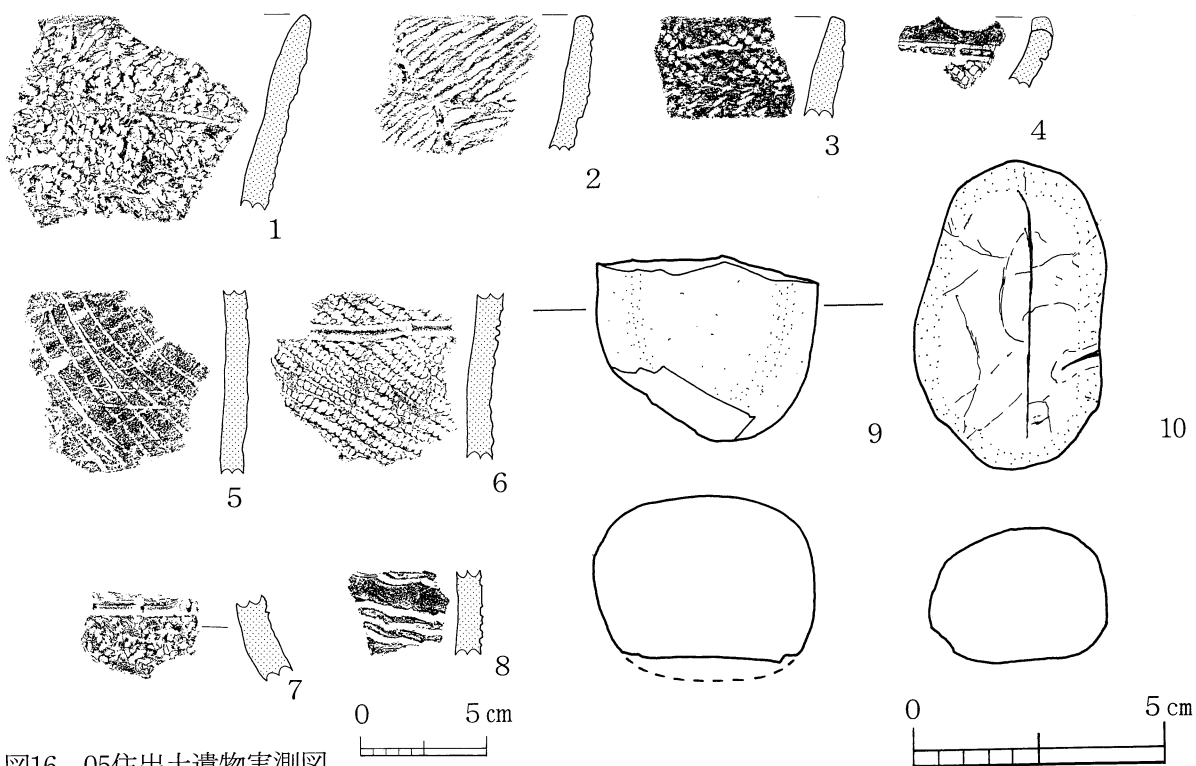


図16 05住出土遺物実測図

器で波状口縁部分が遺存する。文様施文は口縁下に竹管文による平行沈線を施し、その下に単節縄文を施文する。胎土に繊維を多量に混入する。**5**は1cm浮いて出土した土器で胴部が遺存する。竹管状工具の先端部による縦方向の沈線を施す。**6**、**7**共に胴部分で竹管状工具による沈線文と単節縄文を施す。**8**は13cm浮いて出土した土器で胴部が遺存する。若干幅の広い櫛歯状工具による沈線文を施す。胎土に繊維雲母、長石を混入する。**9**は砂岩製の磨石で欠損部を除いて全面が磨られている。重量78.9gを測る。**10**は火熱を受けていると考えられる流紋岩で重量は56.2gを測る。磨石として使用されたのではなかろうか。

06住 (図17 図版7)

位置 Y8-1、5 Y7-4、8Gに位置する。

規模 5.7m×4.8mの長方形を呈する。主軸方向 W-22°-S。

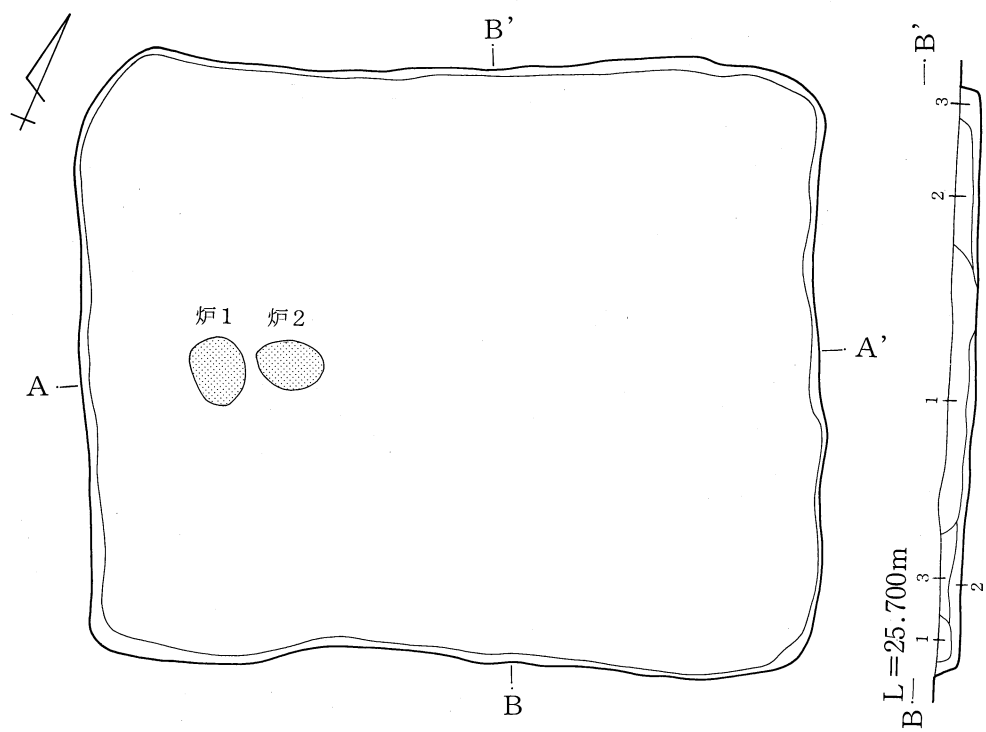
壁高 北壁0.16m・東壁0.2m・南壁0.16m・西壁0.1m程度を測る。

床面 ソフトロームを地床としており全体的に堅くしまっている。

施設 炉 住居中央の西壁寄りに位置する。2基検出される。炉1、2とも覆土は3~5cm大のロームブロック+暗褐色土で1は深さ0.1m、2は深さ0.04mを測る。1は底面が強く焼けているが使い込まれている状況とは言えない。

柱穴 確認されなかった。

遺物 全体で50点程度出土している。出土地点は中央から東壁にかけて多い。全体的には床面から0m~0.2m浮いた状態で出土している。また、遺物全体をみると、縄文施文したものが総体をしめ



06住土層

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。しまる。粘性あり。
- 2 暗褐色土 ローム粒主体として黒色土を含む。粘性しまる。
- 3 " 黒色土多く含む。1に類似。ローム粒より多い。
- 4 ローム粒+黒色土 しまりなし。
- 5 黒褐色土 焼土粒少量含む。
- 6 焼土ブロック+黒色土

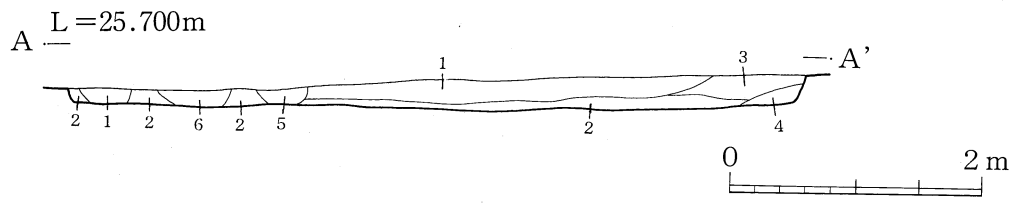


図17 06住遺構平面図

るが竹管状工具の先端部による縦方向の沈線文を施したものや付加縄文を施文した遺物がごく少量みられる。

06住出土遺物 (図18 図版22)

1は床面から15cm浮いて出土した土器で、波状の口縁部が遺存する。口縁部は粘土紐による横位文様帯で波状の頂上部に二重円形の粘土紐を貼付している。文様帯の内外に円形竹管文が配される。胎土に繊維、雲母を混入する。2、3は16cm浮いて出土した土器で、同一固体であるが、接合しない。口縁から頸部下まで遺存する。全面に単節の羽状縄文を施文する。胎土に繊維、長石を混入する。4は凝灰岩製の乳棒状石斧で全長15.7cm、最大幅5.3cmで358.1gを測る。一度大きく剥離した部分の裏面を薄く再加工して使用したと考えられる。5はホルンフェルス製の石匙で全長4.0cm、刃部長5.5cmで13.2gを測る。細部調整は刃部は右方向に、側面は上方向に剥離調整している。

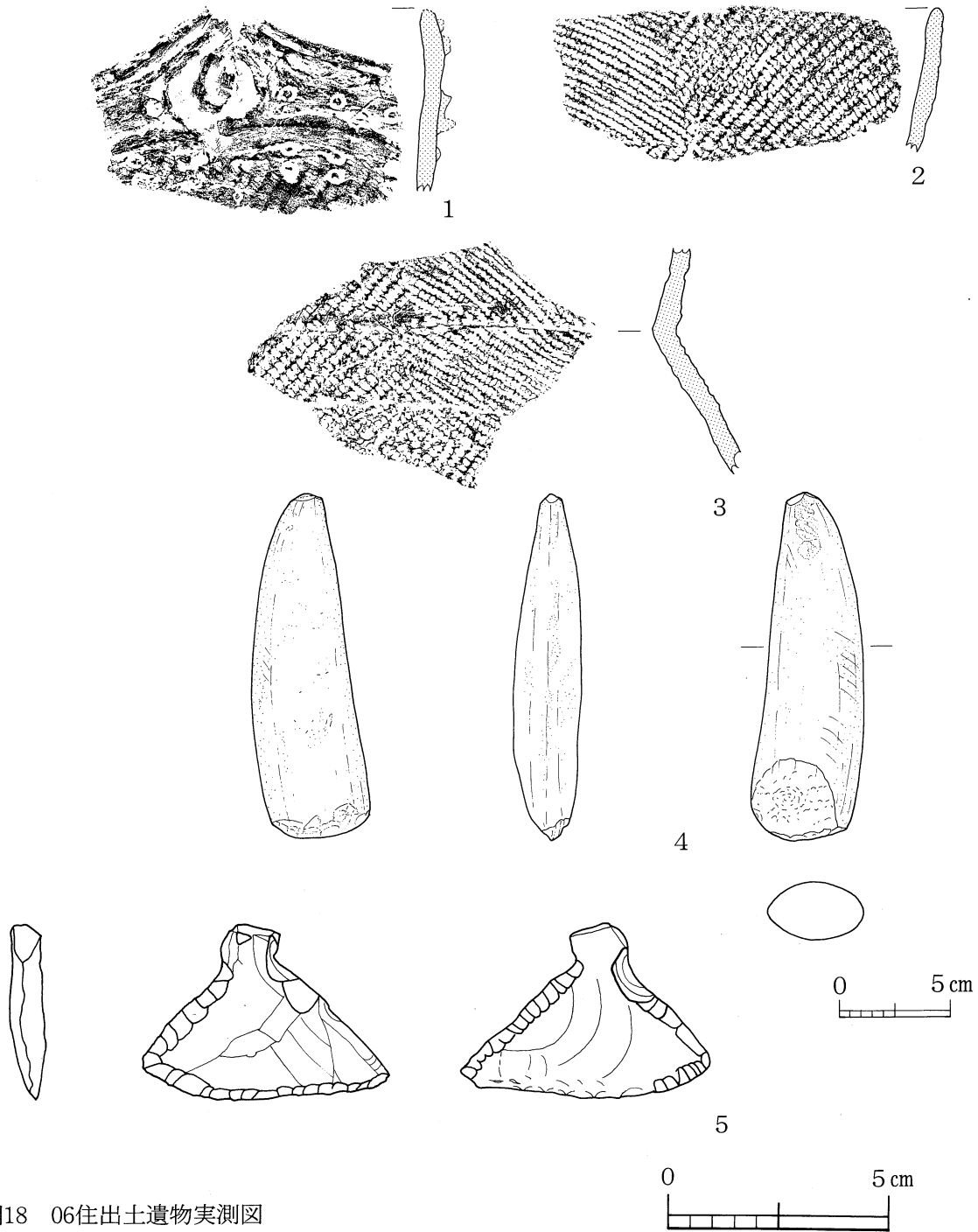


図18 06住出土遺物実測図

07住 (図19 図版8)

位置 x 7-10、11Gに位置する。東壁の一部を46土坑にきられる。

規模 4.5m×4.2mの不整形を呈する。主軸方向 N-62°-W。

壁高 北東壁0.14m・南東壁0.26m・南西壁0.26m・北西壁0.14m程度の規模をもつ。

床面 ソフトローンを地床としており全体的に堅くしまっている。

施設 炉 中央からやや北西壁によった位置に所在する。平面形は不整楕円で掘り込みはほとんどみ

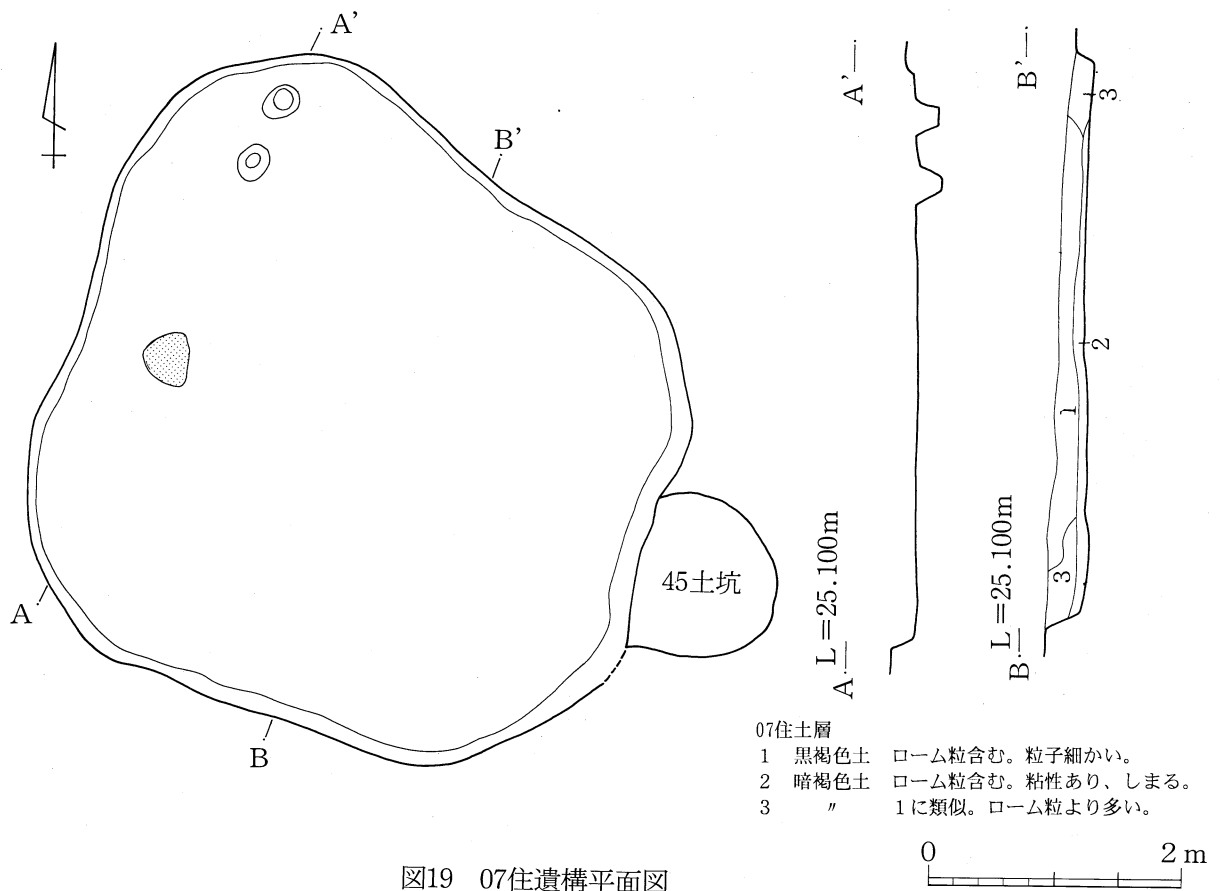


図19 07住遺構平面図

られない。焼土ブロック化したロームが見られるが焼土の堆積も少なく使い込まれている状況とは言えない。

柱穴 径0.3m、深さ0.2m。規格的な配列はない。

遺物 全体で744点程度出土している。出土地点は北西コーナーを除く全体に散っている。出土した高さは0m~0.3m浮いた状態で出土している。また、遺物全体をみると、縄文施文したものが全体を占め、続いて竹管文による沈線文を施文したものが30~40点程度、貝殻腹縁文のものが10点程度出土している。

07住出土遺物 (図20, 21 図版23)

1は口径20.6cm、遺存高19.6cmで口縁から胴部にかけて約 $\frac{1}{2}$ 程度遺存する。単節縄文を全面に施す。部分的に原体の末端が横走する。胎土に繊維を多量に混入する。2は無節縄文を施文した土器で、繊維を多量に混入する。3は口径20.7cm、遺存高16.0cmで口縁から胴部にかけて約 $\frac{1}{2}$ 程度遺存する。文様施文は原体の長い無節縄文を全体に施す。胎土に繊維、粗砂粒を混入する。4は口縁から頸部にかけて遺存する土器で単節羽状縄文を全面に施す。口唇部から口縁上半の表側に炭化物が付着している。内面はよく磨かれており滑らかである。胎土に繊維、砂粒を混入する。5はコノ字状の口縁部で竹管状工具による刺突後挟り込みによって凹文を施し、その下に無節縄文を施文する。6は無節縄文を施文している。7は口縁下に粘土紐を周回させてその上下に半截竹管状工具による押し引きと単節斜縄文を施す。8は竹管状工具による沈線文で斜格子状に施文している。9、11は単節縄文を施文する。10、12は竹管状工具による押し引きを施す。13は同じ竹管状工具による波状沈線を施文する。14は口縁下半から頸部が遺存する土器で網目状撚糸文、無節縄文と竹管状工具の押し引きによる凹文によって文様を施文する。15も竹管による沈線と縄文を施文する。16~19は底部を集めたものだが、16は立ち上がり部に縄文を施文

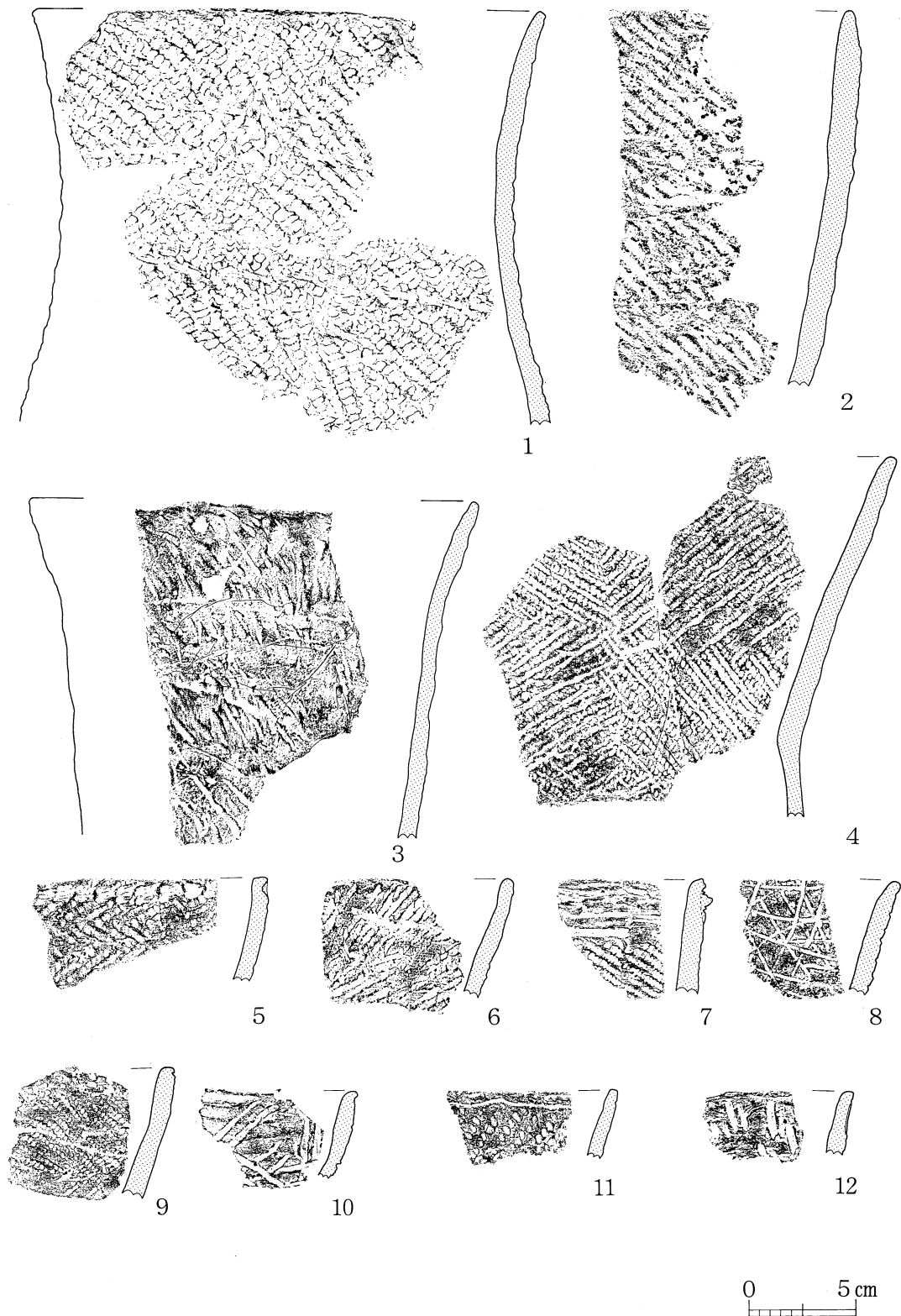


図20 07住出土遺物実測図(1)

する。18は立ち上がり部に竹管状工具による刺突文、19は貝殻腹縁文を施文する。20は凝灰岩製の蛤刃石斧先端部である。

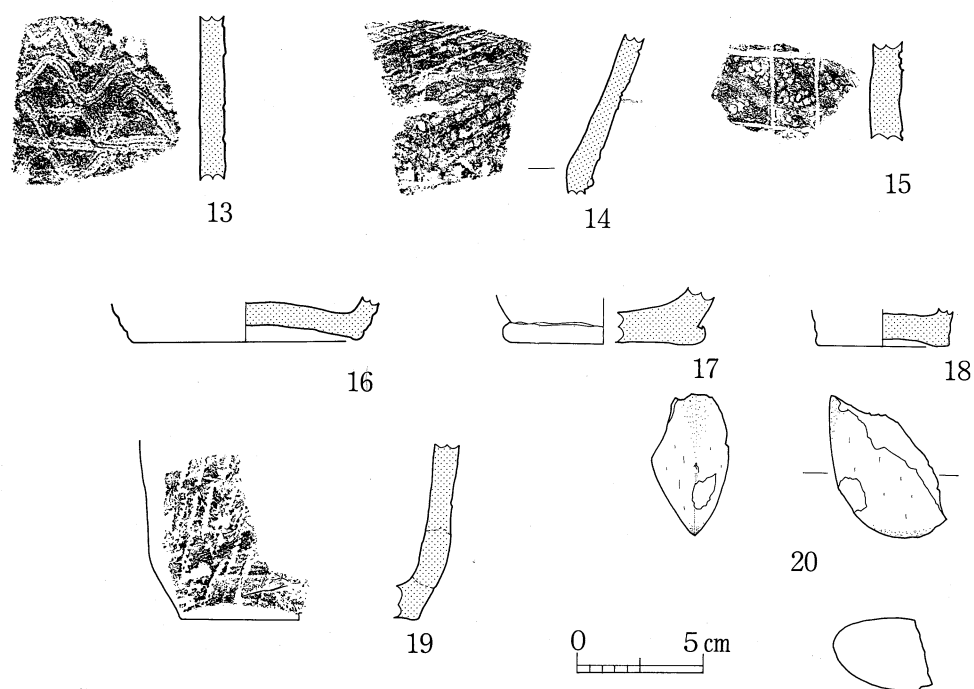


図21 07住出土遺物実測図(2)

08住 (図22 図版8)

位置 U11-9Gに位置する。

規模 4.2m×3.4mの不整長方形を呈する。主軸方向 N-28°-E。

壁高 北壁0.12m・東壁0.11m・南壁0.14m・西壁0.28m程度で浅い。

床面 ソフトロームを地床としている。中央から東壁にかけてよく硬化している。

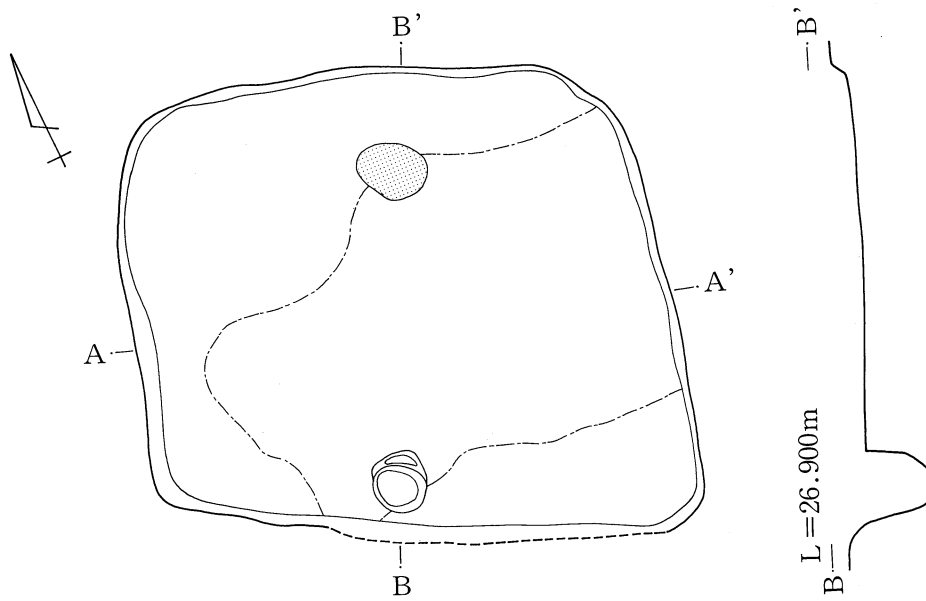
施設 炉 中央やや北寄りに位置する。床面を4~7cm程度掘り窪め底面としている。平面は楕円形で0.55m×0.45m。底面は南側で部分的に焼土ブロック化しているが、焼土の堆積も疎らで使い込まれている状況とは言えない。炉のプラン確認段階でも覆土は暗褐色土を主体とした土層であった。

柱穴 南壁際に1ヵ所のみで0.45m、深さ0.5mを測る。

遺物 全体で20点程度出土している。出土地点は北東コーナー及び西壁際に多い。出土した高さは全体的には床面から0m~0.15m浮いた状態で出土している。また、遺物全体をみると、出土量は少ないが縄文施文、網目状撚糸文、条痕文のもの等が出土している。

08住出土遺物 (図23 図版24)

1は床面から11cm浮いて出土した土器で、口縁から胴部にかけて遺存する。網目状撚糸文を施文しており、胎土に繊維を多量に混入している。単位は不明だが小突起が一か所ある。内面はよく磨かれている。2は床面から7cm浮いて出土した土器で、口縁から胴部にかけて遺存する。竹管状工具の先端部による斜格子沈線文を施す。繊維を多量に含みぼそぼそしている。3は確認調査時に出土した石器で全長8.7cm、最大幅3.75cm、重さ47.8gを測る。尖った部分を上にしたが、尖頭器というよりは自然面の磨耗した感じからするとスクレーパーかもしれない。石材はホルンフェルスである。



08住土層

- 1 暗褐色土 ローム粒ごく少量含む。黒色土粒含む。若干粘
- 2 " ローム粒含むが、若干粘性にかける。
- 3 茶褐色土 ローム粒+暗褐色土。粘性あり、しまっている。
- 4 " 3に類似するが、暗褐色土が少ない。

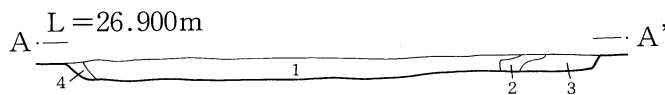


図22 08住遺構平面図

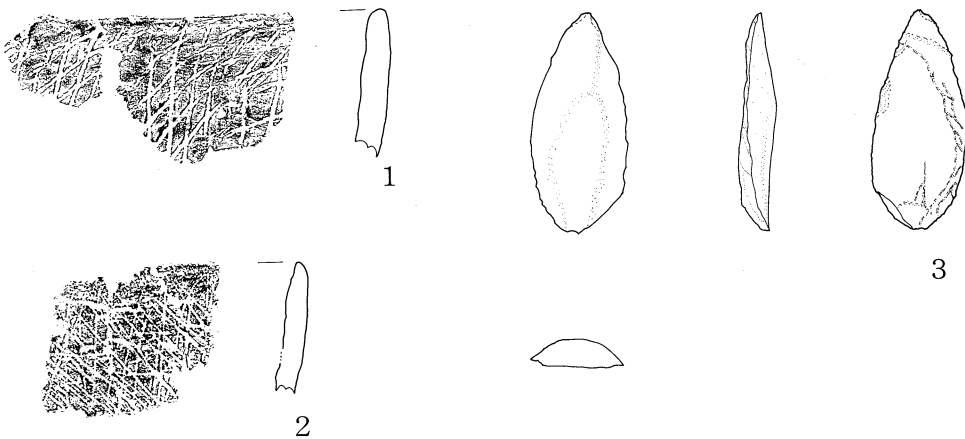
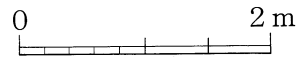
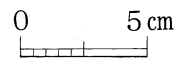


図23 08住出土遺物実測図



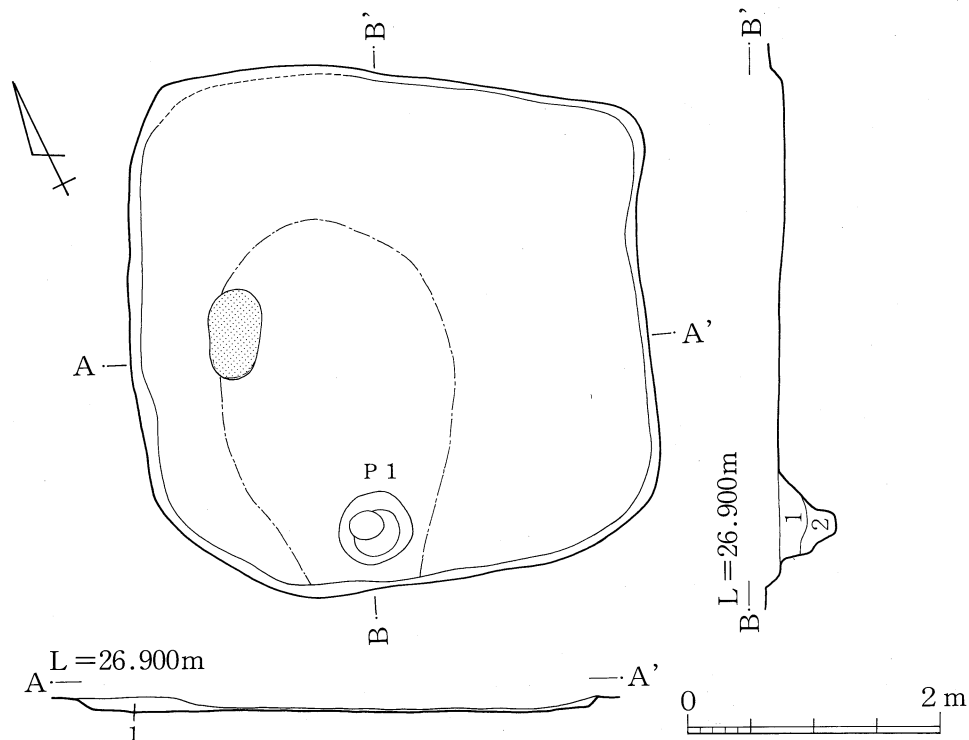


図24 09住遺構平面図

09住土層

- 1 暗褐色土 黒色土粒+ローム粒。粒子細かくしまっている。

09住P 1土層

- 1 黒褐色土 暗褐色土。ローム粒含み、若干粘質。
2 暗褐色土 ローム粒含む。若干粘質。

09住 (図24 図版9)

位置 V11-9Gに位置する。

規模 3.95m×4.1mの不整形を呈する。主軸方向 N-66°-W。

壁高 北壁0.1m・東壁0.07m・南壁0.11m・西壁0.1m程度で浅い。

床面 ソフトロームを地床としている。P 1と炉に至る間において硬化面が見られる。

施設 炉 中央やや西壁に寄って位置する。確認面において暗褐色土に焼土粒を含んだ層であった。規模は0.7m×0.4mで1~2cm程度掘り窪めて底面としている。中央部20cm程度の円形の範囲において強く焼けている。

柱穴 P 1のみで、0.6mの円形で、深さ0.26mを測る。

遺物 全体で200点程度出土している。出土地点は西壁~南壁に近い部分に多い。出土した高さは全体的には床面から0m~0.1m浮いた状態で出土している。また、遺物全体をみると、縄文施文をしたものを主体として網目状撚糸文等が出土している。なお図示しえなかったが土器片を円形に再加工した土製円盤?が1~2点出土している。

09住出土遺物 (図25 図版24)

1は口縁から胴部にかけて遺存する土器で口縁部下に半截竹管による並行沈線を波状に施文し、その下部に単節縄文を施す。砂粒、繊維を混入する。焼成前に穿孔されている。2は単節縄文を施文した土器で胎土には繊維、砂粒を多く含む。内面は良く磨かれている。3、6は口縁部下に半截竹管による刺突文とその下部に縄文を施文している。4、5、9、10は縄文のみを施文している。7は網目状撚糸文

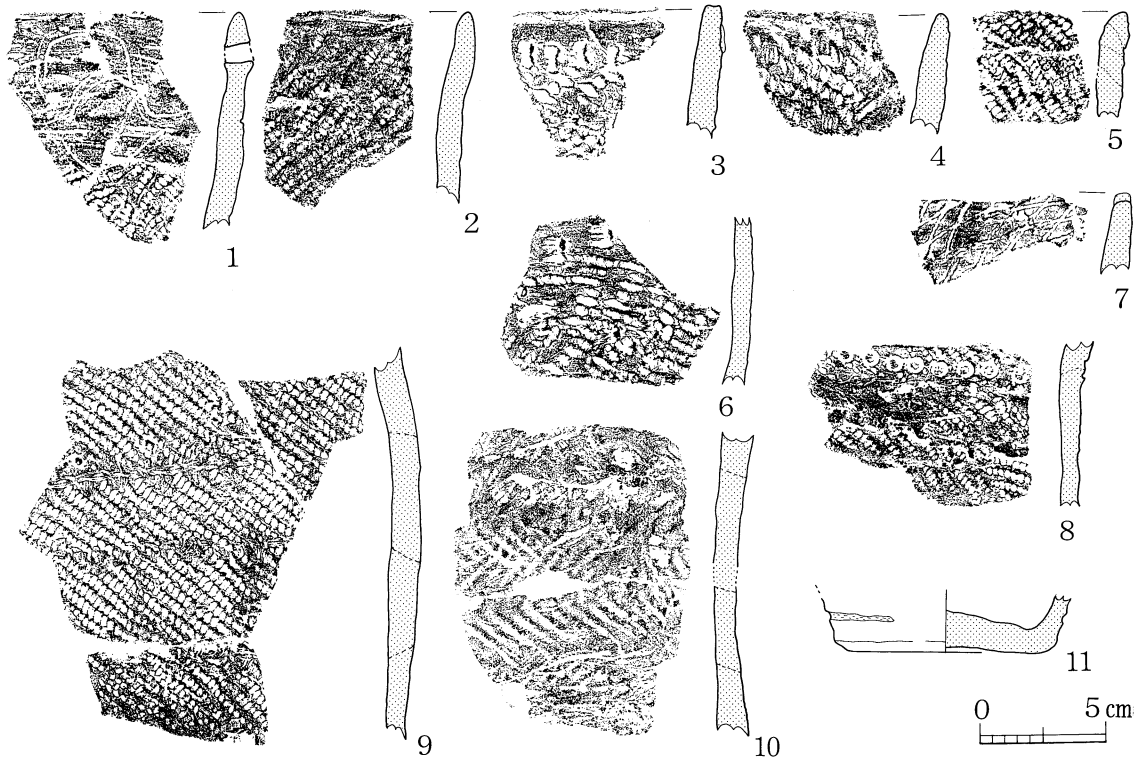


図25 09住出土遺物実測図

を施文するもので繊維を多量に含んでいるが、焼成もよく内面は良く磨かれている。**8**は緩い頸部から胴部にかけて遺存する土器で頸部には円形竹管文、胴部に単節縄文を施文する。**11**は若干上げ底状の底部で立ち上がり部分には縄文を施文している。

10住（図26 図版9）

位置 Y10-16G、Y11-13Gに位置する。

規模 上底3.0m×下底3.4m×長辺3.95mの隅丸台形状である。主軸方向 N-2°-E。

壁高 北壁0.11m・東壁0.1m・南壁0.05m・西壁0.06m程度で浅い。

床面 ソフトロームを地床としている。住居跡中央やや南側から北側にかけて硬化面が見られる。

施設 炉 北壁中央やや南側に位置する。確認面において黒褐色土にローム粒を含んだ層であったが中、下層に暗褐色土に焼土粒を混入した層が堆積する。規模は1.65m×1.15mの楕円形で深さ0.23mを測る。底面において一部焼土ブロック化した範囲が見られる。

遺物 全体で59点程度出土している。出土地点は北西コーナー及び住居中央、南壁際に多い。全体的には床面から0m~0.16m浮いた状態で出土している。また、遺物全体をみると、縄文施文をしたもの、条痕文、撚糸文等が出土している。

10住出土遺物（図27 図版24）

1は口縁から胴部にかけて遺存する土器で推定口径25.0cm、遺存高15.0cmを測る。**2**本の撚糸文を縦横に施文している。胎土に砂粒、繊維を多量に混入する。**2**は無節縄文を施文している。**4**は貝殻腹縁文を刻むもので若干の繊維を含む。**5**、**7**は同一固体で撚糸文を施文するものである。胎土に繊維を多

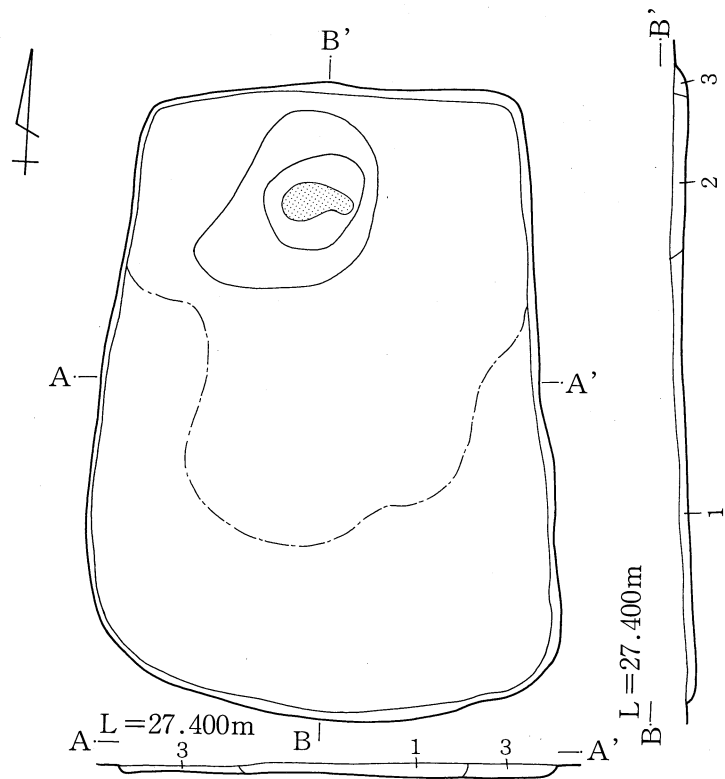


図26 10住遺構平面図

10住土層

- 1 暗褐色土 ローム粒粒含み、黒色土粒少量含む。若干粘質。
- 2 黒褐色土 ローム粒少量含み、しまっている。
- 3 茶褐色土 ローム粒主体。暗褐色土含む。

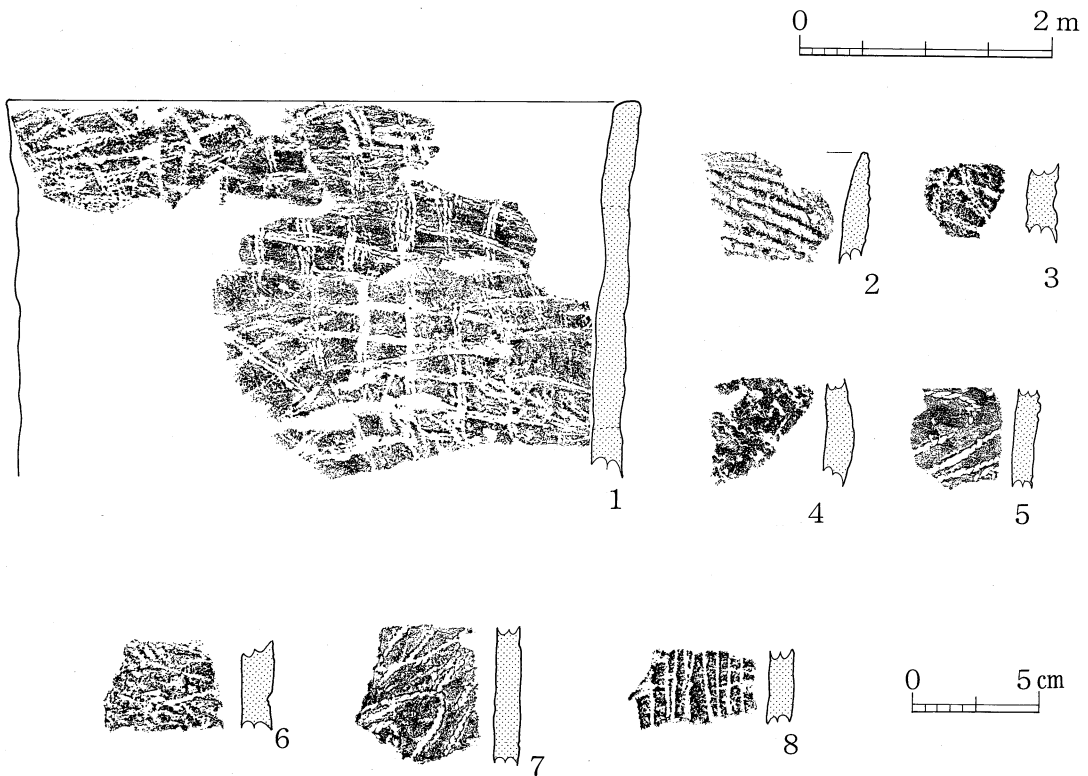


図27 10住出土遺物実測図

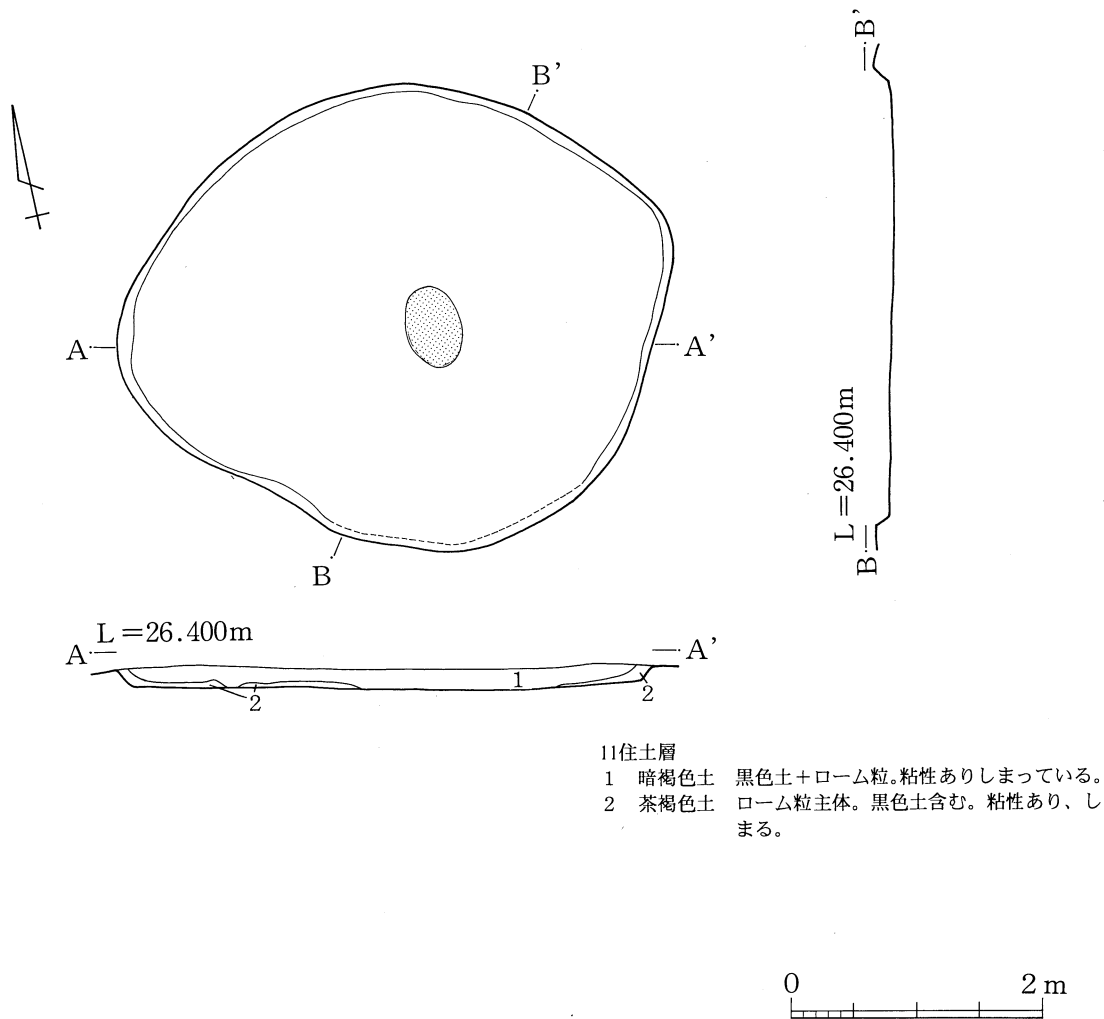


図28 11住遺構平面図

量に含んでいるが、内面は良く磨かれている。8は竹管の先端部による沈線文を施している。

11住 (図28)

位置 012-2、6Gに位置する。

規模 3.35m×3.65mの隅丸不正方形を呈する。主軸方向 N-58°-W。

壁高 北壁0.13m・東壁0.16m・南壁0.1m・西壁0.12m程度で浅い。

床面 ソフトロームを地床としている。

施設 炉 住居中央に位置する。掘り込みはほとんど見られない。規模は0.65m×0.45mの楕円形でごく少量の焼土粒と火熱を受けたロームブロックが若干見られた。

柱穴 検出されなかった。

遺物 出土しなかった。

b. 土坑

概要 本遺跡において検出した土坑は53基を数える。この内明らかに性格の判明する遺構は落とし穴状遺構で01、03、07、15、18、19、20、29、30、34、40、41、42、43、48、49、50、51、52、56、58の21基がこれに該当する。また特異なプランをもつ土坑としては、半円截頭形のプランで片側の断面が直立して立ち上がる特徴をもった遺構が23、28、38にみられる。また、円形プランの底面に焼土を伴う土坑が、26、39にみられる。その他については遺構としての認定、性格においても不明な部分がおおい。

01土坑 (図29 図版12)

位置 X5-1Gに位置する。

規模 2.17m×1.46m×深さ2.23mの楕円形を呈する。主軸方向 N-31°-W。

所見 覆土は上層に黒褐色土、中層以下褐色土（ローム粒、ロームブロック混合層）となっている。遺物は最上層の黒褐色土中より3点程出土している。縄文中期阿玉台式の小片であり、埋積土中のため本土坑に伴うものではない。

02土坑 (図30 図版12)

位置 W5-9Gに位置する。

規模 2.15m×1.35m×深さ0.71mの不整形を呈する。主軸方向 N-85°-E。

所見 覆土は上層で黒褐色土、下層でローム土を主体とした褐色土である。遺物は16点程出土しているが底面から浮いており本土坑に伴うものかどうかは判然としない。

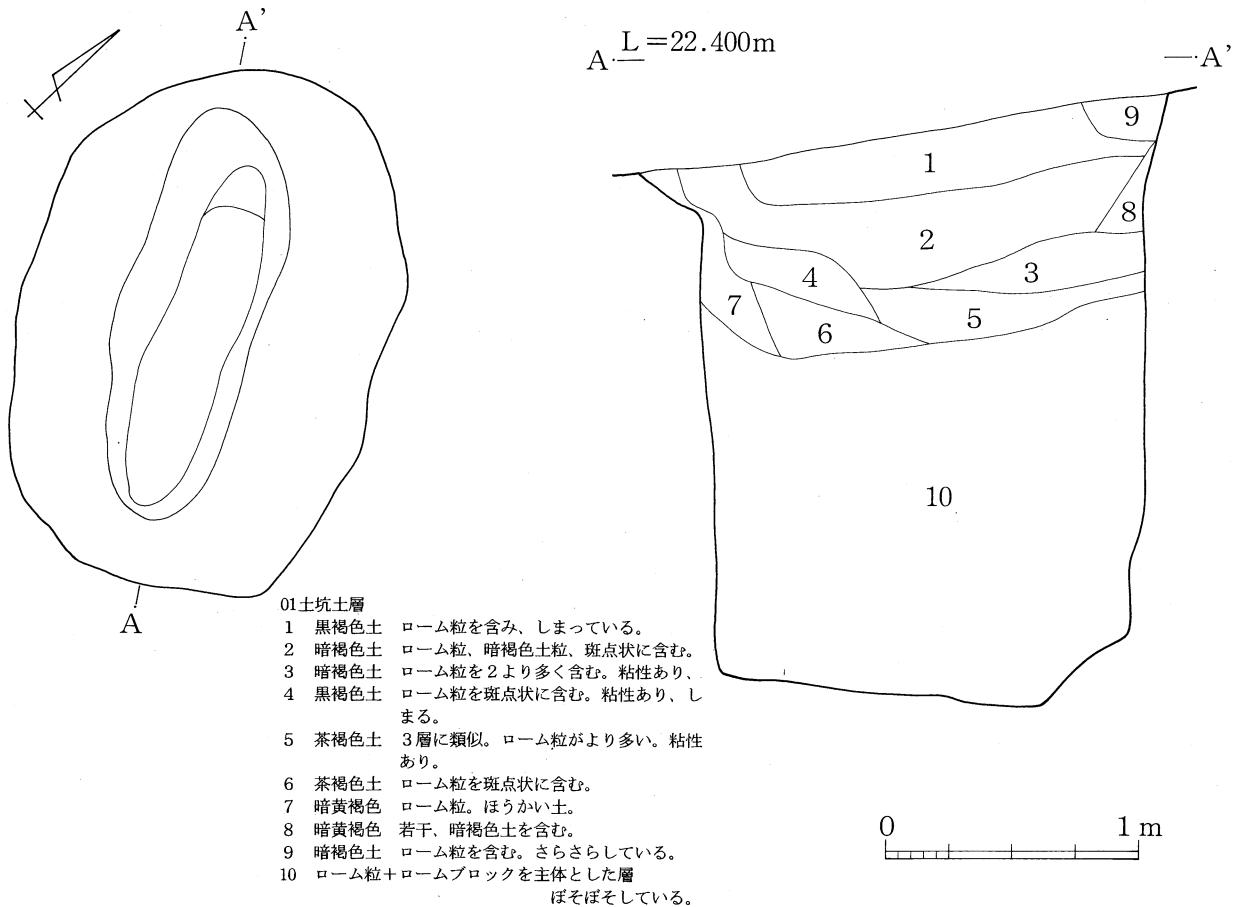


図29 01土坑遺構平面図

03土坑（図30 図版12）

位置 Y 5 -14、15Gに位置する。

規模 3.59m×1.70m×深さ1.98mの楕円形を呈する。主軸方向 N-27°-E。

所見 覆土は上層に黒褐色土、中層以下褐色土（ローム粒、ロームブロック混合層）となっている。遺物は出土していないため、時期不明である。

04土坑（図31 図版12）

位置 W 6 -12Gに位置する。

規模 2.93m×1.52m×深さ0.28mの不整形を呈する。主軸方向 N-79°-E。

所見 覆土は暗褐色土を基調とした土層となっている。遺物は最上層において2点出土しているが小片のため、時期不明である。

06土坑（図31）

位置 W 6 -12Gに位置する。

規模 1.90m×1.04m×深さ0.21mの不整楕円形を呈する。主軸方向 N-88°-E。

所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土を基調としている。遺物は出土していないため、時期不明である。

08土坑（図31 図版12）

位置 X 6 - 6 Gに位置する。

規模 1.10m×0.83m×深さ0.37mの不整形を呈する。主軸方向 N-18°-E。

所見 覆土は暗褐色土を基調としている。遺物は出土していないため、時期不明である。

09土坑（図31 図版12）

位置 X 6 - 6、7 Gに位置する。

規模 1.60m×1.11m×深さ0.55mの楕円形を呈する。主軸方向 N-52°-E。

所見 覆土は暗褐色土を基調としている。遺物は底面の深い方で2点出土している。内1点は図示したが燃糸文を施した胴部片である。

11土坑（図31 図版12）

位置 Y 6 - 4 Gに位置する。

規模 2.03m×0.92m×深さ0.44mの楕円形を呈する。主軸方向 E-9°-S。

所見 覆土は暗褐色土を基調としている。遺物は出土していないため、時期不明である。断面の形態が片側が直立に立ち上がり、反対側が緩やかに立ち上がる特徴を持つ。

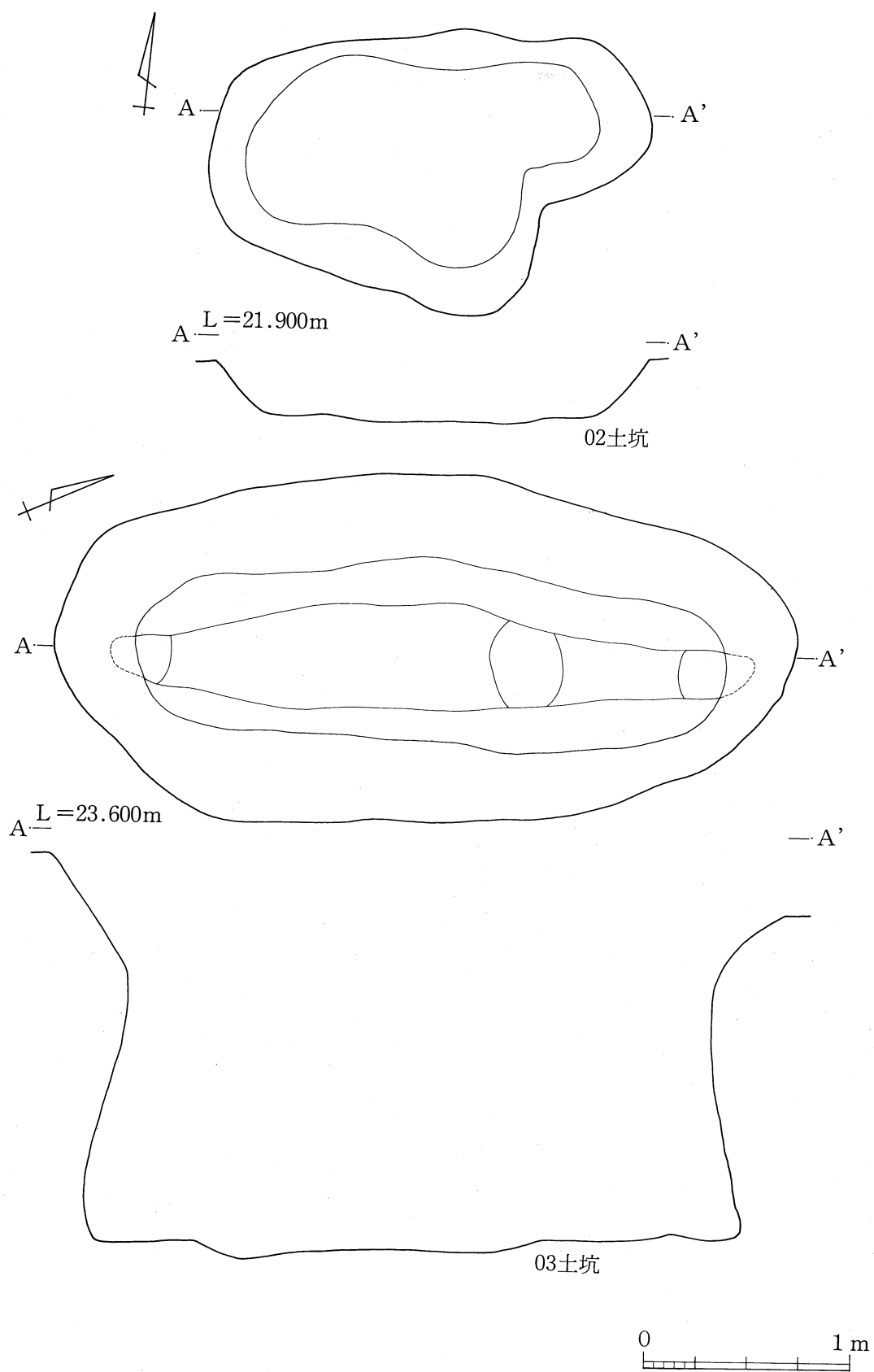
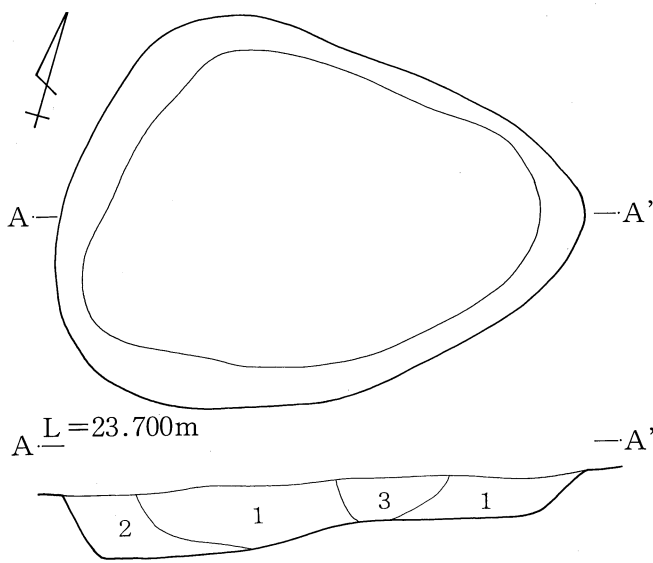
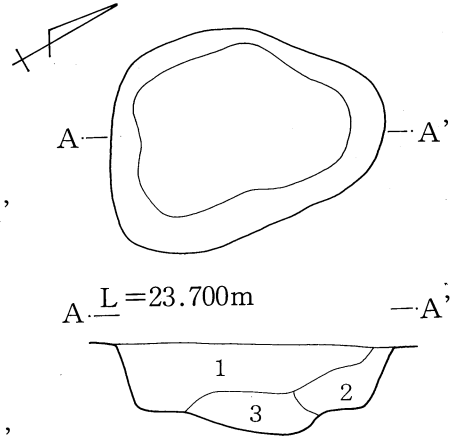


图30 02·03土坑遺構平面図



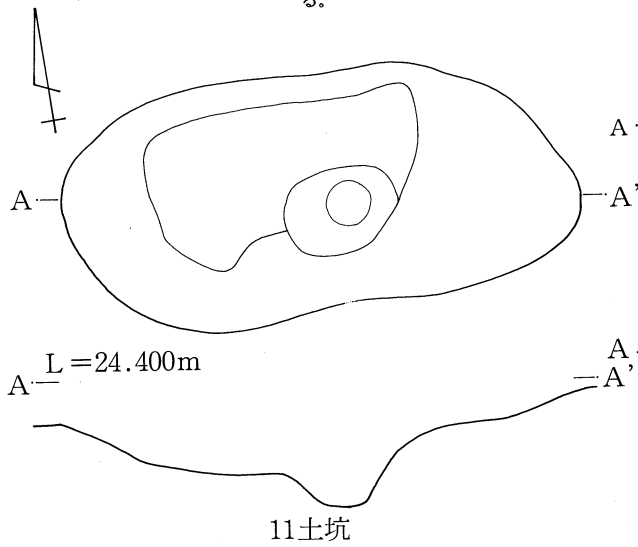
04土坑

- 04土坑土層
- 1 暗褐色土 ローム粒、斑点状に含む。割合多し。暗褐色土との混合層。
 - 2 黒褐色土 ローム粒、少量含む。若干粘性あり、しまっている。
 - 3 暗褐色土 ローム粒少量斑点状に含む。しまっている。

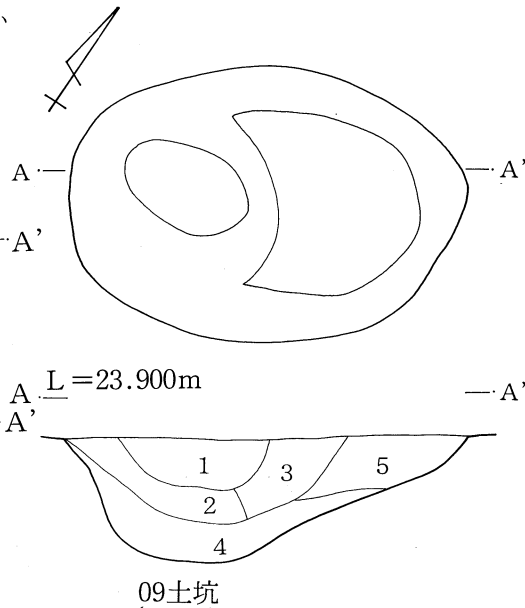


08土坑

- 08土坑土層
- 1 暗褐色土 黒色土粒と、ローム粒が混在している。粒子細かい。
 - 2 茶褐色土 ローム粒多く、3~5mm大、ロームブロック混入。ぼそぼそする。
 - 3 暗褐色土 黒色土主体、2cm大ロームブロック含む。ぼそぼそする。

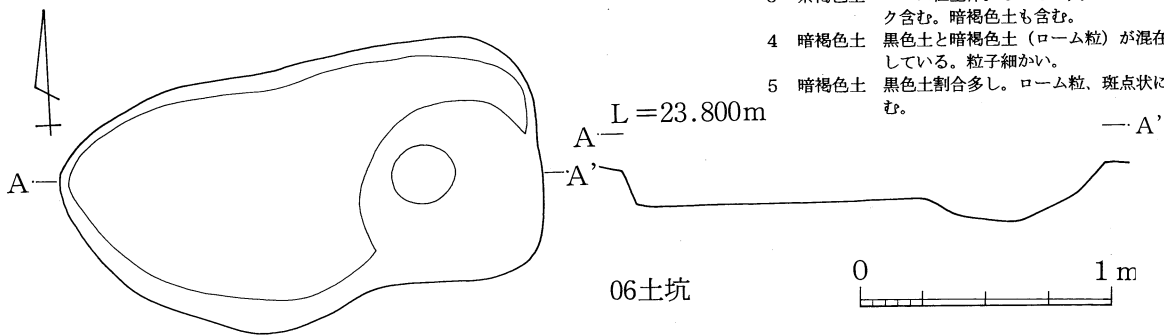


11土坑



09土坑

- 09土坑土層
- 1 暗褐色土 ロームブロック、3cm大含む。しまっている。
 - 2 黒褐色土 暗褐色土(ローム粒)斑点状に含む。若干粘性あり。
 - 3 茶褐色土 ローム粒主体。3~5cm大ロームブロック含む。暗褐色土も含む。
 - 4 暗褐色土 黒色土と暗褐色土(ローム粒)が混在化している。粒子細かい。
 - 5 暗褐色土 黒色土割合多し。ローム粒、斑点状に含む。



06土坑

図31 04・06・08・09・11土坑遺構平面図

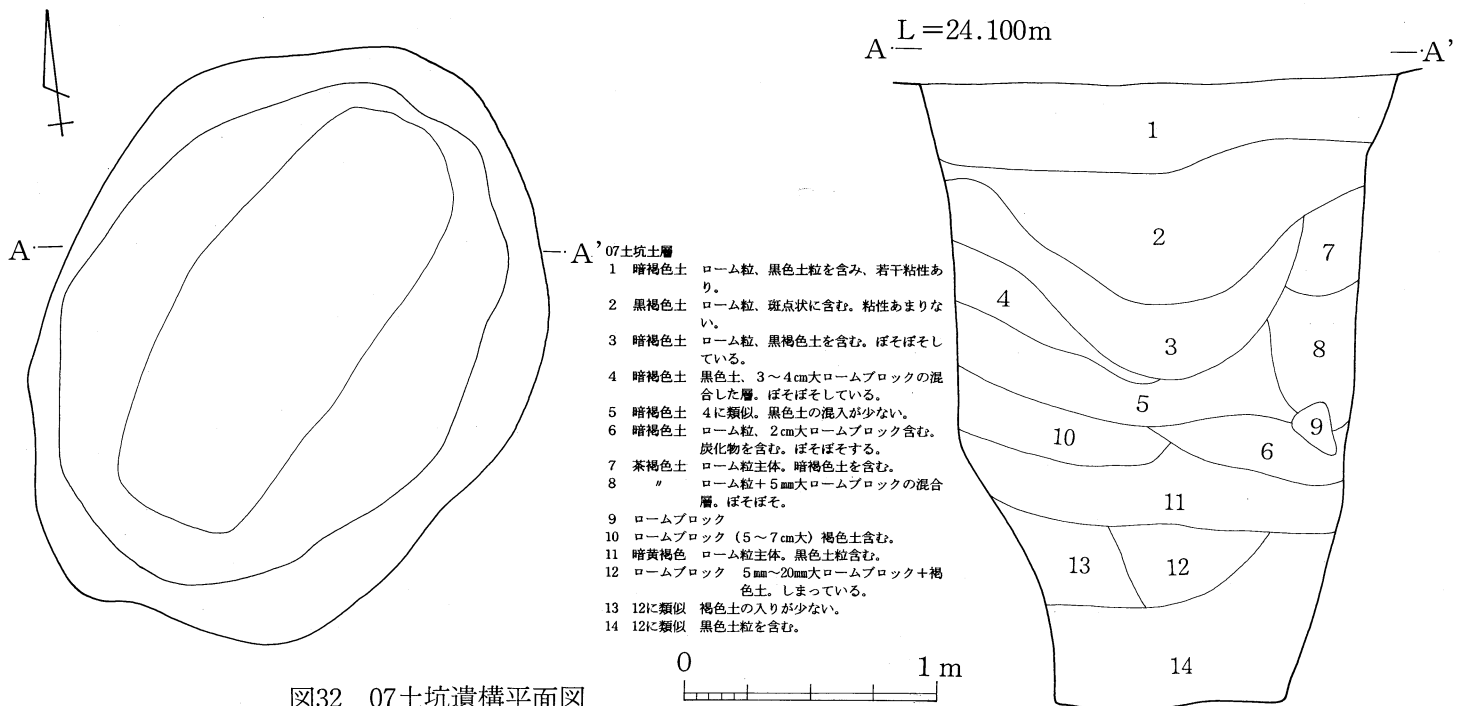


図32 07土坑遺構平面図

- 07土坑土層
- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒を含み、若干粘性あり。
 - 2 黒褐色土 ローム粒、斑点状を含む、粘性あまりない。
 - 3 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土を含む、ぼそぼそしている。
 - 4 暗褐色土 黒色土、3~4cm大ロームブロックの混合した層、ぼそぼそしている。
 - 5 暗褐色土 4に類似、黒色土の混入が少ない。
 - 6 暗褐色土 ローム粒、2cm大ロームブロック含む、炭化物を含む、ぼそぼそする。
 - 7 茶褐色土 ローム粒主体、暗褐色土を含む。
 - 8 " ローム粒+5mm大ロームブロックの混合層、ぼそぼそ。
 - 9 ロームブロック
 - 10 ロームブロック (5~7cm大) 褐色土含む。
 - 11 暗黄褐色 ローム粒主体、黒色土粒含む。
 - 12 ロームブロック 5mm~20mm大ロームブロック+褐色土、しまっている。
 - 13 12に類似 褐色土の入りが少ない。
 - 14 12に類似 黒色土粒を含む。

07土坑 (図32 図版12)

位置 Y 6 - 2 G に位置する。

規模 2.47m × 1.78m × 深さ2.74mの楕円形を呈する。主軸方向 N-38°-E。

所見 覆土は上層に黒褐色土、中層以下褐色土（ローム粒、ロームブロック混合層）となっている。遺物は最上層の黒褐色土中より2点程出土している。2点共混入遺物で縄文前期（黒浜式）の遺物である。

12土坑 (図33 図版13)

位置 X 6 - 9 G に位置する。

規模 1.59m × 1.05m × 深さ0.33mの不整形を呈する。主軸方向 N-4°-W。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土（ローム粒混じり）となっている。平面形の特徴は北及び東側において緩やかに立ち上がる中場を持つことである。遺物は壁面に密着して1点出土しているが小片のため図示できなかった。

13土坑 (図33 図版13)

位置 X 6 - 4 G に位置する。

規模 1.47m × 1.10m × 深さ0.58mの不整形を呈する。主軸方向 E-28°-S。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土（ローム粒混じり）となっている。平面形の特徴は東側においてテラス状になる中場を持つことである。遺物は1点も出土していないため、時期不明であるが覆土からすると縄文の他の遺構と同様の堆積土である。

14土坑 (図34)

位置 Y 5 - 11 G に位置する。

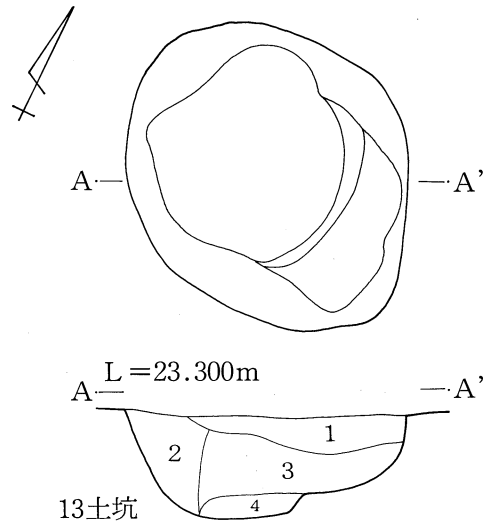
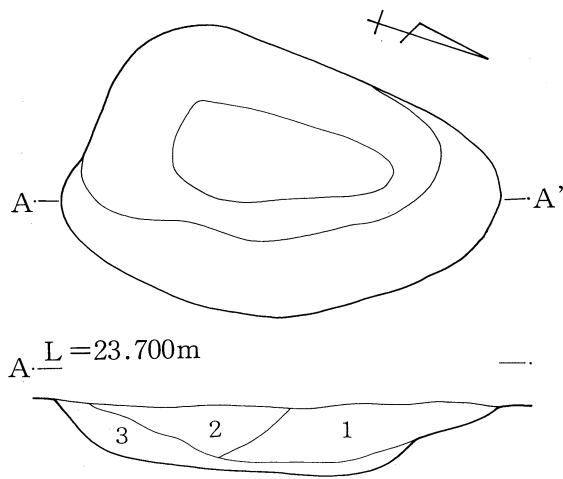
規模 1.60m × 1.38m × 深さ0.68mの不整形を呈する。主軸方向 N-59°-E。

所見 この土坑は01住に壊されてつくられている。01住検出時において貼り床部分等の存在からトレンチを設定して確認した経緯がある。覆土は上層で暗褐色土、下層で黒色土となっている。平面形は底面が偏った円形である。遺物は01住の混入遺物とも考えられる黒浜式小片のみで時期は明確ではない。

15土坑 (図33 図版13)

位置 a 6 - 10 G に位置する。

規模 2.65m × 1.4m × 深さ1.96mの楕円形を呈する。主軸方向 N-54°-E。



12土坑土層

- | | | | |
|---|------|--------------------------|------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒、黒色土粒、斑点状に含む。しまっている。 | 12土坑 |
| 2 | 暗褐色土 | 黒色土粒、少量含む。しまっている。 | |
| 3 | " | ローム粒多く含んでいる。 | |

13土坑土層

- | | | |
|---|------|------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 黒色土粒、ローム粒、斑点状に入る。ぼそぼそしている。 |
| 2 | 黒褐色土 | ローム粒少量含む。ぼそぼそしている。 |
| 3 | " | 2に比べローム粒の混入がほとんどない。ぼそぼそしている。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒に黒色土を混入。 |

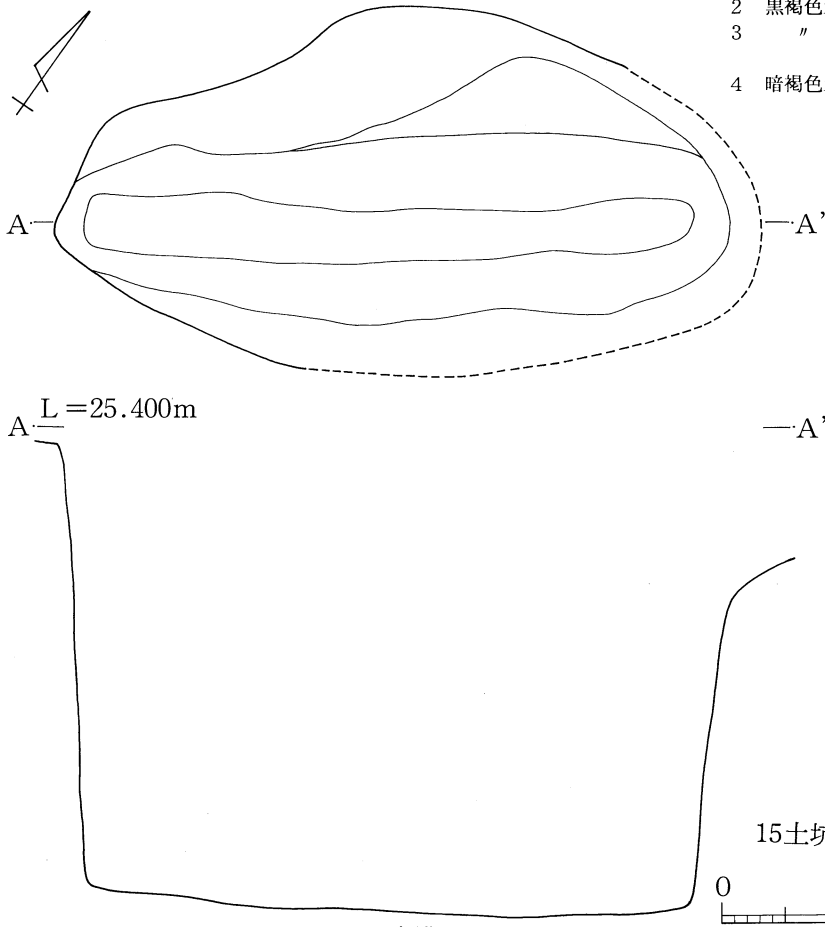


図33 12・13・15土坑遺構平面図

所見 覆土は上層に黒褐色土、中層に暗褐色土(黒色土粒混じり)、下層に褐色土(ソフトローム+ロームブロック混合層)となっている。平面形の特徴は南北辺に沿って緩やかな立ち上がり面をもっている点である。遺物は黒浜式の新しい段階から浮島Ⅲ~興津式が出土している。

18土坑(図34)

位置 Z7-4Gに位置する。

規模 2.58m×1.57m×深さ2.50mの楕円形を呈する。主軸方向 N-35°-E。

所見 覆土は上層から中層にかけて黒褐色土・暗褐色土(1.5m前後の堆積)、下層は褐色土(ソフトローム+ロームブロック混合層)となっている。平面形の特徴は底面において1か所小穴が穿たれていることである。遺物は出土していないため、時期不明である。

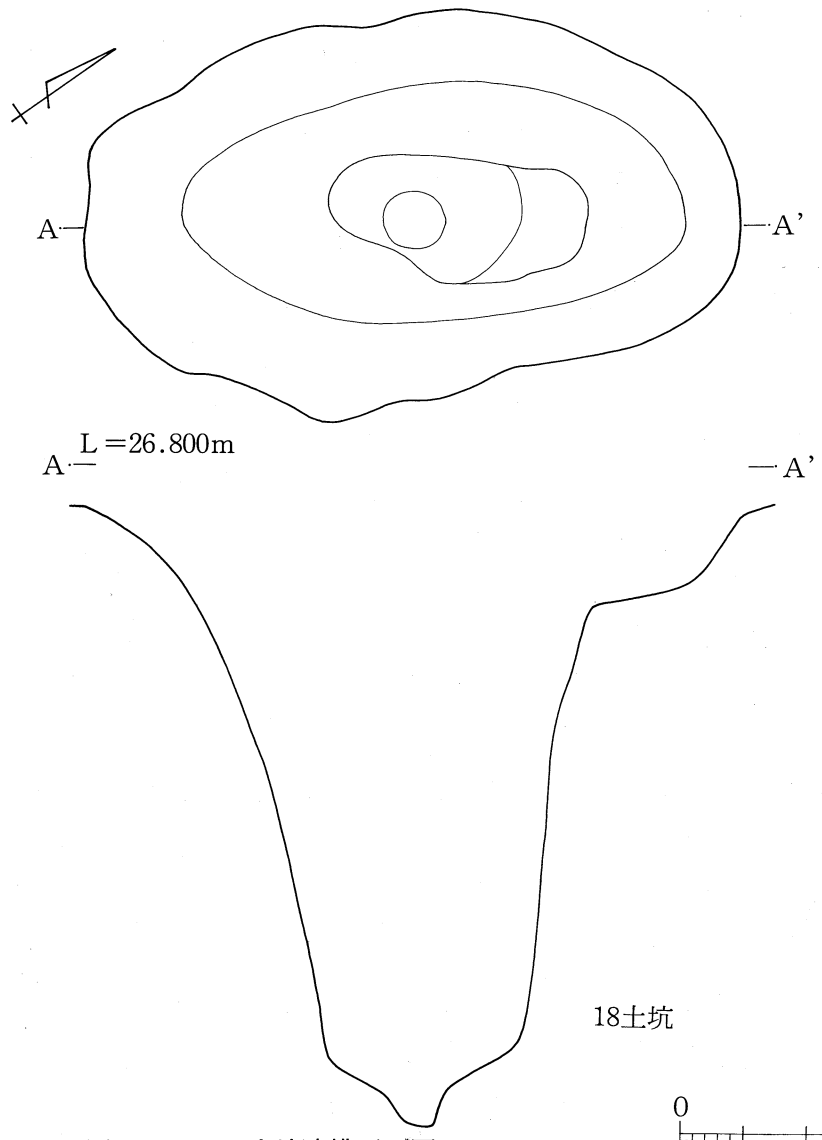
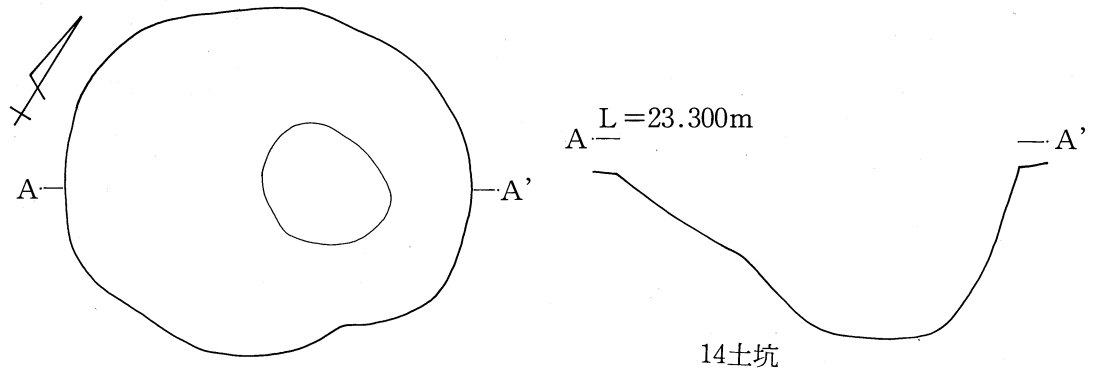


图34 14·18土坑遺構平面圖

17土坑 (図35 図版13)

位置 a 7-3 Gに位置する。

規模 1.20m×1.21m×深さ0.53mの略円形を呈する。主軸方向 N-76°-W。

所見 覆土は上層に暗褐色土、下層に黒褐色土（ローム粒を斑点状に含む。）となっている。時期不明

19土坑 (図35)

位置 Y 7-4 Gに位置する。

規模 3.48m×1.33m×深さ1.88mの楕円形を呈する。主軸方向 N-38°-E。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に褐色土（ローム粒混じり）となっている。断面の特徴として底面から上0.8m位までは幅0.3~0.4mと狭い。底面は平らで長軸方向のオーバーハングも見られない。遺物なく時期不明。

22土坑 (図35 図版13)

位置 X 7-13Gに位置する。

規模 0.68m×0.70m×深さ0.53mの不整形円形を呈する。主軸方向 N-48°-E。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に茶褐色土（ローム粒混じり）となっている。時期不明。

20土坑 (図36 図版13)

位置 X 9-15Gに位置する。

規模 2.89m×0.77m×深さ1.10mの楕円形を呈する。主軸方向 N-48°-E。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に褐色土（ローム粒混じり）となっている。断面の特徴として底面が10~15cmと狭い。底面は平らで著しいT字状の断面も見られない。遺物なく時期不明。

23土坑 (図36 図版14)

位置 Y 7-13Gに位置する。

規模 2.25m×0.98m×深さ0.39mの楕円形を呈する。主軸方向 N-60°-E。

所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土となっている。遺物は覆土上面から前期黒浜式が一点出土している。

24土坑 (図36)

位置 Y 7-11Gに位置する。

規模 1.53m×1.30m×深さ0.31mの不整形を呈する。主軸方向 不明

所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土となっている。遺物は小片のため図示できなかった。時期不明。

25土坑 (図36)

位置 Y 8-12Gに位置する。

規模 1.18m×0.94m×深さ0.32mの略円形を呈する。主軸方向 N-22°-W。

所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土となっている。遺物出土せず時期不明。

26土坑 (図37 図版14)

位置 Z 9-8 Gに位置する。

規模 1.43m×1.27m×深さ0.28mの略円形を呈する。主軸方向 N方向

所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土となっている。底面に2cm程度の厚さで焼土混じりの暗褐色土が堆積している。範囲は0.35m×0.30m程度である。遺物は前期黒浜式が1点出土している。

27土坑 (図37 図版14)

位置 X 8-11Gに位置する。

規模 3.1m×2.53m×深さ0.5mの隅丸方形を呈する。主軸方向 N-5°-W。

所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土となっている。遺物なく時期不明。

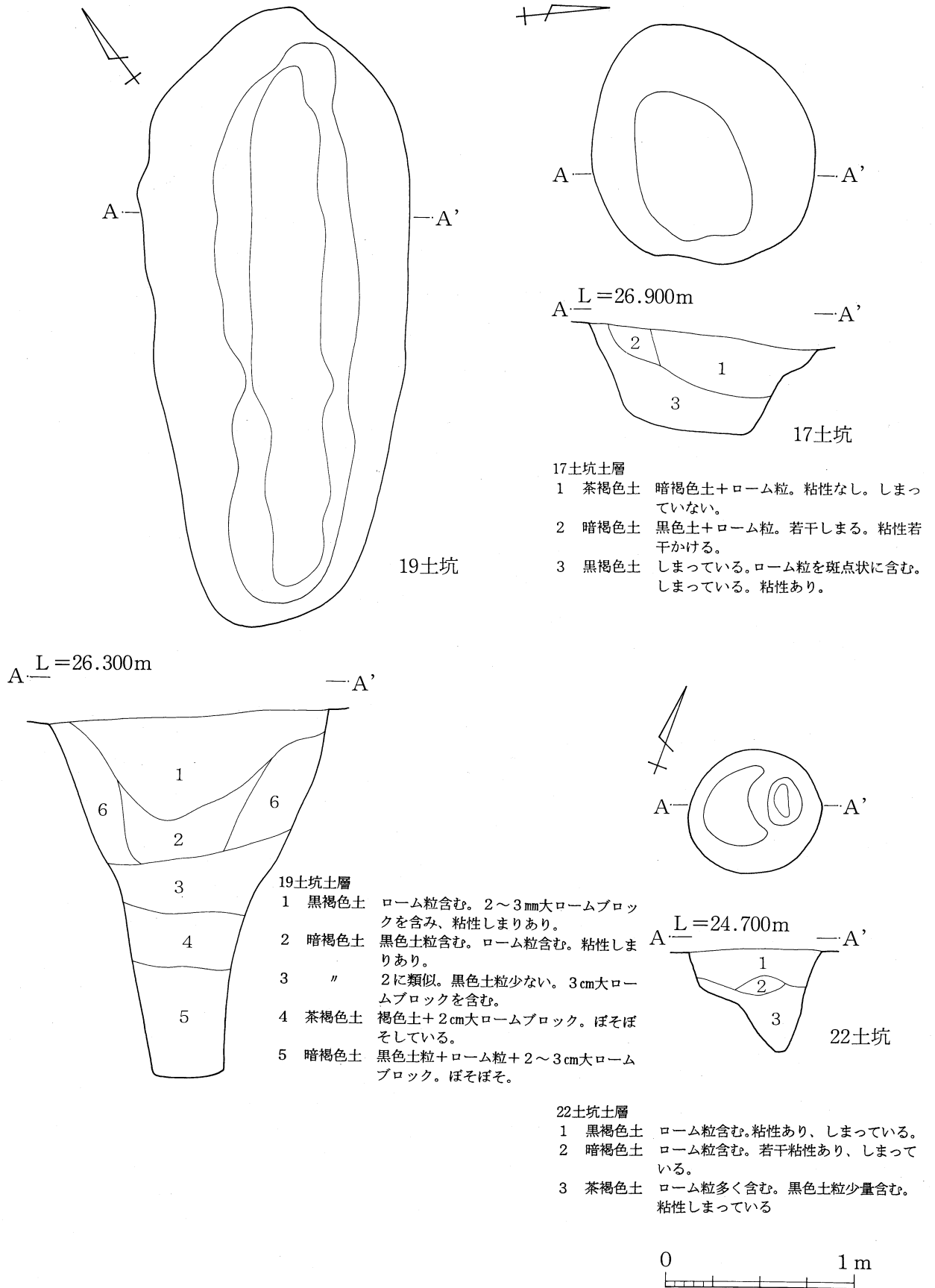


図35 17・19・22土坑遺構平面図

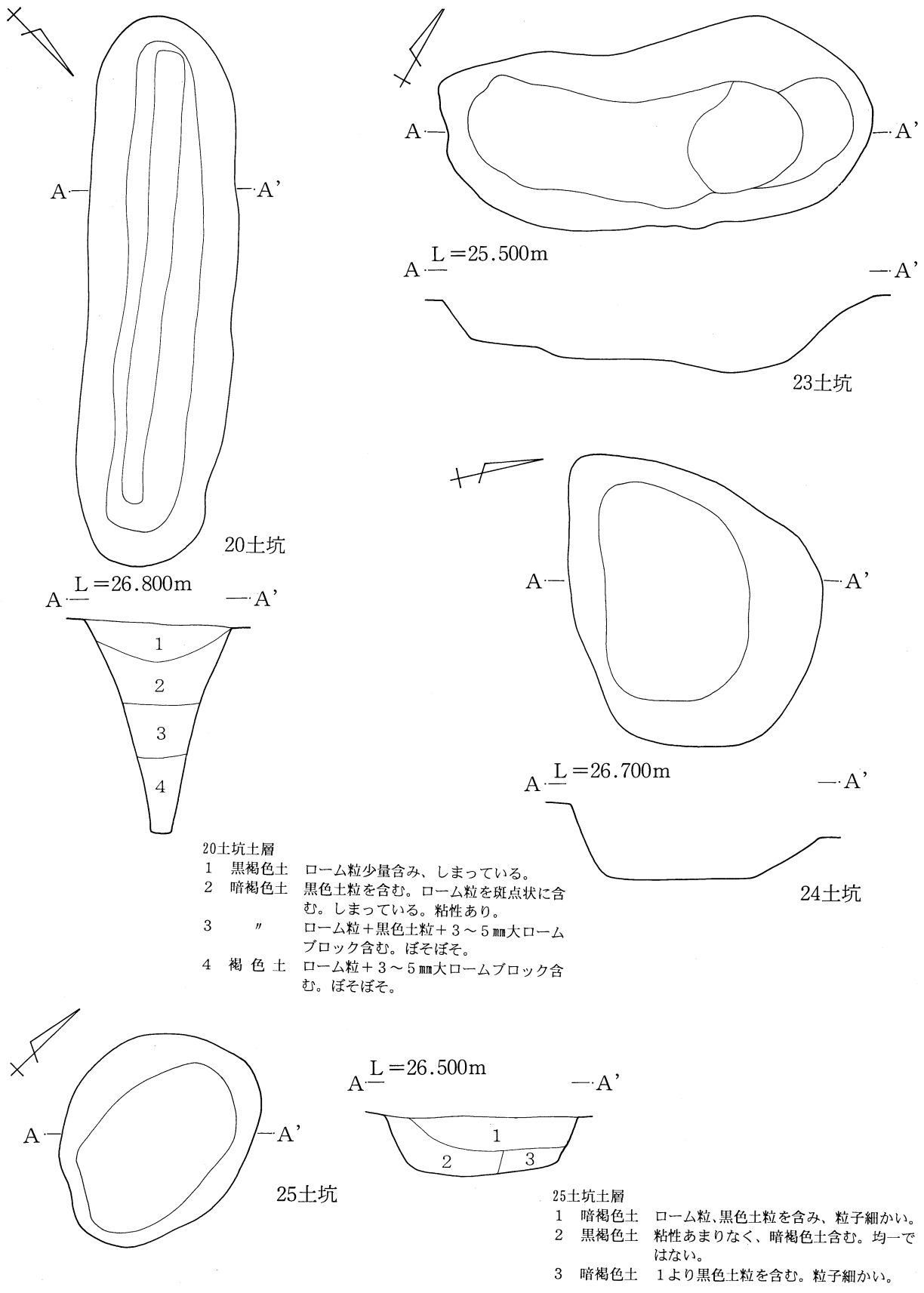
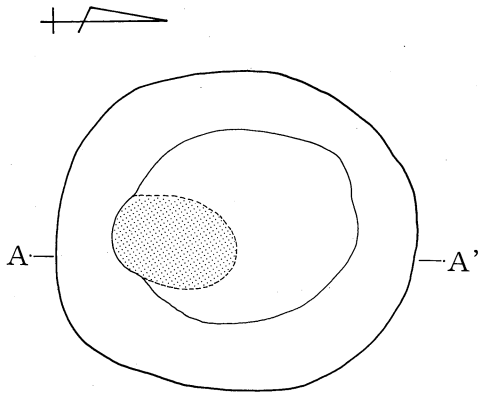
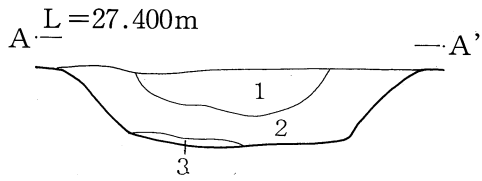


図36 20・23・24・25土坑遺構平面図

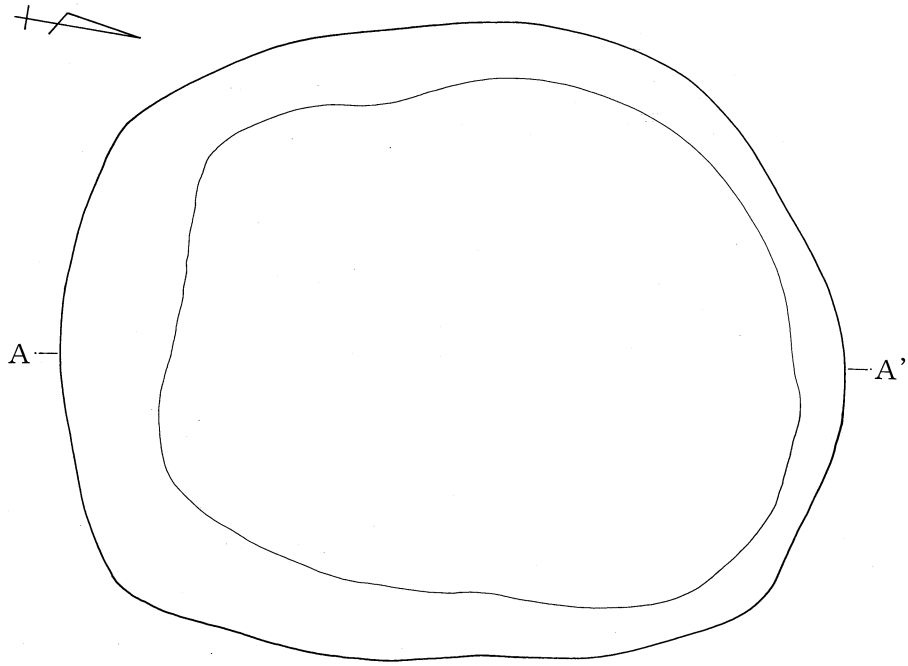


26土坑

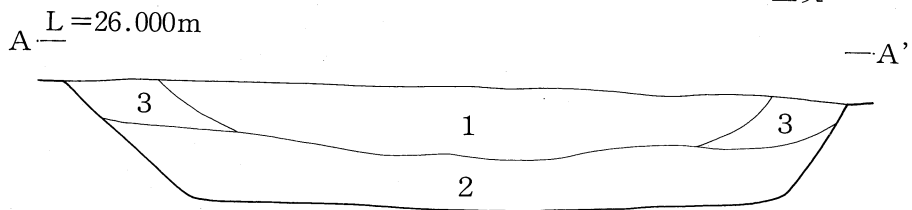


26土坑土層

- 1 黒褐色土 スコリヤを少量含み、粘性はない。粒子細かい。
- 2 暗褐色土 黒色土粒+ローム粒、均一に含む。粘性あり、しまっている。
- 3 " 2に類似するが、焼土粒を少量含む。



27土坑



27土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒含み、粒子細かい。しまっている。粘性なし。
- 2 暗褐色土 1に類似。ローム粒がやや多い。
- 3 " 1に類似。ローム粒が2より少ない。



図37 26・27土坑遺構平面図

28土坑（図38 図版14）

位置 X 7 - 3、7 Gに位置する。

規模 3.88m×1.0m×深さ0.5mの半月形を呈する。主軸方向 N-78°-W。

所見 断面形状は片側で緩やかに反対側で急勾配に立ち上がる。遺物は縄文前期が5点出土している。
覆土は上層に黒褐色土、下層で暗褐色土となっている。

29土坑（図38 図版14）

位置 X 9 - 4、8 Gに位置する。

規模 2.83m×1.45m×深さ1.85mの楕円形を呈する。主軸方向 N-74°-W。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に褐色土（ローム粒混じりしまり欠く）となっている。断面はろ斗状に立ち上がっている。底面は平らである。

30土坑（図39 図版14）

位置 W11-9、10Gに位置する。

規模 2.82m×1.35m×深さ1.78mの楕円形を呈する。主軸方向 N-21°-E。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に褐色土（ローム粒混じりしまり欠く）となっている。断面はろ斗状に立ち上がっている。底面は平らである。最上層に前期黒浜式が出土している。

32土坑（図39 図版14）

位置 Z 7 - 15Gに位置する。

規模 1.43m×1.40m×深さ0.37mの略円形を呈する。主軸方向 不明

所見 覆土は黒褐色土となっている。遺物なく時期不明。

33土坑（図39）

位置 W 7 - 4、W 8 - 1 Gに位置する。

規模 1.84m×1.51m×深さ0.67mの不整形を呈する。主軸方向 N-22°-E。

所見 覆土は暗褐色土が主体となっている。遺物なく時期不明。

34土坑（図40 図版14）

位置 U13-9 Gに位置する。

規模 1.84m×1.56m×深さ2.23mの楕円形を呈する。主軸方向 N-76°-E。

所見 覆土は確認面から80cm位までは黒褐色土、暗褐色土でその層以下ではローム粒主体の褐色土となっている。ぼそぼそでしまりない土質である。

35土坑（図40 図版15）

位置 U13-2 Gに位置する。

規模 1.55m×0.94m×深さ0.38mの楕円形を呈する。主軸方向 N-61°-W。

所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土となっている。

36土坑（図40 図版15）

位置 U13-15Gに位置する。

規模 1.05m×0.89m×深さ0.32mの不整形を呈する。主軸方向 N-31°-E。

所見 覆土は暗褐色土中心となっている。遺物なく時期不明。

37土坑（図40 図版15）

位置 U13-12Gに位置する。

規模 0.93m×0.93m×深さ0.24mの略円形を呈する。主軸方向 不明

所見 覆土はローム粒、黒褐色土粒混じりの暗褐色土となっている。遺物なく時期不明。

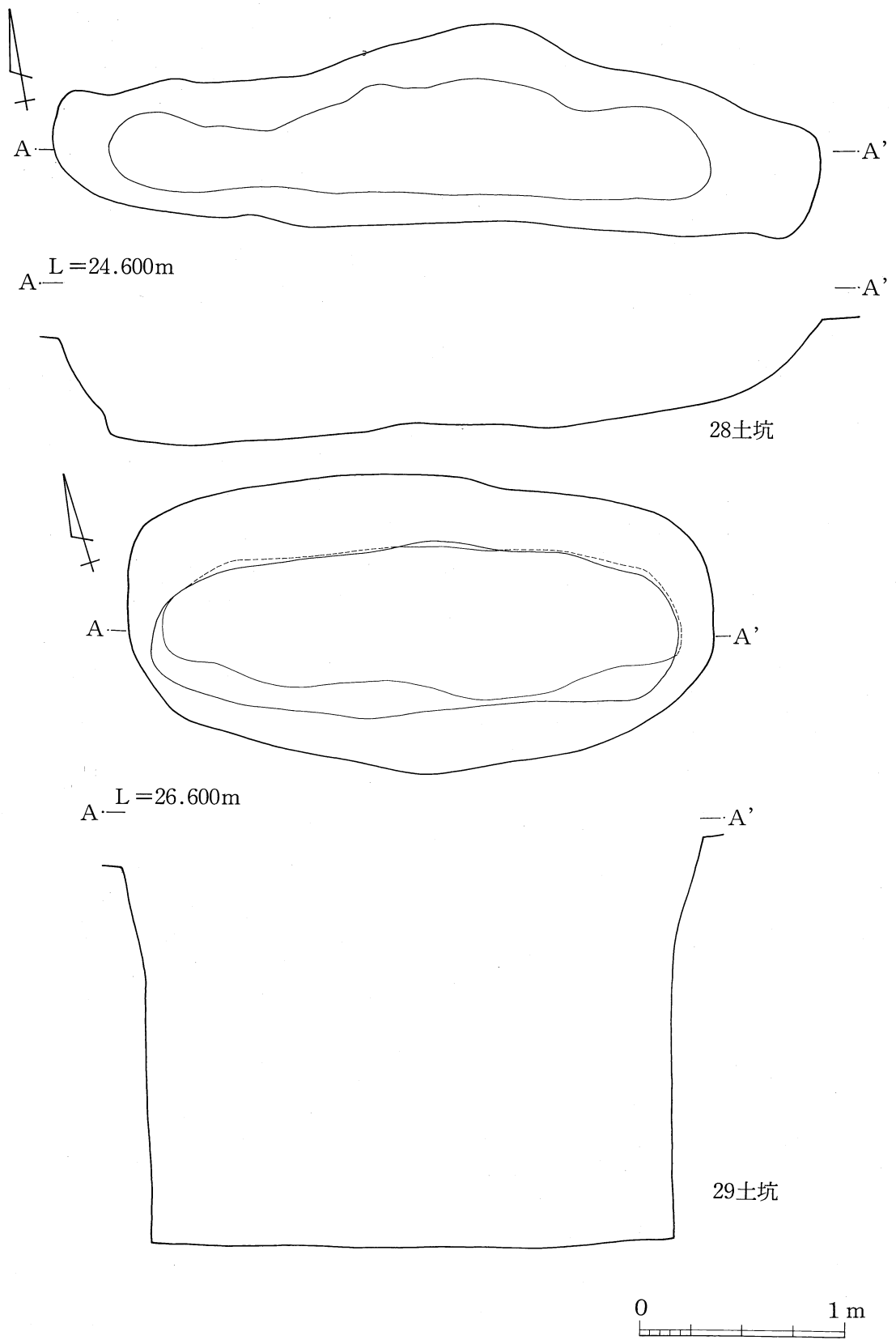
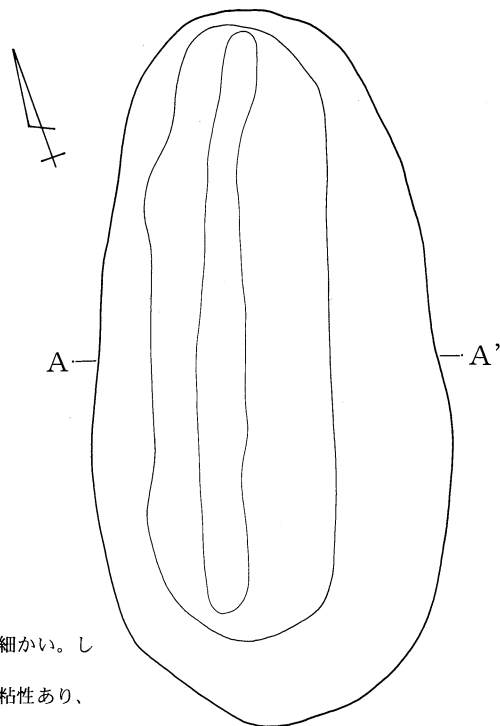
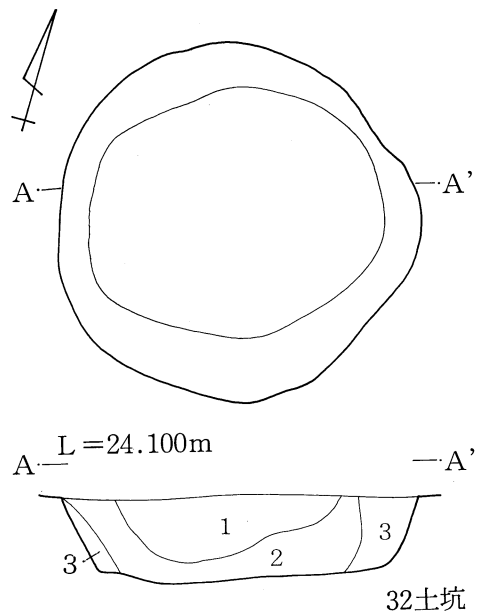
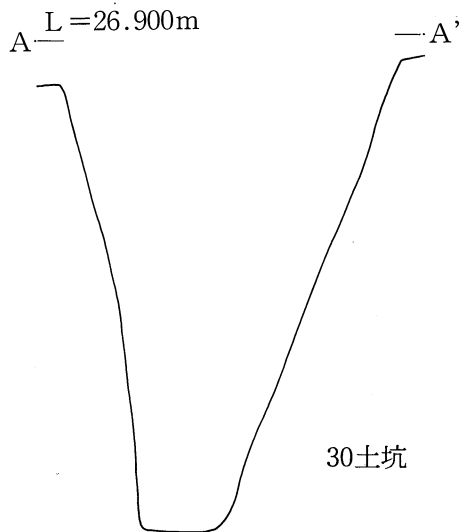
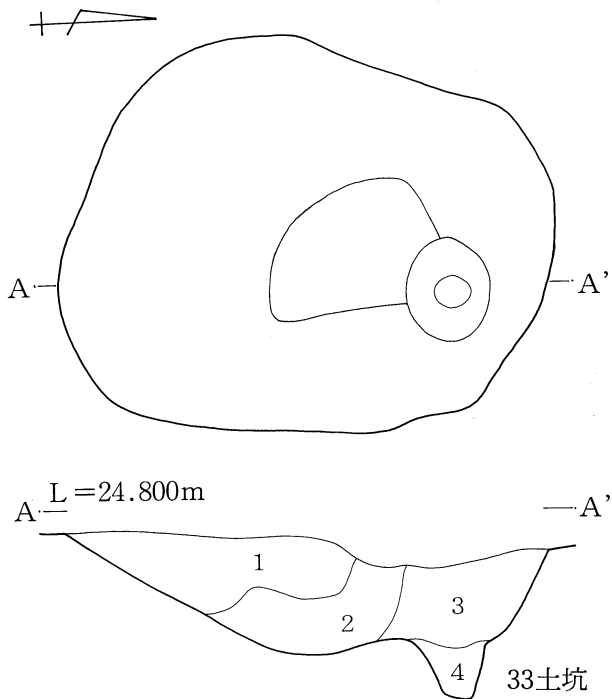


图38 28·29土坑遺構平面图



- 32土坑土層
- 1 黒褐色土 ローム粒ごく少量含む。粒子細かい。しまっているが粘性はない。
 - 2 " 1よりローム粒を含む。若干粘性あり、しまっている。
 - 3 茶褐色土 ローム粒+黒色土粒。若干粘性あり、粒子細かい。



- 33土坑土層
- 1 暗褐色土 ローム粒+黒色土粒が斑点状に含まれる。若干粘性あり、しまっている。
 - 2 黒褐色土 黒色土中心にローム粒斑点状に含まれる。少量しまりにかける。
 - 3 暗褐色土 1に類似するが、ローム粒が少なめである。
 - 4 " 3に類似、黒色土粒がより多い。

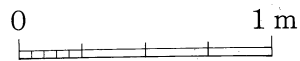


図39 30・32・33土坑遺構平面図

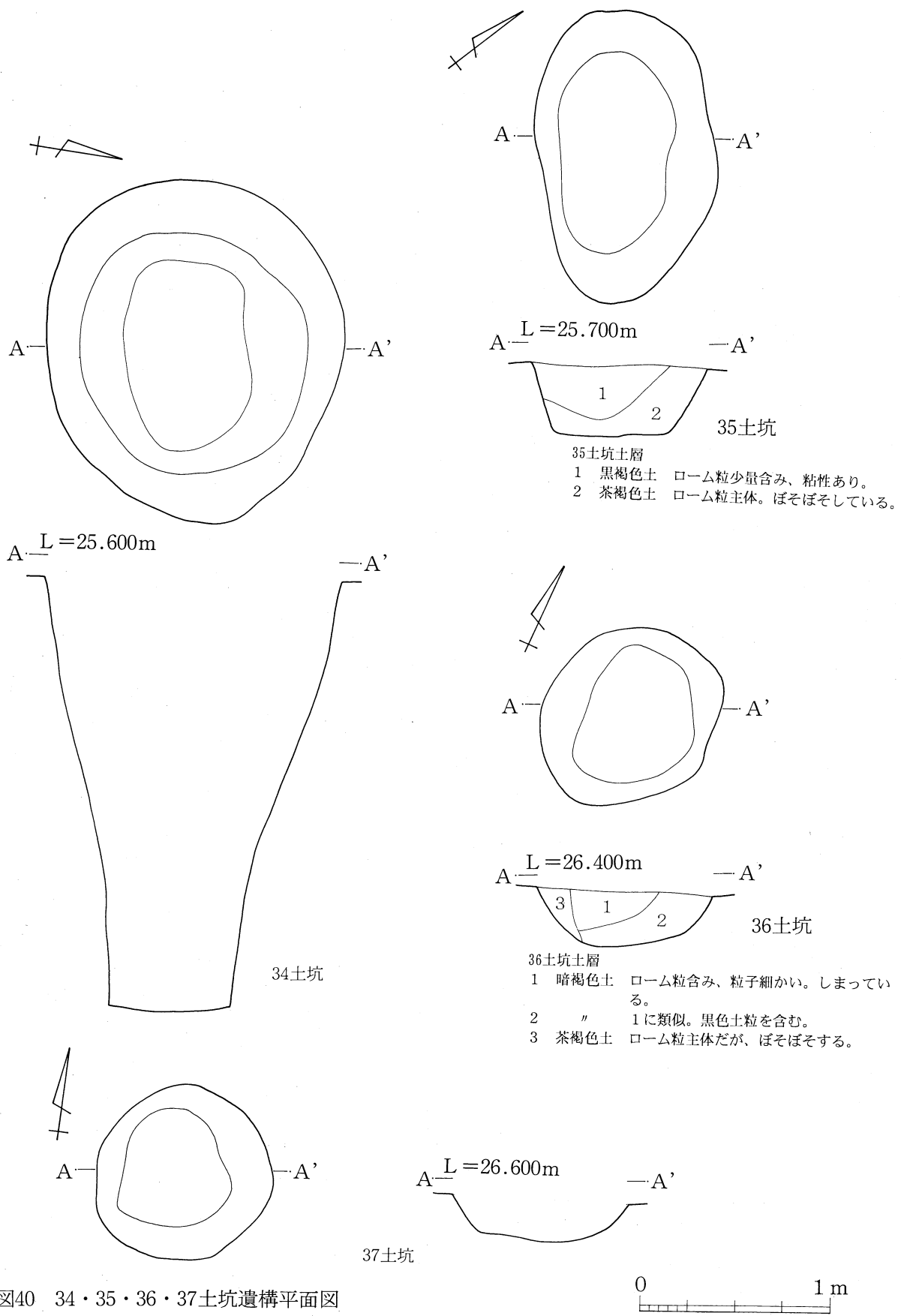


図40 34・35・36・37土坑遺構平面図

38土坑（図41 図版15）

位置 U13-3Gに位置する。

規模 2.22m×0.85m×深さ0.59mの半月形を呈する。主軸方向 N-52°-W。

所見 断面形状は片側で緩やかに反対側で急勾配に立ち上がる。遺物なく時期不明。覆土は上層に暗褐色土、下層に黒褐色土となっている。

39土坑（図41 図版15）

位置 U14-6Gに位置する。

規模 1.18m×0.97m×深さ0.19mの楕円形を呈する。主軸方向 N方向

所見 図示できなかったが東西幅0.5m程度、厚さ0.1m程度の焼土範囲を土層断面から確認している。遺物は石片1点が底面から0.14m浮いた状態で出土した。

40土坑（図41 図版15）

位置 R14-9、13Gに位置する。

規模 2.58m×1.09m×深さ1.15mの楕円形を呈する。主軸方向 N-57°-W。

所見 断面形状は若干T字状となっている。覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土となっている。なお、坑底は武蔵野粘質ローム（チョコレートローム）直上層となっている。

41土坑（図42 図版15）

位置 S14-8、S15-5Gに位置する。

規模 2.24m×1.59m×深さ2.03mの楕円形を呈する。主軸方向 N-85°-W。

所見 断面形状はほとんど斗状に近い断面となっている。長軸両端において若干斜めの立ち上がり部分を持つ。覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土となっている。

42土坑（図42 図版15）

位置 S15-9Gに位置する。

規模 2.49m×0.67m×深さ1.31mの楕円形を呈する。主軸方向 N-46°-W。

所見 平面形は狭長な楕円形で長軸に対して短軸が著しく狭い。断面形は坑底が狭い分直立して立ち上がる。覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土でしまった土質とぼそぼその土質にわかれる。

43土坑（図43 図版16）

位置 X8-1、2Gに位置する。

規模 3.22m×1.13m×深さ1.98mの楕円形を呈する。主軸方向 N-32°-E。

所見 断面形状はT字状で確認面から0.5m~0.7m付近から下は狭くなっている。坑底は南側で0.1m程度高くなっている。覆土は上層に黒褐色土、下層にぼそぼその褐色土となっている。

44土坑（図42 図版16）

位置 X8-2Gに位置する。

規模 0.89m×0.81m×深さ0.24mの略円形を呈する。主軸方向 不明

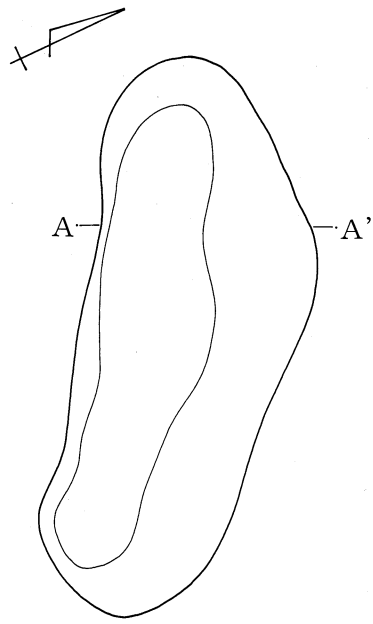
所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土となっている。遺物は前期黒浜式が出土している。

45土坑（図43）

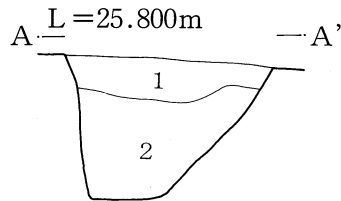
位置 X7-16Gに位置する。

規模 1.11m×1.29m×深さ0.85mの略台形を呈する。主軸方向 N-78°-E。

所見 断面形状は階段状に2段になっている。西側は一部攪乱を受けているが壁は直立したように立ち上がる。遺物は前期黒浜式が出土している。

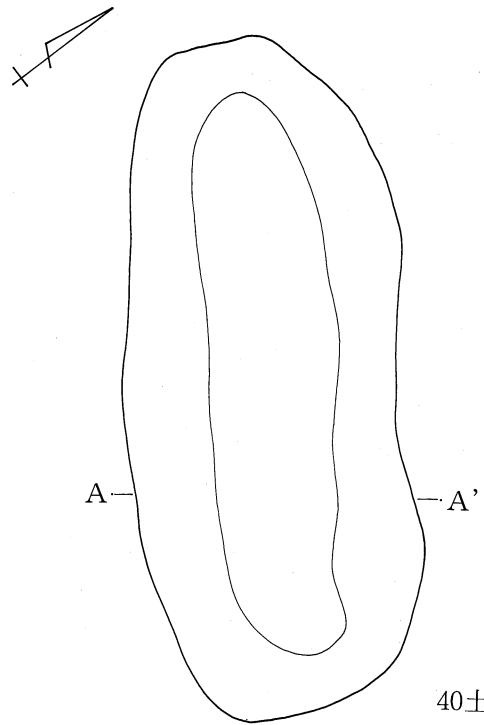


38土坑

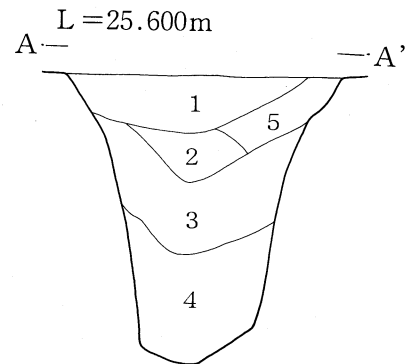


38土坑土層

- 1 暗褐色土 黒色土粒含み、しまっている。粘性欠く。
- 2 黒褐色土 ローム粒含み、しまっている。粘性あり。

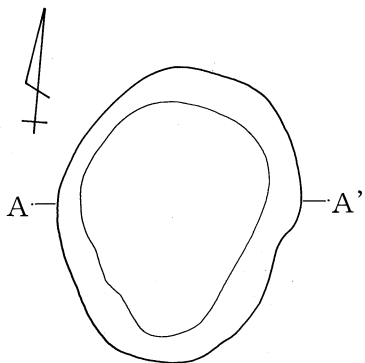


40土坑

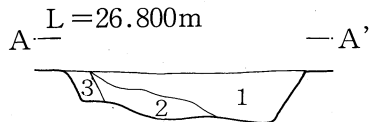


40土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含み、しまっている。粘性あまりない。
- 2 " 1に類似。よりローム粒を含む。
- 3 茶褐色土 ローム粒+2~3mm大ロームブロック+褐色土。しまっている。若干粘質。
- 4 " 暗褐色土+ロームブロック(2~3mm大)+ローム粒。ぼそぼそして粘性なし。
- 3 " 3に類似するが、ロームブロックがより多い。若干しまりにかける。
- 5 茶褐色土 ローム粒主体。若干しまりにかける。



39土坑

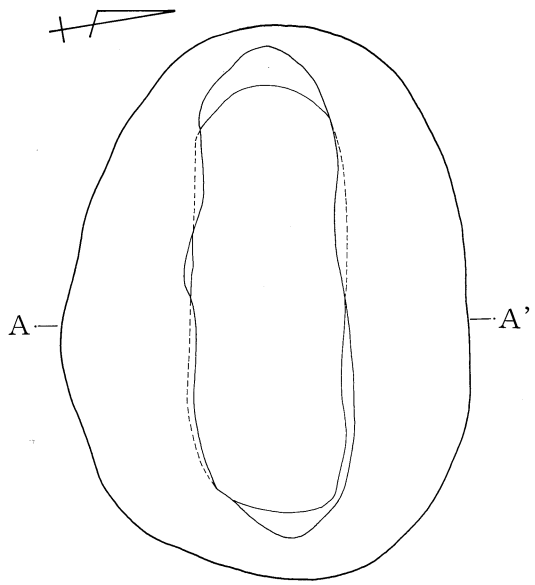


39土坑土層

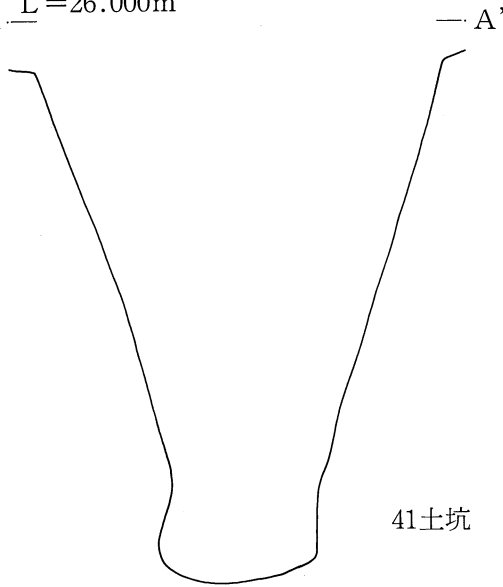
- 1 暗褐色土 黒色土粒主体として2~3mm大焼土ブロック含む。しまっている。粘性なし。
- 2 赤褐色土 焼土粒主体として暗褐色土含む。
- 3 茶褐色土 ローム粒+焼土粒

図41 38~40土坑遺構平面図

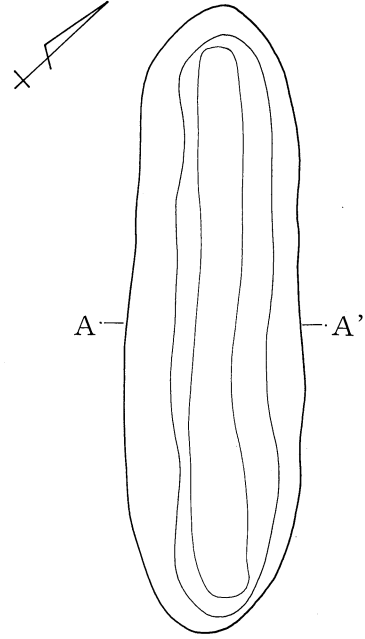




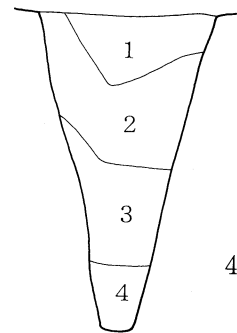
A L=26.000m



41土坑



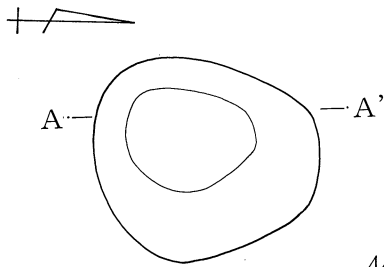
A L=25.600m



42土坑

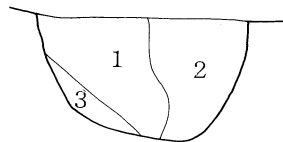
42土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。粘性あり、しまっている。
- 2 茶褐色土 ローム粒主体。黒色土粒含み、粘質しまっている。
- 3 " 3~5mm大ロームブロック+褐色土。ぼそぼそしている。
- 4 " 2に類似するが、黒色土粒がより少ない。



44土坑

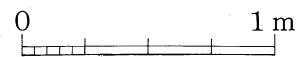
A L=25.300m



44土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含む。粘性あり。しまる。
- 2 暗褐色土 ローム粒+黒色土。ローム斑点状に含む。
- 3 " ローム粒主体。粘性あり。しまる。

図42 41・42・44土坑遺構平面図



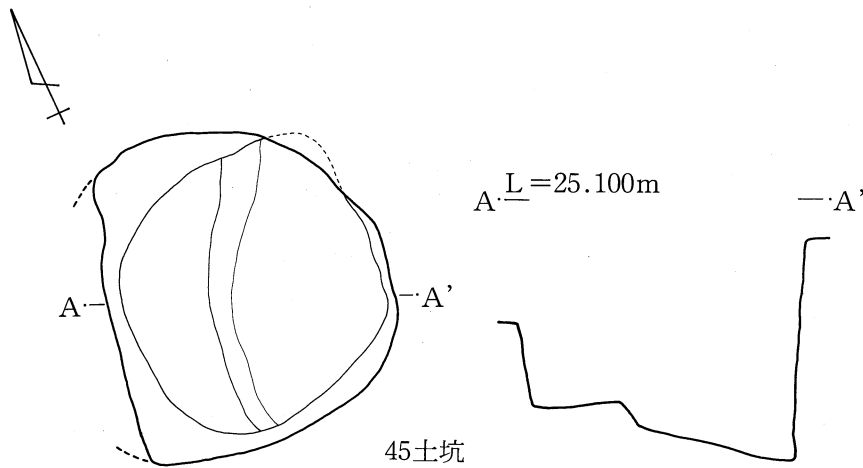
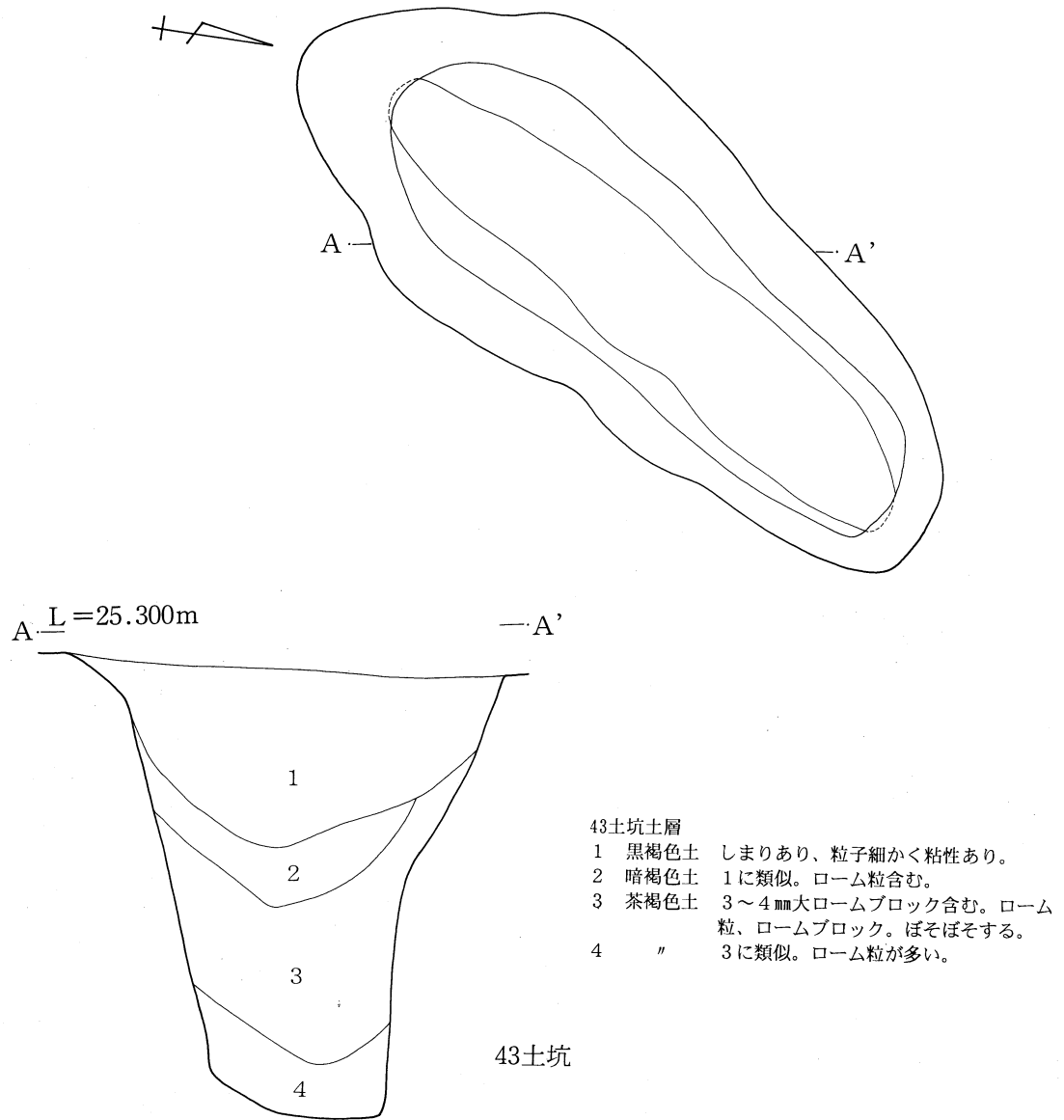
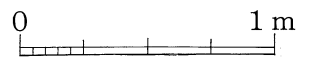


図43 43・45土坑遺構平面図



46土坑 (図44)

位置 014-11Gに位置する。

規模 2.06m×1.29m×深さ0.32mの隅丸長方形を呈する。主軸方向 N-6°-W。

所見 覆土は上層に暗褐色土、下層に褐色土となっている。遺物は前期黒浜式が出土している。

47土坑 (図44)

位置 014-11Gに位置する。

規模 1.43m×0.7m×深さ0.44mの楕円形を呈する。主軸方向 N-40°-W。

所見 覆土は上層に暗褐色土、下層に褐色土となっている。遺物なく時期不明。

48土坑 (図44 図版16)

位置 N14-12、N15-9Gに位置する。

規模 3.21m×0.89m×深さ1.21mの楕円形を呈する。主軸方向 N-52°-E。

所見 断面形状は若干T字状となっている。覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土となっている。北側底面において0.1~0.2m程度の浅い窪み状となっている。

49土坑 (図45 図版16)

位置 N15-2Gに位置する。

規模 3.15m×0.9m×深さ1.29mの楕円形を呈する。主軸方向 N-30°-W。

所見 断面形状はT字状となっている。底面は平らだが長軸両端において若干斜めの立ち上がり部分を持つ。覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土となっている。

50土坑 (図46 図版16)

位置 M8-15、16Gに位置する。

規模 3.18m×2.05m×深さ2.30mの楕円形を呈する。主軸方向 N-14°-E。

所見 平面形は若干幅のある楕円形で規模としては大型である。底面は南側で若干窪んでいる。断面形状はT字状となっている。覆土は確認面から0.9m程度は黒褐色土で以下は褐色土となっている。

51土坑 (図45 図版16)

位置 M9-7、8Gに位置する。

規模 3.10m×1.32m×深さ2.46mの楕円形を呈する。主軸方向 N-28°-E。

所見 断面形状はゆるやかなT字状となっている。底面は若干の窪みは見られるが平坦に近い。幅は深いにもかかわらず0.3m弱で狭い。覆土は確認面から0.95m程度まで黒褐色土で、以下褐色土となっている。

52土坑 (図46 図版16)

位置 I13-9Gに位置する。

規模 2.58m×1.14m×深さ1.81mの楕円形を呈する。主軸方向 N-8°-E。

所見 断面形状はろ斗状となっている。底面は平坦に近いが南端において若干立ち上がり部分を持つ。覆土は確認面から0.8m程度まで黒褐色土で、以下褐色土となっている。褐色土は締まった部分とぼそぼそした部分に分層される。

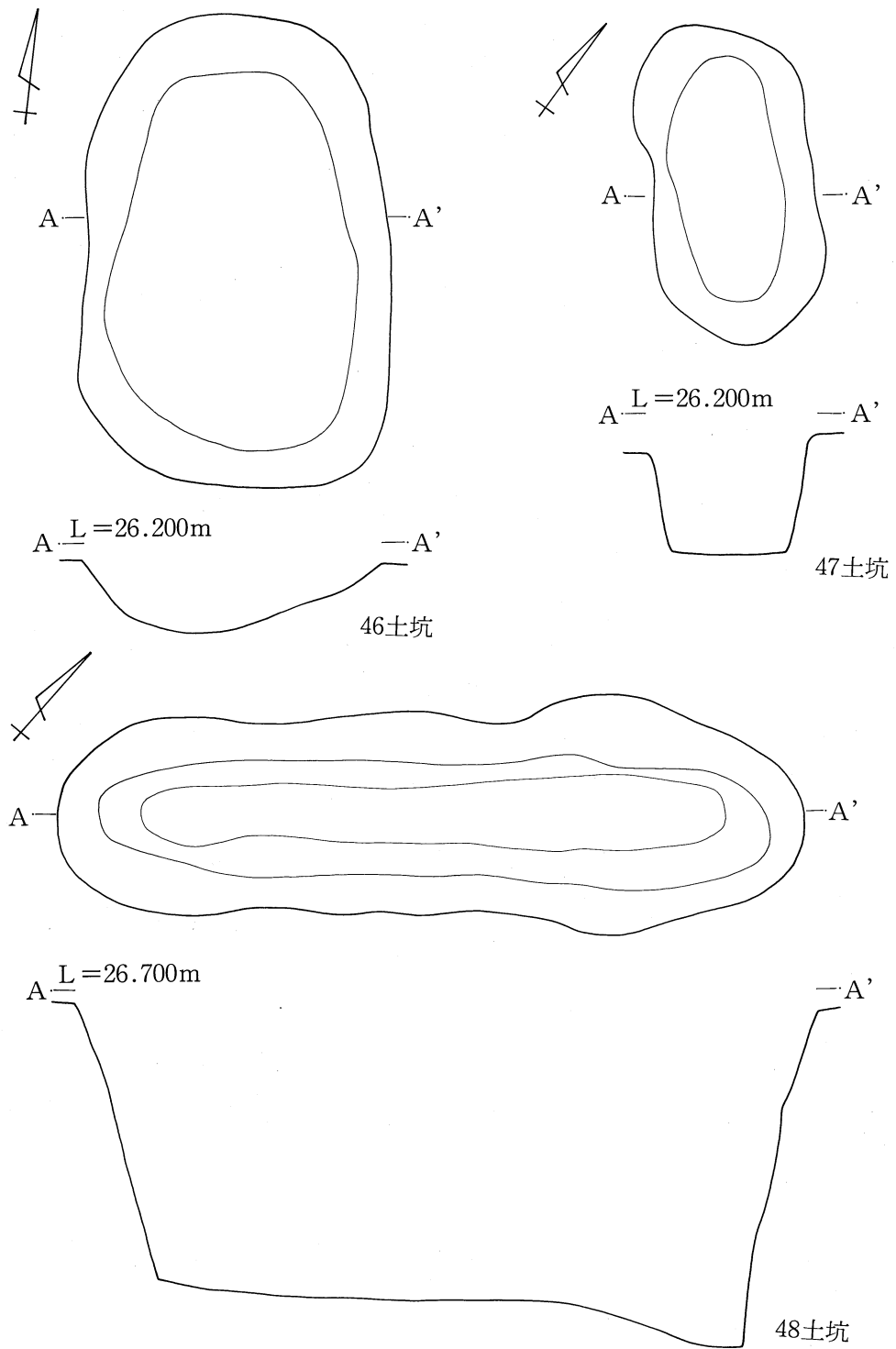
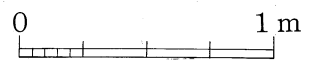
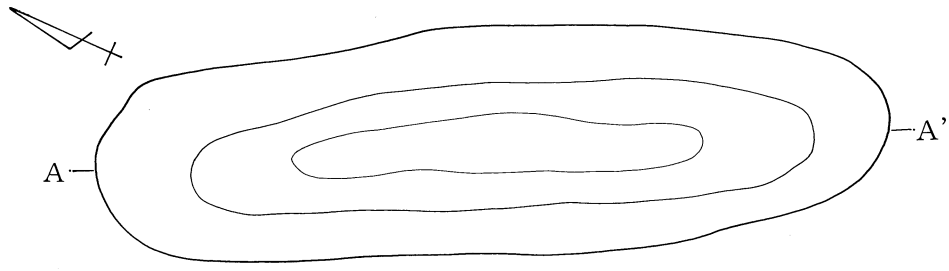
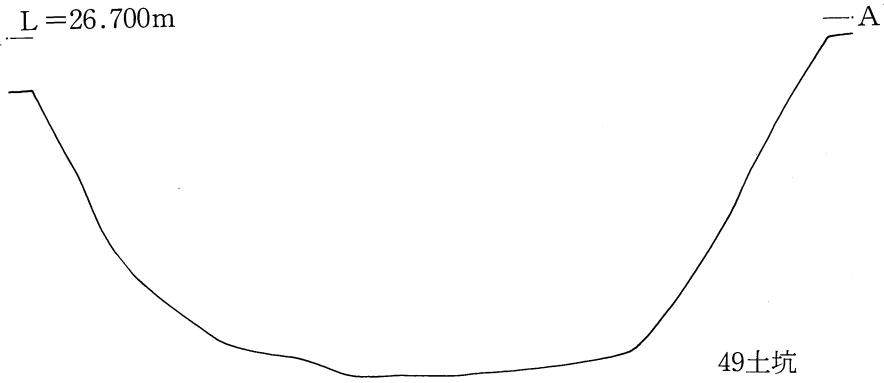


图44 46~48土坑遺構平面图



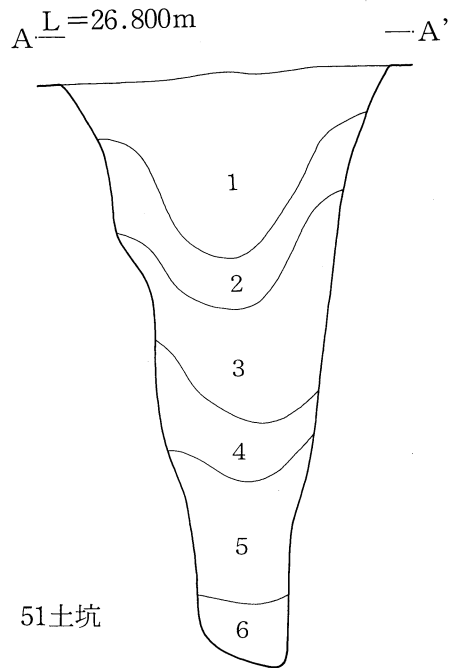


A—L=26.700m

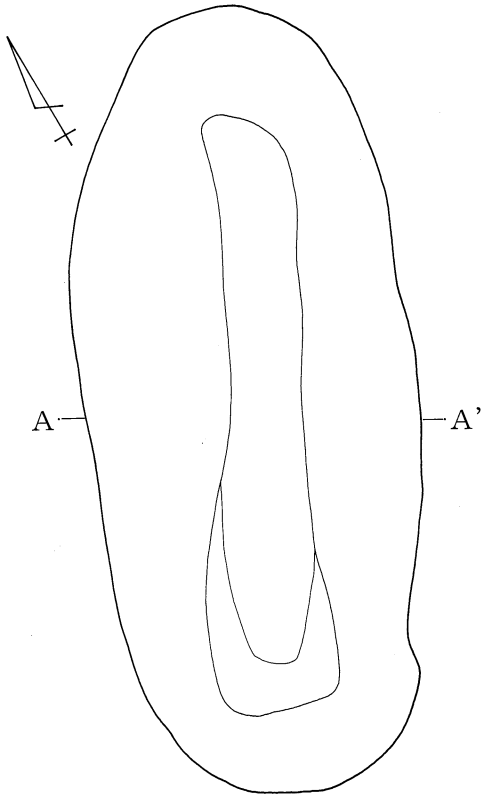


49土坑

A—L=26.800m



51土坑



51土坑土層

- | | | |
|---|-------|----------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒含み、しまっている。粒子細かい。粘性あり。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒+黒色土、混合し、粘性しまりあり。 |
| 3 | 暗黄褐色土 | ローム粒+暗褐色土粒子。2~3cm大ロームブロック。しまりなし。 |
| 4 | " | ハードブロック主体に褐色土少量含む。かたい。しまっている。 |
| 5 | " | ローム粒主体に黒色土粒含む。ロームブロック含む。ぼそぼそする。 |
| 6 | " | 5に類似。黒色土粒多し。 |

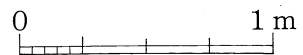
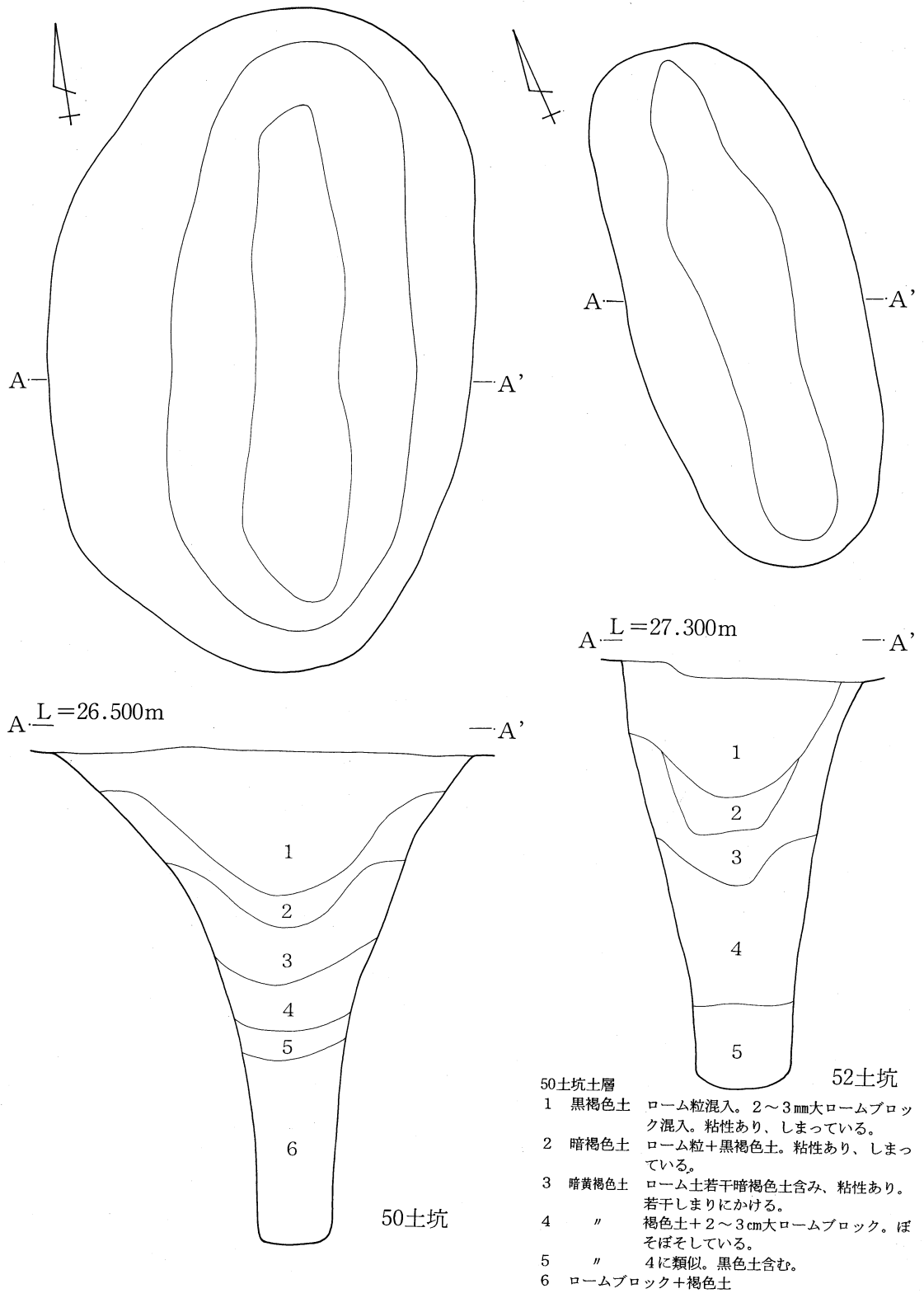


図45 49・51土坑遺構平面図



- 50土坑土層**
- 1 黒褐色土 ローム粒混入。2~3mm大ロームブロック混入。粘性あり、しまっている。
 - 2 暗褐色土 ローム粒+黒褐色土。粘性あり、しまっている。
 - 3 暗黄褐色土 ローム土若干暗褐色土含み、粘性あり。若干しまりにかける。
 - 4 " 褐色土+2~3cm大ロームブロック。ぼそぼそしている。
 - 5 " 4に類似。黒色土含む。
 - 6 ロームブロック+褐色土
- 52土坑**
- 52土坑土層**
- 1 黒褐色土 ローム粒斑点状に含み、粘性ありしまっている。
 - 2 暗褐色土 1に類似。ローム粒がより多い。
 - 3 ローム粒+暗褐色土 粘性あり、若干ぼそぼそする。
 - 4 ロームブロック主体にローム粒含む。しまっている。かたい。
 - 5 ローム粒+黒色土粒 粘性あり。ぼそぼそしている。

図46 50・52土坑遺構平面図

53土坑 (図47)

位置 K 8 - 9 Gに位置する。

規模 1.04m×0.85m×深さ0.34mの略円形を呈する。主軸方向 N-53°-W。

所見 覆土は暗褐色土となっている。遺物なく時期不明。

54土坑 (図47)

位置 M 7 - 12、16Gに位置する。

規模 1.57m×0.64m×深さ0.19mの楕円形を呈する。主軸方向 N-13°-W。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土となっている。遺物なく時期不明。

55土坑 (図47)

位置 L 9 - 15Gに位置する。

規模 1.48m×1.21m×深さ0.26mの隅丸方形を呈する。主軸方向 N-63°-E。

所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土となっている。覆土に炭化物を含む点が考慮される。遺物なく時期不明。

56土坑 (図48)

位置 J 10 - 15、K10 - 3 Gに位置する。

規模 2.62m×1.32m×深さ1.65mの楕円形を呈する。主軸方向 N-71°-W。

所見 断面形状はろ斗状となっている。底面は平らだが東側立ち上がり部分において若干斜めに立ちあがる特徴を持つ。覆土は確認面から0.9m程度は黒褐色土、下層は締まりのない褐色土である。

57土坑 (図47)

位置 J 12 - 1 Gに位置する。

規模 1.14m×1.24m×深さ0.2mの略円形を呈する。主軸方向 不明。

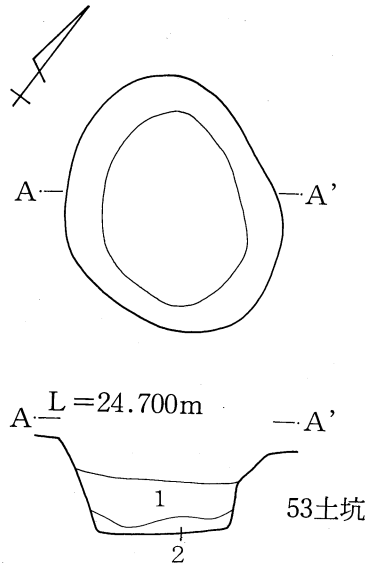
所見 覆土は上層に黒褐色土、下層に暗褐色土となっている。遺物なく時期不明。

58土坑 (図48 図版16)

位置 I 11 - 4、I 12 - 1 Gに位置する。

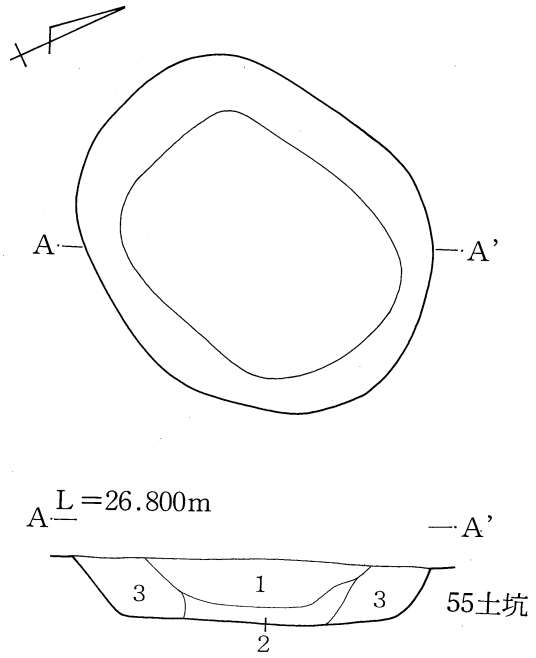
規模 2.19m×1.35m×深さ1.44mの隅丸長方形を呈する。主軸方向 N-51°-E。

所見 断面形状はゆるやかなT字状となっている。底面は平坦に近い。幅は広く0.5m程度である。覆土は確認面から0.85m程度まで黒褐色土で、以下褐色土となっている。中層は締まりのある褐色土、下層はぼそぼその褐色土となっている。



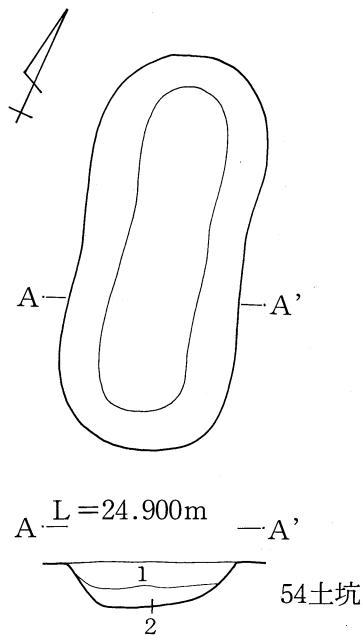
53土坑土層

- 1 暗褐色 ローム粒、黒色土含み、若干粘性に欠く。粒子細かい。
- 2 " 1に比べ、ローム粒多く、粘性あり、しまっている。



55土坑土層

- 1 黒褐色土 炭化物含み、軟質。粘性なし。
- 2 暗褐色土 炭化物含む。ローム粒含む。
- 3 " ローム粒含み、若干粘質。



54土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含み、粘性あり、しまる。
- 2 暗褐色土 ローム粒に黒色土粒少量含む。粘性あり、しまる。

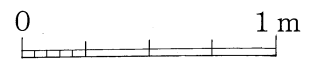
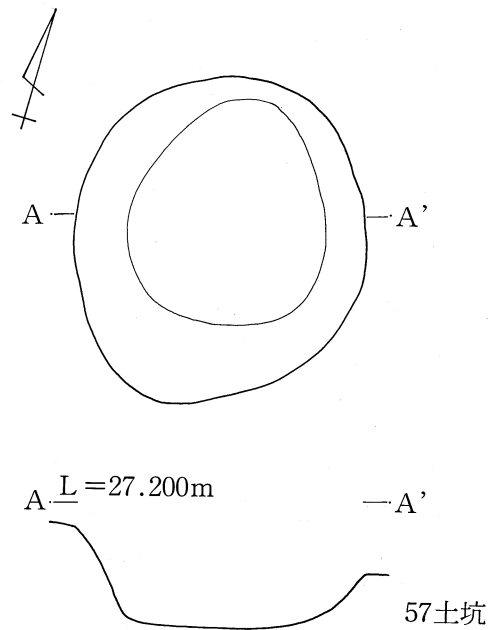
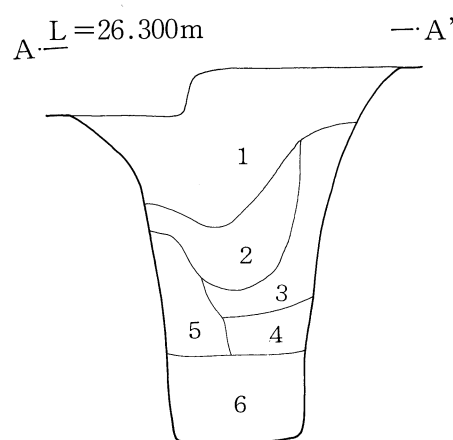
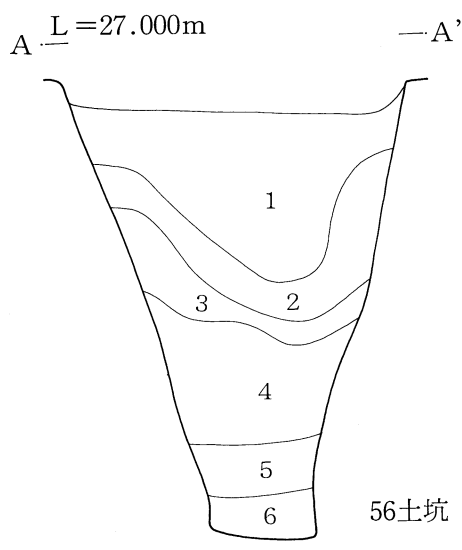
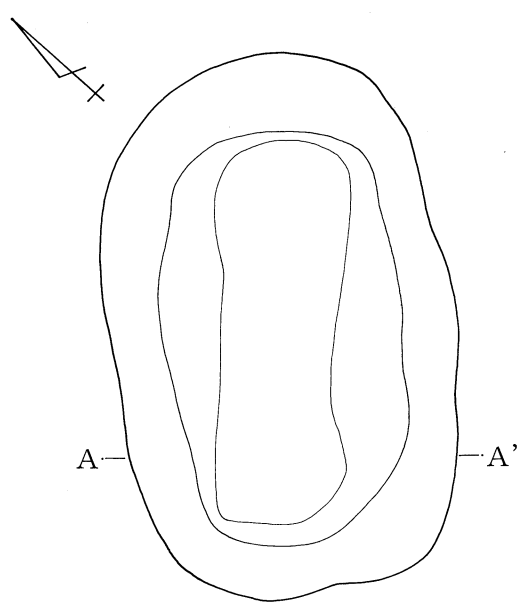
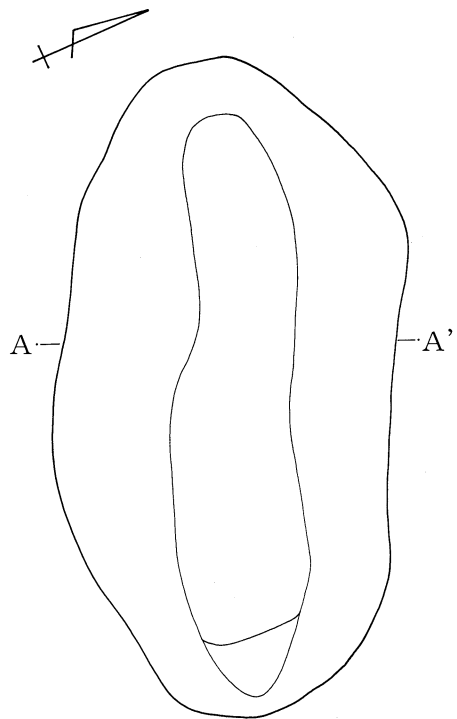


図47 53・54・55・57土坑遺構平面図



- 56土坑土層
- 1 黒褐色土 ローム粒少量含み、粘性あり、しまっている。
 - 2 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒含み、粘性あり、しまる。
 - 3 茶褐色土 ローム粒主体。粘性あり、しまっている。
 - 4 " 褐色土+ロームブロック(2~3cm大)。ぼそぼそでしまりにかける。
 - 5 " 4に類似。黒色土粒を含む。
 - 6 " 5より多く黒色土粒を含む。

- 58土坑土層
- 1 黒褐色土 ローム粒少量含み、粘性あり、しまる。粒子細かい。
 - 2 暗褐色土 1に比べ、ローム粒多し。若干ぼそぼそする。
 - 3 茶褐色土 ローム粒+暗褐色土。少量ロームブロック含む。しまっている。
 - 4 " ロームブロック主体。ローム粒少量含む。かたくしまっている。
 - 5 暗褐色土 黒色土+ローム粒、ロームブロック少量含む。粘性ありしまっている。
 - 6 茶褐色土 ローム粒+黒色土。ぼそぼそでしまりなし。



図48 56・58土坑遺構平面図

土坑内出土遺物（図49. 50 図版26. 27）

概要 全体的傾向で言えば縄文前期（黒浜式）の遺物がおおい。該期の遺構が主体を占める点が考慮される。落とし穴状遺構については埋まる最上層の遺物を図示した事もあり、遺構の使用された時代とは考えがたい。

1、2は01土坑のプラン確認面の9cm程度下がった地点から出土している。胎土に雲母片を含む。阿玉台I b式である。3～6は02土坑出土で3は口径19.9cmの中型の深鉢である。単節縄文を施文し、胎土には繊維を混入する。4は縄文を施文している。5は網目状撚糸文を施文する。9、10は07土坑出土で9は縄文を施文している。10は竹管文による沈線を施文する。胎土に雲母、長石を混入する。11は09土坑出土で竹状工具による荒いなでが見られる。12は11土坑出土で縄文を施文する。13～18は14土坑出土で13、14、16は縄文を施文している。15、18は竹管状工具による沈線文を施す。黒浜式の中～後半のものである。19、20は15土坑出土で19は半截竹管と縄文を施す。黒浜式後半である。20は沈線文を施す。浮島Ⅲ～興津式のものである。21は23土坑出土で単節縄文を施す。黒浜式である。22は26土坑出土でわずかに単節縄文を施す。23～26は28土坑出土で23～25は縄文を施す。26は竹管状工具による沈線文を縦横に施文する。いずれも胎土中の繊維量は少ない。27～30は30土坑出土で27はループ文を施す。28はコの字状口縁で単節縄文を施文する。29は多截竹管状工具による押し引きにより施文する。33は43土坑出土で単節縄文を施す。34は44土坑出土で粗い縄文を施す。36は45土坑出土で無節縄文を施す。37は46土坑出土で粗い縄文を施す。38、39は50土坑出土で38は細かい沈線文を縦横に施文する。39は無節縄文を施文する。40は39土坑出土で砂岩製の磨り石である。側面は粗くごつごつしている。両面はよく磨られている。

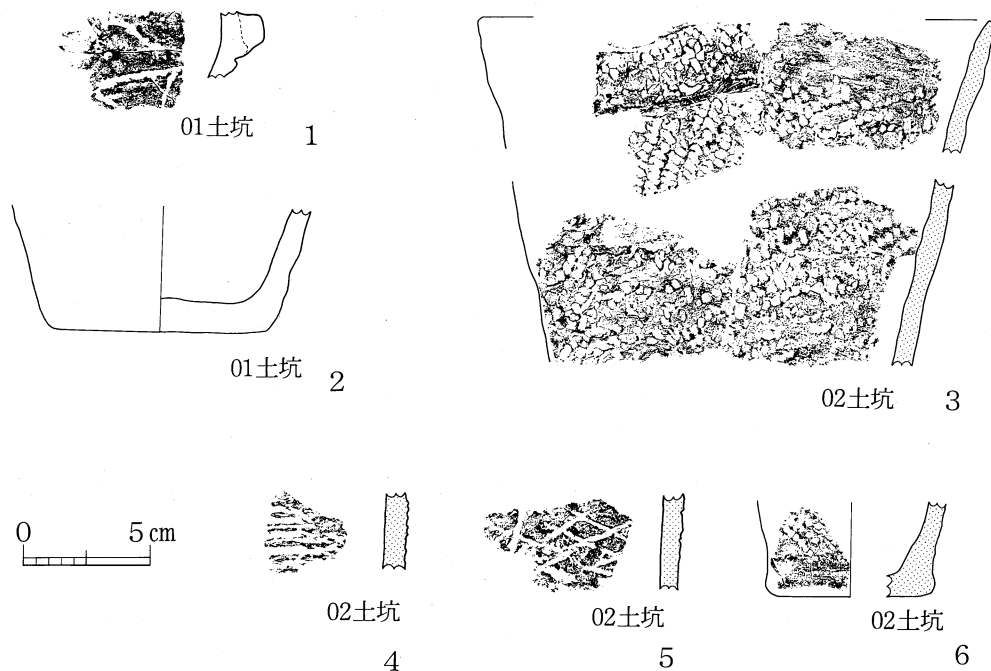


図49 01・02土坑内出土遺物実測図

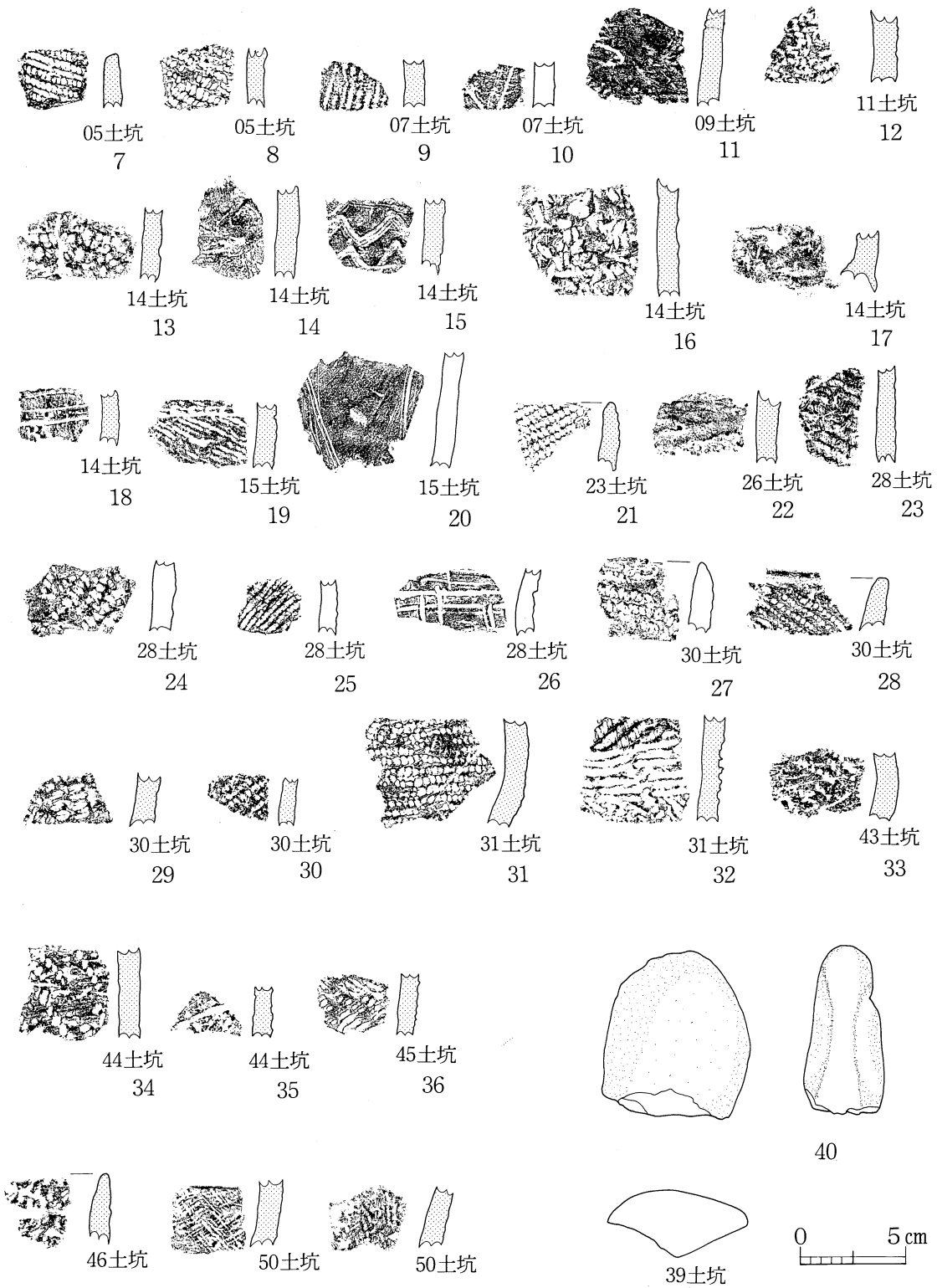


图50 05~50土坑内出土遺物実測図

Ⅲ 歴史時代

a. 住居跡

概要 確認調査時においては小規模ながら平安時代の集落跡が展開する可能性はあった。ただ遺物が極端に少ない点、遺構が散在している点から全体の状況を把握することは難しかった。遺構の確認は前述したとおり新期テフラ層上面において行った。掘り込みは10～15cm程度と浅かったため、ソフトロームまで下げるとプランの確定はむずかしい状況であった。結果として住居跡4軒を調査した。

04住（図51、52 図版5）

位置 X 8-11、12Gに位置する。

規模 3.15m×2.80m×深さ0.17mの長方形を呈する。主軸方向 E-35°-S。

壁高 北壁 0.23m・東壁 0.25m・南壁 0.35m・西壁 0.27m

床面 ソフトローム中の貼り床で全体的に締まっている。

施設 カマド 西壁の中央に位置する。袖部分には淡褐色砂質土を使用している。セクションから天井部の崩落が伺える。燃焼部はやや奥に位置している部分が強く焼けている。煙道部はV字状に掘り込まれていて、傾斜をもって立ち上がる。全体的には燃焼部及び煙道は良く焼けており、使い込まれている。

柱穴 ピットは1か所のみで径0.38m×0.35mの円形で深さ0.25mを測る。覆土は炭化粒を含む暗褐色土となっている。

周溝 東壁、南壁に浅い状態ではあるが周回する。

遺物 カマド中及び近い部分から4点出土している。

04住出土遺物（図53 図版20）

図示しえる遺物はこの1点のみである。須恵器甕の胴部片で外面は平行叩き目文、内面はヘラナデ後別の工具によるなで整形が施される。胎土は砂粒をほとんど含まず、長石を混入する。焼成は良好で非常に堅い。色調は外面赤茶灰色、内面暗青灰色を呈する。

12住（図54、図版10）

位置 M 7-12Gに位置する。59土坑に南壁の一部を切られる

規模 3.15m×2.48m×深さ0.12mの長方形を呈する。主軸方向 N-89°-E。

壁高 北壁 0.17m・東壁 0.13m・南壁 0.15m・西壁 0.12m

床面 ソフトローム中の貼り床で全体的に軟弱である。

施設 カマド 東壁やや北寄りに位置する。袖部はよく遺存している。燃焼部はやや奥に支脚が遺存している。煙道部はフラットな燃焼部からほぼ直立するように立ち上がっている。

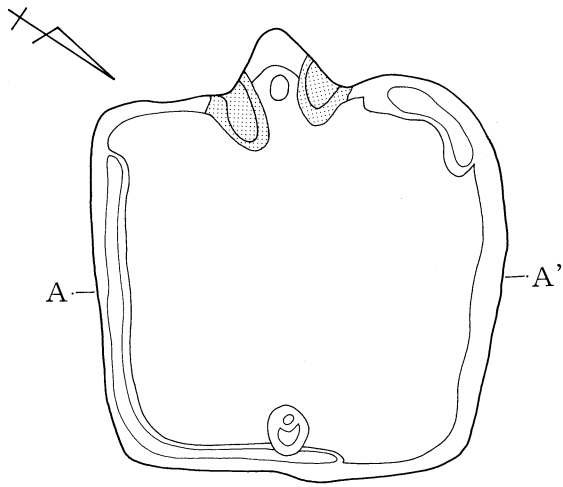
柱穴 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

遺物 カマド中及びカマド前から90点程度出土している。

12住出土遺物（図55 図版25）

1は底部欠損の壺形土器で口径13.5cm、遺存高21.7cm、最大径21.0cmを測る。外面は口縁部横ナデ、胴部中位まで縦方向のヘラケズリ、中位から下端横方向のヘラケズリ調整をする。内面は全体にナデ整



04住土層

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含み、粘性なくしまる。
- 2 茶褐色土 暗褐色土+ローム粒、ロームブロック。ぼそぼそする。
- 3 " ローム粒主体。ぼそぼそする。
- 4 暗褐色土 ロームブロック2~3mm大+暗褐色土。

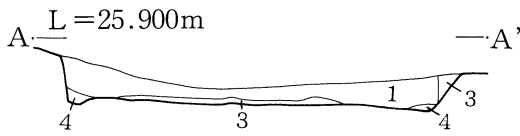
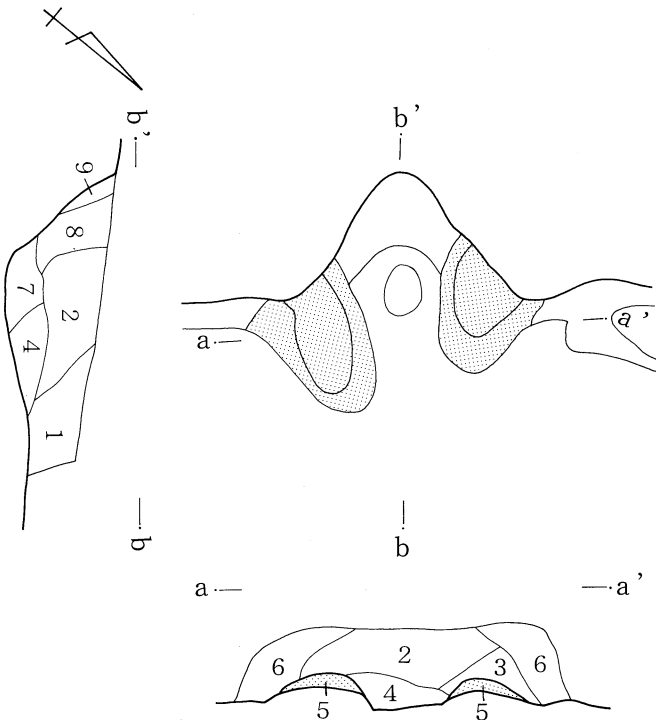


図51 04住遺構平面図



04住カマド土層

- 1 黒褐色土 ローム粒、荒砂粒少量含む。しまっているが、粘性なし。
- 2 暗褐色土 暗褐色土と荒砂粒の混在層。
- 3 " 2に類似。荒砂粒をより多く含む。
- 4 " 暗褐色土中心に荒砂粒と2~3mm大焼土土含む。
- 5 淡褐色土 荒砂粒主体。暗褐色土を含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒を含む。若干ぼそぼそする。
- 7 暗赤褐色土 荒砂粒+焼土粒+2~3cm大焼土ブロック。
- 8 淡褐色土 4に類似。焼土粒を少量含む。
- 9 暗褐色土 荒砂粒ごく少量含む。粘性なし。粒子細かい。

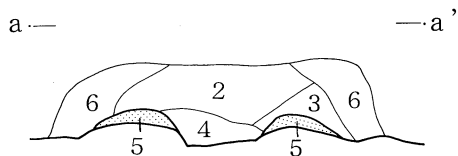


図52 04住カマド平面図

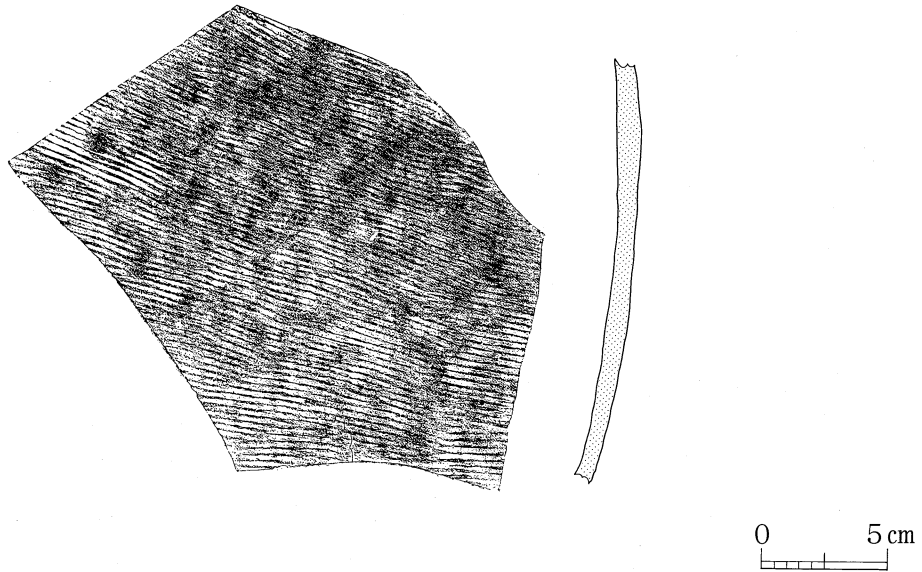


図53 04住出土遺物実測図

形する。胎土に砂粒、長石、焼成は良好で色調は内外面淡褐色だが内面に煤を付着したような痕跡がある。**2**は口径13.9cm、遺存高3.5cmの土師器坏形土器で約□程度遺存する。口縁部横ナデ、内外面細かいヘラミガキ調整する。焼成よく、内外面共淡橙褐色を呈する。**3**は口径14.3cm、遺存高4.1cmの土師器坏形土器で約□程度遺存する。口縁部横ナデ、外面中位から下に回転ヘラケズリ調整、内面は細かいヘラミガキ調整する。焼成よく、内外面共橙褐色を呈する。**4**は土師器甕形土器で口縁から胴部中位にかけて程 $\frac{1}{4}$ 程度遺存する。口径24.6cm、遺存高14.4cm、最大径26.1cmを測る。外面は口縁部横ナデ胴部中位まで縦方向のヘラケズリ、中位から横方向のヘラケズリ調整をする。内面は全体にナデ整形される。胎土に砂粒を含む。色調は内外面共淡橙褐色を呈する。**5**は土師器甕形土器で胴部上位から底部にかけて $\frac{1}{6}$ 程度遺存する。底径12.0cm、遺存高23.9cm、最大径26.0cmを測る。外面は全体に縦方向のヘラケズリ調整をする。内面は全体にナデ整形される。胎土に長石、雲母、砂粒を混入する。焼成はよく、外面は茶褐色、内面は暗褐色を呈する。**6~9**は本住居跡とは全く時代が異なるが、住居覆土中出土のためここに載せた。**6**は全長4.6cm、幅2.2cm、重量5.7gを測る。周辺部加工を施す尖頭器である。石材は珪質頁岩を使用している。**7**は全長4.2cm、幅2.0cm、重量5.3gを測る。先端部を欠いているが尖頭器である。石材は頁岩を使用している。**8**は全長5.5cm、幅2.7cm、重量12.9gを測る。先端部欠損するが尖頭器である。石材は頁岩を使用している。**9**は全長2.7cm、幅1.6cm、重量1.1gを測る。無茎石鏃で石材は黒色安山岩を使用している。

13住 (図56、57 図版10)

位置 M8-9、10、13、14Gに位置する。

規模 4.43m×2.95m×深さ0.15mの長方形を呈する。主軸方向 E-4°-S。

壁高 北壁 0.16m・東壁 0.14m・南壁 0.17m・西壁 0.19m

床面 ソフトローム中の貼り床で西壁南側が特に硬化している。

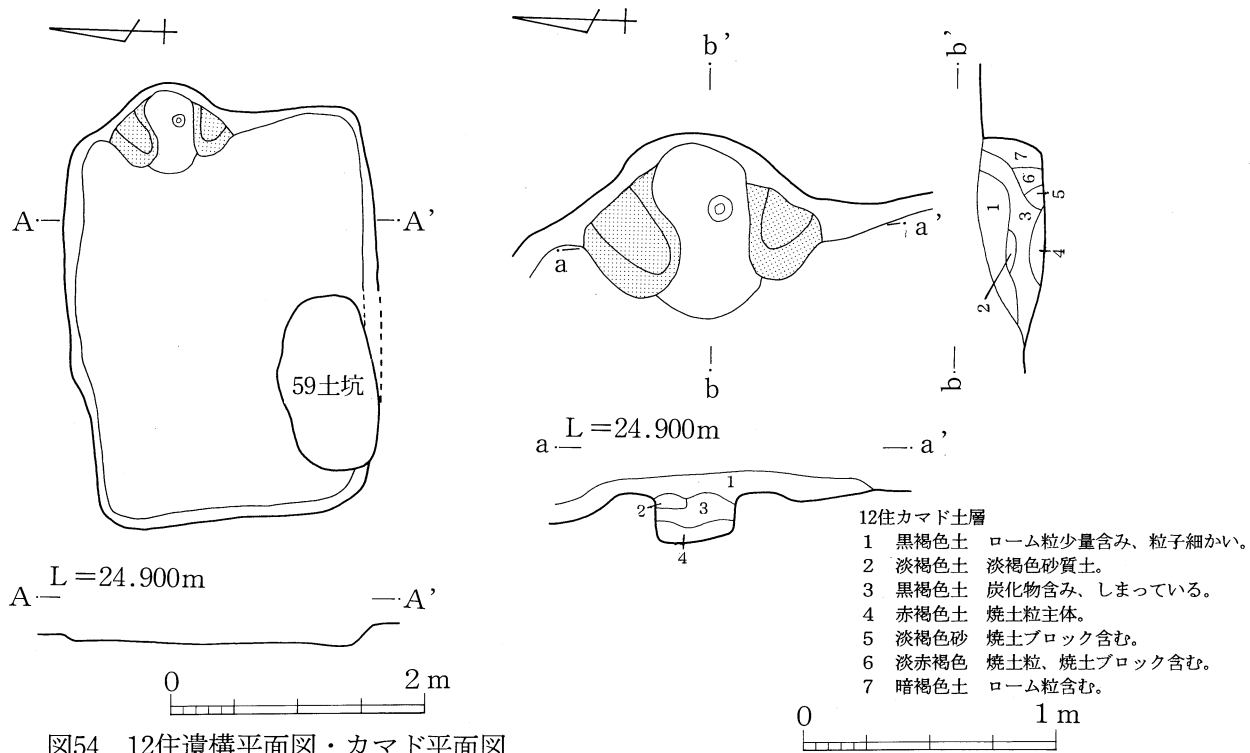


図54 12住遺構平面図・カマド平面図

施設 カマド 東壁中央に位置する。袖部等は痕跡さえも遺存していない。燃烧部はごく浅いくぼみがあるのみである。土層からは焼土粒、焼土ブロックの堆積が顕著である。

柱穴 南壁際東寄りに0.4m程度の円形プランのピットが検出された。

周溝 検出されなかった。

遺物 カマド中及びカマド前と住居中央付近から100点程度出土している。

13住出土遺物（図58 図版25）

1 は完形の土師器坏形土器で口径10.5cm、器高3.0cm、底径4.6cmを測る。口唇部は肉厚で外反する。ロクロ使用で底部切離しは回転糸切り後無調整である。胎土は砂粒、雲母、長石を含む。焼成は良好で内外面共暗橙褐色を呈する。**2** は□程度遺存の土師器坏形土器で口径10.8cm、器高3.0cm、底径4.4cmを測る。1 同様の特徴を持つ。胎土は1 ほど砂粒を含んでいない。焼成は良好で内外面共暗褐色を呈する。**3** は $\frac{1}{2}$ 程度遺存の土師器高台付坏形土器で口径13.6cm、遺存高5.0cm、遺存底径5.5cmを測る。口唇部はコの字状を呈し、内外面共ナデ整形される。底部切離しは回転糸切り後無調整である。胎土は長石、石英、砂粒（ごく少量）を混入する。焼成は良好で内外面共淡茶褐色を呈する。**4** は器形の一部しか遺存していないが、土師器高台付皿形土器と考える。遺存高3.8cm、遺存底径6.0cmを測る。底部切離しは回転糸切り後無調整である。胎土は砂粒、雲母、長石を含む。焼成は良好で内外面共淡茶褐色を呈する。**5** は $\frac{1}{4}$ 程度遺存の底部で底径8.8cmを測る。底部切離しは回転糸切り後無調整である。胎土は砂粒、雲母、長石を含む。焼成は良好で内外面共暗茶褐色を呈する。**6** は全周遺存の底部で底径8.6cmを測る。底部切離しは回転糸切り後無調整である。胎土は長石、石英、砂粒を含む。**7** は□程度遺存の土師器甕形土器で口径17.4cm、遺存高10.1cm、最大径20.5cmを測る。口唇部はコの字状を呈する。口縁部横ナデで胴部は縦方向のヘラケズリ調整をしている。内面はナデ調整をしている。胎土は雲母、石英、砂粒を含む。焼成は良好で外面は茶褐色、内面は暗褐色を呈する。**8** は $\frac{1}{4}$ 程度遺存の土師器甕形土器で口径14.3cm、遺存高6.5cm、最大径16.5cmを測る。口唇部はコの字状を呈する。調整は7と同様に縦方向のヘラ

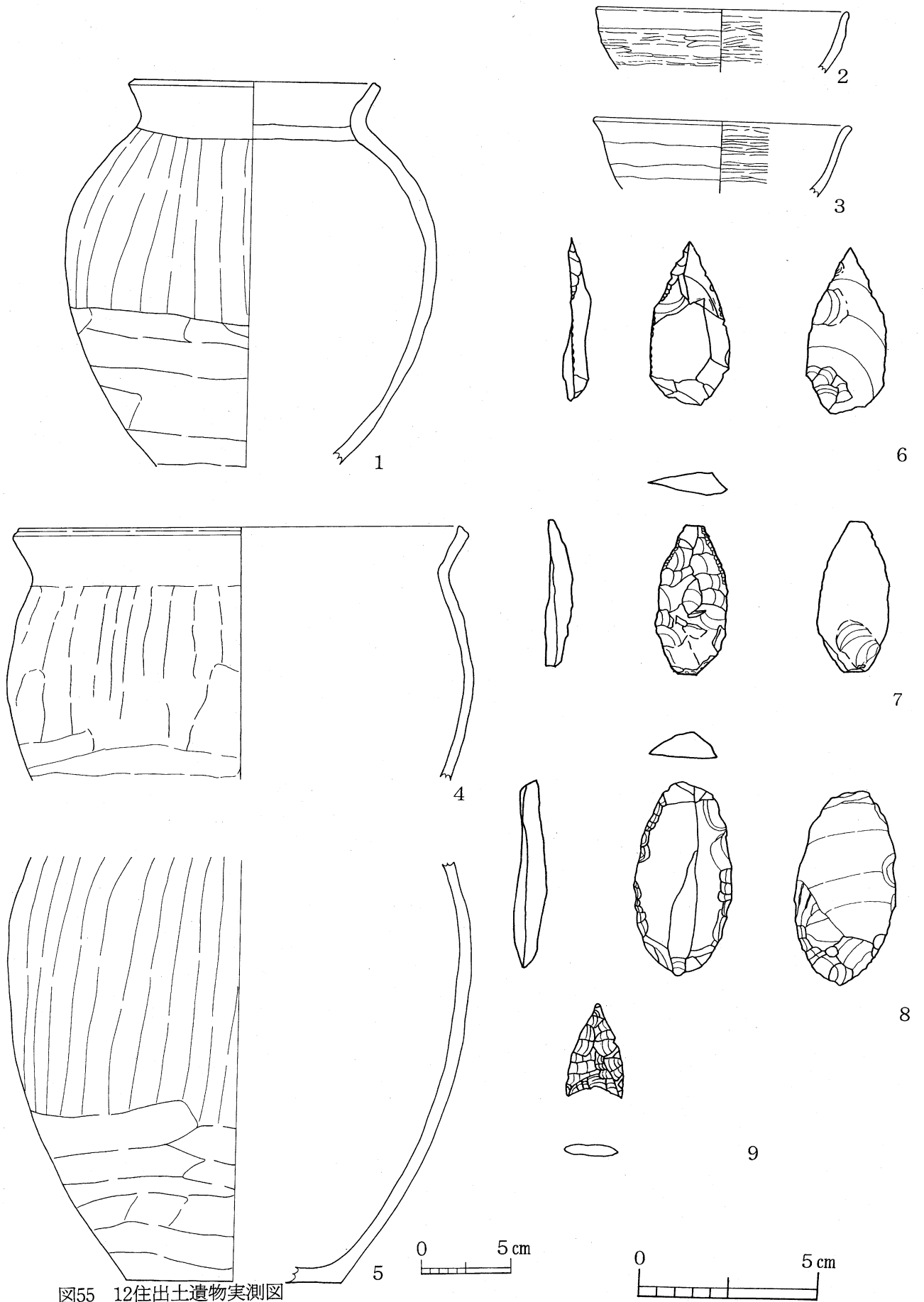


图55 12住出土遺物実測図

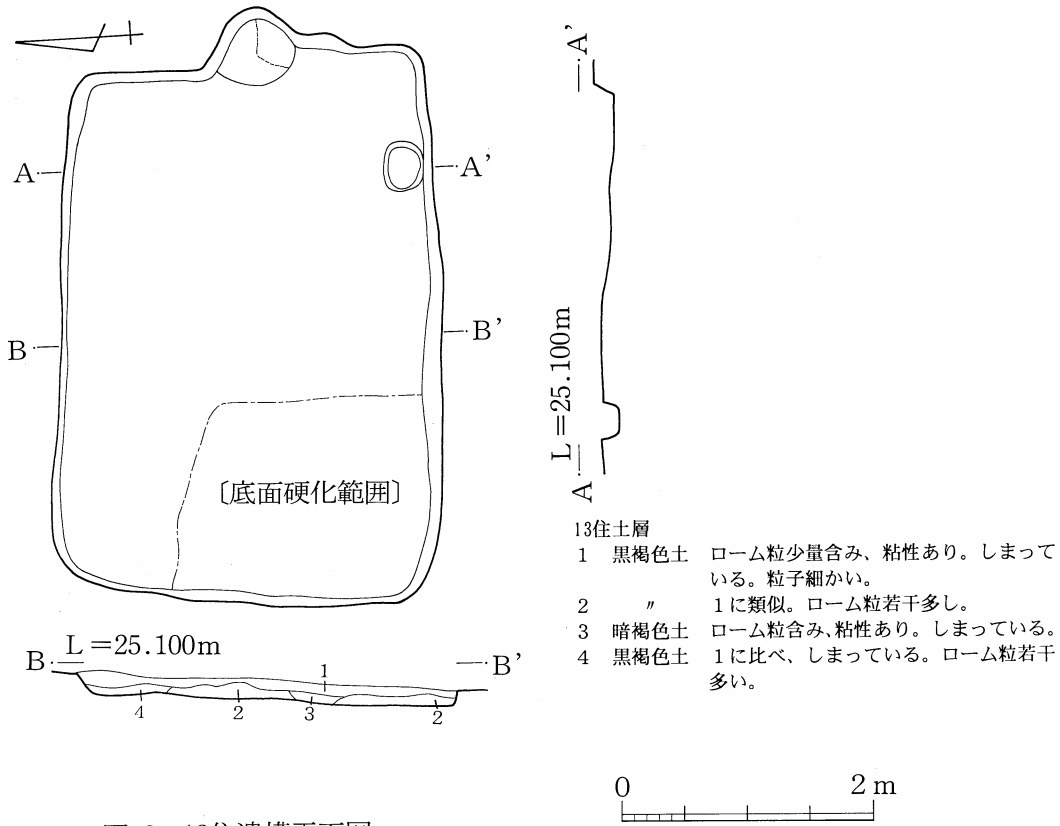


図56 13住遺構平面図

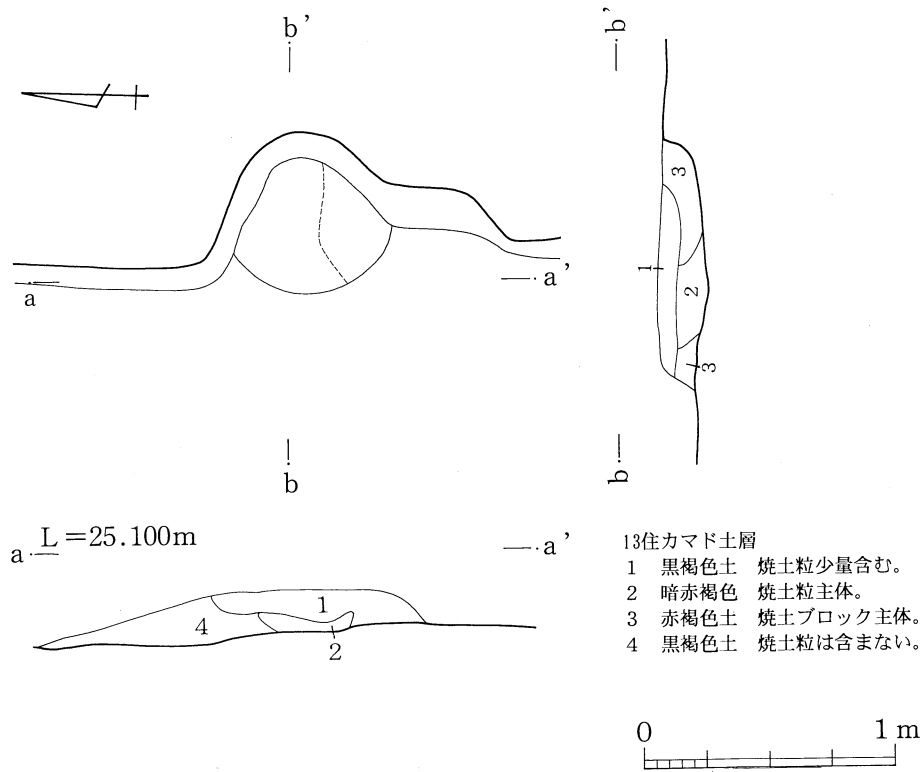


図57 13住カマド平面図

ケズリをしている。焼成は良好で内外面共淡茶褐色を呈する。9は筒状の土製品で全長4.6cm、幅1.8cmを測る。穿孔幅は9mm程度である。土錘として使用されたものか。

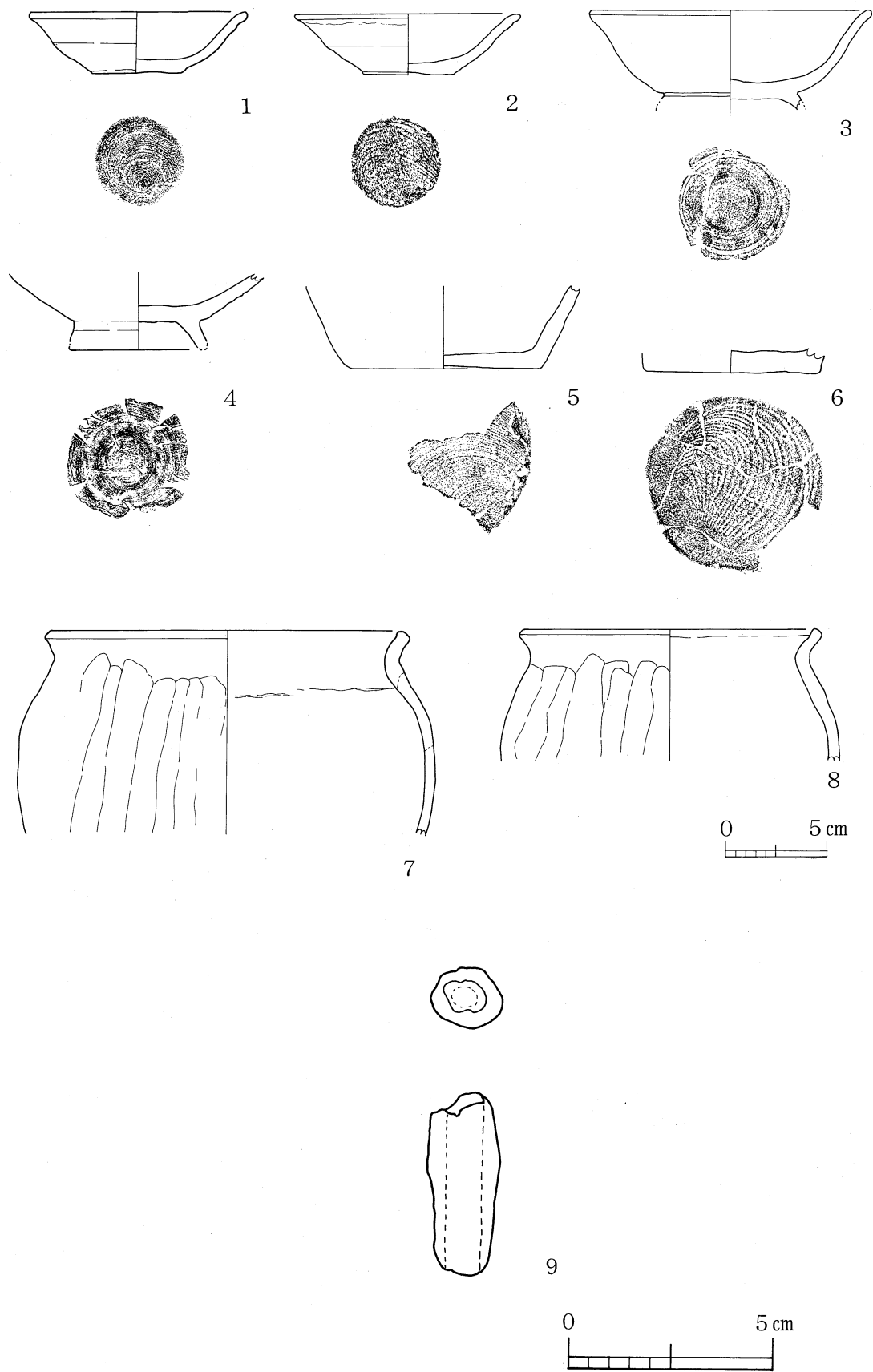


图58 13住出土遺物実測図

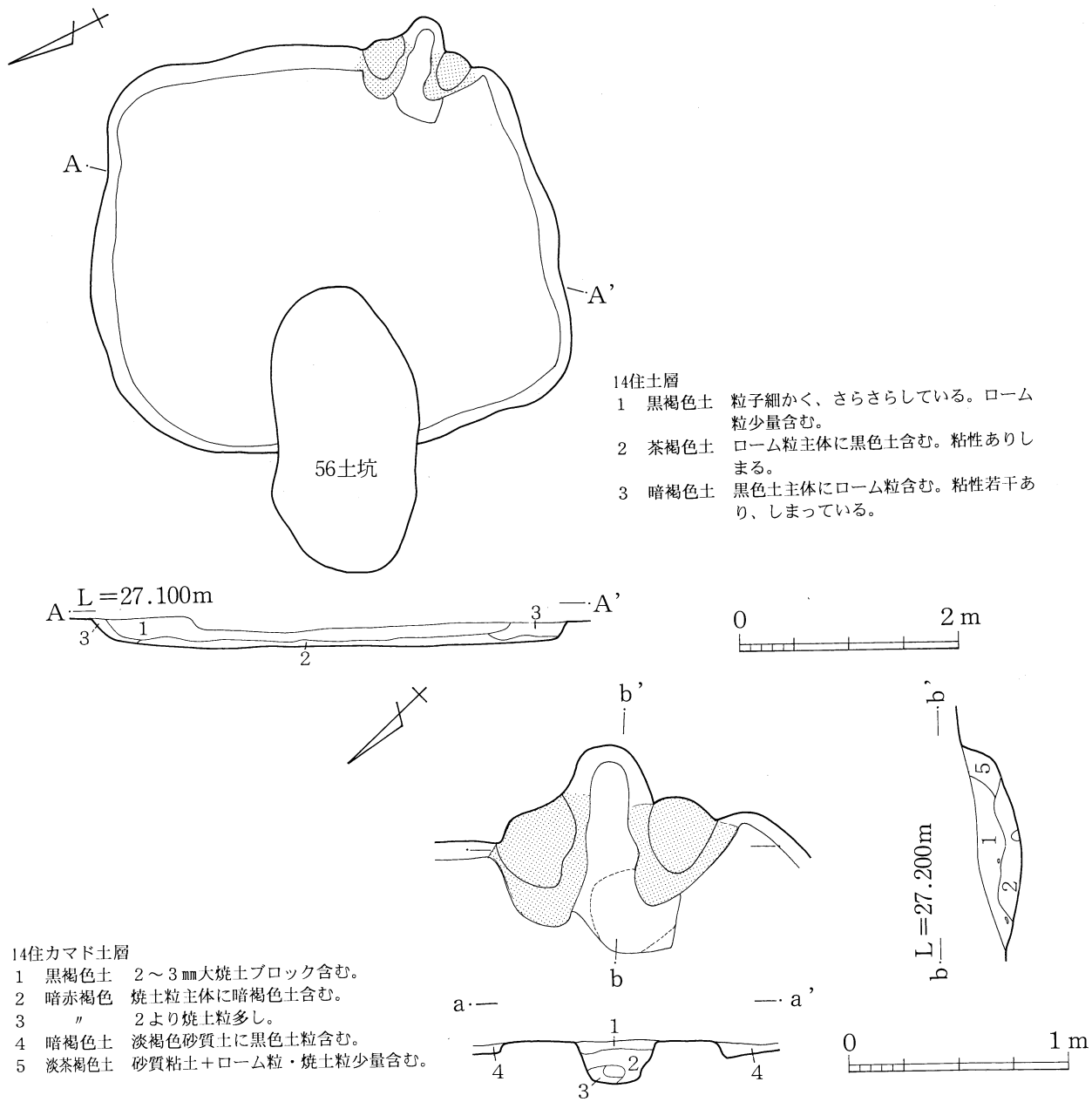


図59 14住遺構平面図・カマド平面図

14住 (図59 図版10)

位置 K10-3Gに位置する。56土坑と重複関係にあり切っている。

規模 4.26m×3.53m×深さ0.14mの長方形を呈する。主軸方向 E-19°-S。

壁高 北壁 0.18m・東壁 0.14m・南壁 0.14m・西壁 0.11m

床面 ソフトローム中の貼り床で全体的に軟弱である。

施設 カマド 東壁南寄りコーナーに位置する。袖部はよく遺存している。燃焼部は右袖前面が強く焼けている。焼土の堆積は立ち上がり手前まで達している。煙道部へは直立しながら立ちあがっている。煙道は住居外にU字状に掘られている。

柱穴 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

遺物 カマド中及びカマド前から96点程度出土している。

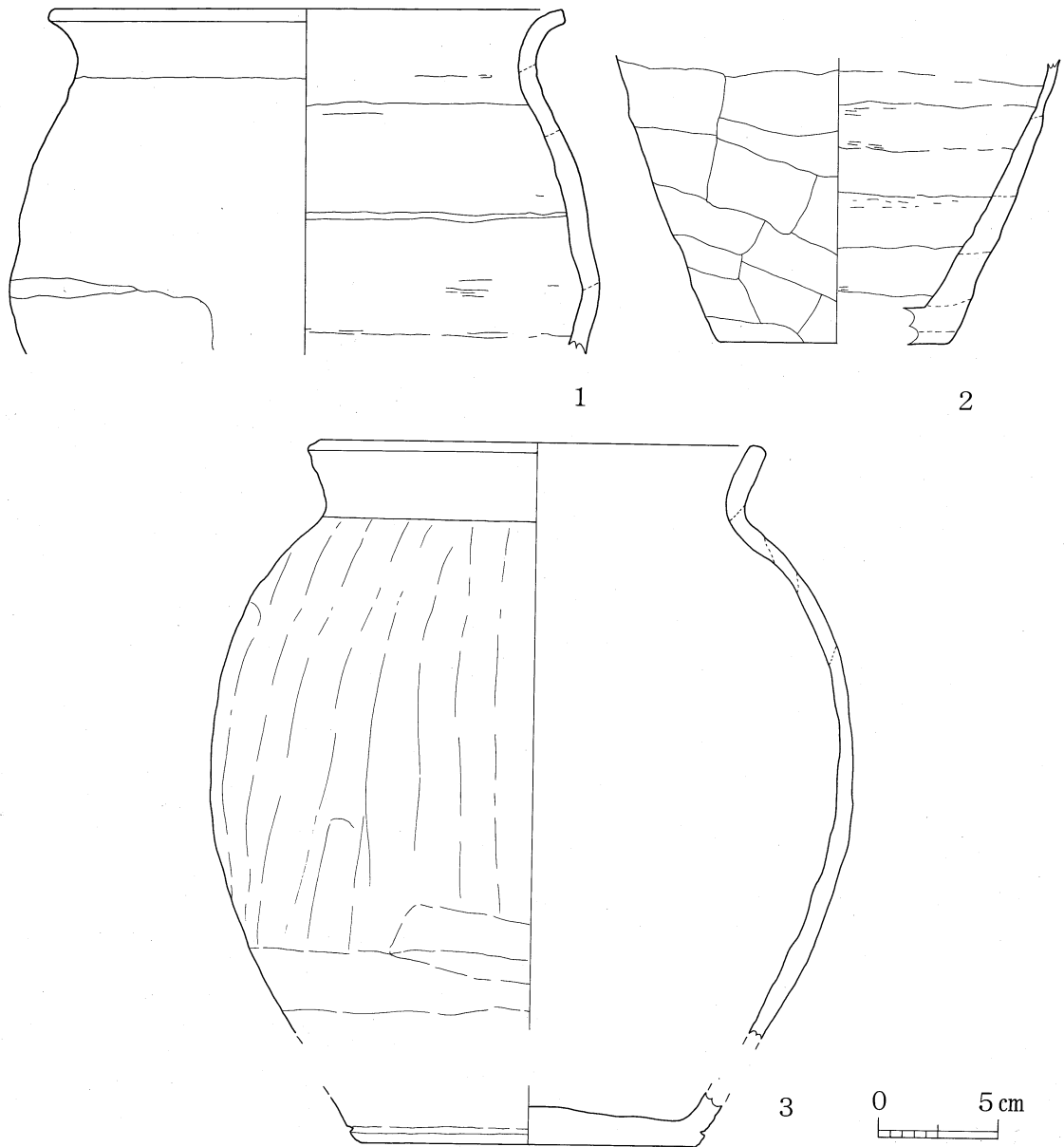


図60 14住出土遺物実測図

14住出土遺物（図60 図版25）

1は $\frac{1}{2}$ 程度遺存の土師器甕形土器で口径21.0cm、遺存高14.5cm、最大径24.5cmを測る。ロクロ使用で口唇部はコの字状を呈する。調整は外面が口縁部横ナデ、胴部中位横方向のヘラケズリ、内面は木口状工具による横方向のナデを施す。胎土は砂粒、長石、雲母を混入する。焼成はおおむね良好で内外面共淡茶褐色を呈する。2は $\frac{1}{2}$ 程度遺存の土師器甕形土器底部で底径9.6cm、遺存高12.0cmを測る。調整は外面が胴部において横方向のヘラケズリ、内面は木口状工具による横方向のナデを施す。胎土は砂粒、長石、雲母を混入する。焼成はおおむね良好で内外面共淡褐色を呈する。1、2は接合していないが同一固体と考えられる。3は口縁部 $\frac{1}{4}$ 、底部 $\frac{1}{4}$ 程度遺存の土師器甕形土器で口径18.0cm、底径13.8cm、遺存高29.4cm（想定）を測る。調整は外面が口縁部横ナデ、胴部は縦及び横方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデを施すとともにカーボンが付着させている。胎土は砂粒を混入している。

b. 土坑

概要 本遺跡において平安時代の住居跡は4軒と非常に散漫な分布状況であった。この1群に付随もしくは独立した形で土坑がどう展開しているか、結果としては2基の土坑（墓坑か）を調査した。

10土坑（図61 図版13）

位置 X7-9Gに位置する。

規模 1.14m×0.69m×深さ0.33mの隅丸長方形を呈する。主軸方向 N-0°-W。

所見 覆土は黒褐色土、暗褐色土でぼそぼそした土であった。遺物は底面から7cm浮いた状態で刀子が出土している。

59土坑（図61 図版17）

位置 M8-9Gに位置する。

規模 1.44m×0.80m×深さ0.46mの隅丸長方形を呈する。主軸方向 N-78°-W。

所見 覆土は暗褐色土でぼそぼそした土であった。遺物は底面から10cm浮いて土師器坏が伏せた状態で出土している。また、西側によって0.6m×0.4mの範囲で焼土が検出された。

土坑内出土遺物（図61）

10土坑からは刀子が出土している。切先は欠損するが全長16.1cm、刃部幅1.8cm、茎部幅1.4cmを測る。

59土坑からは土師器坏形土器が出土している。ロクロ使用で体部下端ヘラケズリ調整、底部切離し後ヘラケズリ調整、内面は横位ヘラミガキ調整を施す。

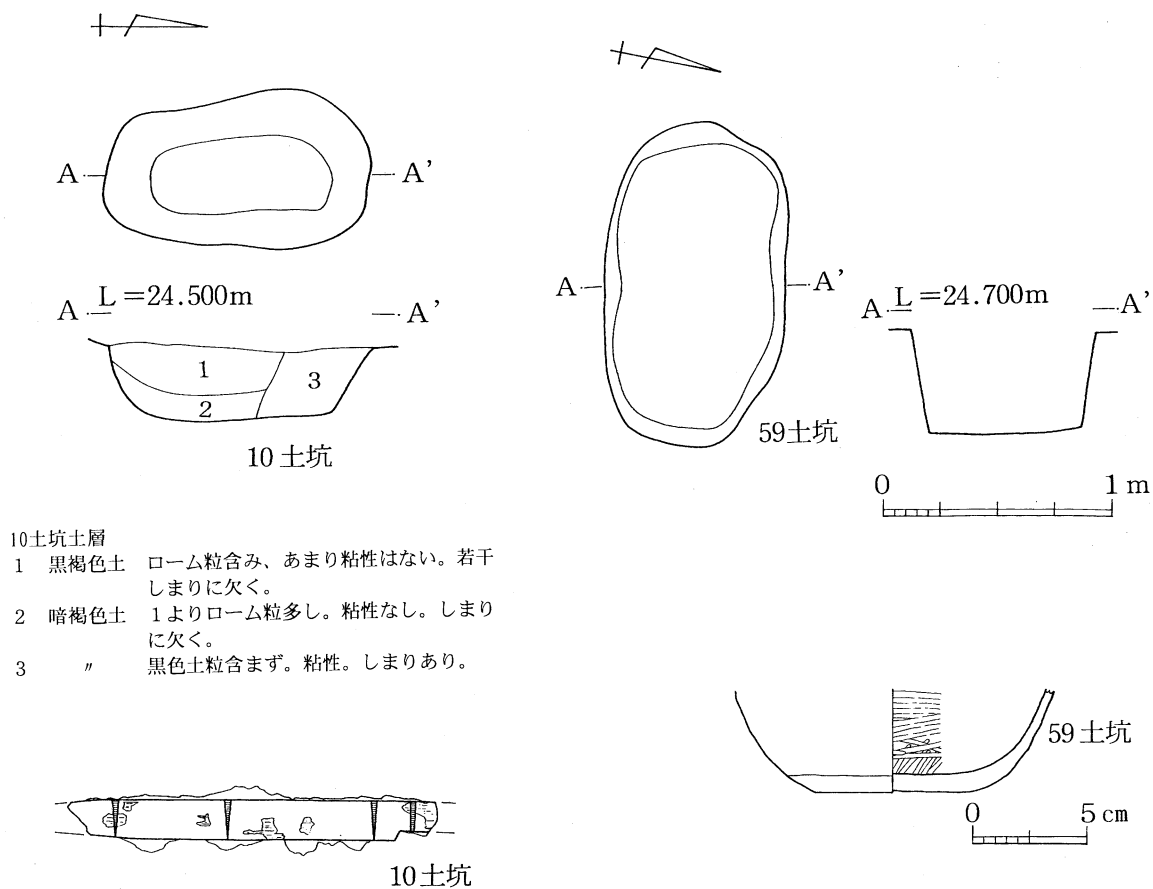


図61 10・59土坑遺構平面図・出土遺物実測図

IV 遺構外出土遺物 (図62・63 図版28・29)

1は砂岩製の磨石で2次焼成を受けている。側面も稜線はなく磨られている。両面に凹みを1カ所ずつ設けている。上部、下部の破損部は磨耗していて破損後も使用している。2は安山岩製の打製石斧で形状は短冊形を呈する。表面及び裏面上部は平らで若干滑らかである。実測図は刃部が上になっている点ご容赦いただきたい。3は安山岩製の敲石で両面は平らな楕円形を呈する。全体に多孔質でごつごつしている。表面中央に2か所、裏面中央に1か所の凹部を設ける。側面脇部はごつごつと剥離しており強く敲打している状況である。4は形状としてはスタンプ形を呈するが特に顕著な加工痕は見られない。石材は流紋岩である。細い先端部は敲打しているが他の各面においては滑らかで磨られている状況である。表面に浅い凹部が3か所、裏面に深い凹部が1か所見られる。5は石皿の破損品だが良く遺存している。石材は粘板岩である。縁辺部は表面下の二辺においては欠損している。表面の縁部に凹部が1か所見られる。中央部に向かって浅く窪んでいる。裏面においてもそう顕著ではないが浅く窪んでいる状況である。断面形状も縁部で厚い。6、7は共に乳棒状の磨製石斧である。6は基部を欠損するが遺存長12.5cmを測る。石材は粘板岩である。刃部は一部欠損するが蛤刃状を呈する。断面は楕円形となっている。7は刃部先端を欠損するが全長13.7cmを測る。石材は凝灰岩である。本来もう少し長い製品を先端部を再加工して使用したように思える。8は頁岩製の尖頭器で全長4.2cm、最大幅3.1cmでややずんぐりした形状を持つ。表裏面の周辺部について剥離調整をしている。9はソフトローム上面において出土している尖頭器である。下層調査のきっかけとなった遺物であるが、周辺部では他の遺物は出土していない。石材は粘板岩で風化が著しく調整も明確な痕跡を留めていない。基部から下半部を欠損している。両面先端部において周縁調整を施す。10はチャートの剥片である。4.4gを測る。11はチャート製の無茎石鏃で基部が若干欠損する。遺存長3.2cmで2.2gを測る。両面とも平らに調整されるが雑な仕上がりである。12~18は土製の皿状耳飾でいずれも半分程度欠損している。12は遺存長4.4cm、復元径5.4cmで17.4gを測る。胎土に雲母、石英を混入する。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。両面とも丁寧になで整形されている。側面に三列の列点文を施す。13は遺存長3.7cm、復元径4.6cmで8.6gを測る。胎土に雲母、長石を混入する。焼成は良好で暗茶褐色を呈する。両面とも丁寧になで整形されている。側面に二列の列点文を施す。断面形状は縁辺部において肥厚する。14は遺存長3.4cm、復元径3.7cmで5.2gを測る。胎土に雲母、長石を混入する。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。側面に二列の列点文とその中央に沈線を区画する。15は遺存長4.2cm、復元径4.4cmで11.3gを測る。胎土に雲母を混入する。焼成は良好で淡橙褐色及び暗褐色を呈する。断面形状は縁辺部において肥厚する。16は遺存長4.4cm、復元径5.1cmで12.0gを測る。胎土に雲母を混入する。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。断面形状はコの字状となっている。両面とも丁寧になで整形されている。17は遺存長3.8cm、復元径4.9cmで10.6gを測る。胎土に雲母、長石を混入する。焼成は良好で暗褐色を呈する。断面形状は縁辺部両端において肥厚する。18は遺存長3.7cm、復元径4.8cmで8.6gを測る。胎土に雲母、長石を混入する。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。断面形状は縁辺部両端において肥厚する。

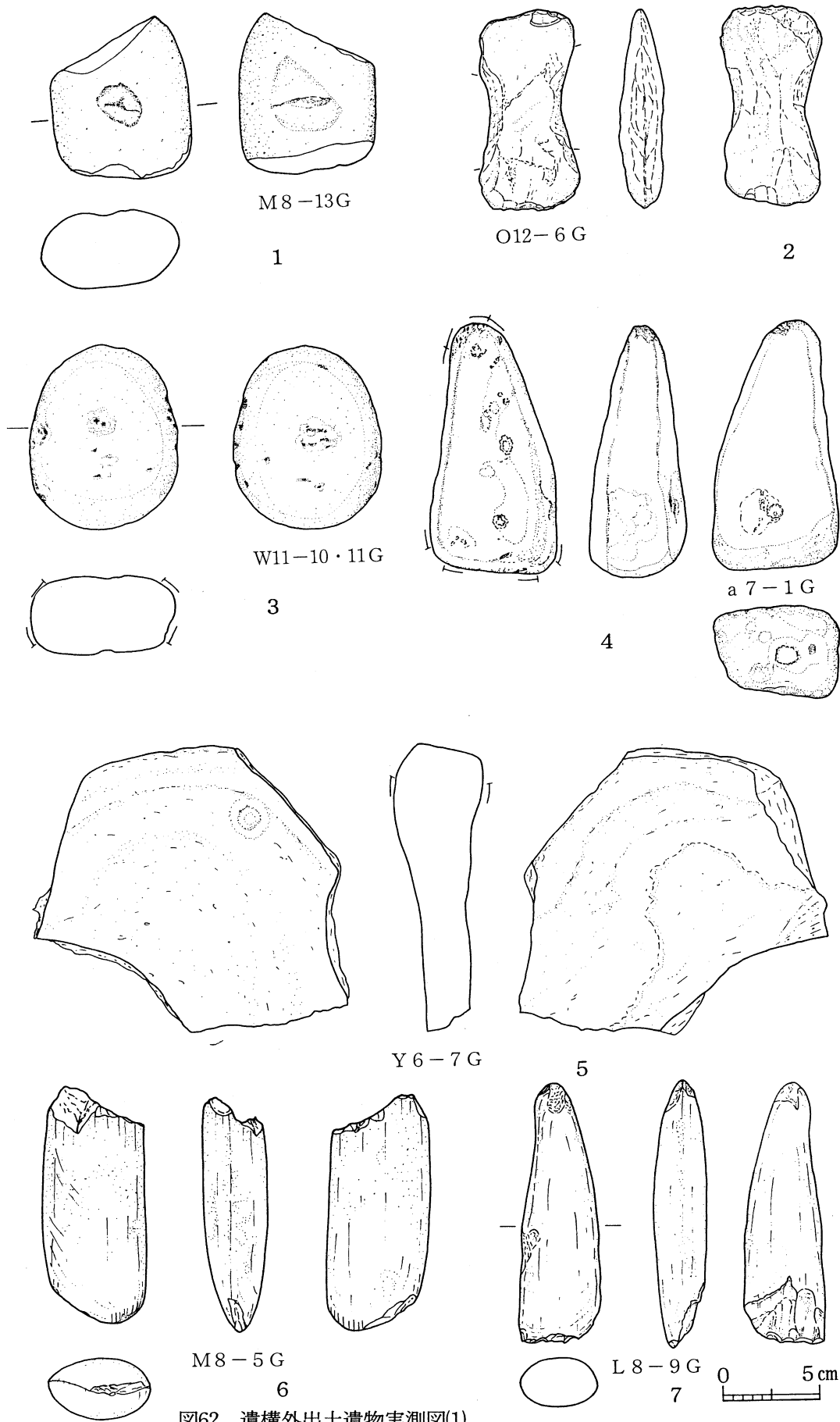


图62 遺構外出土遺物実測図(1)

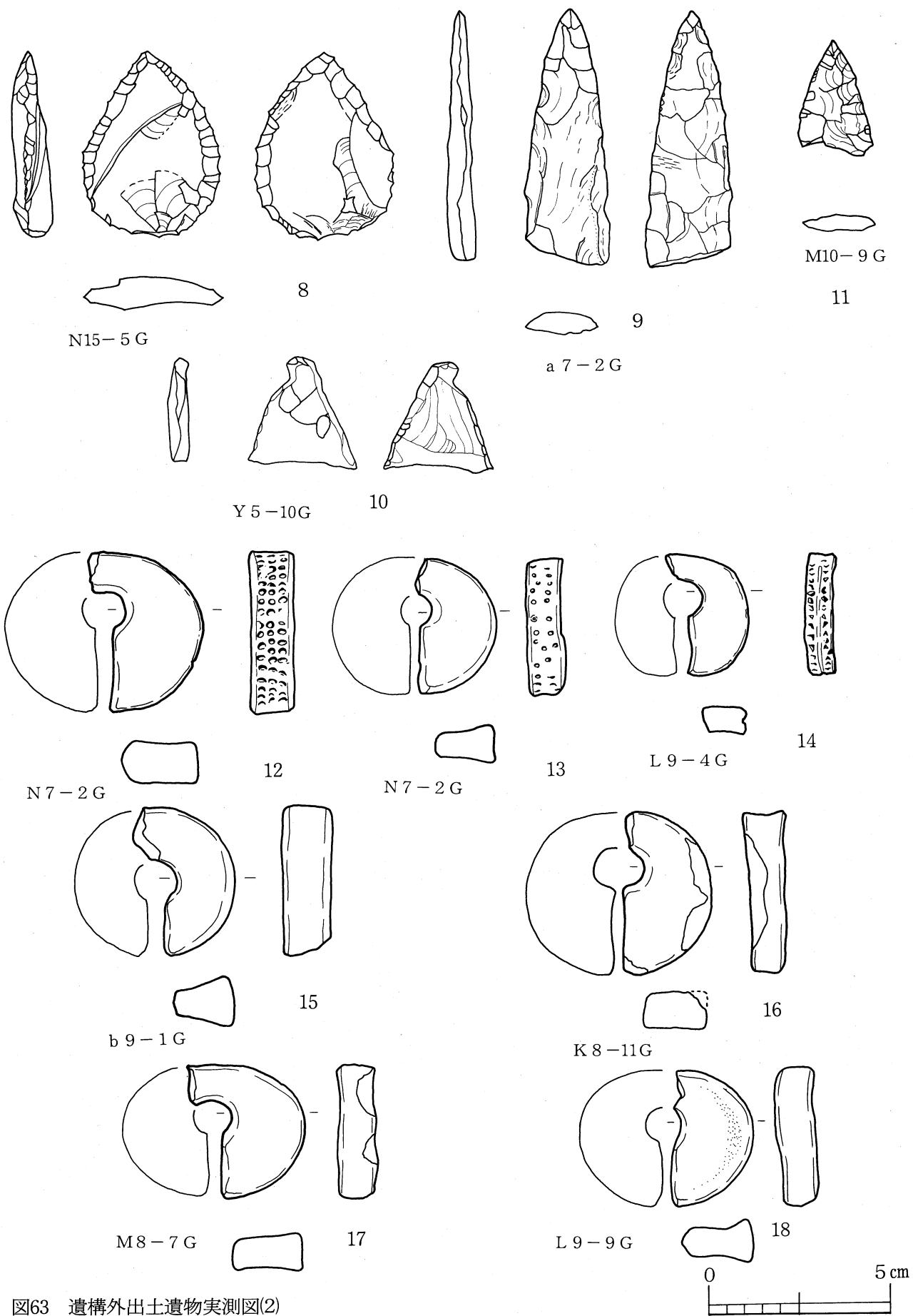


图63 遺構外出土遺物実測図(2)

V 小結

旧石器時代 ソフトローム上面において出土した尖頭器を最初として下層調査を実施した訳だがⅣ～Ⅴ層においては遺物集中地点は確認できなかった。更に下層に掘り下げた結果、Ⅶ～Ⅷ層において遺物集中地点を2か所検出した。製品は使用痕のある剥片以外は出土していない。石材は01遺物集中地点においては珪質頁岩の単一材、02遺物集中地点においてはチャートの単一材となっている。石材の相違、出土層位、剥片の観察によると02遺物集中地点が古いようである。その他12住覆土中出土の尖頭器3点は頁岩製ではあるがⅣ層に帰属するものと思われる。

縄文時代 検出した遺構は早期?の落とし穴状遺構21基、前期(黒浜式)の住居跡10軒、時期不明のピット32基となっている。

住居 プランは不整形、隅丸方形、隅丸台形等方形を基本としている。炉は中央よりやや壁際に寄って造られている。柱跡等の施設は4本ないし5本といった規格性はず1カ所から数カ所の浅いほりこみを有する。遺物は関山式の新しい段階に見られるループ文や組紐文を施文した土器はなく、黒浜式終末に見られる無繊維化、肋骨文等を施文した遺物もみられない。各住居跡の土器の施文された文様割合をみると縄文(単節、無節)が多く、次に縄文と竹管文・沈線文を組み合わせたもの、客体的に貝殻腹縁文、網目状燃糸文、条痕文を施文したものとなっている。遺物は見たかぎりではそのほとんどに繊維を含んでいる。おおむね黒浜式の中葉～後半に帰属するものと思われる。

ピット 落とし穴状遺構は21基検出しているが、その占地は大きく台地を南北方向に縦断して線上に展開するケース(東側部分)と台地上縁辺部に等高線に沿って展開するケース(南側部分)、南西方向から北東方向に縦断して線上に展開するケース(西側部分)がある。プランは大きく楕円形と円形に分かれる。規模は長径2.2m・2.6m・2.8m・3.2m・3.5m、短径は0.8m～1.7mとばらつきが見られる。深さも0.9m～2.5mとばらつきが見られる。掘り方にも差異がみられ規格性はないようである。遺物は最上層の黒褐色土中から縄文前期～中期の土器片が出土しているが混入遺物のため、前期以前の所産と想定される。ちなみに早期の遺物、遺構は検出されていない。その他のピットとして、プランが半月状で断面の一方が直立して立ち上がるという特徴をもったピットがある(23、28、38)。規模は長軸2.2m～3.9m、短軸0.9m～1.0m、深さ0.3m～0.5mを測る。遺物は黒浜式土器片が出土しているが小片である。またプランが円形で焼土を伴うピットがある(26、39)。規模は略円形で1.4m×1.2mと1.2m×1.0mで深さは0.3m程度を測る。焼土が底面の立ち上がり部に偏って検出される。遺物はほとんど確認されない。

歴史時代 検出した遺構は平安時代の住居跡4軒、同時期のピット(墓坑か)2基である。

住居 4軒検出している。仲ノ台遺跡の規模(68,000m²)からみると極めて密度は薄い。占地はまどまりのある展開ではないが東側で1軒、西側で3軒となっている。

各住居跡の基本データ

| | | | | |
|-----|----|-------------------------|------|---------|
| 04住 | 規模 | 3.15m×2.80m×深さ0.17mの長方形 | 主軸方向 | E-35°-S |
| 12住 | 規模 | 3.15m×2.48m×深さ0.12mの長方形 | 主軸方向 | N-89°-E |
| 13住 | 規模 | 4.43m×2.95m×深さ0.15mの長方形 | 主軸方向 | E-4°-S |
| 14住 | 規模 | 4.26m×3.53m×深さ0.14mの長方形 | 主軸方向 | E-19°-S |

カマドの位置は14住のコーナーカマドを除いて壁中央に造られている。方向は東ないし南東位置である。13住では袖部はなく置きカマドと考えられる。柱跡等のピットは4、5本といった規格性はなく1カ所程度となっている。各住居跡の時期は、04住では遺物がほとんどなく確証に乏しいが須恵器甕の胴部片が出土している。9世紀前半～中葉と考えたい。12住は遺物点数が100点を超えるが、須恵器の出土はみられない。2、3の土師器坏は若干古いと思われるが甕等のロクロ使用からみると9世紀第Ⅳ四半期頃であろうか。13住は遺物点数が100点前後を数える。ほとんどカマド位置での出土である。坏、甕等の底部切離し後無調整、各器種の口唇部の形態からすると10世紀第Ⅱ四半期頃であろうか。14住は遺物点数が96点前後を数える。ほとんどカマド内の出土である。甕のみの出土であるが、コの字状口縁、木口状のもので内面整形している等の特徴をもつ。13住の甕よりやや後出の感がある。13住と同じないしやや遅れる10世紀第Ⅱ四半期頃であろうか。

ピット 2基検出している。群としての性格づけはできず、形態も異なる。

各ピットの基本データ

| | | | | |
|------|----|---------------------------|------|----------|
| 10土坑 | 規模 | 1.14m×0.69m×深さ0.33mの隅丸長方形 | 主軸方向 | N-0°-W。 |
| 59土坑 | 規模 | 1.44m×0.80m×深さ0.46mの隅丸長方形 | 主軸方向 | N-78°-W。 |

両者共に1m程度の隅丸長方形を呈する。10土坑からは底面中央部から刀子が出土している。59土坑からは覆土中から図示した坏が伏せた状態で出土している。焼土も伴っていた。こうした状況から墓坑と考えるに至った。時期は59土坑が12住を切っていることから10世紀頃であろうか。

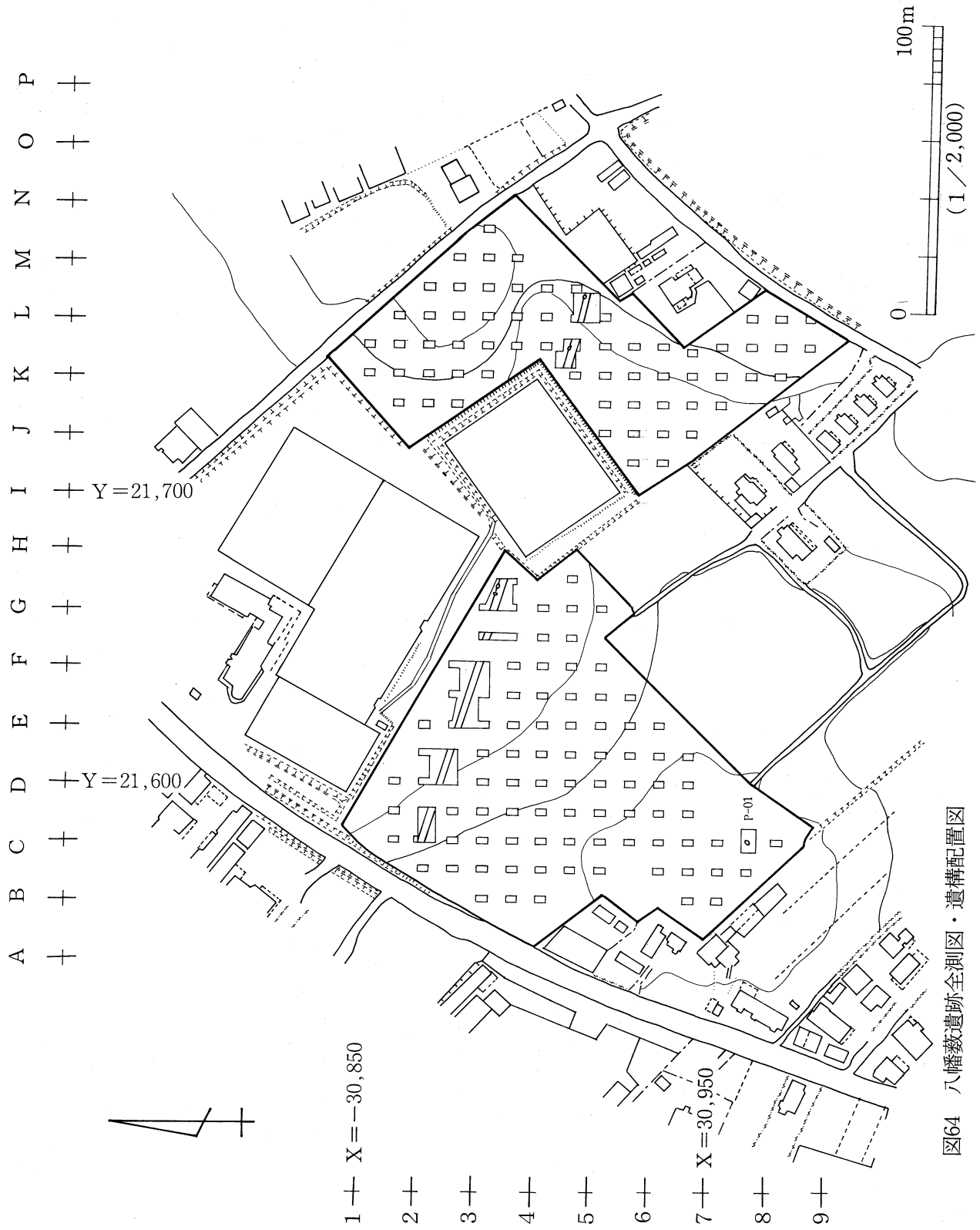


図64 八幡敷遺跡全測図・遺構配置図

第2節 八幡藪遺跡

本遺跡は区画整理事業地内の南地区に当たる。当初未承諾地や建物があったため遺跡の有無が回答できなかった。順次試掘を実施できるめどがついたため、対象面積の1%程度を掘り下げた結果ピット1基を確認したので遺跡有りの回答となった。小学校の南側では唯一の遺跡である。

遺物の分布状況はきわめて薄く20,000㎡弱の面積にもかかわらず50点にも満たない。

検出された遺構は縄文時代のピット1基である。

I 縄文時代

P-01 (図65 図版17)

位置 C7-3Gに位置する。

規模 3.23m×1.61m×0.61mの楕円形を呈する。主軸方向 N-50°-E。

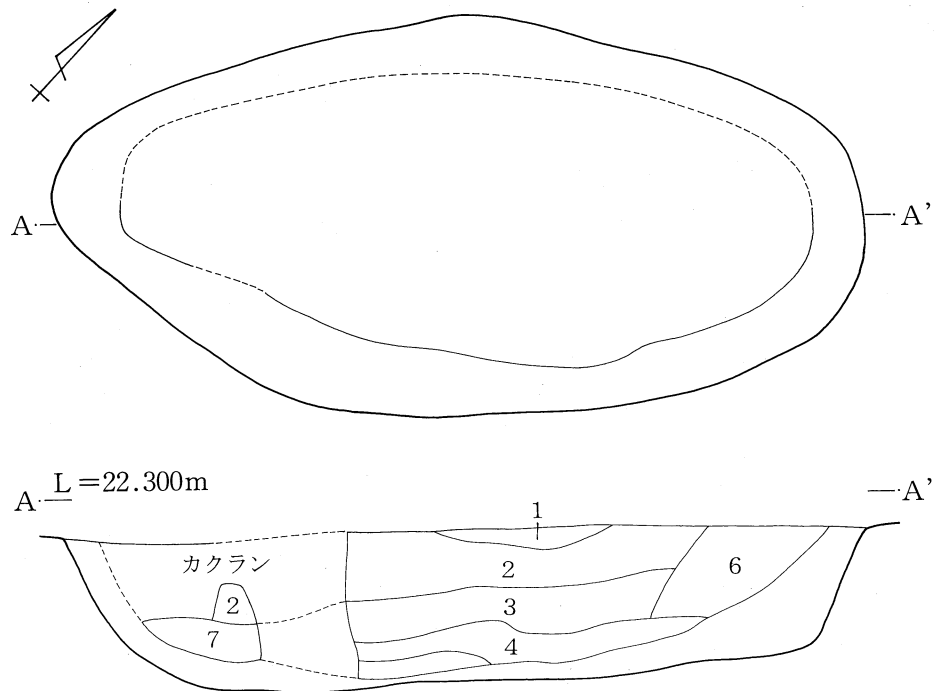
所見 覆土は暗褐色土を基調としている。遺物出土せず時期不明。

トレンチ内出土遺物 1は口唇部は欠損するが口縁部が遺存する。文様施文は撚糸文を施す。胎土に繊維を混入している。黒浜式である。2は口縁部が遺存する。文様施文は浅い沈線の下部に単節縄文を施文する。後期である。3は口縁部が遺存する。文様施文は竹管状工具による細い沈線文を縦方向に施文する。前期終末か？4は胴部が遺存する。文様施文は単節縄文を施す。後期である。5は胴部が遺存する。文様施文は地文に縄文を施した後、沈線文でおおわれている。後期（加曾利B式？）である。6は底部が全周する。底部径5.5cmを測る。スタイルからすると後期か？7は有舌尖頭器である。先端部を欠損するが遺存長6.9cm、幅2.0cm、重量11.6gを測る。両面において粗い剥離調整をしている。

II 小結

八幡藪遺跡では、検出遺構についてはピット1基という状況であり、その性格についてもおそらくは落とし穴であろうと思われるが明確ではない。遺物については旧石器後～末期の尖頭器、縄文前期中～末期、同後期と散発的な分布である。

本遺跡は台地上平坦部の標高約26m～27mに位置している。周辺は一枚板のように平坦で河川に至る小支谷まで北側で800m、西側で700mを測る。そのため、人にとっての水の便の悪さや動物にとって水場を確保できないことから居住地としては不都合だったのだろうと想定される。西八千代地区の南側での遺跡限界を示す好資料ではなかろうか。



- P-01土層
- 1 暗褐色土 黒色土粒多く含み、粘性あり。しまっている。
 - 2 褐色土 暗褐色土粒+ローム粒。粒子細かくしまっている。
 - 3 暗褐色土 ローム粒少量含む。2~3mmの大ロームブロック含む。粘性あり。しまっている。
 - 4 " 黒色土粒多く含む。2~3mm大ロームブロック含む。粘性あり。しまっている。
 - 5 褐色土 黄褐色土、砂質土主体に、暗褐色土含む。
 - 6 暗褐色土 4層に類似する。黒色土粒少ない。
 - 7 茶褐色土 ローム粒+暗褐色土。斑点状に含まれる。

図65 P-01遺構平面図

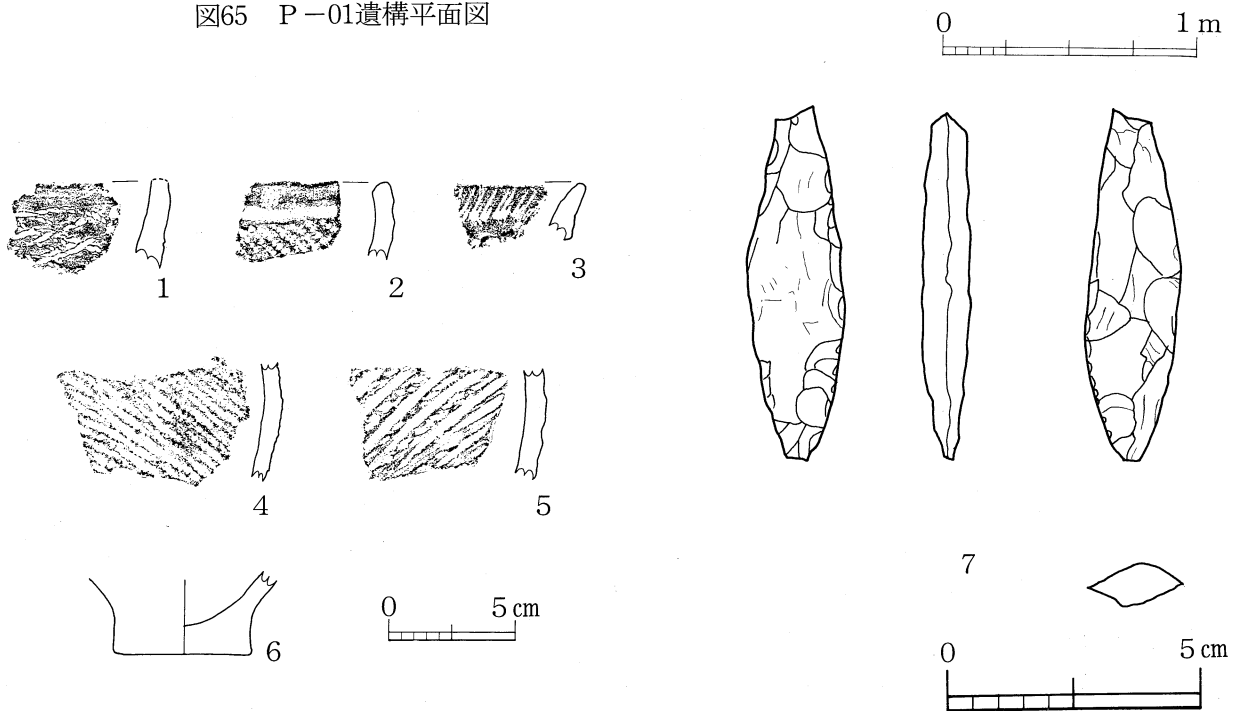


図66 八幡藪遺跡トレンチ内出土遺物実測図

第3節 芝山遺跡

本遺跡は仲ノ台遺跡の谷を隔てた北東対岸に当たる。仲ノ台遺跡では未伐採の段階で確認調査を実施したため、遺構確認は非常に難しかった。今回の確認調査は伐採後の調査だったのでプランの想定には前回調査の経験もあり、ある程度は容易であった。なお、トレンチの掘り下げは人力で行った。また、北側隣接地において千葉県文化財センターが調査（東葉高速鉄道引込み線等に係わる）を実施していたのでこの点も考慮し、本調査時において下層の確認調査を可能な範囲で実施した。

トレンチ出土の遺物の分布状況は、斜面部においては全くといっていいほど出土していない。台地上平坦部においては、本調査の遺構配置図に重なる状態で出土しているが点数は全体的に10～20点と少ない。

検出された遺構は縄文時代の住居跡2軒、土坑10基、平安時代の住居跡1軒、土坑1基である。

I 縄文時代

a. 住居跡

概要 確認調査時において1軒は確認していた。覆土は黒褐色土だった点や確認時での遺物量が300点を超えていたため、これらの点に考慮してプラン確認を実施した。結果として前期の住居跡2軒を調査した。

02住（図69 図版33）

位置 F 3-3、4 Gに位置する。

規模 3.4m×2.8mの隅丸長方形を呈する。主軸方向 N-2°-E。

壁高 北壁0.17m・東壁0.16m・南壁0.26m・西壁0.26m程度となっている。

床面 ソフトローンを地床としている。

施設 炉 東壁際に位置する。床面を2～3cm程度掘り窪め底面としている。平面は楕円形で0.41m×0.26m。底面は部分的に焼土ブロック化しているが、焼土の堆積も薄く使い込まれている状況とは言えない。

柱穴 検出されなかった。

遺物 全体で500点程度出土している。中央から北壁及び東壁にいたる部分に多い。出土した高さは全体的には床面から0m～0.25m浮いた状態で出土している。個々の遺物の文様施文の割合は縄文施文のものが総体をしめ、続いて竹管文を施したものの、その他は1、2点程度の客体的な出土となっている。

02住出土遺物（図70 図版36）

1は床面から10cm浮いて出土した土器で、口縁から胴部上位にかけて遺存する。器形の特徴は胴部上位から朝顔状に開いて口唇部にいたる。口唇部は断面U字状で内側が削がれている。文様施文は口縁直下から単節縄文を施す。部分的に縄文原体の末端がみられる。胎土は繊維を多量に含んでいるが、焼成は良好で器面内面はよくなで整形されている。2は床面から15cm浮いて出土した土器で、口縁から胴部上位にかけて遺存する。文様施文は口縁直下から無節縄文を施す。器面内面はよくなで整形されている。口唇部に2カ所抉った痕がある。胎土は繊維を多量に含んでいる。3は床面から15cm浮いて出土した土

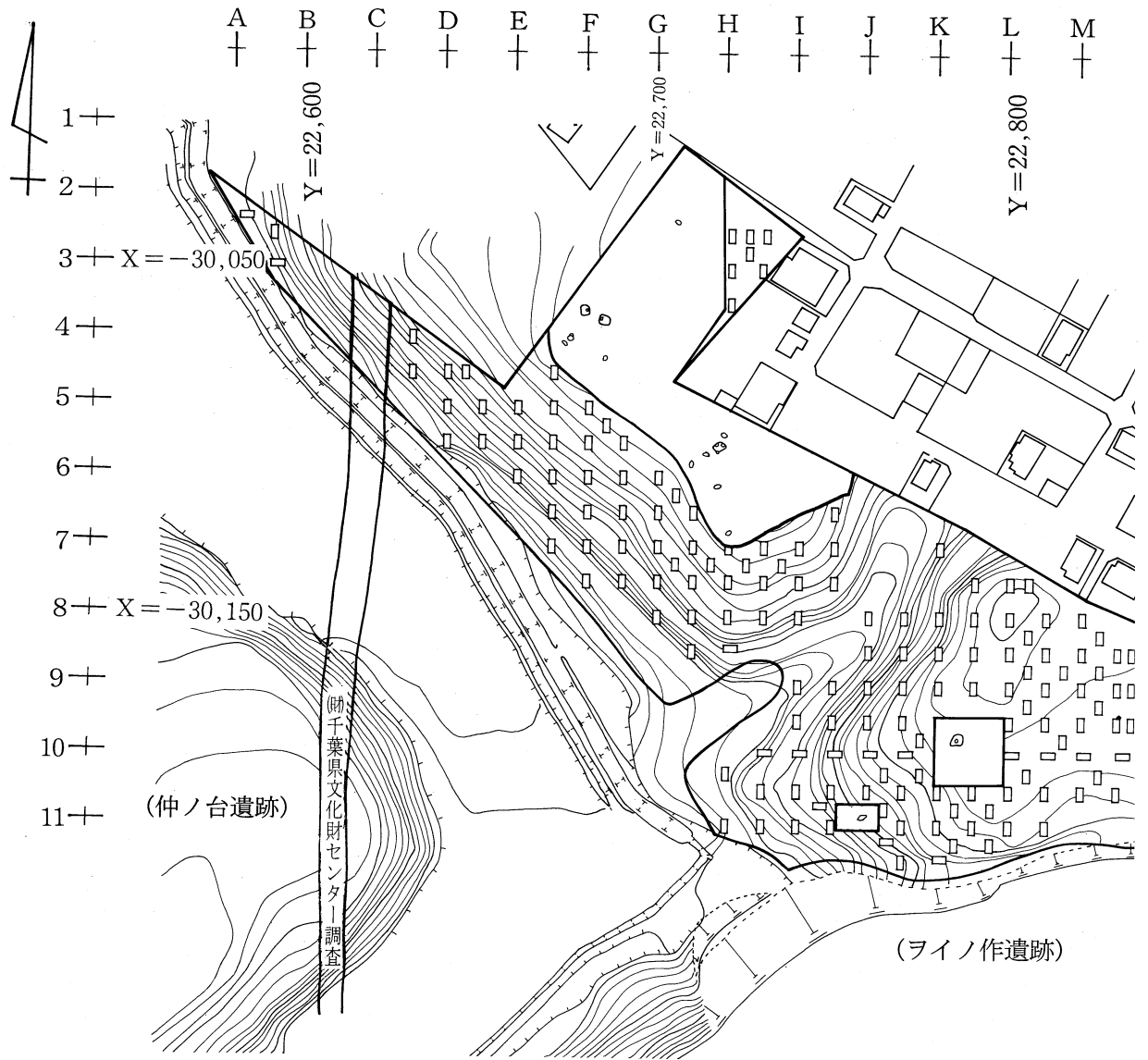
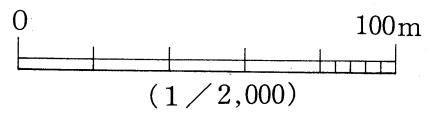


図67 芝山遺跡全測図



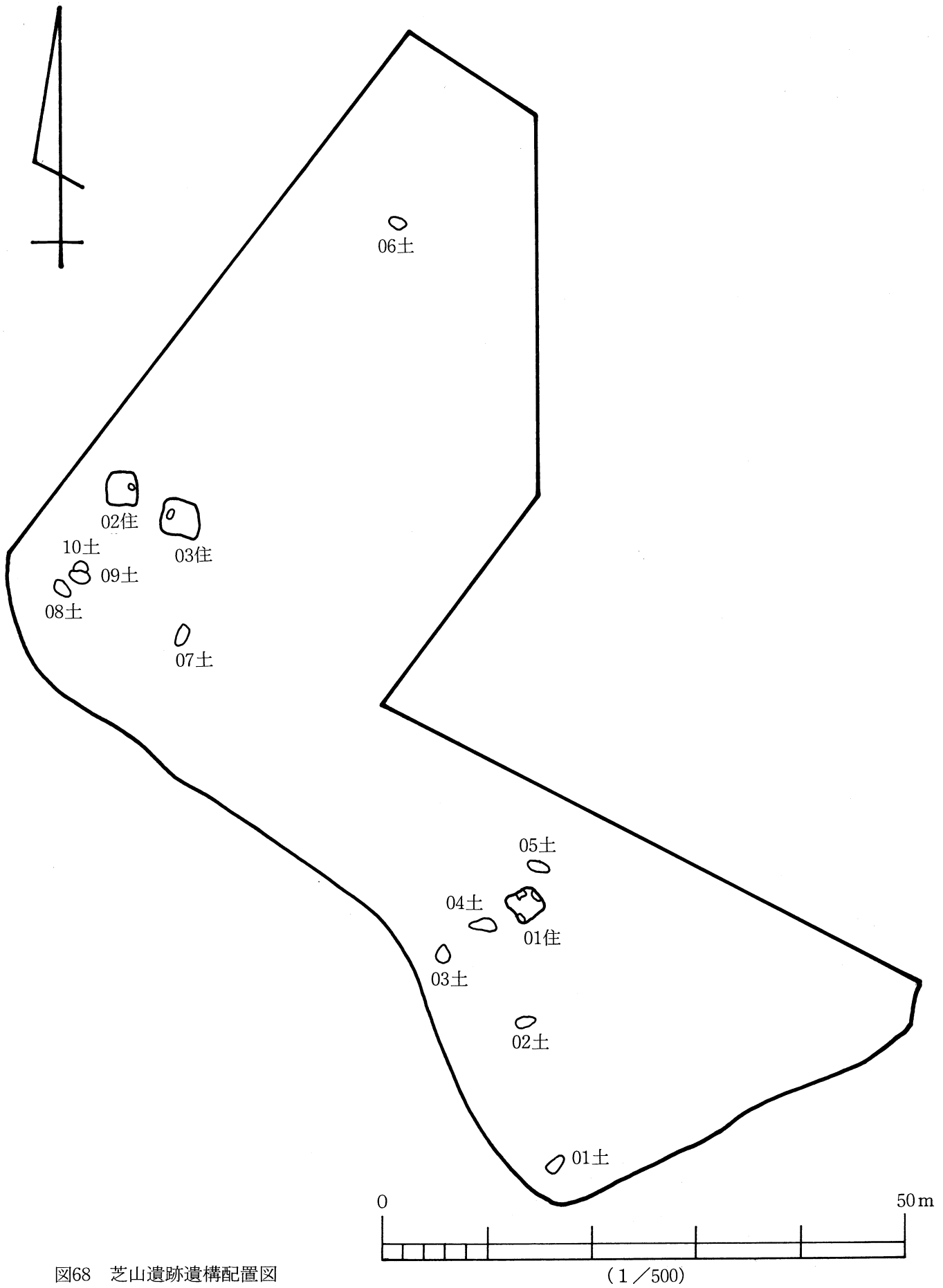


图68 芝山遗迹遺構配置図

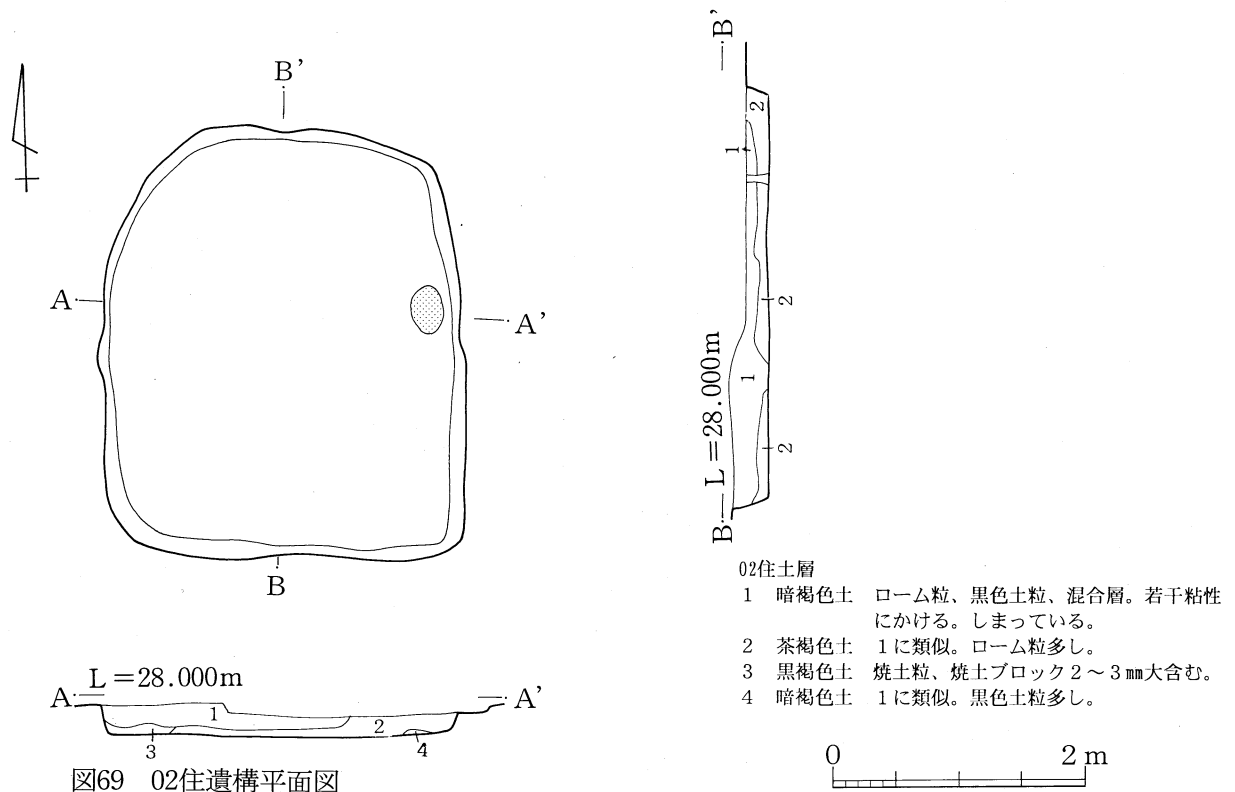


図69 02住遺構平面図

器で、口縁から胴部上位にかけて遺存する。文様施文は口縁直下に列点文、その下に縄文を地文として竹管状工具による平行沈線文と鋸歯状沈線文を施文する。繊維はほとんど含んでいない。**4**は床面から15cm浮いて出土した土器で口縁部が遺存する。竹管文を横方向に施文する。繊維は全く含んでいない。**5**は床面から22cm浮いて出土した土器で縄文を施文する。胎土に繊維を混入している。**6**は床面直上出土の土器で単節縄文を施文する。繊維は全く含んでいない。**7**は床面から15cm浮いて出土した土器で円形竹管文を施文する。胎土に少量の繊維を混入している。**8**は床面から12cm浮いて出土した土器で縄文を地文として竹管状工具による沈線文を施す。3とは接合しないがおおむね同じ個体であろう。**9**は床面から23cm浮いて出土した土器で内傾した口縁部が遺存する。文様は口縁部下に沈線文でその下に撚糸文を施す。胎土に繊維を混入するが焼成は良好である。**10**は23cm浮いて出土した土器で竹管状工具による波状沈線文を施す。胎土に繊維を混入する。**11**は条痕文を施文した土器で珍しい一例である。

03住 (図71 図版33)

位置 F 3-8 Gに位置する。

規模 3.5m×3.2mのやや東西に長い正方形を呈する。主軸方向 N-75°-W。

壁高 北壁0.19m・東壁0.23m・南壁0.23m・西壁0.21m程度を測る。

床面 ソフトロームを地床としている。

施設 炉 中央やや西壁寄りに位置する。掘り込みはほとんど見られない。平面は楕円形で0.52m×0.34m。焼土の堆積も薄く使い込まれている状況とは言えない。

柱穴 検出されなかった。

遺物 全体で94点程度出土している。出土地点は中央やや東寄り部分に多い。出土した高さは全体的には床面から0m～0.15m浮いた状態で出土している。個々の遺物の文様施文の割合は他の住居跡では縄文施文のものが総体をしめているのに対し、ここでは縄文施文がやや多いものの縄文と竹管文を組み合わせたもの、竹管文のみのもの等が含まれ1点貝殻腹縁文のものが出土している。

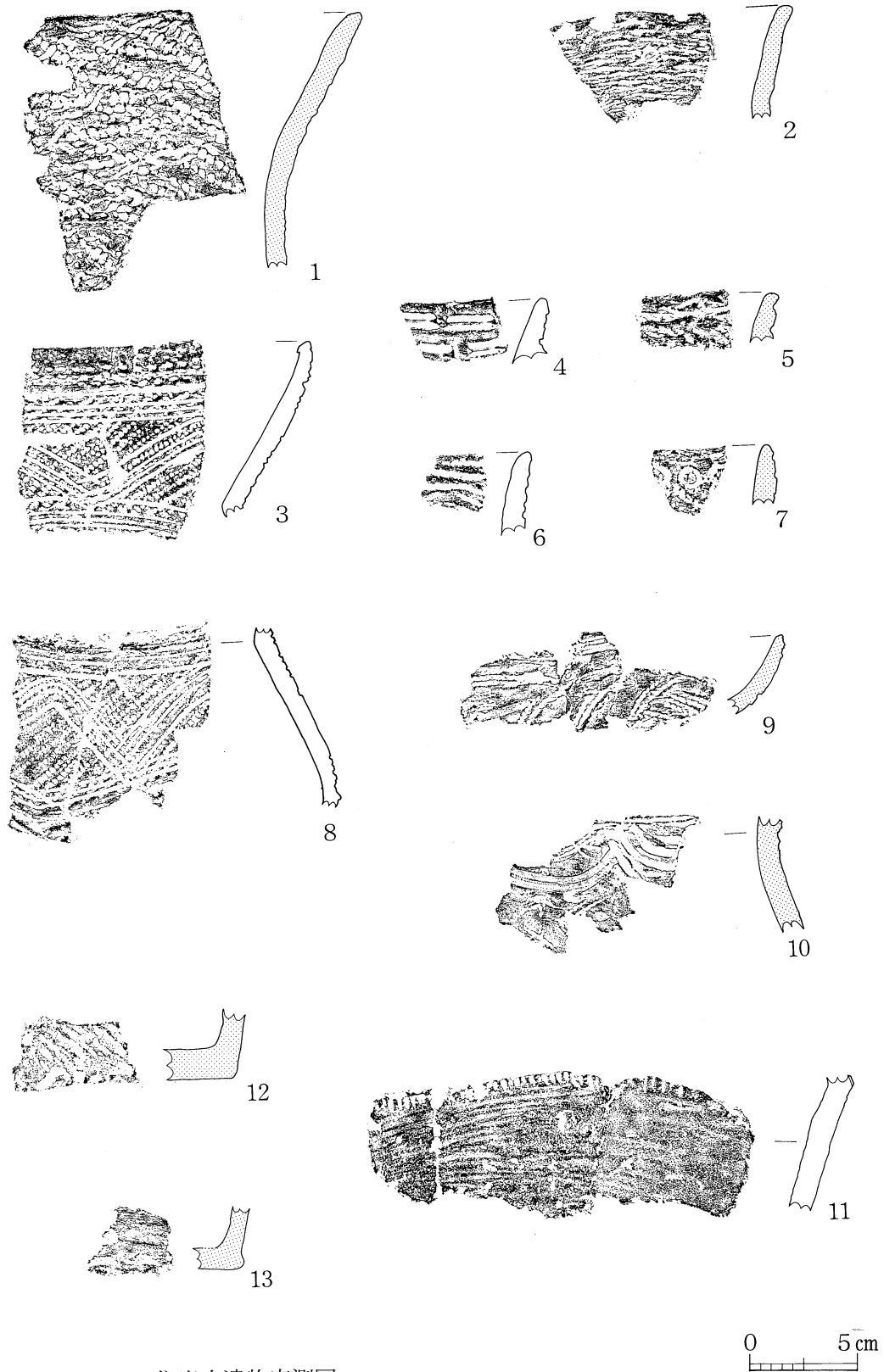


图70 02住出土遺物実測図

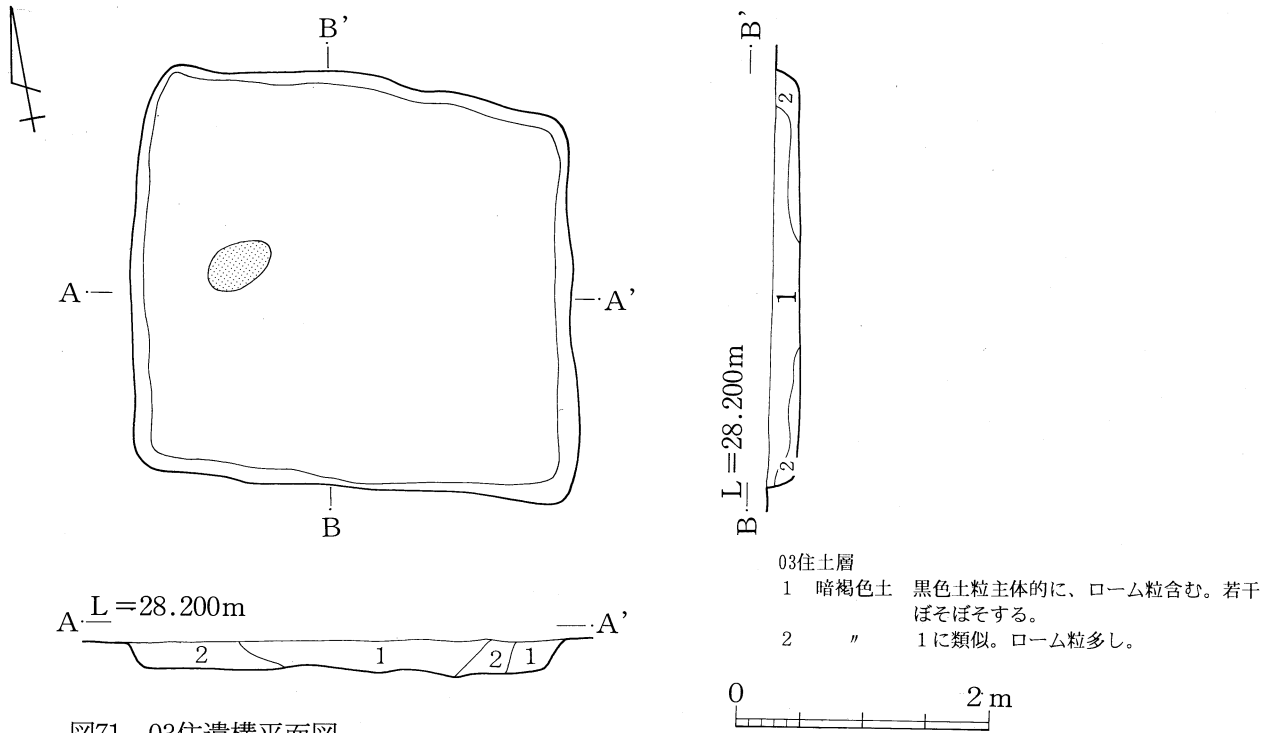


図71 03住遺構平面図

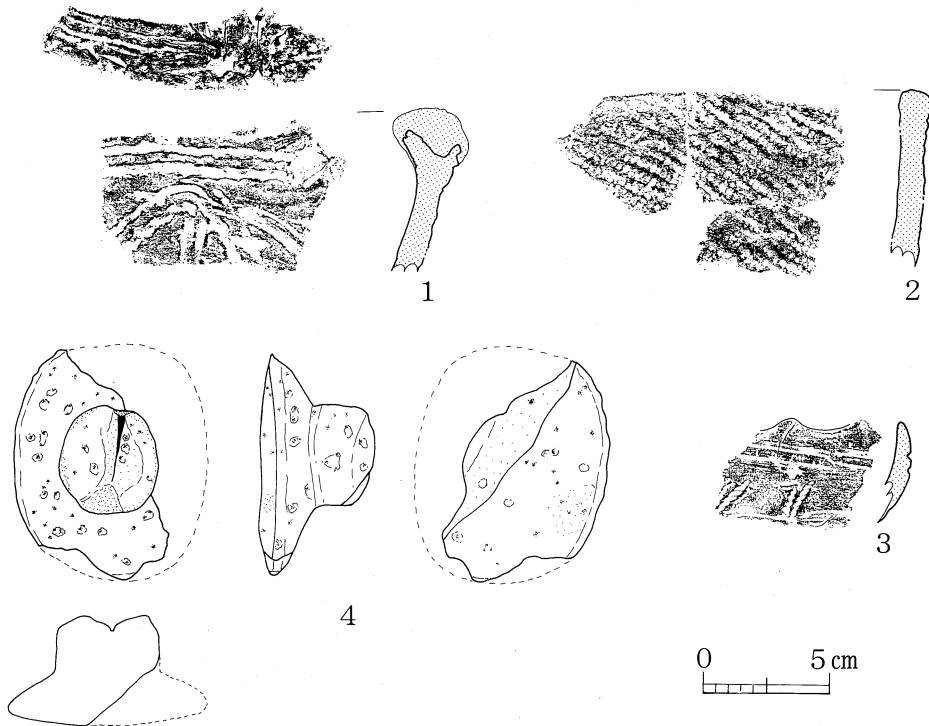


図72 03住出土遺物実測図

03住出土遺物（図72 図版36）

1は4cm浮いて出土した土器で口縁部が遺存する。口縁下に粘土帯を巡らして口縁部文様帯とし竹管状工具による沈線文を全体的に施文する。胎土に繊維を混入する。2は2cm浮いて出土した土器で口縁部が遺存する。単節縄文を施文する。胎土に繊維を混入する。3は17cm浮いて出土した土器で波状の口縁部が遺存する。竹管文による沈線と撚糸文を施文する。胎土に繊維を混入する。4は石冠状を呈する浮子で約 $\frac{1}{2}$ 程度欠損する。14cm浮いて出土している。長軸8.8cm、短軸6.7cm、重量26.2gを測る。

b. 土坑

概要 本遺跡において検出した土坑は9基を数える。この内明らかに性格の判明する遺構は落とし穴状遺構で01、02、05、06、07の5基が該当する。また、仲ノ台遺跡でも確認されているが、プランが半月状を呈する土坑が04に該当する。08、09については深度が1.0m程度を測るが土層断面の観察から落とし穴状遺構とは考え難い。

01土坑(図73 図版34)

位置 H6-4、H7-1Gに位置する。

規模 1.92m×1.10m×深さ1.50mの隅丸長方形を呈する。主軸方向 N-45°-E。

所見 覆土は上層が暗褐色土、下層がロームブロック混じりの褐色土である。遺物出土せず時期不明。

02土坑(図73 図版34)

位置 G6-14Gに位置する。

規模 2.15m×0.76m×深さ0.62mの楕円形を呈する。主軸方向 N-64°-E。

所見 覆土は上層が黒褐色土、下層がロームブロック混じりの褐色土である。遺物は覆土中から出土しているが、前期の小片である。

04土坑(図74 図版34)

位置 G5-12、16Gに位置する。

規模 2.61m×1.24m×深さ0.72mの半月形を呈する。主軸方向 N-80°-W。

所見 覆土は上層が暗褐色土、下層がロームブロック混じりの褐色土である。遺物は覆土最上層から前期の小片と石鏃が出土している。

05土坑(図74 図版34)

位置 H5-3、G5-15Gに位置する。

規模 2.26m×1.25m×深さ2.62mの楕円形を呈する。主軸方向 N-69°-W。

所見 覆土は上層が黒褐色土、下層がロームブロック混じりの褐色土である。遺物は上層の黒褐色土から前期の小片が出土している。

06土坑(図75 図版34)

位置 G2-6Gに位置する。

規模 1.72m×1.14m×深さ2.47mの隅丸楕円形を呈する。主軸方向 N-65°-W。

所見 覆土は上層が暗褐色土、下層がロームブロック混じりの褐色土である。遺物は上層の黒褐色土から前期の小片が出土している。

07土坑(図75 図版34)

位置 F4-6Gに位置する。

規模 1.89m×1.10m×深さ2.29mの楕円形を呈する。主軸方向 N-24°-E。

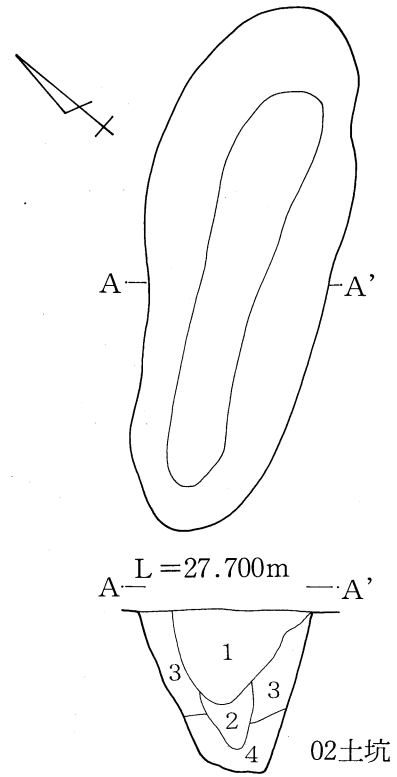
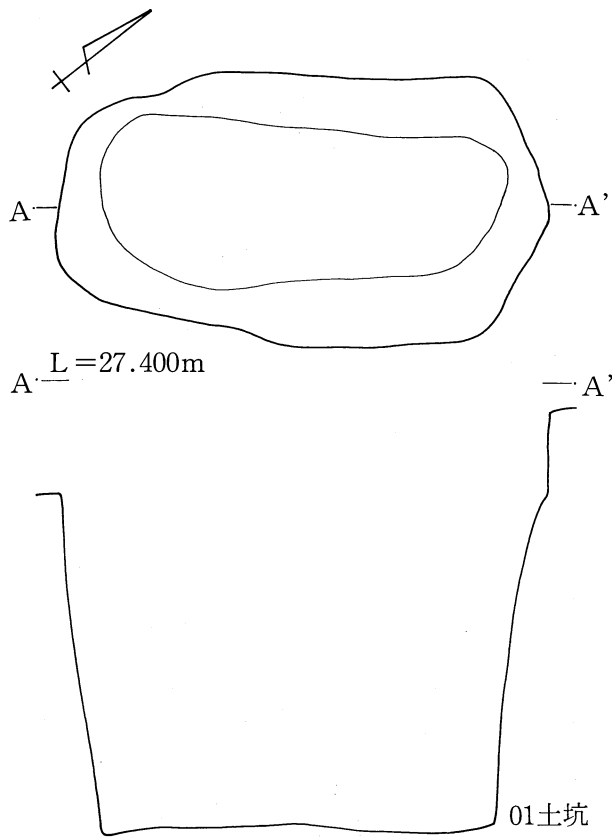
所見 覆土は上層が黒褐色土、下層がロームブロック混じりの褐色土である。遺物は上層の黒褐色土から前期末の小片が出土している。

08土坑(図75 図版34)

位置 E4-9、13Gに位置する。

規模 1.61m×1.17m×深さ0.74mの不整楕円形を呈する。主軸方向 N-43°-W。

所見 覆土は上層が暗褐色土だが、自然堆積の埋まりかたではないようである。遺物なく時期不明。



02土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒少量含み、しまっている。
- 2 暗褐色土 黒色土粒含み、しまっている。
- 3 茶褐色土 ローム粒主体として暗褐色土含む。しまっている。
- 4 暗褐色土 黒色土粒、ローム粒混在している。5mm大ロームブロック含む。ぼそぼそ。

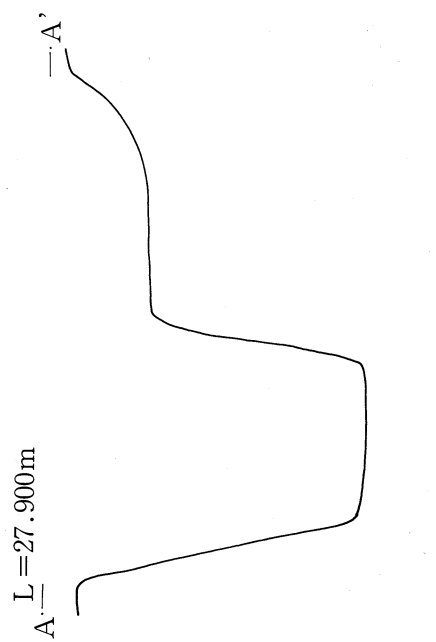
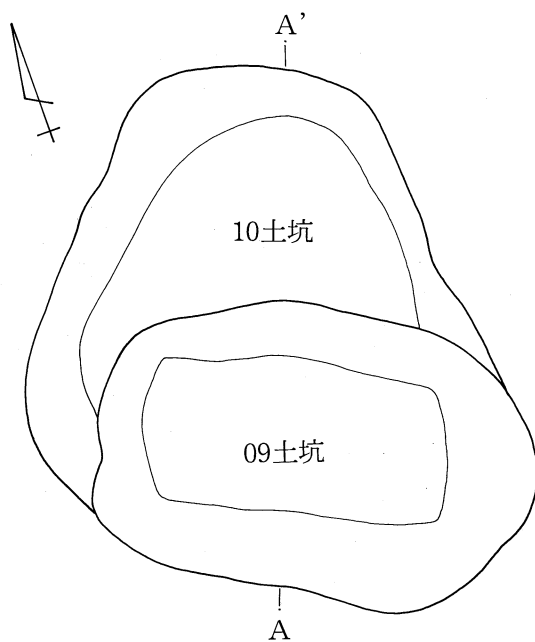


図73 01・02・09・10土坑遺構平面図



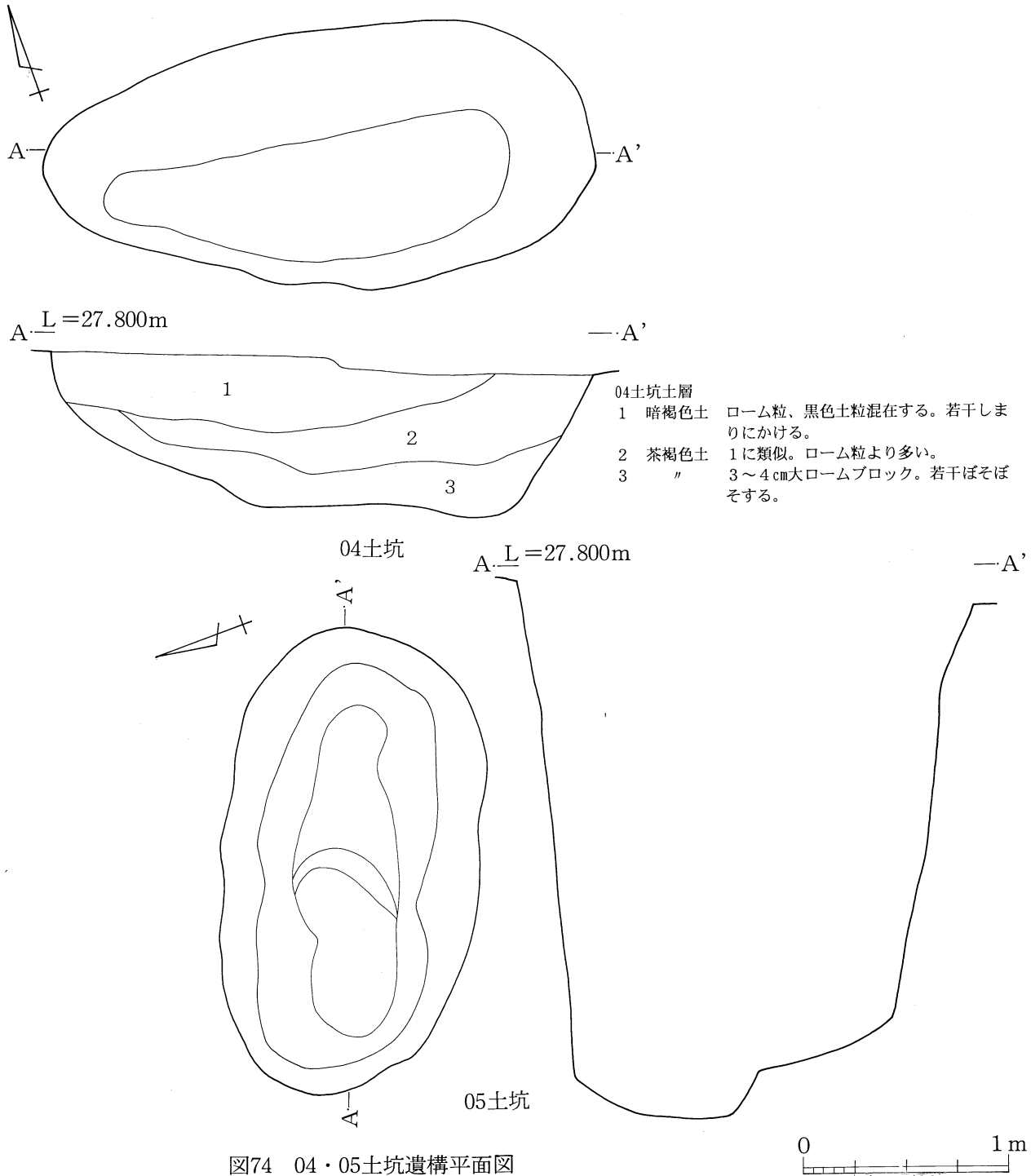


図74 04・05土坑遺構平面図

09土坑 (図73 図版34)

位置 E 4-13Gに位置する。

規模 1.74m×1.13m×深さ1.13mの隅丸長方形で10土坑をきる。主軸方向 N-61°-W。

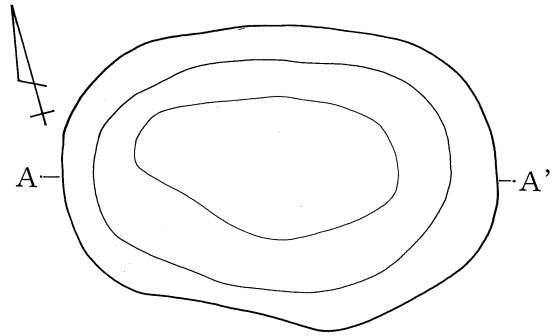
所見 暗褐色・茶褐色土の覆土だが、自然堆積の埋まりかたではないようである。遺物なく時期不明。

10土坑 (図73 図版34)

位置 E 4-131Gに位置する。

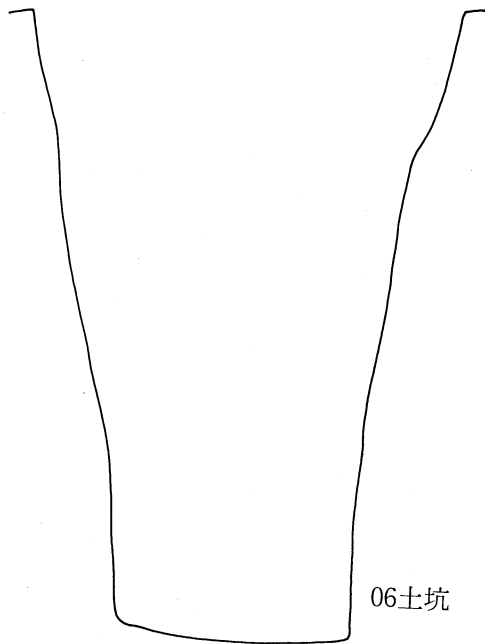
規模 想定1.73m×1.47m×深さ0.34mの不整楕円形を呈する。主軸方向 N-24°-E。

所見 覆土は暗褐色土である。09土坑にきられる。遺物は早期の条痕文施文の土器が出土している。

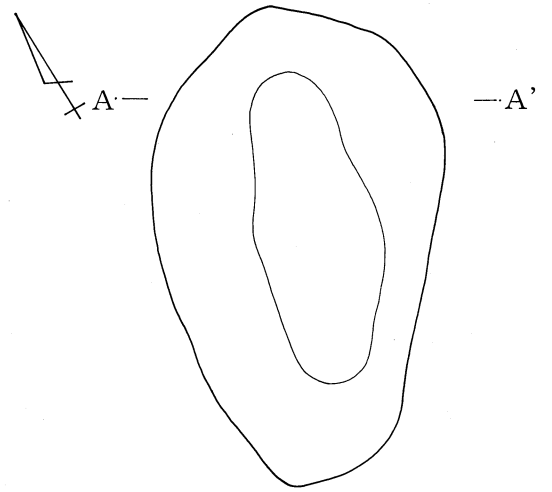


A. $L=28.000m$

—A'

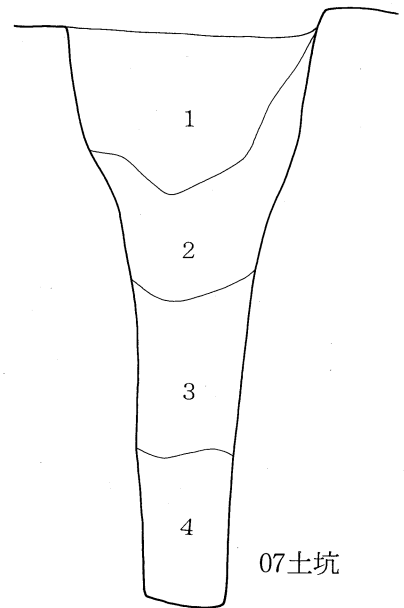


06土坑



A. $L=28.200m$

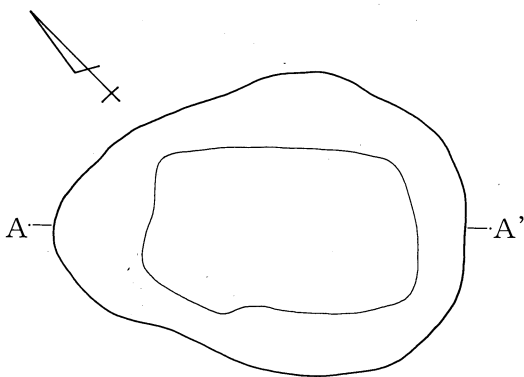
—A'



07土坑

07土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒、斑点状に含む。粘性あり。しまっている。
- 2 茶褐色土 ローム粒主体。粘性あり。若干しまりにかける。
- 3 " ローム粒1~3cm大ロームブロック含む。しまりなし。
- 4 " 3に類似。黒色土粒含む。粘性あり。若干ぼそぼそ。



A. $L=27.900m$

—A'

08土坑



図75 06・07・08土坑遺構平面図

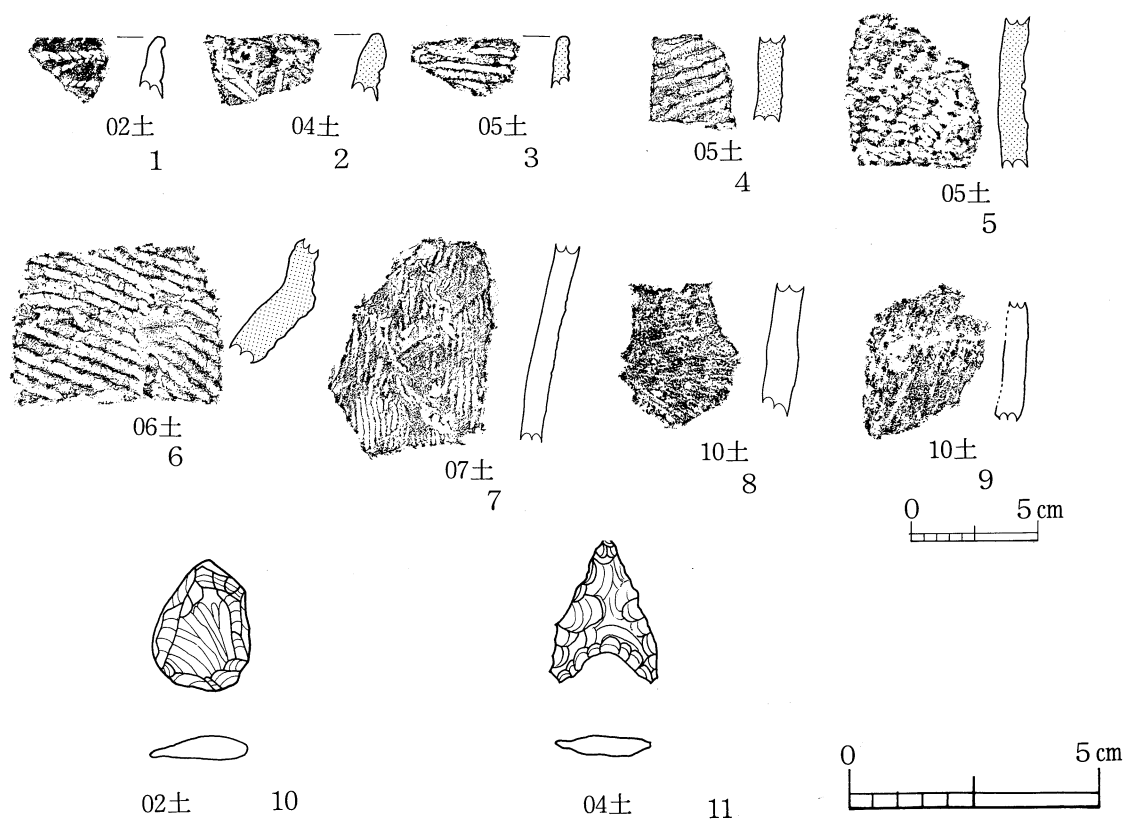


図76 02・04・05・06・07・10土坑内出土遺物実測図

土坑内出土遺物（図76）

概要 落とし穴状遺構出土の遺物をのせたが、いずれも最上層の出土であり遺構の使用された時代とは考えがたい。

1、10は02土坑出土の遺物である。1は口縁部直下に縄文を施文する。胎土に繊維混入は見られない。10はチャートの剥片で2.6cm×2.0cm、重量2.6gを測る。2、11は04土坑出土の遺物である。2は沈線文を施文する口縁部で胎土に繊維を混入する。11は黒曜石の無茎鏃で3.1cm×2.2cm、重量1.5gを測る。両面とも剥離調整を施す。3～5は05土坑出土の土器で3点とも縄文を施文する。胎土には繊維を混入している。3点とも黒色土層中の出土であり遺構に伴うものではない。6は06土坑出土の土器で無節縄文を施文する。胎土に繊維を混入している。この遺物も最上層出土であり遺構埋没時のものである。7は07土坑出土の土器で結節縄文を施文している。前期末の遺物である。この遺物も遺構に伴うものではない。8、9は10土坑出土の遺物である。早期末の条痕文土器群で、数少ない出土例である。

II 歴史時代

a. 住居跡

概要 確認調査時においても遺物の出土量は稀少であった。結果として平安時代の住居跡1軒を調査した。

01住 (図77 図版33)

位置 G5-15、16Gに位置する。

規模 2.78m×2.60mの略方形を呈する。主軸方向 N-41°-W。

壁高 北壁0.41m・東壁0.36m・南壁0.34m・西壁0.38m程度となっている。

床面 ソフトロームの貼り床で全体的によく硬化している。

施設 カマド 北西壁中央に位置する。袖部はよく遺存している。燃焼部は焼土の堆積も厚くよく使いこまれている。支脚は燃焼部若干奥に遺存していた。煙道の立ち上がりは36°程度のやや緩やかな角度をもち、堀り込みは住居外にU字状に掘られる。

柱穴 検出されなかった。

周溝 南コーナーと北東壁に掘られている。

その他 出土量はそう多くないが、炭化材が床面上に散っている。

遺物 全体で10点程度と少ない。カマド前からの出土である。出土した高さはおおむね床から3、4cm程度浮いた状態で出土している。遺物は土師器片主体で須恵器の出土は少ない。

01住出土遺物 (図78 図版35)

1はカマド脇から伏せた状態で出土している。胴部上位から口縁部の全周を欠損する。土師器台付甕で最大径17.6cm、遺存高13.9cmを測る。器壁は極めて薄い。胎土は精密でごく少量砂粒を混入する。調整は外面が胴部中位は横位ヘラ削り、下位は縦位ヘラ削りである。内面はヘラナデ調整を施す。最大径下端に煤が付着している。2は須恵器胴部片で床面から4cm浮いて出土している。外面に平行叩目文調整を施す。3は支脚で遺存長17.6cm、径8.3cmを測る。2ヶ所に窪みが見られる。

b. 土坑

概要 本遺跡において検出した土坑は1基のみである。以下概要を記す。

03土坑 (図79 図版34)

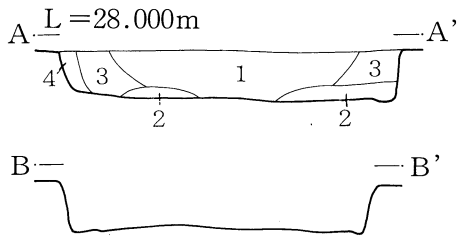
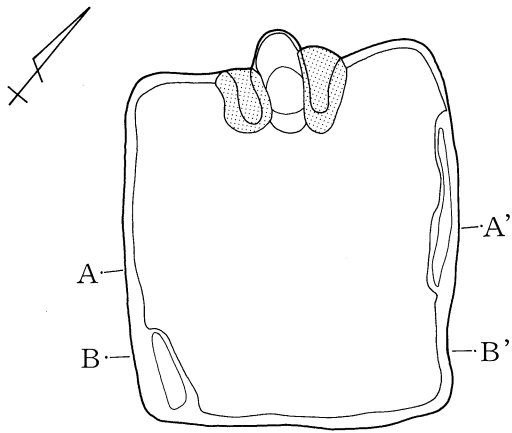
位置 G5-12Gに位置する。

規模 1.58m×1.49m×深さ0.30mの不整円形を呈する。主軸方向 N-30°-W。

所見 覆土は上層が黒褐色土で下層にいくほど明るくなる。遺物は底面から2cm浮いて土師器坏が出土している。また、底面に密着して焼土、炭化物が検出されている。

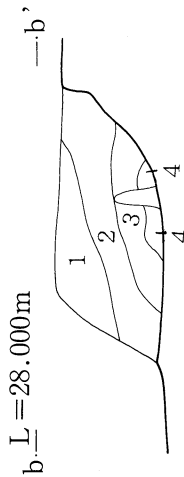
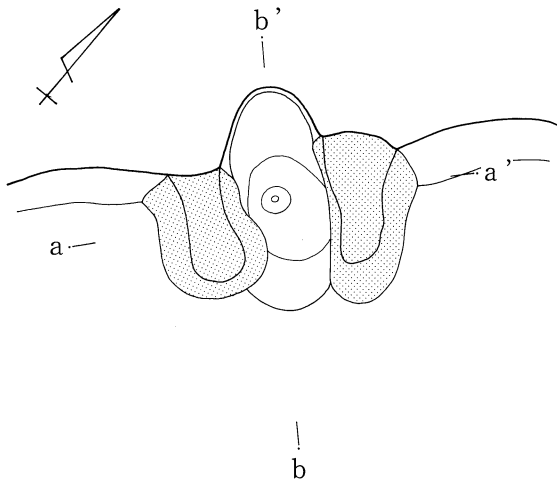
03土坑出土遺物 (図79 図版36)

1点のみ出土している。出土状態は底面から2cm浮いており伏せた状態であった。ロクロ使用の土師器坏で口縁の $\frac{1}{2}$ 程度欠損する。口径12.6cm、底径7.0cm、遺存高3.6cmを測る。胎土は雲母、砂粒を混入する。焼成は良好で淡褐色を呈する。調整は外面が体部下端回転ヘラケズリ調整、底部は回転ヘラ切り後無調整である。器形の特徴は立ち上がり部分で肥厚している。



01住土層

- 1 黒褐色土 ローム粒、少量含む。しまりあり。
- 2 茶褐色土 焼土粒、炭化物含む。しまりあり。
- 3 暗褐色土 ローム粒+暗褐色土、粒子細かい。
- 4 茶褐色土 ローム粒主体。暗褐色土含む。



01住カマド土層

- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、少量含む。
- 2 茶褐色土 茶褐色砂質土主体としてローム粒、焼土粒含む。全体的にさらさらしている。
- 3 暗赤褐色土 焼土ブロック、焼土粒主体として、暗褐色土も含む。
- 4 " 焼土粒、砂質土粒混合層。
- 5 暗褐色土 ローム粒、炭化粒、焼土粒混入。
- 6 淡褐色土 暗褐色土、淡褐色砂質土。

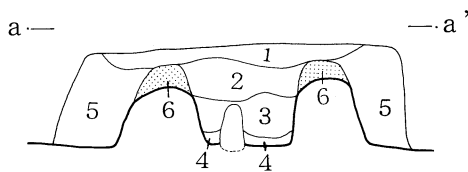
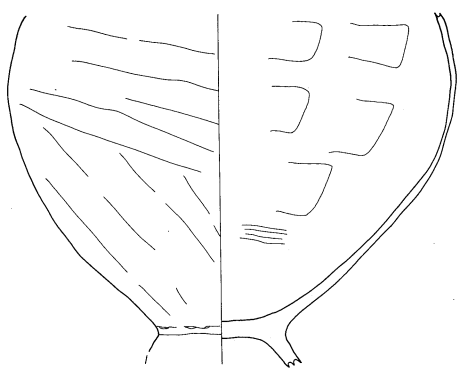


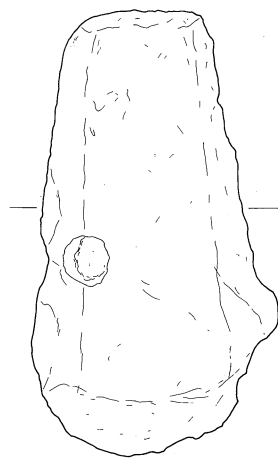
図77 01住遺構平面図・カマド平面図



1



2



3

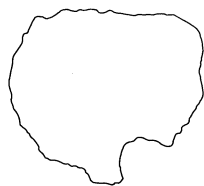
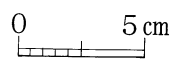


图78 01住出土遺物実測図



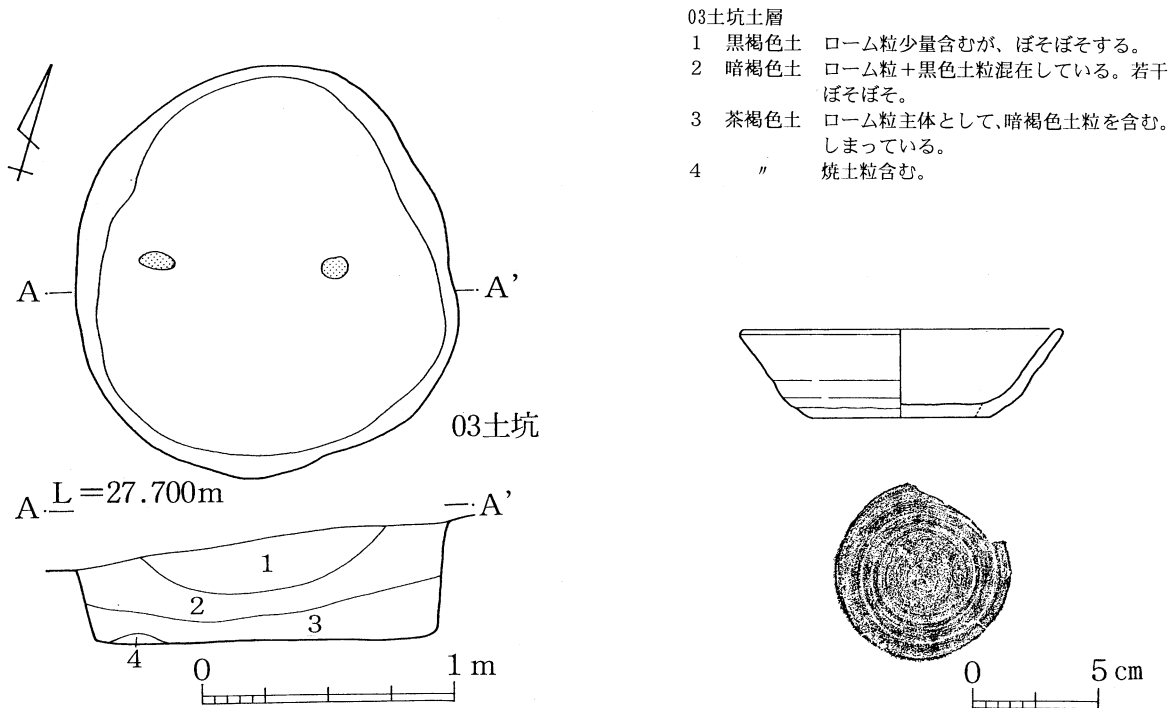


図79 03土坑遺構平面図・遺物実測図

Ⅲ 遺構外出土遺物（図80 図版37、38）

1は口縁部直下に鎖状文を巡らし、その下部に縄文を施文する。加曾利B式である。2は竹管先端部による沈線文を施文する。胎土に繊維を混入する。3は半截竹管による押し引き文で諸磯a式であろうか。4~8は石器であるが、4は磨石で一部敲打も行っている。石材は安山岩である。長軸9.2cm、短軸6.6cm、重量324.3gを測る。5は磨石である。石材は安山岩であるが、軟質で軽い。長軸6.5cm以上、短軸7.7cm、重量173.1gを測る。表裏側面が明確で各々の面が磨られている。6は定角式に近い磨製石斧で刃部を一部欠損する。石材は蛇紋岩である。全長6.1cm、最大幅3.3cm、重量41.0gを測る。刃部はよく研がれている。7は磨石で全面においてよく磨られている。石材は流紋岩である。全長9.2cm、最大幅3.9cm、重量111.0gを測る。とくに先端部において磨られた痕跡が明瞭である。8は底面の使用痕から見るとスタンプ形石器になるか。石材は絹雲母片岩である。全長11.9cm、最大幅9.6cm、重量797.5gを測る。中央側面部分は握りやすいように抉っている。底面は石材の特性もあってか、他の面と著しい違いは見られないが、若干ごつごつした感じである。9~11は土器片錘である。3点とも胎土には長石、雲母を混入する。9、11は数条の角押文がみられる。10は左側面が口縁部であるが、刻み目がみられる。3点とも阿玉台式である。

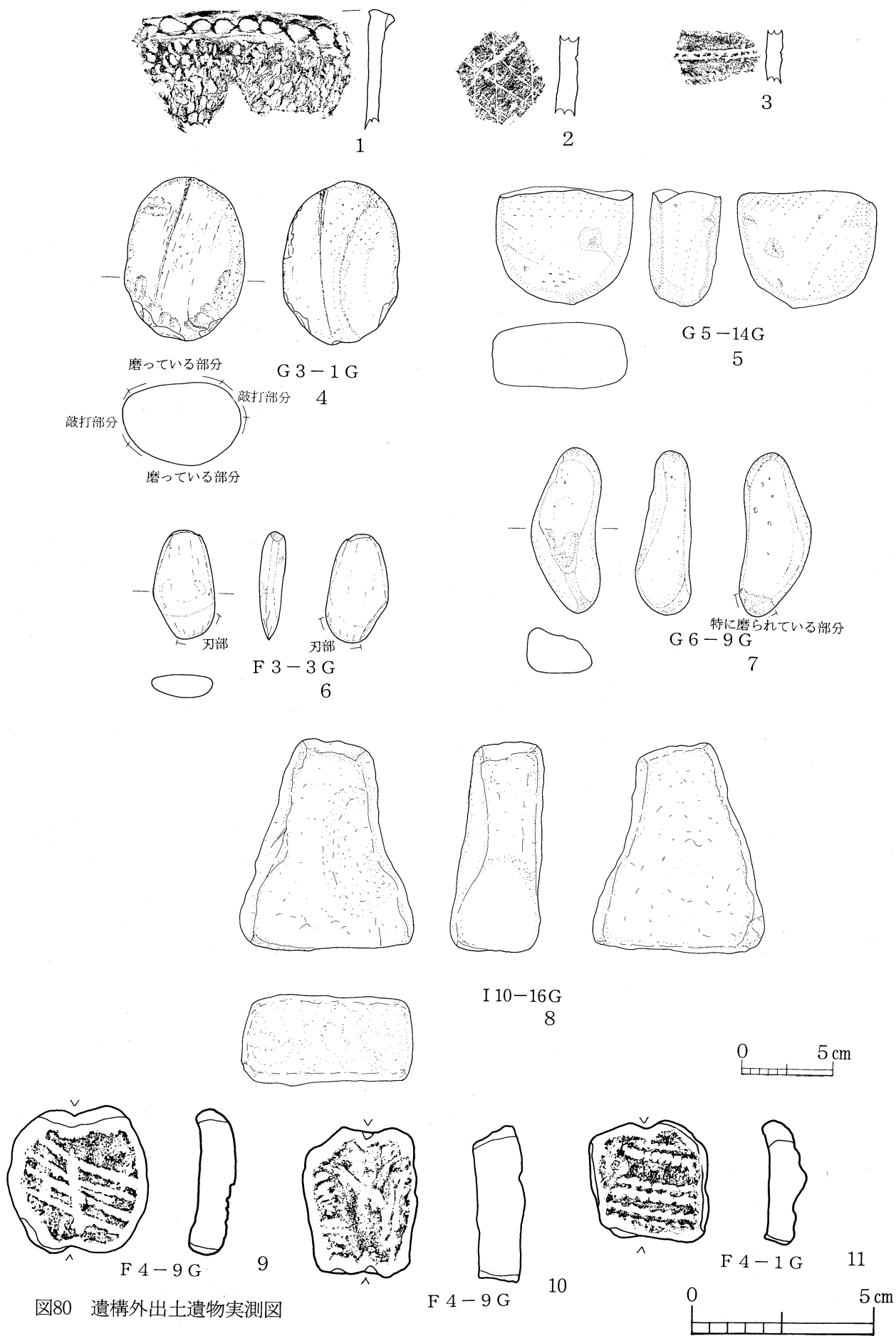


図80 遺構外出土遺物実測図

Ⅲ 小結

縄文時代 検出した遺構は早期の土坑1基、前期黒浜式後半の住居跡2軒、時期不詳の落とし穴状遺構5基、半月形プランの土坑1基、墓坑と考えられる土坑2基である。

住居跡の基本データ

02住 規模 3.4m×2.8mの隅丸長方形 主軸方向 N-2°-E
03住 規模 3.5m×3.2mのやや東西に長い正方形 主軸方向 N-75°-W

住居 プランは長辺が若干長い長方形である。炉は1基つくられている。柱跡等の施設は2軒とも見られない。遺物は2軒とも繊維混入の縄文施文のものが主体を占めるが、竹管文と縄文を組み合わせたもので繊維を含まない土器(図70の3、8)や同じく繊維をふくまず砂粒を多く含んだ条痕文を施文した土器(図70の11)等諸磯式に近い遺物もみられ、黒浜式でも新しい段階の時期と考える。なお、県文化財センター調査の芝山遺跡でも、黒浜式期の住居跡が1軒検出されている。同じ台地上縁辺部に占地するがまとまりをもつとはいえない。

土坑の基本データ

01土坑 規模 1.92m×1.10m×深さ1.50mの隅丸長方形(落穴) 主軸方向 N-45°-E
02土坑 規模 2.15m×0.76m×深さ0.62mの楕円形(落穴) 主軸方向 N-64°-E
04土坑 規模 2.61m×1.24m×深さ0.72mの半月形 主軸方向 N-80°-W
05土坑 規模 2.26m×1.25m×深さ2.62mの楕円形(落穴) 主軸方向 N-69°-W
06土坑 規模 1.72m×1.14m×深さ2.47mの隅丸楕円形(落穴) 主軸方向 N-65°-W
07土坑 規模 1.89m×1.10m×深さ2.29mの楕円形(落穴) 主軸方向 N-24°-E
08土坑 規模 1.61m×1.17m×深さ0.74mの不整楕円形(墓坑か) 主軸方向 N-43°-W
09土坑 規模 1.74m×1.13m×深さ1.13mの隅丸長方形(墓坑か) 主軸方向 N-61°-W
10土坑 規模 想定1.73m×1.47m×深さ0.34mの不整楕円形(炉穴か) 主軸方向 N-24°-E

土坑 早期の土坑(10土坑)が1基検出されている。台地縁辺部に位置する。遺物は条痕文施文の土器である。落とし穴状遺構は5基が台地縁辺部に占地する。規模、プラン、深度にもばらつきがみられ、規格性は見られない。時間幅をもってつくられたものであろう。県文化財センターの芝山遺跡の様相に近い状況といえる。

歴史時代 検出した遺構は平安時代の住居跡1軒、墓坑と考えられる土坑1基である。

01住 規模 2.78m×2.60mの略方形 主軸方向 N-41°-W。
03土坑 規模 1.58m×1.49m×深さ0.30mの不整円形(墓坑か) 主軸方向 N-30°-W。

住居跡は1軒のみの検出である。本跡では遺物も少ないため時期を特定することはむずかしいが武蔵タイプの台付甕、須恵器甕胴部等の出土がみられることから9世紀中葉～9世紀後半と考えたい。なお県文化財センター調査の芝山遺跡においては8軒検出されているが、8世紀後半の1軒と9世紀後半～10世紀前半の7軒であり、時期が若干異なる。

土坑も1基のみの検出である。本跡において特徴的なのは焼土、炭化物の底面での検出と土師器坏の出土である。意図的に燃やしたと思われる。遺物は体部下端ヘラ削り調整の土師器坏で、9世紀第Ⅱ四半期頃であろうか。

第4節 ヲイノ作遺跡

本遺跡は中央に東西方向の谷をまたいで北側と南側に遺跡が立地する。確認調査は未承諾地の関係から、数次にわたって実施した。なお、トレンチの掘り下げは人力で行った。

トレンチ出土の遺物の分布状況は、北側では緩傾斜面に沿って、30~100点程度の出土と更に西傾斜面で30~120点程度出土している。遺構がその部分に検出されている点も考慮される。南側では台地緩傾斜面と平坦部先端において出土量が多く、東側にいくに従ってほとんど出土しない傾向がある。遺構の検出状況も同様な傾向を示す。

検出された遺構は縄文時代の住居跡2軒、ピット・土坑16基である。

I 縄文時代

a. 住居跡

概要 北側の03住については確認調査時において確認済であった。ただ、遺物が黒浜式ではなかったため、覆土、遺物の出土量等参考となるか疑問であった。南側では本調査時のプラン確定作業で黒色土の覆土で遺物が相当数出土したため、プラン確定は容易であった。結果として前期の住居跡1軒、後期の住居跡1軒を調査した。

02住 (図83 図版39)

位置 D4-8、D5-5Gに位置する。

規模 4.7m×3.5mの不整長方形を呈する。主軸方向 N-26°-E。

壁高 北壁0.16m・東壁0.15m・南壁0.09m・西壁0.10m程度となっている。

床面 ソフトロームを地床としている。住居中央の北側と南側部分がよく硬化している。

施設 炉 中央やや北寄りに位置する。掘り込みはほとんど見られない。平面は楕円形で0.50m×0.30m。焼土ブロック化しているが、焼土の堆積もなく使い込まれている状況ではない。

柱穴 P-1 0.88m×0.6m×深さ0.37m P-2 0.52m×0.46m×深さ0.30m

P-3 0.46m×0.46m×深さ0.48m P-4 0.70m×0.66m×深さ0.40m

4つのピットは周縁を巡るように配置される。深さも0.3~0.4mと一定している。

遺物 全体で130点程度出土している。全体に疎らに出土しているが、しいて言うと中央から東壁にかけて多い。出土した高さは0mの遺物もあるが、全体に0.1m~0.15m浮いて出土している。遺物をみると、繊維を混入したものや無繊維のものが同一の高さから出土している。繊維土器では単節縄文、網目状撚糸文、竹管文では沈線文、刺突文等が見られる。無繊維土器では無文、貝殻腹縁による波状文、三角文等が見られる。

02住出土遺物 (図84 図版43)

1は床面から13cm浮いて出土した土器で、口縁から胴部上位にかけて遺存する。文様施文は口縁直下から単節縄文を施す。口縁は緩やかな波状となっている。胎土には繊維を混入する。**2**は床面から12cm浮いて出土した土器で、口縁部が遺存する。文様施文は口縁直下から竹管状工具による横位の刺突文(刺突後引いている。)を施す。胎土には繊維を混入する。**3**は混入遺物である。口唇部に刻目、口縁部は粘土帯に刻み目をつけている。地文に条痕文を施文する。茅山式である。**4**は床面から7cm浮いて出土した土器で、口縁部が遺存する。文様施文は口縁直下から半截竹管による刺突文を施文する。全体

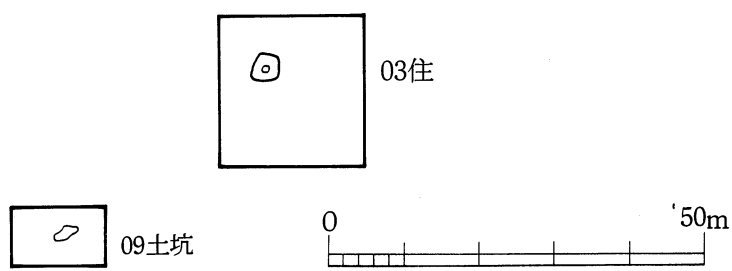
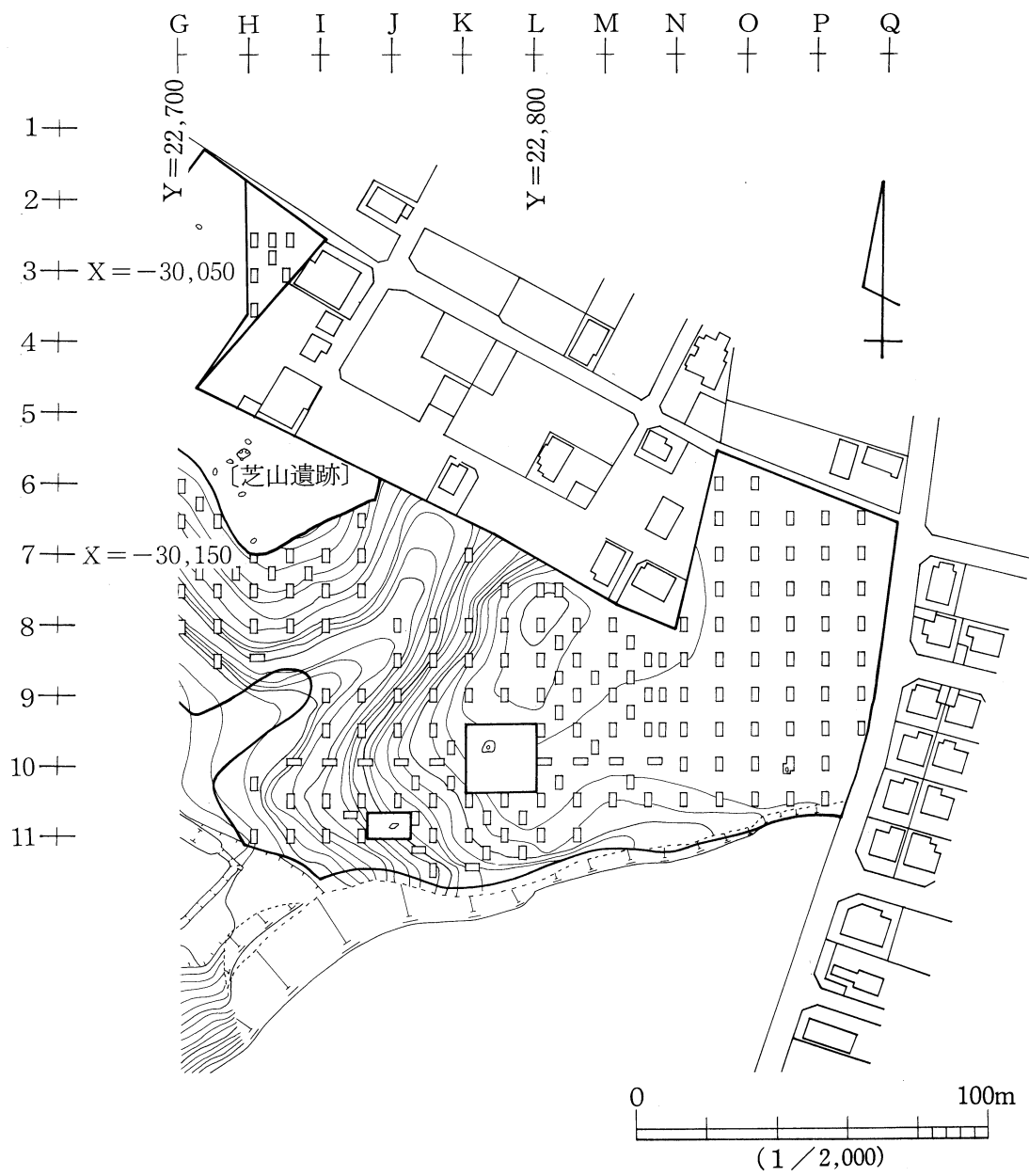


図81 ライノ作遺跡（北側部分）全測図・遺構配置図 (1/1,000)

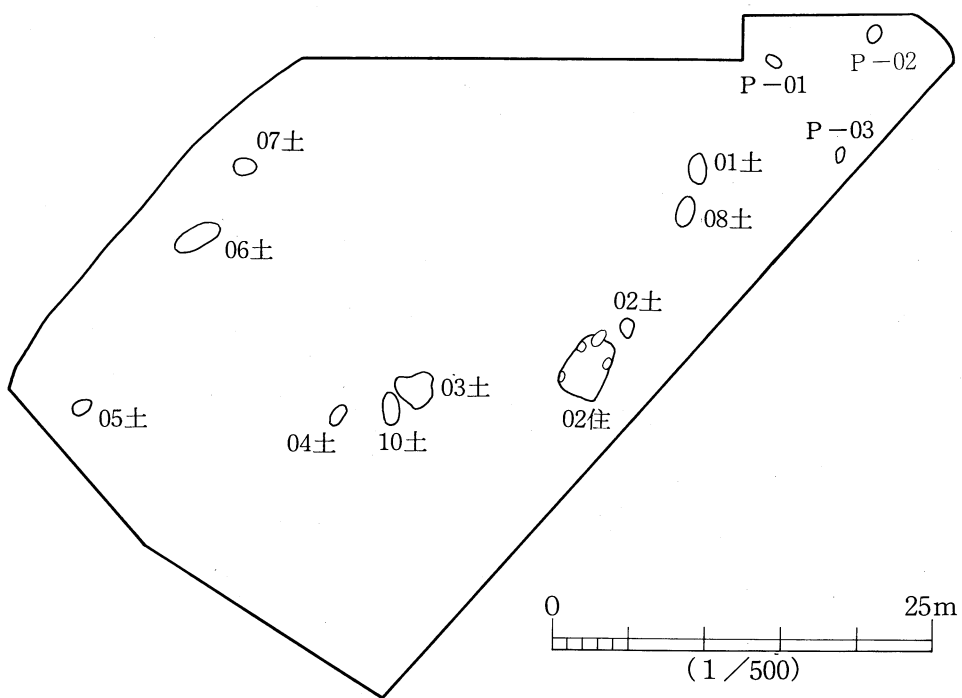
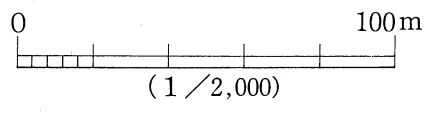
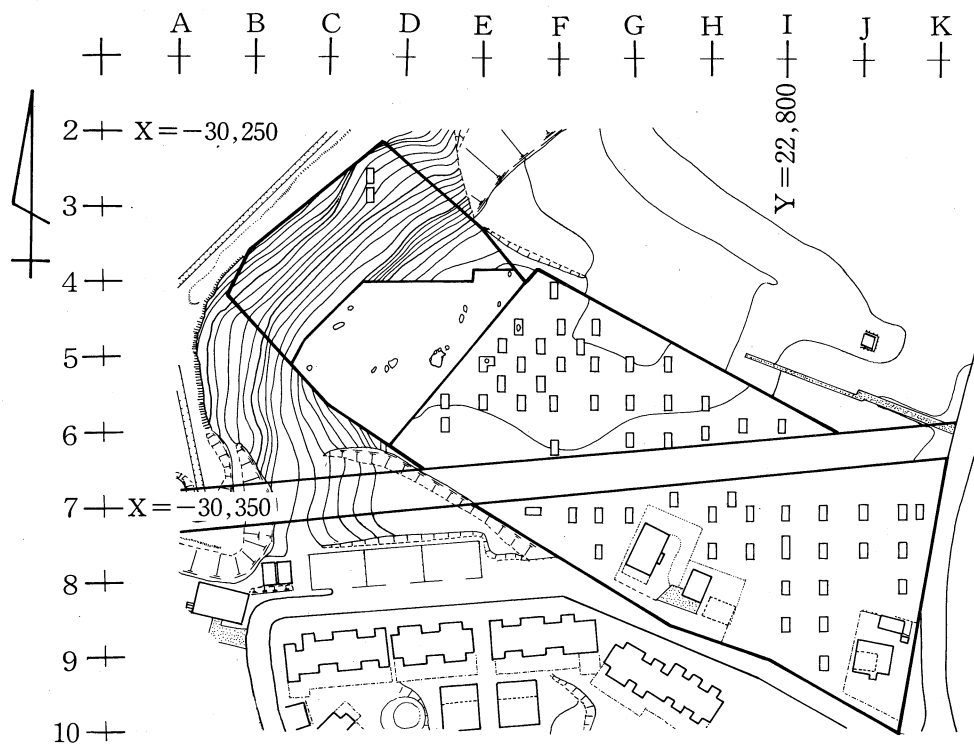
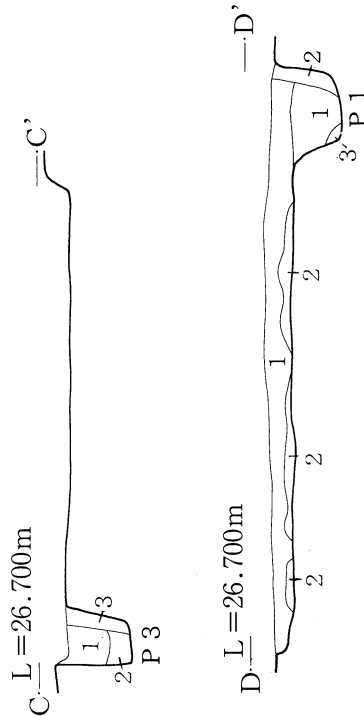
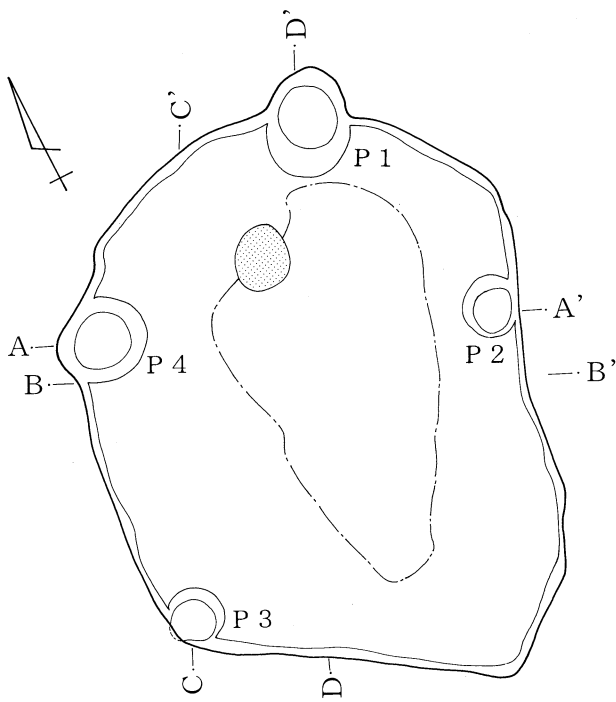


図82 ライノ作遺跡（南側部分）全測図・遺構配置図



02住土層

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒斑点状に含まれる。
- 2 茶褐色土 ローム粒主体。黒色土粒少量含む。粘性あり、しまっている。
- 3 暗褐色土 1に類似するが、黒色土粒をより多く含む。黒色土粒主体。

P1土層

- 1 黒褐色土 ローム粒混入。しまっている。
- 2 暗褐色土 ローム粒+暗褐色土混合層。若干ぼそぼそ。
- 3 茶褐色土 ローム粒主体。粘性あり。しまっている。

P2土層

- 1 黒褐色土 ローム粒、黒色土粒が斑点状に含まれる。
- 2 暗褐色土 ローム粒含む。しまっている。

P3土層

- 1 暗褐色土 ローム粒斑点状に含まれる。しまりあり粘質。
- 2 黒褐色土 ローム粒少量含まれる。しまりあり粘質。
- 3 茶褐色土 ローム粒主体に暗褐色土含む。しまっている。

P4土層

- 1 暗褐色土 ローム粒、1~2cm大ロームブロック混入。しまりあり粘質。
- 2 茶褐色土 1に類似。ローム粒多し。

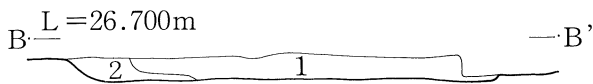
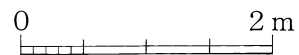


図83 02住遺構平面図



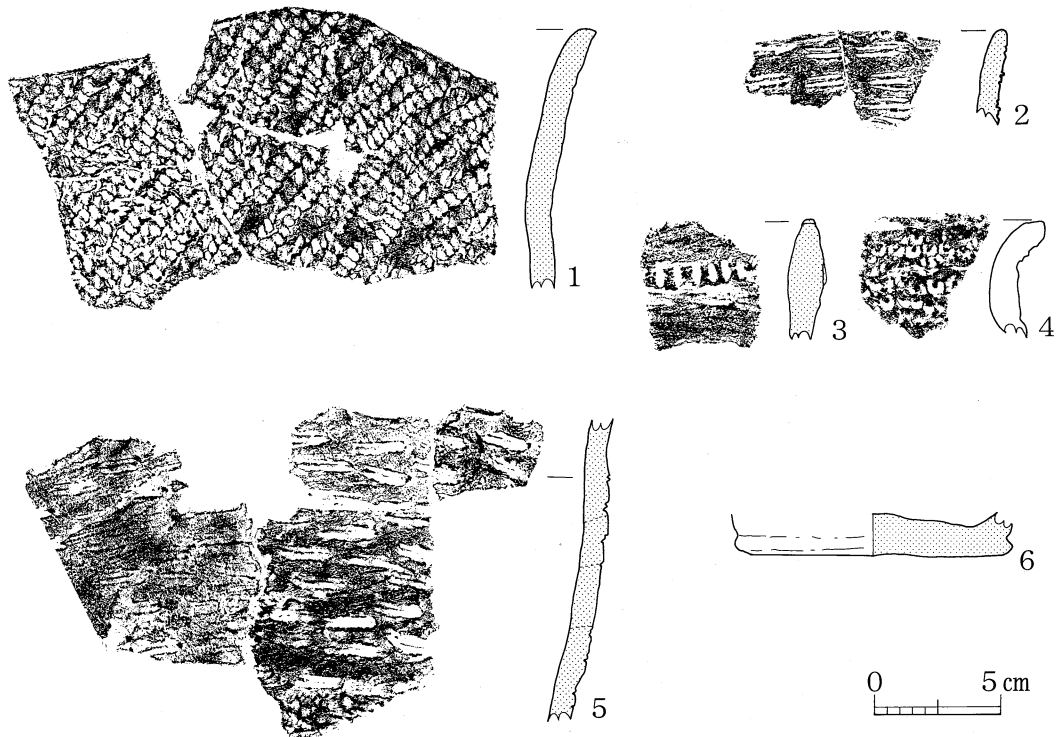


図84 02住出土遺物実測図

的に厚く、屈曲して口唇部にいたる。胎土には砂粒を若干含む。繊維の混入はみられない。焼成は良好で内外面淡茶褐色を呈する。**5**は接合しないが、**2**と同一個体であろう。**6**は床面から8 cm浮いて出土した土器で、底部が $\frac{1}{2}$ 遺存する。胎土に繊維を混入する。

03住 (図85 図版39)

位置 K 9 - 8 G に位置する。

規模 3.84m × 3.6m のやや東西に長い隅丸正方形を呈する。主軸方向 N - 8° - E。

壁高 北壁0.21m・東壁0.25m・南壁0.09m・西壁0.06m程度を測る。

床面 ソフトローンを地床としている。

施設 炉 中央部に位置する。掘り込みは皿状であるが深い所で0.18mを測る。平面は円形で1.04m × 0.94mを測る。全体的に良く焼けているが、中央やや東側の凹み部分が焼土化している。覆土は暗褐色土で焼土粒を含む。良く使い込まれている。

柱穴 検出されなかった。

遺物 全体で20点程度出土している。出土地点は中央の炉から東側に多い。出土した高さは全体的には床面から0 m ~ 0.15m浮いた状態で出土している。炉内及び周辺から浅鉢、粗製深鉢、蜂の巣石等が床面上から出土している。

03住出土遺物 (図86、87 図版44)

1は床面から4 cm浮いて出土した土器で、口縁部が遺存する。文様施文は口縁直下に指頭押圧による粘土紐を一条巡らす。その下に縄文を地文として、横位の沈線文を施文する。**2**は床面から6 cm浮いて出土した土器で、口縁部が遺存する。文様施文は口縁直下から縄文を地文として、横位の沈線文を施文する。**3**は混入遺物である。縄文を施文する。前期末の遺物である。**4**は炉内から出土した浅鉢で、ほ

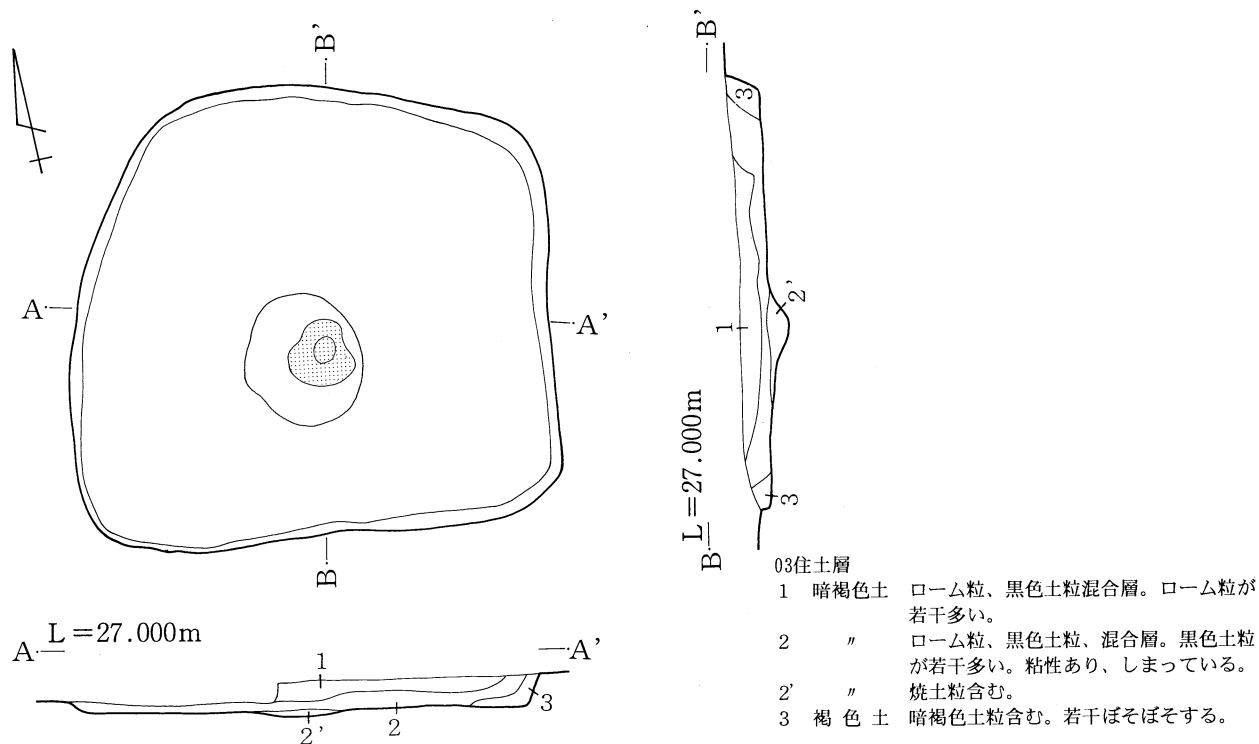


図85 03住遺構平面図

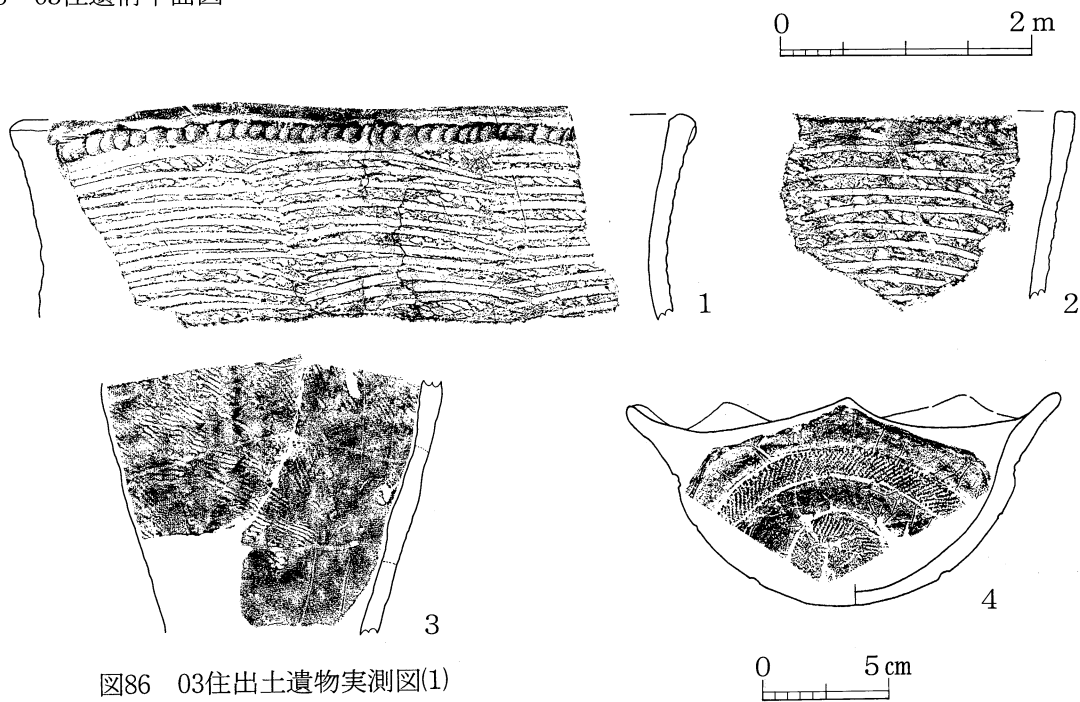


図86 03住出土遺物実測図(1)

ば完形である。4単位の波状口縁で丸底である。文様の施文は底部部分と口縁が広がる基部の2ヶ所に縄文を施文する。5は南壁際で出土した蜂の巣石である。長軸22.7cm、短軸17.6cm、重量7.5kgを測る。石材は安山岩である。凹みは上面と想定される若干の皿状凹みを中心に15ヶ所、側面下部に4ヶ所見られる。凹みを中心に滑らかな面を持っている。6は4cm浮いて出土している。石皿の破損品と考えられる。敲打部あり、磨っている部分ありの多機能である。石材は安山岩である。重量は234gを測る。また、付篇に実測図を掲載したが、深鉢でラップ状に開く口縁部に羽状沈線文を施文した土器が4の脇付近で出土している。

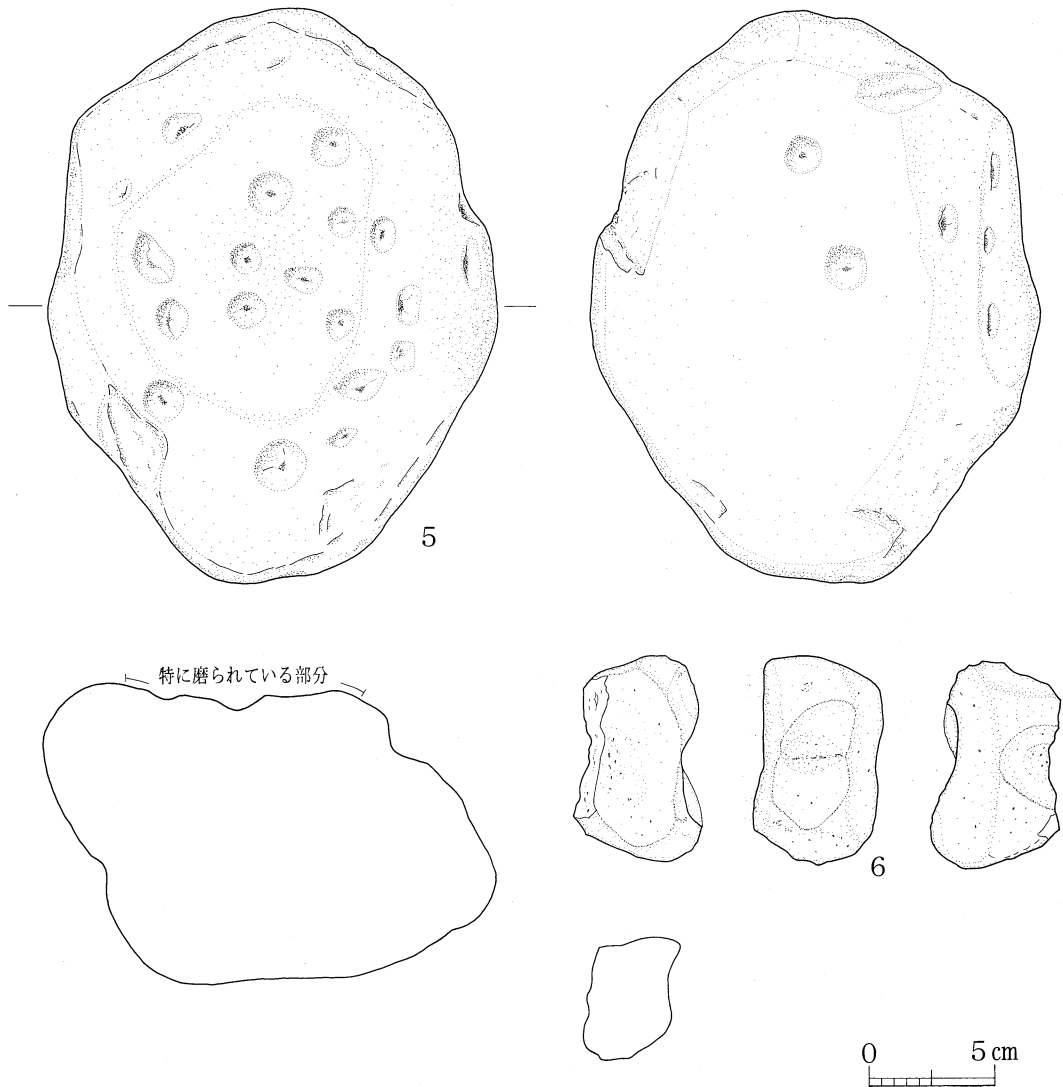


図87 03住出土遺物実測図(2)

b. 土坑・ピット

概要 本遺跡において検出した土坑・ピットは16基を数える。この内明らかに性格の判明する遺構は落とし穴状遺構で05、07、09土坑がこれに該当する。また、半月状プランの土坑が06に該当する。底面に焼土を伴う炉穴と想定される遺構は、02、03、08土坑とP-02、03がこれに該当する。他は性格が判然としないが明らかに掘り込みを有しており遺構と考えられる。

01土坑 (図88)

位置 D4-14Gに位置する。

規模 1.24m×0.78m×深さ0.38mの楕円形を呈する。主軸方向 N-2°-W。

所見 覆土は上層が暗褐色土、下層が黒褐色土である。遺物出土せず時期不明。

02土坑 (図88 図版41)

位置 D4-12Gに位置する。

規模 1.13m×0.86m×深さ0.20mの楕円形を呈する。主軸方向 N-9°-W。

所見 覆土は上層が暗褐色土を主体としている。遺物は覆土中から出土しているが前期?の小片である。また、底面東側に偏って0.45m×0.30mの範囲で焼土が検出された。

03土坑 (図88)

位置 C 5 - 9 Gに位置する。

規模 2.10m×1.77m×深さ0.6~0.7mの不整形台形を呈する。主軸方向 N-42° - E。

所見 覆土は上層が暗褐色土、下層が茶褐色土を呈する。遺物は覆土中から3点出土しているが小片のため時期不明。また、底面壁の立ち上がり部に強く焼けた部分が2ヶ所検出された。

04土坑 (図88)

位置 C 5 - 5 Gに位置する。

規模 1.66m×0.75m×深さ1.0mの楕円形を呈する。主軸方向 N-30° - E。

所見 覆土は暗褐色土を主体としている。形状及び深度を考慮すると落とし穴状遺構と考えられるが、覆土はそれの堆積ではなく性格は不明である。遺物は最上層から前期の小片が出土している。

05土坑 (図89 図版41)

位置 B 5 - 13Gに位置する。台地傾斜面に立地している。

規模 1.33m×0.93m×深さ1.26mの楕円形を呈する。主軸方向 E-8° - S。

所見 覆土は上層が黒・暗褐色土を主体とし、中下層は褐色土のぼそぼそした土である。遺物は覆土中から前期末の土器が出土している。なお、坑底は淡褐色粘土層である。

06土坑 (図89 図版41)

位置 C 4 - 3 Gに位置する。台地傾斜面に立地している。

規模 2.98m×1.35m×深さ0.35mの半月形を呈する。主軸方向 N-64° - E。

所見 覆土は黒色土混じりの暗褐色土を主体としている。底面は中央が深くその両側が浅い形状となっている。遺物出土せず時期不明。

07土坑 (図89 図版41)

位置 C 4 - 6 Gに位置する。台地傾斜面に立地している。

規模 1.39m×0.81m×深さ0.80mの楕円形を呈する。主軸方向 N-90° - E。

所見 覆土は上層が黒・暗褐色土を主体とし、中下層は褐色土のぼそぼそした土である。遺物は覆土最上層から縄文小片が出土しているが混入遺物である。

08土坑 (図90 図版41)

位置 D 4 - 14、15Gに位置する。

規模 1.71m×1.08m×深さ0.15mの楕円形を呈する。主軸方向 N-12° - E。

所見 覆土は暗褐色土を主体としている。遺物は出土していないため、時期不明である。また、底面西側の北及び南に偏って0.35m×0.20mの範囲で焼土が検出された。

09土坑 (図90 図版41)

位置 ライノ作北側部分のJ 10 - 4 Gに位置する。台地傾斜面に立地する。

規模 3.25m×1.71m×深さ2.0mの楕円形を呈する。主軸方向 N-63° - E。

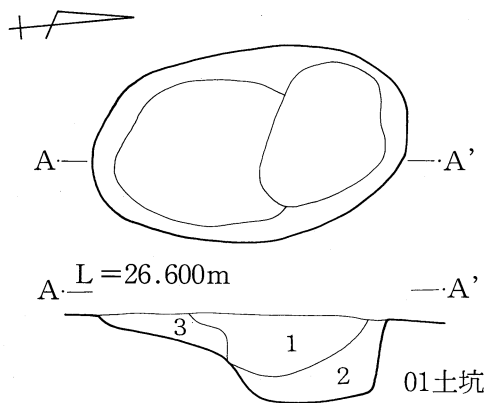
所見 覆土は上層が暗褐色土を主体としている。なお、土層断面図は途中までであり、底面まで至っていない。遺物は中層の暗褐色土から前期末の土器が出土しているが本跡に伴うものではない。

10土坑 (図90)

位置 C 5 - 9 Gに位置する。

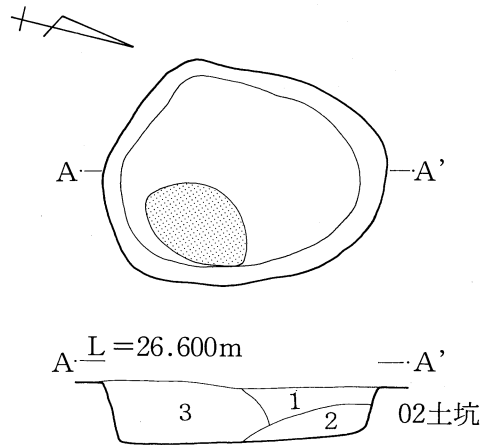
規模 2.34m×1.24m×深さ0.65m~0.80mの不整形楕円形を呈する。主軸方向 N-1° - W。

所見 覆土は褐色土を主体としている。遺物は出土せず時期不明。



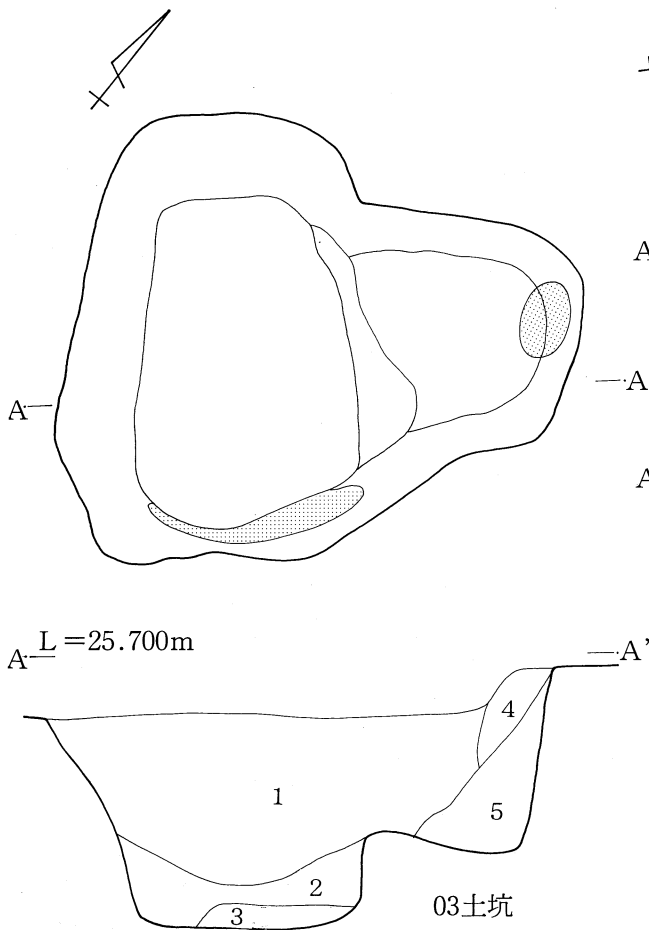
01土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒、斑点状に含む。粘性しまりあり。
- 2 黒褐色土 ローム粒少量含む。若干ぼそぼそする。
- 3 茶褐色土 ローム粒主体。若干ぼそぼそする。



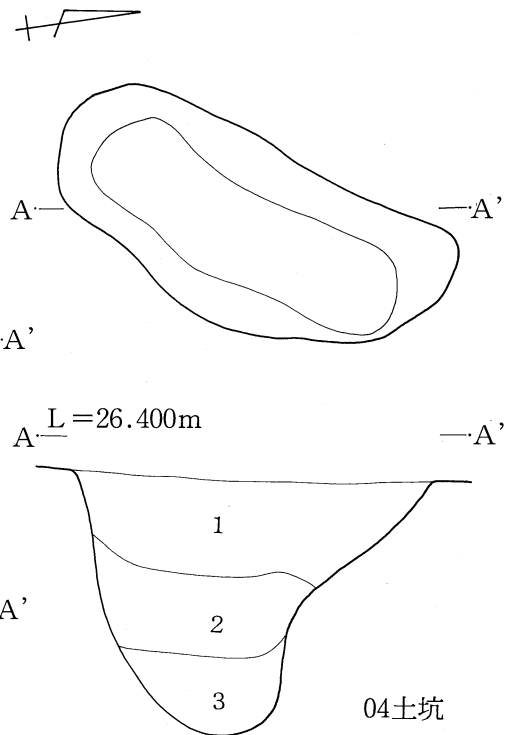
02土坑土層

- 1 暗褐色土 黒色土粒含み、しまっているが、若干粘性にかける。
- 2 茶褐色土 ローム粒を多く含む。粘性あり、しまっている。
- 3 暗褐色土 1に類似。黒色土粒をより多く含む。



03土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒+暗褐色土が斑点状に含む。粘性あり、しまっている。
- 2 茶褐色土 ローム粒主体。暗褐色土少量含む。若干ぼそぼそする。
- 3 " 2に類似。ロームブロック含む。焼土ブロック、炭化物含む。
- 4 茶褐色土 ローム粒主体。若干粘性よわい。
- 5 " ローム粒主体。焼土粒含む。



04土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒+黒色土粒斑点状に含む。若干ぼそぼそする。
- 2 " 1に類似。黒色土粒が若干少ない。
- 3 " 黒色土粒が他の2層より多い。

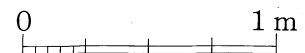
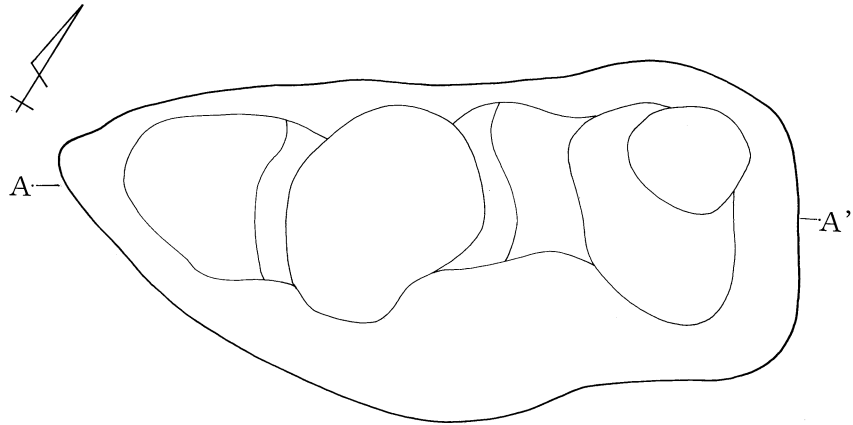
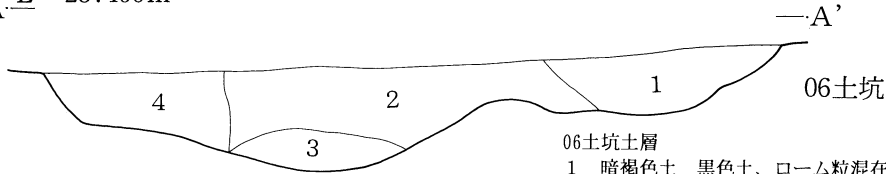


図88 01・02・03・04土坑遺構平面図

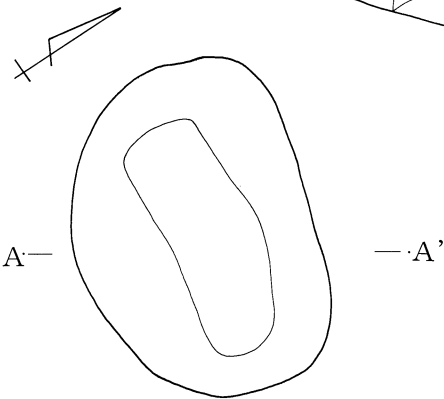


A. L = 23.400m

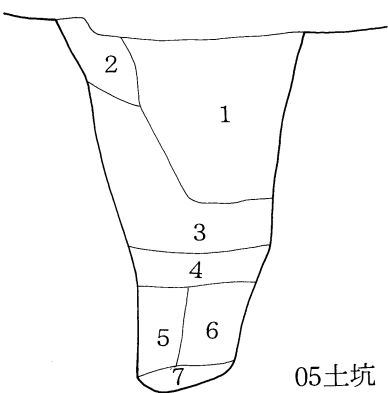


06土坑土層

- 1 暗褐色土 黒色土、ローム粒混在する。しまっている。
- 2 " 1に類似。ロームが若干多い。
- 3 " 黒色土主体。ローム粒少量含む。粘性あり。しまっている。
- 4 茶褐色土 ローム粒+黒色土粒、ローム粒若干多し。

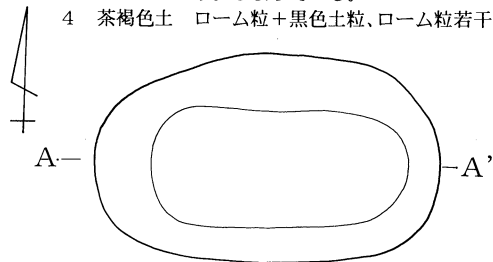


A. L = 23.500m

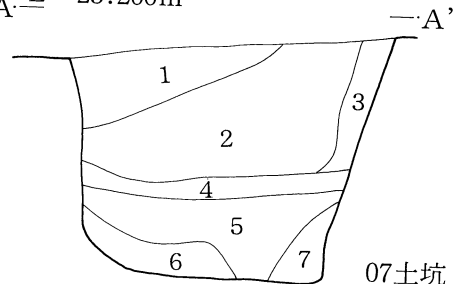


05土坑土層

- 1 黒褐色土 ローム粒斑点状に含む。ぼそぼそする。
- 2 暗褐色土 ローム粒+黒色土。若干ぼそぼそする。
- 3 茶褐色土 ローム粒+2~3cm大ロームブロック。ぼそぼそする。
- 4 暗褐色土 黒色土粒+ローム粒。若干ぼそぼそする。
- 5 茶褐色土 5~10mm大ロームブロック+褐色土+黒色土粒(少量)。ぼそぼそする。
- 6 暗褐色土 ロームブロック+黒褐色土。ぼそぼそする。
- 7 茶褐色土 ローム粒+黒色土。粘性あり、若干ぼそぼそする。



A. L = 23.200m

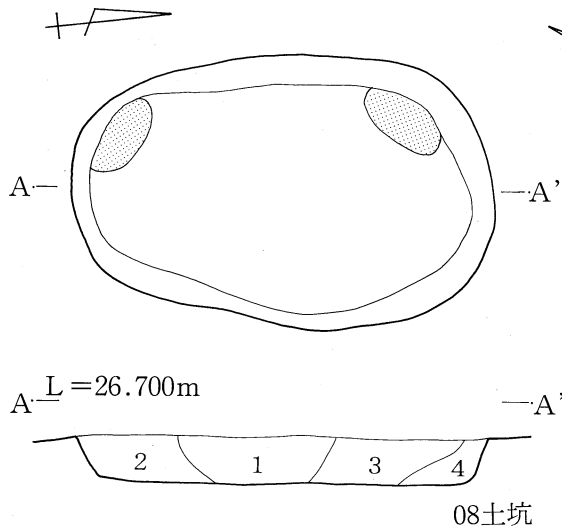


07土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒斑点状に含む。粘性あり、しまっている。
- 2 黒褐色土 ローム粒ごく少量含む。粘性あり、しまっている。細粒。
- 3 茶褐色土 ローム粒、ロームブロック含む。若干ぼそぼそする。
- 4 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒。若干ぼそぼそする。
- 5 茶褐色土 2~3mm大ロームブロック、3~4cmロームブロック、暗褐色土含む。ぼそぼそする。
- 6 暗褐色土 黒色土粒、ローム粒混在し、粘性あり、若干しまる。
- 7 " 6に類似。ローム粒がやや多く、しまっている。粘質。

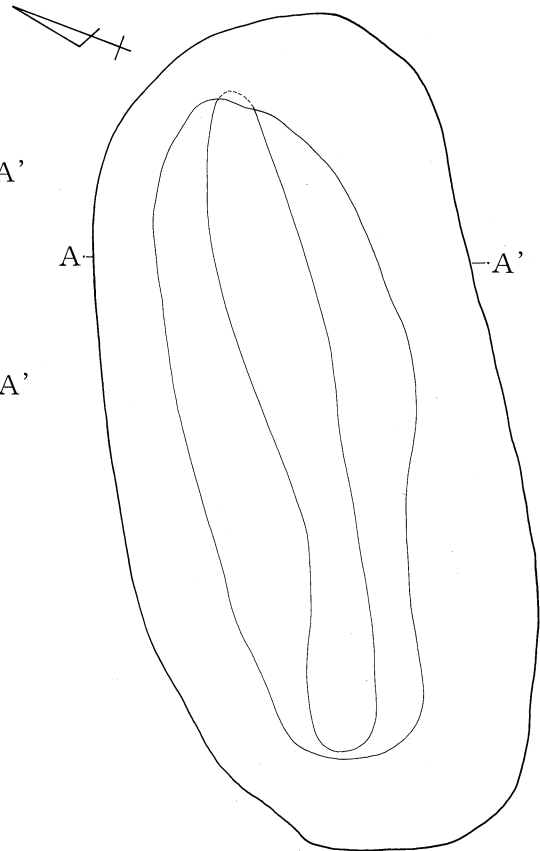


図89 05・06・07土坑遺構平面図



08土坑土層

- 1 茶褐色土 暗褐色土少量含む。ローム粒主体。粘性若干欠く。しまる。
- 2 暗褐色土 黒色土粒主体。ローム粒若干含む。粘性あり、しまる。
- 3 " 2に類似。ローム粒がより多い。
- 4 茶褐色土 ローム粒主体。若干ぼそぼそする。

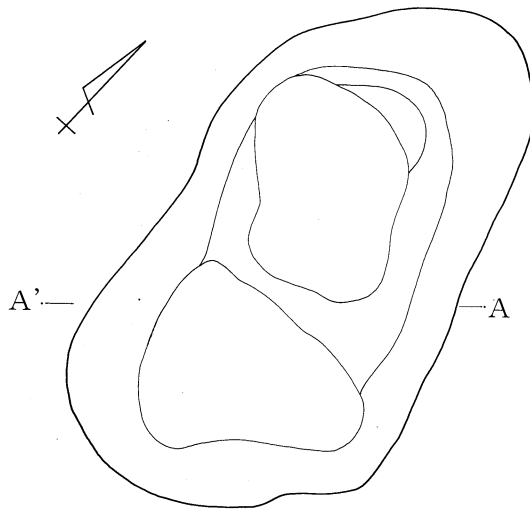


A. $L=23.000m$ —A'

09土坑

09土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒斑点状に含む。粒子細かく、しまっている。
- 2 黒褐色土 黒色土、ローム粒斑点状に含む。1に類似するが、黒色土粒多い。
- 3 暗褐色土 ローム粒主体として、黒色土粒含む。(混在している)。粘性あり、しまっている。
- 4 暗褐色土 ローム粒含む。若干ぼそぼそする。
- 5 茶褐色土 ローム粒主体。若干ぼそぼそする。



A. $L=25.600m$ —A'

10土坑

10土坑土層

- 1 茶褐色土 ローム粒主体。若干ぼそぼそする。
- 2 暗褐色土 1に類似。ロームブロック少量含む。
- 3 茶褐色土 褐色土+2~3cm大ロームブロック。ぼそぼそしている。

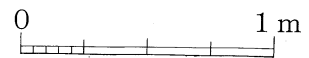
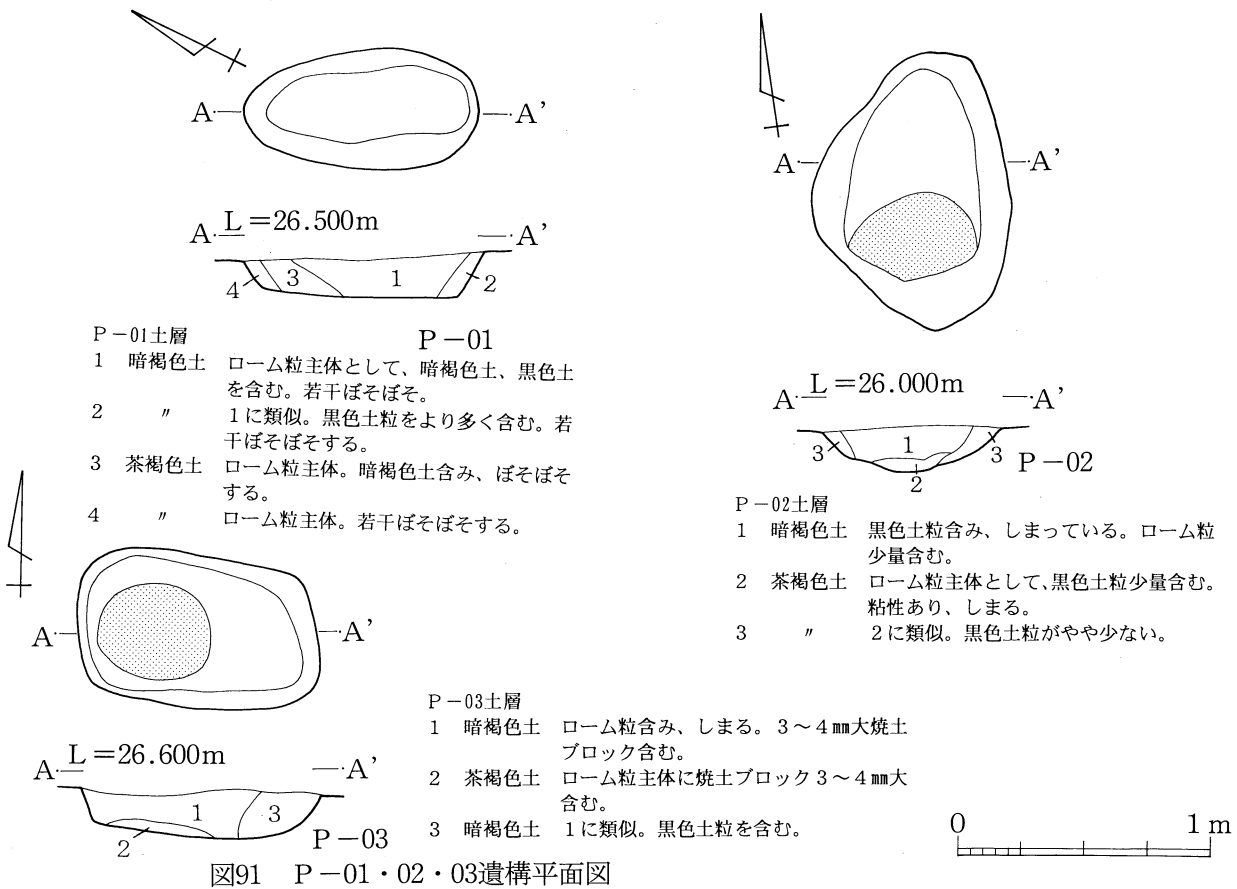


図90 08・09・10土坑遺構平面図



P-01 (図91 図版42)

位置 E4-1Gに位置する。

規模 1.0m×0.49m×深さ0.17mの楕円形を呈する。主軸方向 N-31°-W。

所見 覆土は暗褐色土を主体としている。遺物は1点覆土上層から出土している。時期は早期末葉である。

P-02 (図91 図版42)

位置 E3-8Gに位置する。

規模 1.09m×0.79m×深さ0.12mの楕円形を呈する。主軸方向 N-10°-E。

所見 覆土は上層で暗褐色土、下層で褐色土である。遺物は南壁際で4点出土している。時期は早期末葉である。南壁に偏って0.52m×0.30mの範囲で焼土が検出された。

P-03 (図91)

位置 E4-1Gに位置する。

規模 1.0m×0.58m×深さ0.18mの楕円形を呈する。主軸方向 N-85°-W。

所見 覆土は上層で暗褐色土、下層で褐色土である。遺物は3点出土している。時期は早期末葉である。小片のため図示できなかった。西側に偏って0.44m×0.40mの範囲で焼土が検出された。

土坑・ピット内出土遺物 (図92 図版45)

1はP-01出土の土器で、貝殻条痕文を斜方向に施文する。二次焼成で内面は剥離している。2、3はP-02出土の土器である。2は口縁部に薄い粘土帯を貼り付けて二重口縁としている。その下部に指頭圧痕?文を施す。浅い条痕文がおおう。3は口唇部に指頭圧痕文、全体に細かい横位の条痕文を施文している。胎土に繊維を混入する。4は02土坑出土の土器だが、上層一括であり混入遺物の可能性が高

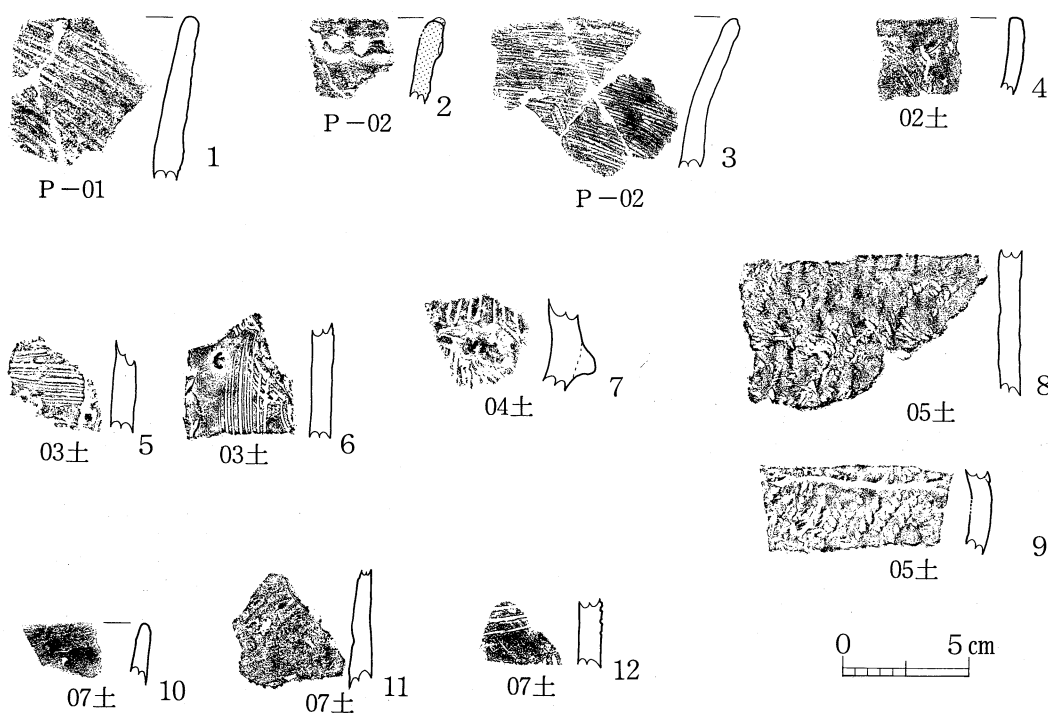


図92 P-01.02/02・03・04・05・07土坑内出土遺物実測図

い。5、6は03土坑出土の土器で、櫛歯状工具による沈線文を施文する。混入遺物と思われる。7は04土坑出土の土器で、瘤状の突起の下部に半截竹管と櫛歯状工具による沈線文を施文する。繊維の混入は見られない。8、9は05土坑出土の土器である。8、9とも縄文を施文するが、混入遺物の可能性が高い。10~12は07土坑出土の土器だが、混入遺物である。黒浜・浮島式期に該当する。

09土坑出土遺物（図93 図版45）

本土坑内出土遺物は、混入遺物のため遺構との関連性は非常に薄い。出土層位は落とし穴状遺構にまま見られる上層の黒色土と中層以下の褐色土の間で、黒色土最下層から出土している。1は口径22.4cm、遺存高15.4cmを測る。口縁部がやや広がる筒状の深鉢である。文様の施文は結節縄文を横方向に回転させている。これとは別にへら状のもので落書？している。胎土は砂粒、長石がやや多く混入している。2は口縁を跨ぐように粘土紐を貼付している。2個1単位となっている。口唇部には刻目を入れている。口縁下は単節縄文が施文され、輪積痕が明瞭である。3はコの字状口縁の平坦面に線状の刻目文が入る。外面はなで整形される。胎土は砂粒、長石が混入している。4は文様のない深鉢で口径18.6cm器高22.6cm、底径8.3cmを測る。内外面の整形は外面が縦位のナデ、内面が横位のナデとなっている。胎土は若干の砂粒、長石を混入する。5は口縁部に粘土帯を貼り付けて二重口縁としている。文様は櫛歯状工具？による沈線文である。6はコの字状口縁の直上部に竹管状工具による刺突文、胴部は単節斜縄文を施す。胎土は長石片を混入する。7は口唇部に粘土紐による小突起をつける。胴部は三角文が見られる。興津式である。8は単節縄文を施文する。9は波状貝殻文を施文する。胎土は砂粒、長石が混入する。浮島Ⅲ式である。10は三角文と沈線により文様を施す。十三菩提式である。胎土、焼成は極めて良好である。

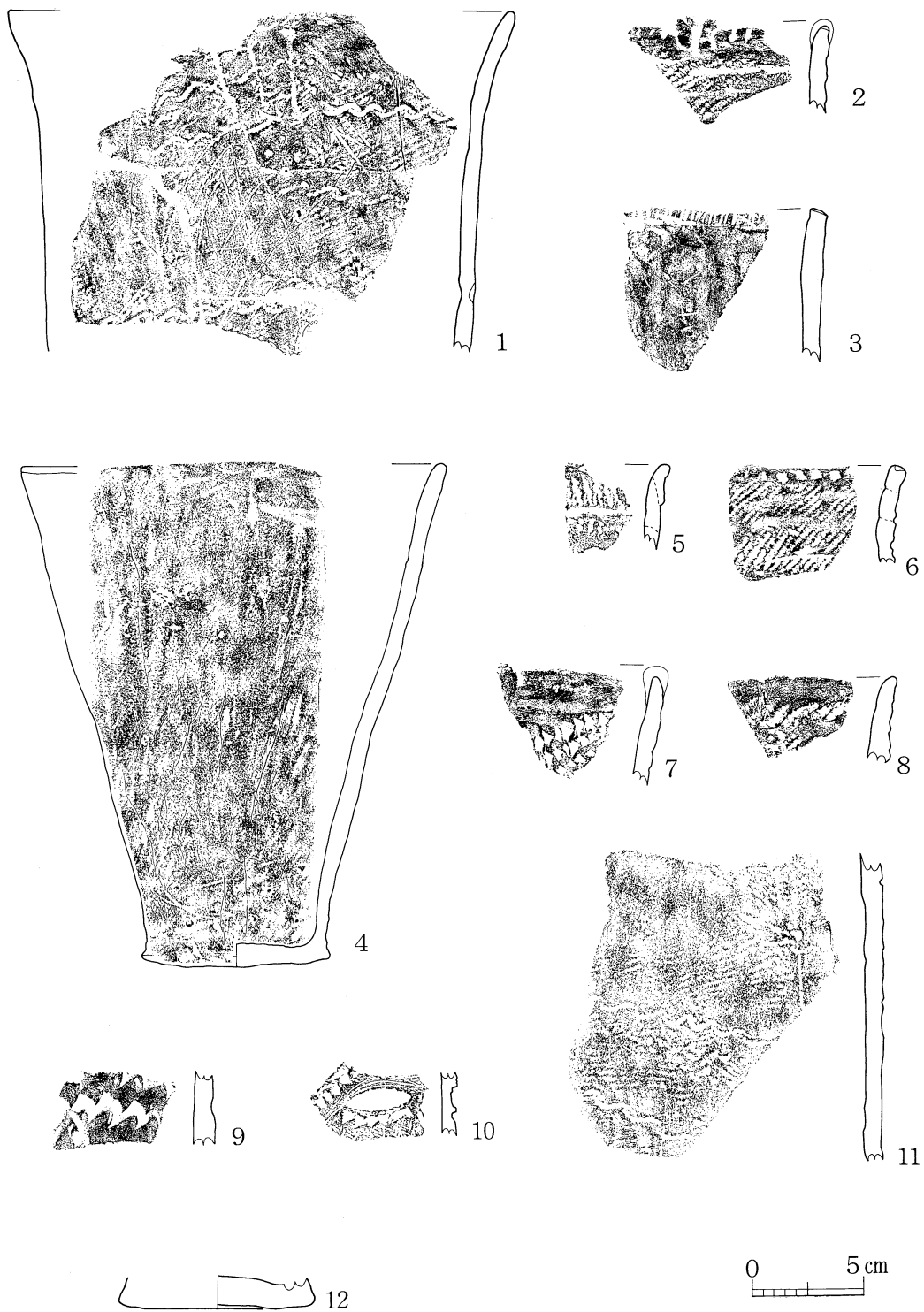


图93 09土坑内出土遺物実測図

Ⅱ 遺構外出土遺物（図94、95 図版46、47）

1、2は結節縄文を施文するもので前期末葉である。3は貝殻沈線文を施文している。興津式である。4は底部立ち上がり部分で単節斜縄文を施文する。繊維を混入する。黒浜式である。5は磨石で2次焼成を受けている。両面共よく磨られている。石材は流紋岩である。6~12は土製挾状耳飾で全て $\frac{1}{2}$ 以下の遺存である。6は遺存長4.6cm、復元径5.0cmを測る。断面は三角状を呈する。胎土はち密で焼成は良好、茶褐色を呈する。7は遺存長3.8cm、復元径4.1cmを測る。断面は四角状を呈する。胎土は砂粒、長石を混入する。8は遺存長3.6cm、復元径3.6cmを測る。断面は四角状を呈する。側面には三列の列点文を施文する。胎土はち密で焼成は良好、茶褐色を呈する。10、11は断面が縁部で肥厚している。12はりんかくがやや角ばる形状となっている。13~19は石鏃である。13は全長2.2cm、幅1.4cm、重量0.5gを測る。両面調整をしている。石材は黒曜石。14は全長2.4cm、幅1.8cm、重量1.5gを測る。両面調整をしている。石材はチャート。15は全長1.4cm、幅1.1cm、重量0.3gを測る。片面調整をしている。石材は黒曜石。16は全長2.1cm、幅1.5cm、重量1.8gを測る。片面調整で三角形の断面である。石材は黒曜石。17は全長2.9cm、幅1.6cm、重量1.0gを測る。両面調整をしている。石材は黒曜石。18は全長2.2cm、幅1.5cm、重量0.8gを測る。両面調整をしている。石材は黒曜石。19は全長3.5cm、幅1.7cm、重量2.0gを測る。明瞭な調整痕は残していない。石材は黒色安山岩。20は磨石で全長11.1cm、幅7.6cm、重量647.6gを測る。石材は流紋岩。全体的によく磨られているが、ざらざらの面と滑らかな面があり使い分けをしているようである。21も磨石で全長8.4cm、幅6.3cm、重量308.8gを測る。石材は砂岩。全体的によく磨られている。破損面は磨耗しており、割れてからも使用している。22も磨石で遺存長7.9cm、幅5.7cm、重量189.7gを測る。石材は砂岩。全体的によく磨られている。23も磨石で遺存長8.5cm、幅5.9cm、重量334.1gを測る。石材は流紋岩。全体的によく磨られている。24は磨製石斧で刃部、基部ともに欠損する。遺存長11.8cm、幅6.0cm、重量464.2gを測る。石材は流紋岩。刃部は破損後に両側から再加工して用途は不明だが使用している。

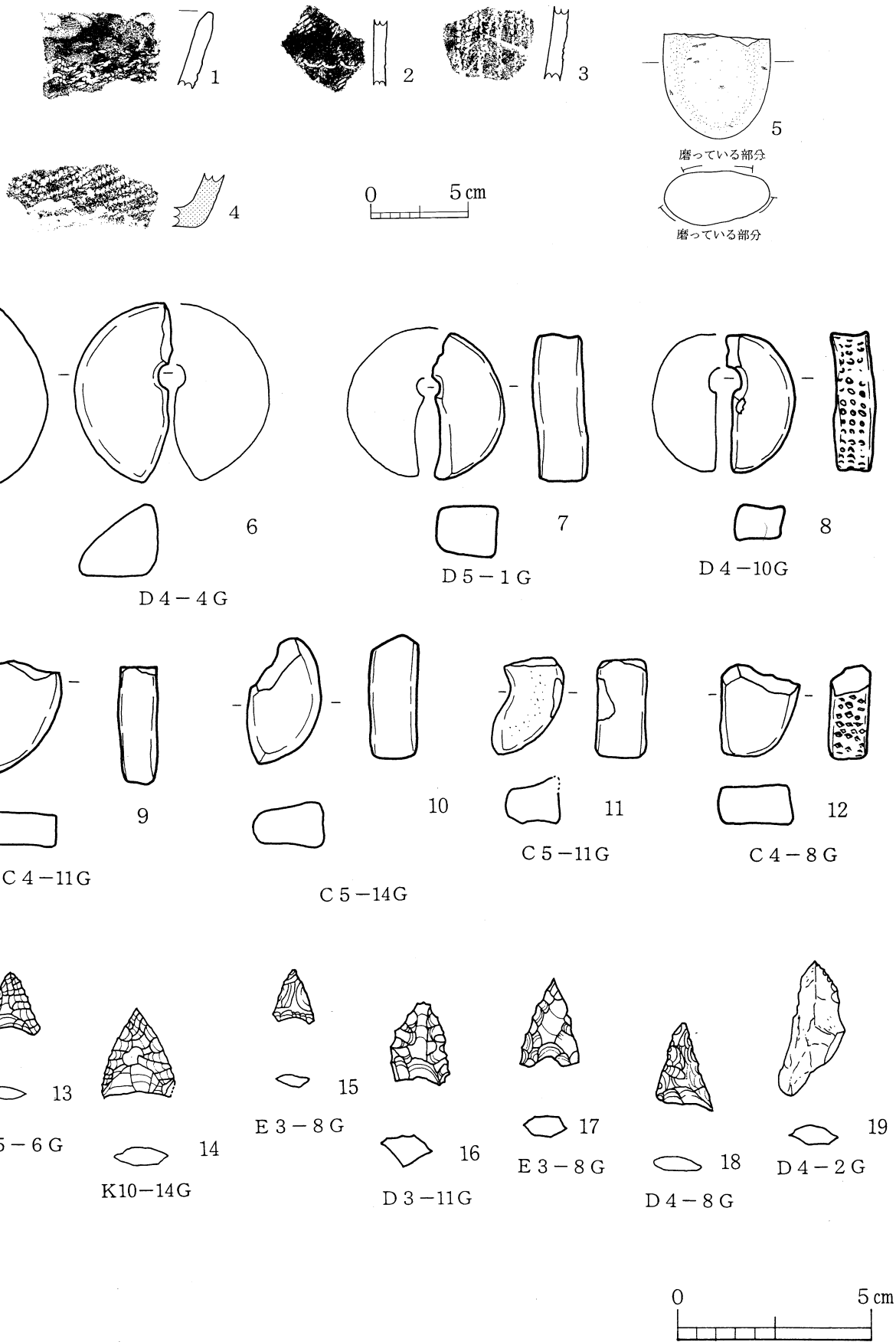


図94 遺構外出土遺物実測図(1)

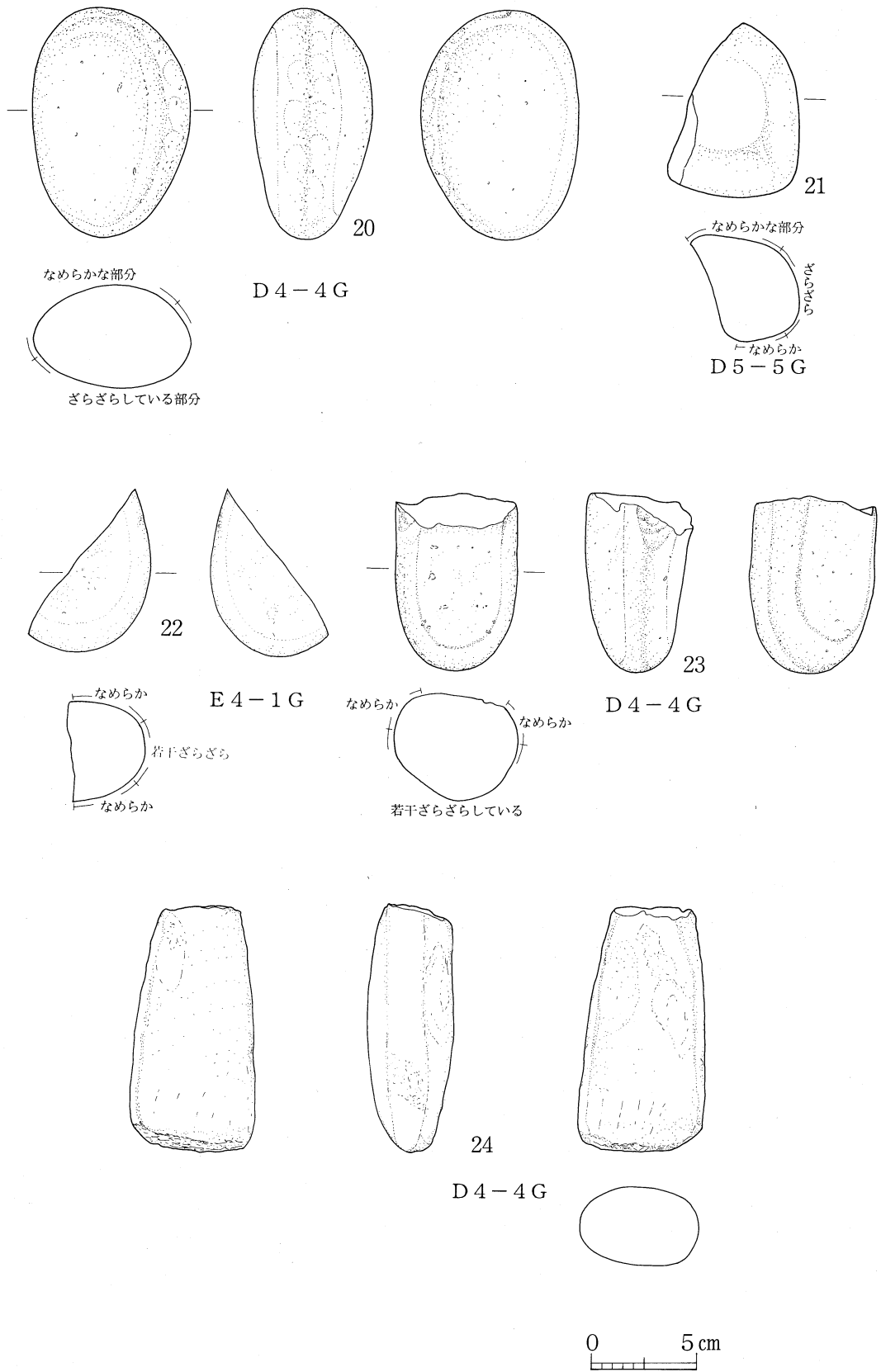


図95 遺構外出土遺物実測図(2)

Ⅲ 小結

縄文時代 検出した遺構は早期の炉穴5基(02、03、08土坑、P-02、03)、同ピット1基(P-01)、前期黒浜式期の住居跡1軒、後期加曾利B式期の住居跡1軒、時期不詳の落とし穴状遺構3基である。その他性格、時期不明の土坑が7基検出された。

住居跡の基本データ

| | | | | |
|-----|----|-------------------------|------|---------|
| 02住 | 規模 | 4.7m×3.5mの不整長方形 | 主軸方向 | N-26°-E |
| 03住 | 規模 | 3.84m×3.6mのやや東西に長い隅丸正方形 | 主軸方向 | N-8°-E。 |

各々の住居跡は時期が異なるため、単独の住居として展開している。02住は黒浜式期でも比較的新しい段階に位置付けられそうである。土器は繊維及び無繊維が混在し、相対的には無繊維が若干多い。中には浮島式にみられる貝殻腹縁による沈線文を施文している土器も出土している。03住は波状口縁の浅鉢、羽状沈線の深鉢、粗製土器の縄文施文等から加曾利BⅡ式に該当すると思われる。千葉県文化財センター調査の芝山遺跡においても当時期の住居跡が1軒調査されており、密度は薄いながらも展開していることが理解される。

炉穴等の基本データ

| | | | | |
|------|----|----------------------------|------|----------|
| 02土坑 | 規模 | 1.13m×0.86m×深さ0.20mの楕円形 | 主軸方向 | N-9°-W。 |
| 03土坑 | 規模 | 2.10m×1.77m×深さ0.6~0.7mの不整形 | 主軸方向 | N-42°-E。 |
| 08土坑 | 規模 | 1.71m×1.08m×深さ0.15mの楕円形 | 主軸方向 | N-12°-E。 |
| P-01 | 規模 | 1.0m×0.49m×深さ0.17mの楕円形 | 主軸方向 | N-31°-W。 |
| P-02 | 規模 | 1.09m×0.79m×深さ0.12mの楕円形 | 主軸方向 | N-10°-E。 |
| P-03 | 規模 | 1.0m×0.58m×深さ0.18mの楕円形 | 主軸方向 | N-85°-W。 |

全て遺跡南側の台地上縁辺部に立地する。03土坑を除いてその他は、浅い皿状の掘り込みを有す。確実に時期がわかる遺構はP-01、02、03で、茅山式期に該当する。03土坑はプラン、掘り込みとも他と様相を異にしているが遺物なく時期不明である。広義の茅山式期であろうか。

落とし穴状遺構の基本データ

| | | | | |
|------|----|-------------------------|------|----------|
| 05土坑 | 規模 | 1.33m×0.93m×深さ1.26mの楕円形 | 主軸方向 | E-8°-S。 |
| 07土坑 | 規模 | 1.39m×0.81m×深さ0.80mの楕円形 | 主軸方向 | N-90°-E。 |
| 09土坑 | 規模 | 3.25m×1.71m×深さ2.0mの楕円形 | 主軸方向 | N-63°-E。 |

05、07土坑は遺跡南側の台地傾斜面に立地する。09土坑は遺跡北側の台地傾斜面に立地する。両者共標高約23mに位置する。プラン、深度は05、07と09で様相が異なる。遺物は09土坑覆土上~中層から前期後半~末葉の遺物が出土しているのでそれ以前につくられたと想定される。

第5節 ヲイノ作南遺跡

本遺跡は仲ノ台遺跡の谷を挟んだ南東部で北側台地平坦部に位置する。確認調査は飼料畑と山林部分で実施した。トレンチの掘り下げは人力で行った。

トレンチ出土の遺物の分布状況は、北側傾斜面及び西側平坦～傾斜面では薄い、中央から東にかけては30～200点以上出土している。本調査範囲から除外されている南側でも100点程度を数える。

検出された遺構は縄文時代の住居跡4軒、ピット12基である。

I 縄文時代

a. 住居跡

概要 遺物は黒浜式がその主体を占めていたので、当時期の遺構が展開することは想定できた。本調査時のプラン想定では黒色土に近い覆土ではあったが、遺構ライン（壁の立ち上がり部分）がどこまで広がるか確定できなかったため、サブトレンチを随時設定し調査を実施した。結果として前期の住居跡4軒を調査した。

01住（図98 図版48）

位置 G3-1、5Gに位置する。

規模 5.48m×4.92mの隅丸長方形を呈する。主軸方向 N-12°-W。

壁高 北壁0.15m・東壁0.11m・南壁0.17m・西壁0.19m程度となっている。

床面 ソフトロームを地床としている。部分的に硬化面が見られる。

施設 炉 北壁際に位置する。掘り込みは10cm程度掘り下げて底面としている。平面は楕円形で1.05m×0.45mを測る。底面は焼土ブロック化せず全体に焼土粒が散っている状況である。

柱穴 支柱穴はP1～4で深さは P1 0.52m P2 0.67m P3 0.40m P4 0.45m P5、6は若干内側に位置する。P5 0.32m P6 0.12m

遺物 全体で670点程度出土している。住居中央とやや南側の2ヶ所に集中して出土している。遺物の全体的傾向をみると単節斜縄文、羽状縄文等施文の土器が主体を占める。竹管文による沈線文、結節文、円形文は縄文を地文とした一部分（頸部）に使用されるのみで少量である。遺物はそのほとんどに繊維を混入する。

その他 支柱穴のP4中層から貝ブロックが出土している。

01住出土遺物（図99 図版51）

1は口縁部が遺存する。単節斜縄文を施文する。2も口縁部が遺存する土器で単節斜縄文を施す。口唇部に小突起がつくようである。3は縄文を地文として口縁部直下に円形竹管文を施す。4は竹管状工具による粗い沈線文を施す。5、6は竹管状工具による沈線文とコンパス文を施文する。7は縄文を地文として竹管状工具による2本1単位の沈線文を縦方向に施文している。8は単節斜縄文を全面に施文する。9は粗い縄文を地文として竹管状工具による袂りを上部に施す。10、11、13は竹管状工具により施文している。10は2本1単位の沈線文を施す。11は先端を尖らせて沈線文としている。13は撚糸文と2本1単位の沈線文を施す。14は円形竹管文と網目状撚糸文を組み合わせている。15～17は底部立ち上がり部分で縄文が底部下端まで被う。18は磨石で全面磨られている。欠損部には使用痕は見られない。石材は流紋岩である。

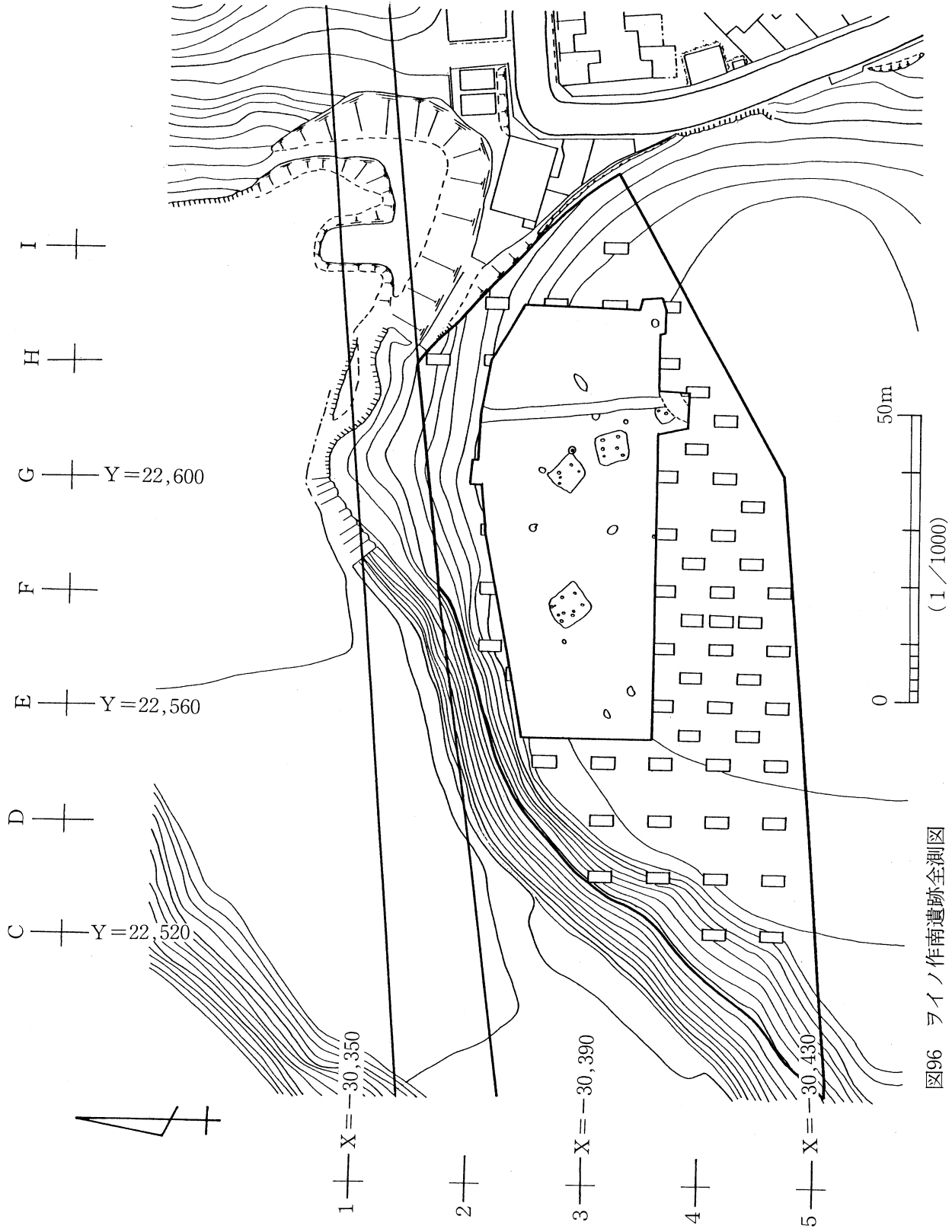


図96 ヲイノ作南遺跡全測図

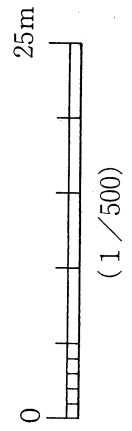
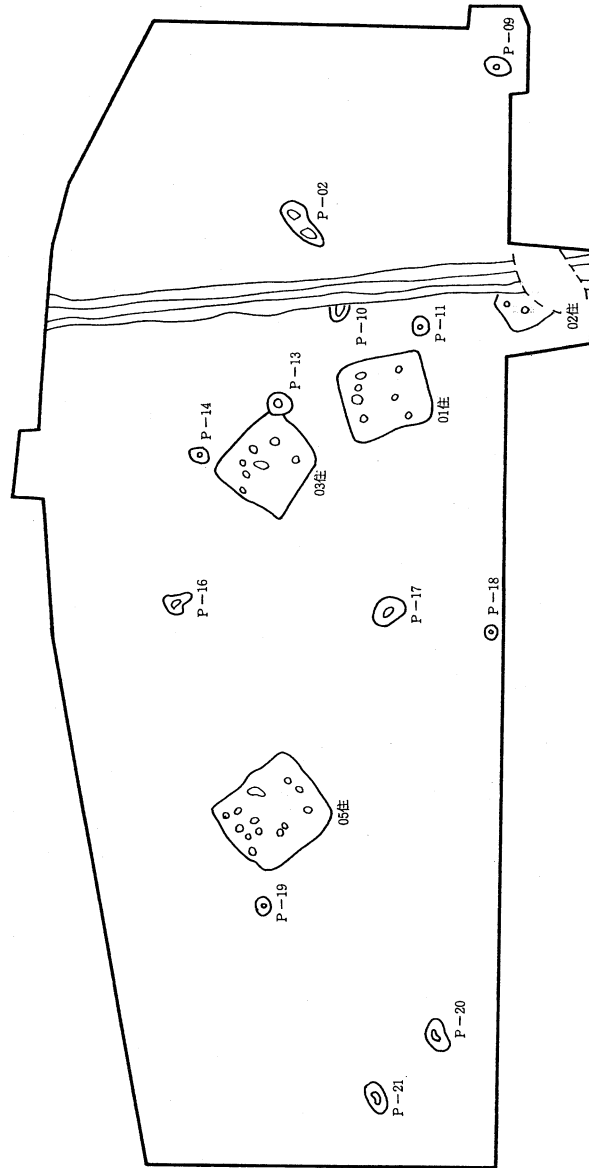
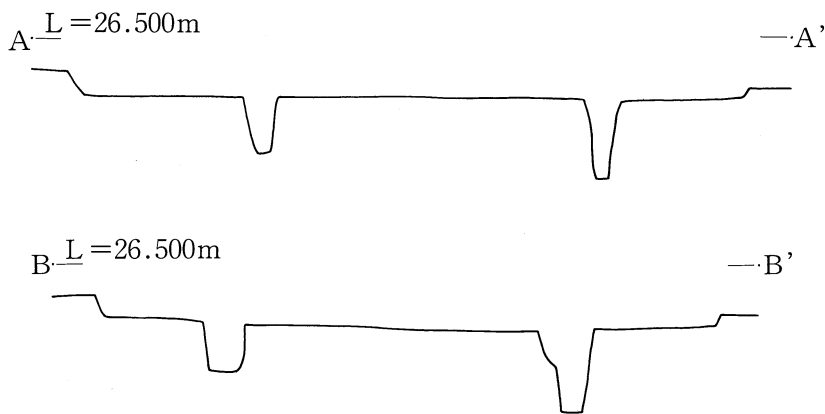
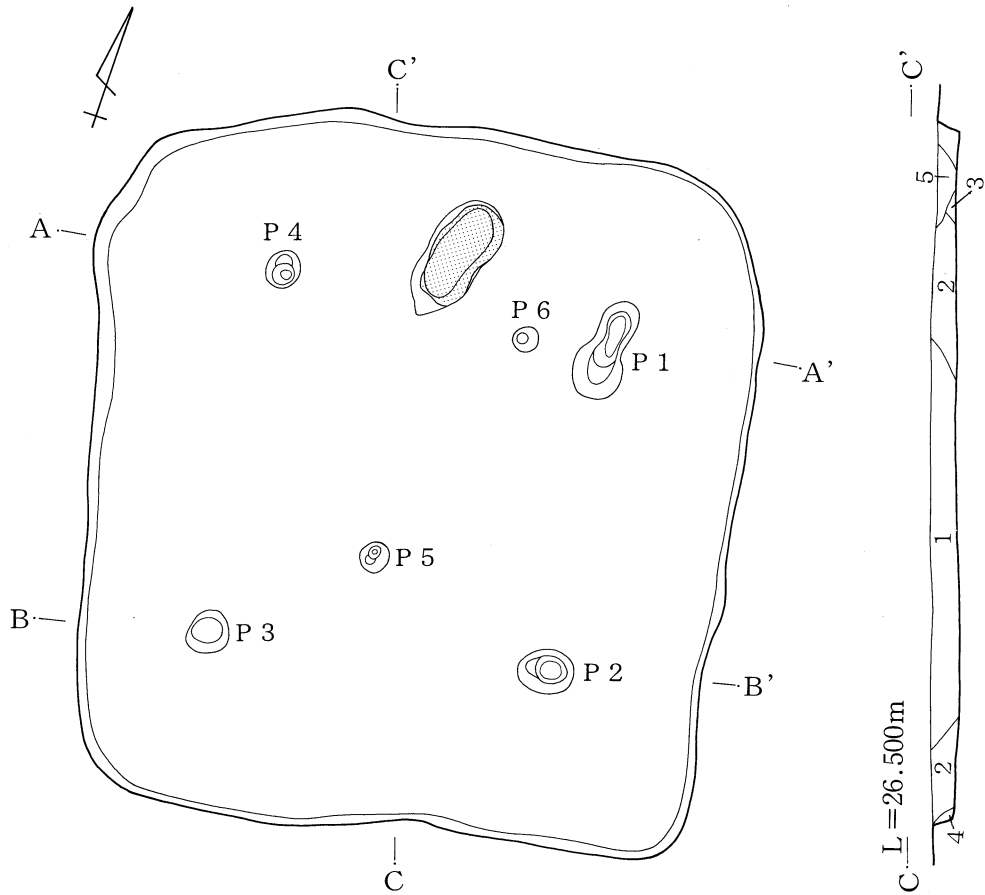


図97 ライノ作南遺跡遺構配置図



01住土層

- 1 黒褐色土・褐色土混合層ローム粒、焼土粒少量混入。
粘性、しまりあり。
- 2 褐色土 ローム粒主体に暗褐色土を斑点状に含む。
しまりあり。
- 3 黒褐色土 褐色土斑点状に含む。ローム粒少量混入。
粘性、しまりあり。
- 4 褐色土 ローム粒少量混入。暗褐色土部分的に含む。
粘性、しまりあり。
- 5 褐色土 4層に類似。暗褐色土の混入がより多い。

図98 01住遺構平面図



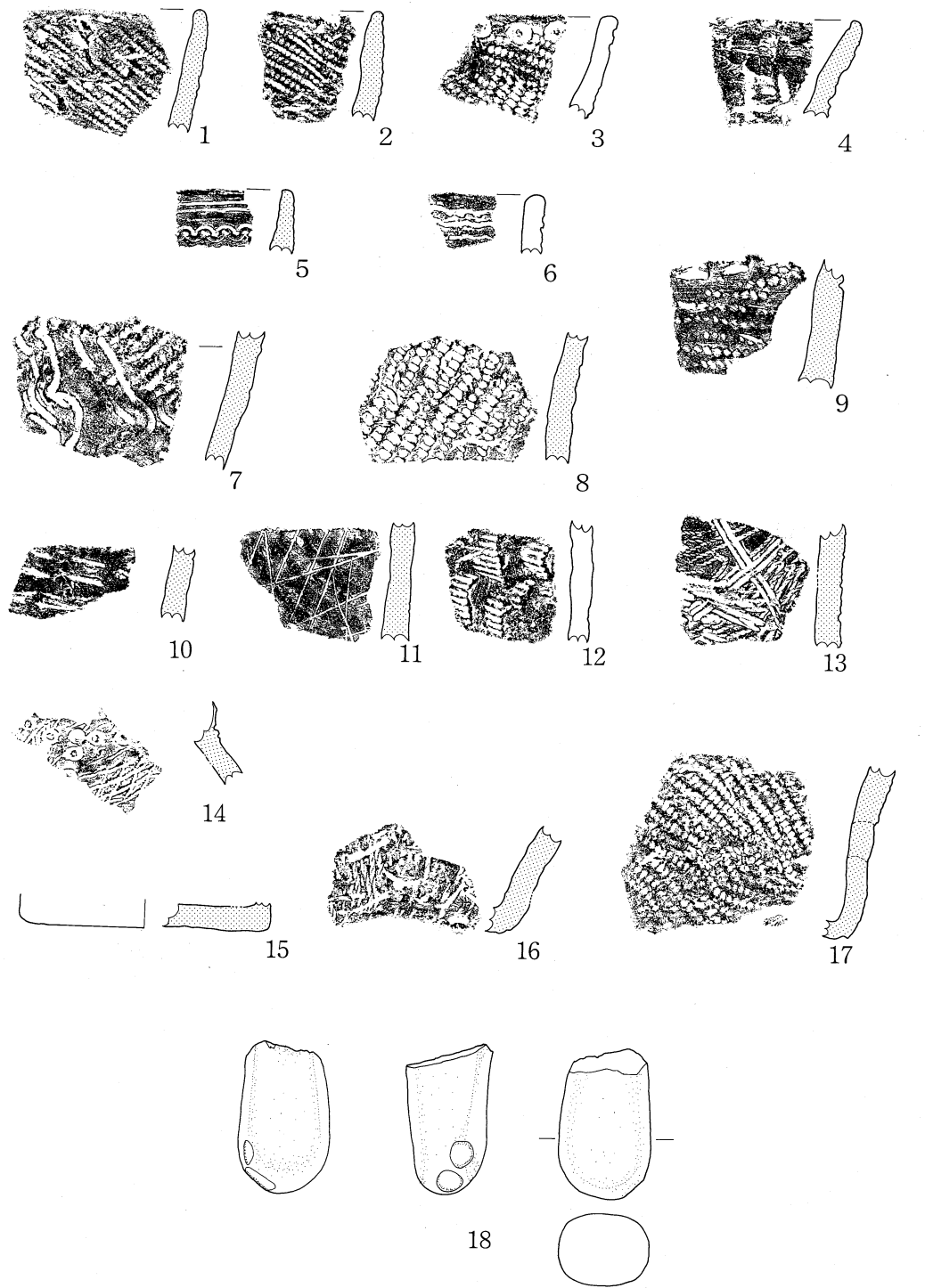


图99 01住出土遺物実測図

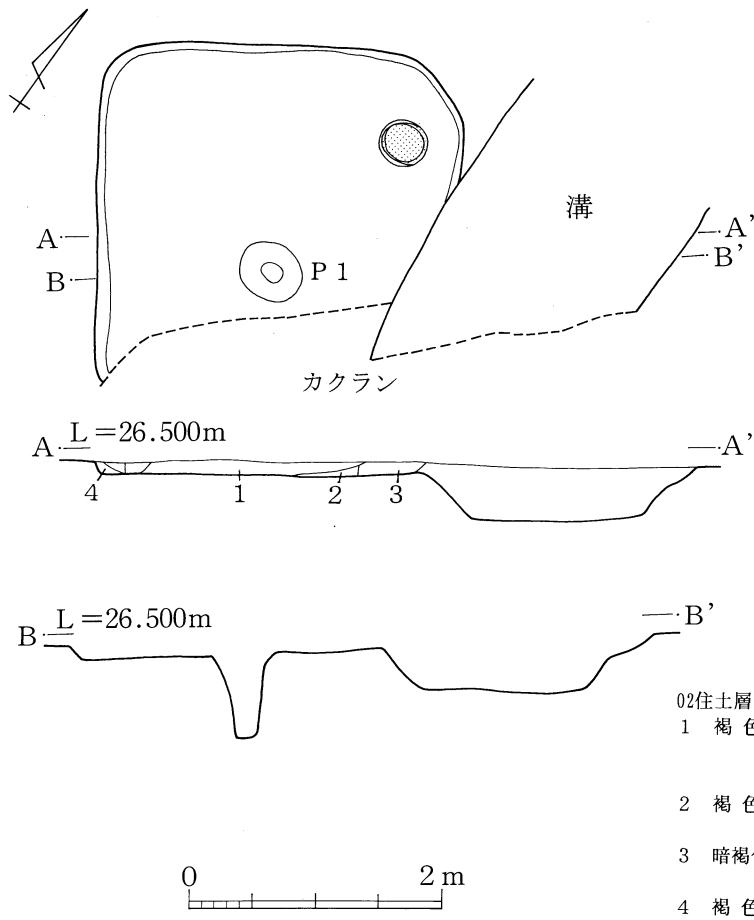


図100 02住遺構平面図

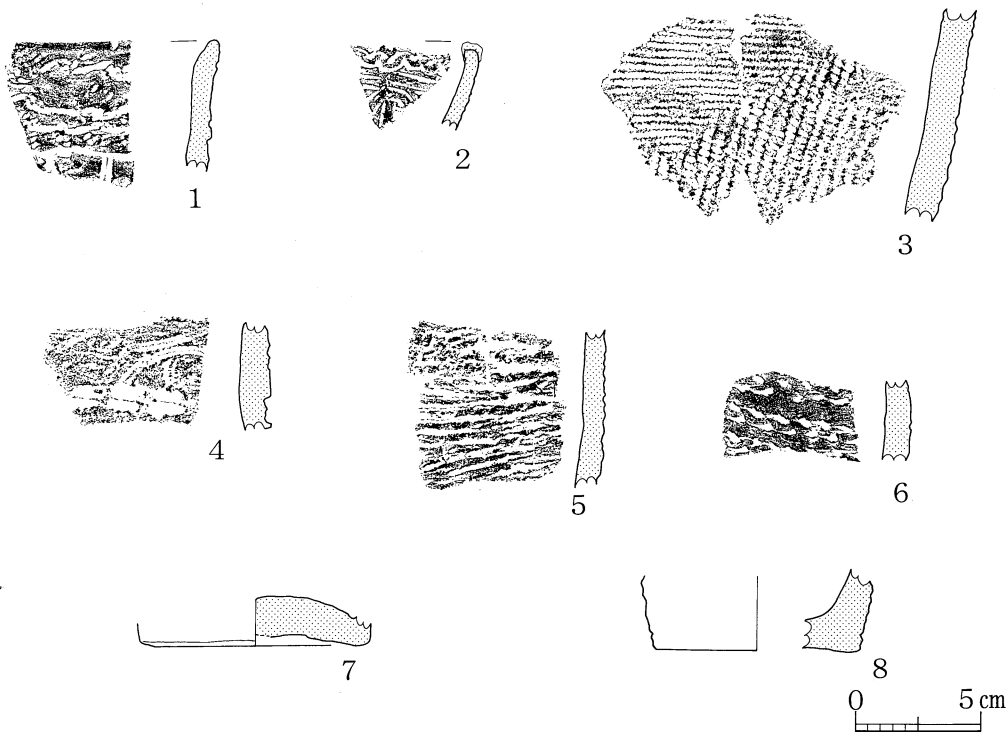


図101 02住出土遺物実測図

02住 (図100 図版48)

位置 G 3-11Gに位置する。

規模 2.93m×2.8m以上の隅丸長方形を呈する。主軸方向 N-31°-W。

壁高 北壁0.07m・東壁0.03m・南壁 攪乱で不明・西壁0.08m程度と浅い。

床面 ソフトローンを地床としている。部分的に硬化面が見られる。

施設 炉 北壁隅に位置する。掘り込みは9cm程度掘り下げて底面としている。平面は円形で0.40mを測る。底面は焼土ブロック、焼土粒がまばらに散っている状況である。

柱穴 柱穴と言えるかP 1は深さは0.70mを測る。

遺物 全体で54点程度出土している。住居中央と北壁隅の2ヶ所を中心に出土している。遺物の全体的傾向をみると単節斜縄文の土器が主体を占める。竹管文による沈線文がごく少量出土している。遺物はそのほとんどに繊維を混入する。

02住出土遺物 (図101 図版51)

1は混入遺物である。結節縄文と竹管状工具による沈線文を施文する。2は竹管状工具による沈線文とコンパス文を施文する。口縁部には2単位以上の小突起がつく。3は原体の異なる単節縄文2種で羽状縄文を施文する。4は竹管状工具による沈線文と刺突文を施文する。5は竹管状工具により沈線文を施文する。6は先端の細い竹管状工具により刺突文を施文する。7、8は底部である。7はやや上げ底で底径8.0cmを測る。胎土に繊維を混入する。8は底径8.0cmを測る。立ち上がり部に単節縄文を施文する。

03住 (図102 図版48)

位置 G 2-3、4Gに位置する。P-13に切られる。

規模 5.22m×5.20mの正方形を呈する。主軸方向 N-39°-E。

壁高 北壁0.23m・東壁0.20m・南壁0.28m・西壁0.26m程度となっている。

床面 ソフトローンを地床としている。P 5周辺に硬化面が見られる。

施設 炉 東壁際に2基位置する。炉1が0.60m×0.43m×深さ4cmを測る。炉2は0.90m×0.33m×深さ8cmを測る。底面は焼土ブロック化せず全体に焼土粒が散っている状況である。

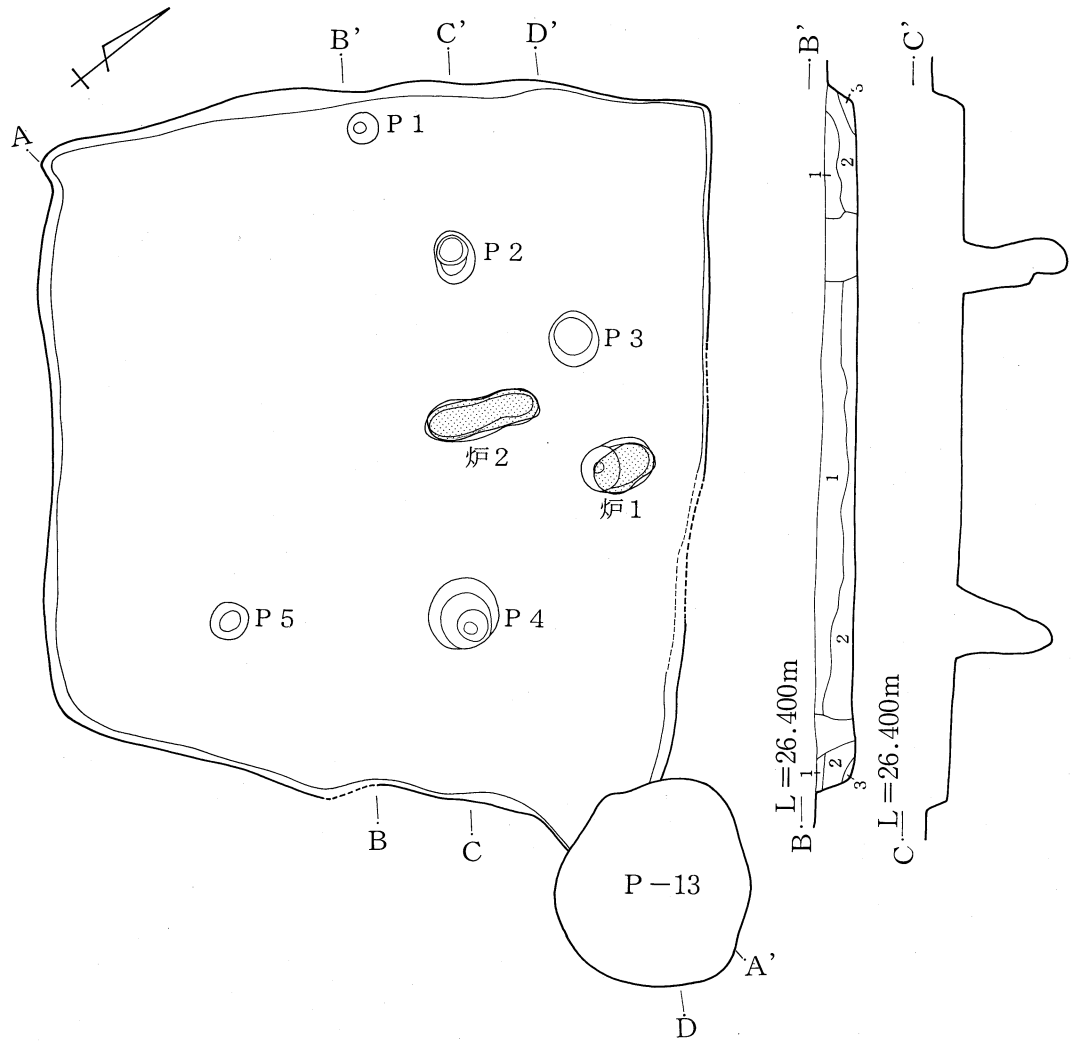
柱穴 主柱穴はP 2、4で深さはP 2 0.81m P 4 0.76m 他は P 1 0.23m P 3 0.18m P 5 0.11m

遺物 全体で770点程度出土している。全体的に出土しているが、南西壁際周辺に多少多く出土している。全体的傾向をみると単節・無節斜縄文、羽状縄文施文の土器が主体を占める。竹管状工具による沈線文は縄文土器中に使われる程度である。まれに条痕文、貝殻腹縁文が見られる。遺物はほとんどに繊維を混入する。

03住出土遺物 (図103~105 図版52~54)

1は波状口縁で最上部に竹管状工具による2本1単位の沈線文と櫛歯状工具による5本1単位の沈線文を施す。2は緩やかな曲線をもつ口縁部で竹管文による沈線と無節縄文を施文する。3も緩やかな波状口縁で乾燥が進んだ段階で単節縄文を施文している。4は口縁部が朝顔状に外反する。無節縄文が器

面をおおう。**5**は竹管状工具によるコンパス文を施文する。若干形がくずれている。**6**は口縁部に竹管状工具による長方形区画の沈線文とその内部に渦巻文を施文する。**7**は混入遺物で粘土瘤と竹管状工具による沈線文を施す。諸磯 a 式である。**8**は口縁部直下に半截竹管を二股にした工具による沈線文と異条縄文?を施す。**9**は波状口縁に沿って円形竹管文、地文に単節縄文を施す。**10**は粗い撚糸文が器面をおおう。**11**は口唇部に縦位の条線、下部に横位の沈線文を施す。混入遺物で興津式である。**12**は1よりも目の細かい櫛歯文である。深く刻まれている。**13**も混入遺物で円形竹管文と波状沈線文を主にまばらな撚糸文が施文される。浮島 I a 式である。**14**は器面全体に羽状縄文を施文する。**15**は波状口縁下に竹管状工具による沈線文と形のくずれたコンパス文を施す。**16**は竹管状工具による4本1単位とした沈線文を施す。**17**は竹管状工具による2本1単位とした沈線文を施す。**18**は頸部から下半が遺存する。頸部に竹管状工具による沈線文、下半は単節斜縄文がおおう。**19**は竹管状工具による形のくずれたコンパス文と沈線文が交互に施文される。**20**は地文の縄文上に沈線文を横位に施文している。**21**は縄文を地文として頸部に竹管状工具による沈線文を施文する。**22**は口縁部下に竹管状工具による抉り(刺突)、単節斜縄文が遺存部をおおう。焼成後の穿孔が1ヶ所みられる。**23~25**は竹管状工具による波状、コンパス状等の沈線文を施文する。**26**は目の細かい無節縄文?を施文する。**27~29**は底部で全て上げ底になっている。特に**27**は高台状につくられる。底部面に文様は見られない。**30~32**は土器片錘でその他図示できなかったが2点出土している。**30**は長径3.9cm、短径3.2cm、重量14.3gを測る。刻み目が2ヶ所見られる。**31**は長径3.5cm、短径3.1cm、重量16.7gを測る。刻み目が2ヶ所見られる。**32**は長径3.5cm、短径3.1cm、重量10.9gを測る。刻み目が2ヶ所見られる。**33**は遺存長3.0cm、復元径3.4cmを測る土製挾状耳飾である。両面共よく磨かれている。一括遺物のため出土位置等不明。**34**は磨石である。全長11.8cm、幅6.9cm、重量558.1gを測る。上面は若干ざらざらしているが他面はよく磨られている。石材はチャートである。**35**も磨石である。全長10.2cm、幅7.1cm、重量405.4gを測る。側面は多面となる程良く磨られている。また、裏面は一度大きく剥離しているが、その後その剥離面を磨って使用している。石材はホルンフェルスである。**36**は乳棒状石斧である。全長14.6cm、幅4.3cm、重量238.4gを測る。刃部先端に横方向の擦痕が見られる。石材は凝灰岩を使用する。**37**は一部磨った痕跡の認められる磨石である。形はさいころ状を呈する。高さ3.4cm、幅4.1cm、重量76.0gを測る。使用痕は底面において認められる。石材は砂岩を使用する。**38**は稜線が全く見られない磨石である。なお、実測図は上部の破損面が本来下に位置する。遺存長8.2cm、幅7.2cm、重量619.7gを測る。全体的に良く磨られ、破損面も粗く磨られた痕跡がある。また実測図内の剥離部分は破損後に故意に調整されているようである。破損面を下にして握ると剥離部分が指にあたりスタンプ形石器様になる。石材は砂岩である。**39**は両先端に敲打部分と粗く磨った痕跡をもつ小型の石器である。全長7.0cm、幅2.6cm、重量58.0gを測る。



03住土層

- 1 黒褐色土 褐色土主体に斑点状に含む。ローム粒、焼土粒、炭化粒少量混入。
- 2 暗褐色土 褐色土主体に斑点状に含む。ローム粒やや多めに混入。
- 3 褐色土 暗褐色土部分的に混入。粘性、しまりあり。

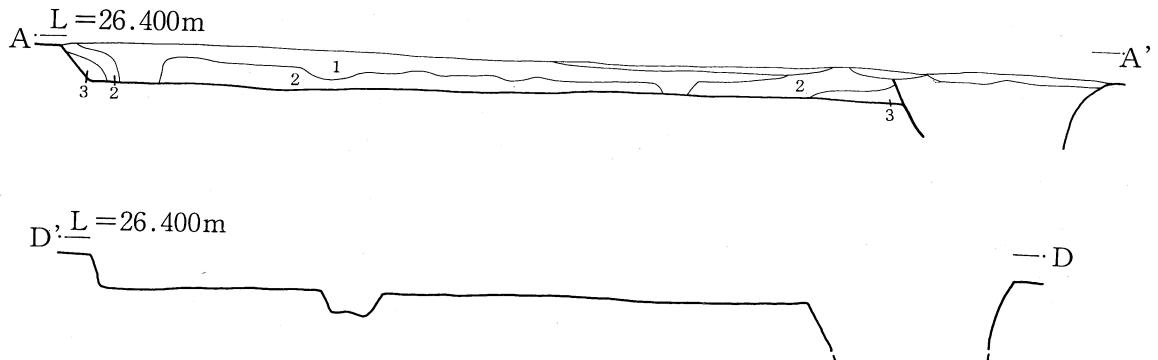
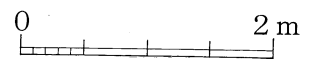


図102 03住遺構平面図



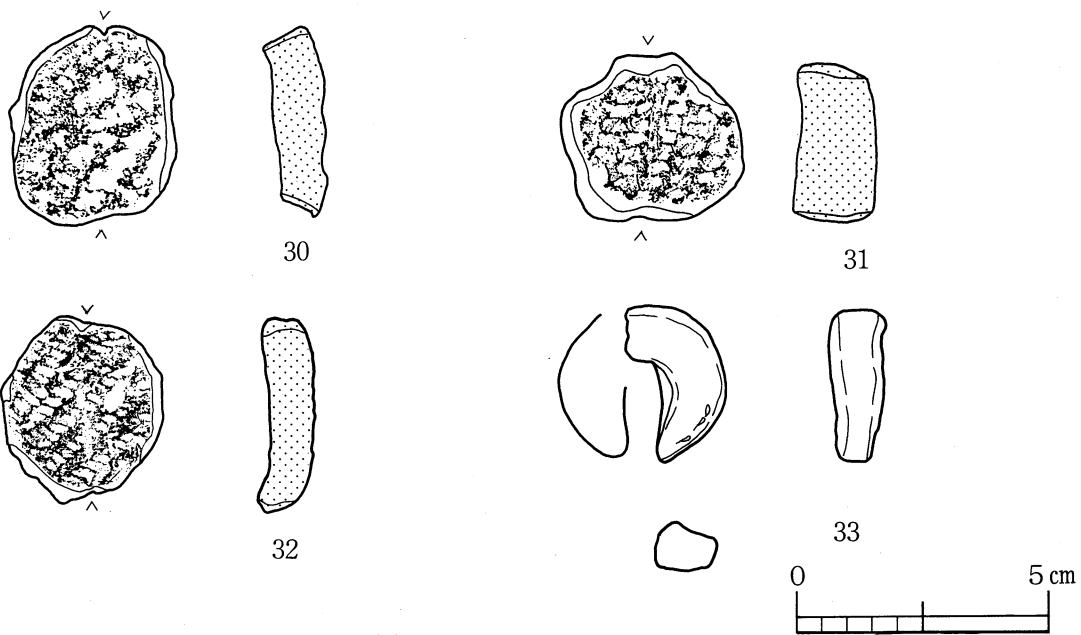
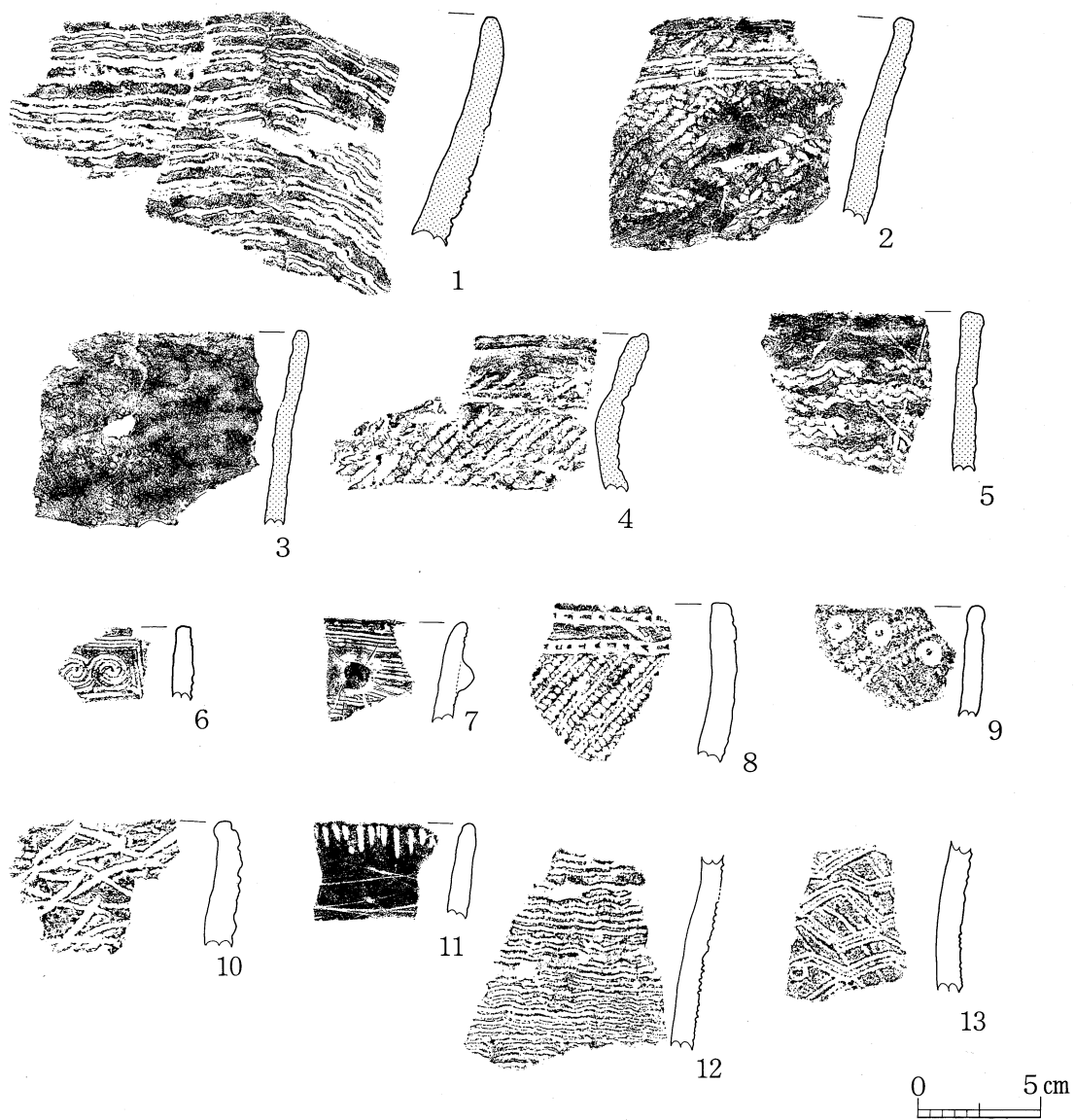


图103 03住出土遺物実測図(1)

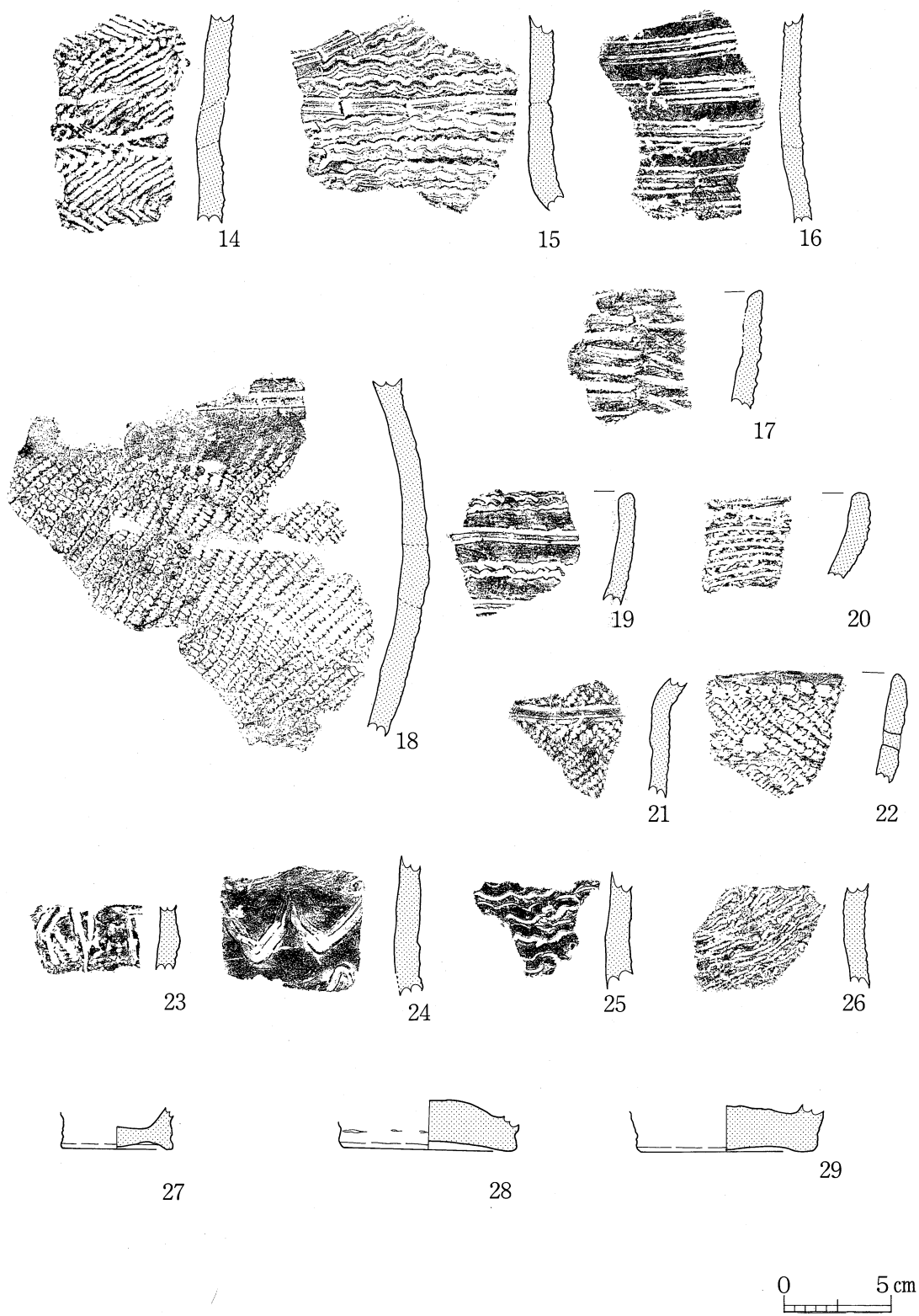


图104 03住出土遺物実測図(2)

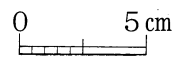
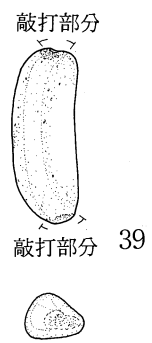
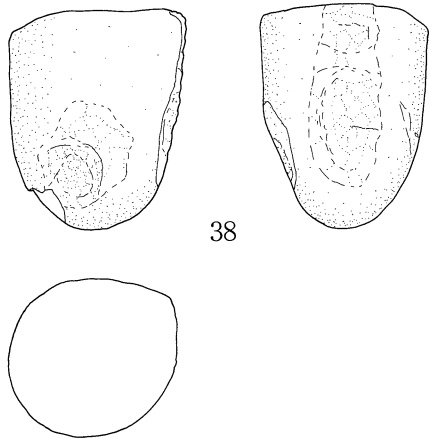
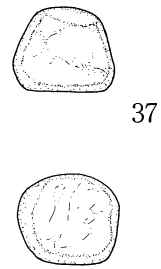
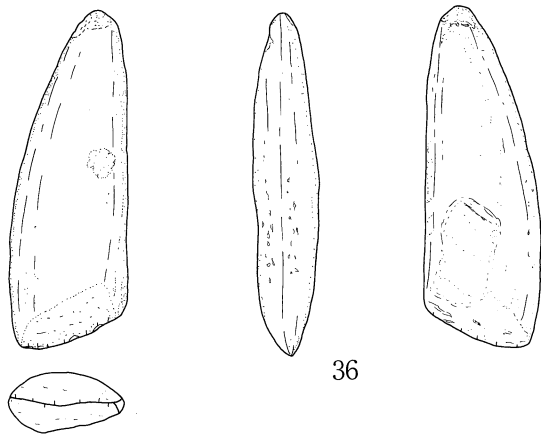
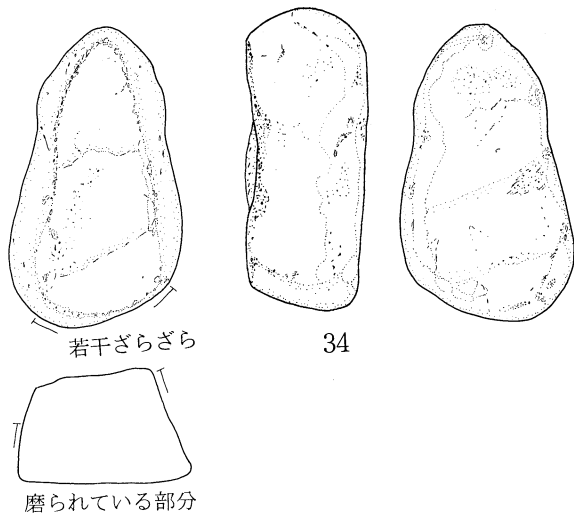


図105 03住出土遺物実測図(3)

05住 (図106 図版49)

位置 E 2-15、16 F 2-3、4 Gに位置する。

規模 6.22m×5.70mの長方形を呈する。主軸方向 N-37°-W。

壁高 北壁0.40m・東壁0.41m・南壁0.41m・西壁0.30m程度となっている。

床面 ソフトローム～ハードロームを地床としている。中央から南壁に至って硬化面が見られる。

施設 炉 北壁際に2基位置する。炉1が0.56m×0.48m×深さ8cmを測る。炉2は0.21m×0.21m×深さ6cmを測る。底面はハードロームが焼土ブロック化している。

柱穴 支柱穴はP 1、3、5、6、9、10で深さは P 1 0.85m、3 0.99m、5 0.74m、6 0.74m、9 0.86m、10 0.86m

その他は P 2 0.67m、4 0.59m、7 0.86m、8 0.56m、11 0.20m、12 0.15m、13 0.30m

遺物 全体で1415点程度出土している。全体的に出土しているが、南西壁際周辺と北壁隅に多く出土している。全体的傾向をみると単節斜縄文、羽状縄文施文の土器が主体を占め、客体的に竹管文による沈線文、コンパス文が使われている。

05住出土遺物 (図107～110 図版55～57)

1は混入遺物で口縁部に小突起(単位不明)をもっている。文様施文は細い沈線文と三角印刻文を施す。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。口径は12.4cm、遺存長7.9cmを測る。五領ヶ台式である。2は波状口縁で先端に小突起をもつ。文様施文は半截竹管にU字状の切り込みをいれ二つの先端部を作り押し引きしている。胎土に多量の繊維を混入している。焼成は良好で淡褐色を呈する。3は単純口縁で器面全体に単節斜縄文がおおう。胎土は繊維を多量に含んでいる。4は混入遺物で口縁下部に段を有している。竹管文を多用する。円形刺突文、連続爪形文、沈線文等が見られる。胎土は長石、雲母、石英、砂粒を混入する。焼成は良好で淡茶褐色を呈する。諸磯a式ないし浮島1a式であろう。5は斜方向の沈線文を施す。胎土は繊維、砂粒を含む。焼成はやや不良である。6も混入遺物で口唇部に連続爪形文、口縁下に半截竹管文による沈線文がおおう。焼成は良好で暗茶褐色を呈する。7は1と同じ個体である。8は口縁直下に半截竹管文による沈線文でその下には単節、無節縄文が施文される。胎土は繊維を多量に含む。9は口唇部に指頭圧痕による波状文、下部に無秩序な沈線文を描く。胎土に砂粒を混入する。10は受け口状の小突起の下に半截竹管文による連続爪形文が2種類使用されている。胎土に砂粒、長石、石英を混入する。11はコの字状口縁の上部を円形に穿って連続させている。竹管文による沈線文を施す。胎土に繊維を混入する。12は原体等不明であるが、2種類以上の縄文を施文している。胎土に繊維を多量に混入している。焼成は良好で橙褐色を呈する。異条縄文か。13は単節斜縄文を地文として頸部に竹管文による押し引き文を施文している。内面はよく磨かれている。14は12の施文原体に似ている。15は目の細かい単節縄文と多条縄文の2種類によって施文されている。胎土に繊維雲母を混入する。16は条痕文を施文している。胎土に石英、長石、繊維、砂粒を混入する。焼成はやや不良である。17は単節縄文を軸に巻いた木目状撚糸文を施文している。胎土に繊維を混入する。18は竹管状工具による施文で竹管をU字状にカットして2つの先端部を作っている。施文はこの工具による押し引き文と沈線文によって構成される。胎土に繊維を混入する。19は3本を1単位とした多截竹管文によって沈線を施文する。胎土に繊維を多く混入する。焼成は良好である。20は混入遺物で、貝殻腹縁文を施文している。胎土には繊維を含まない。21は竹管状工具によるコンパス文を施文している。胎土

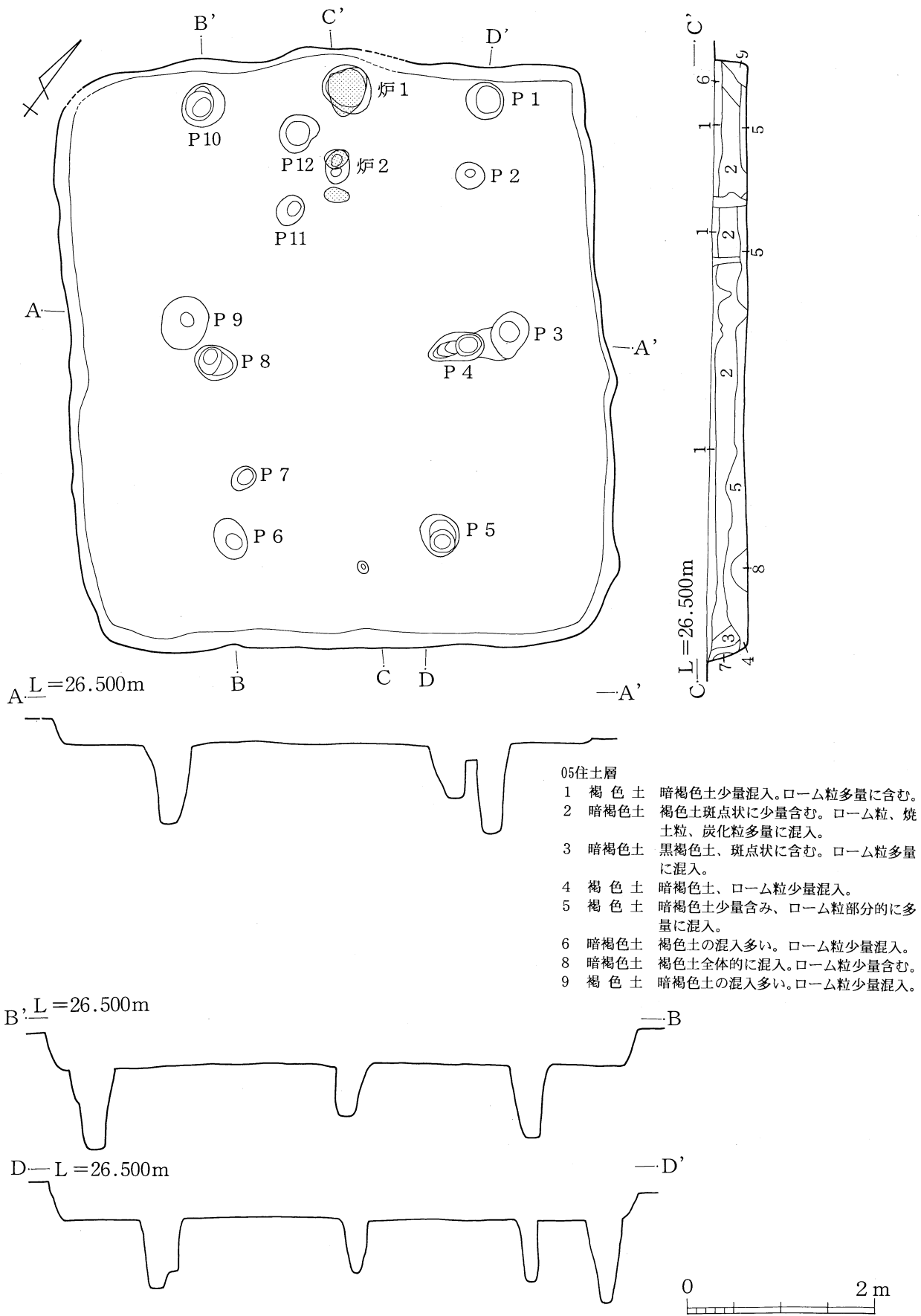


図106 05住遺構平面図

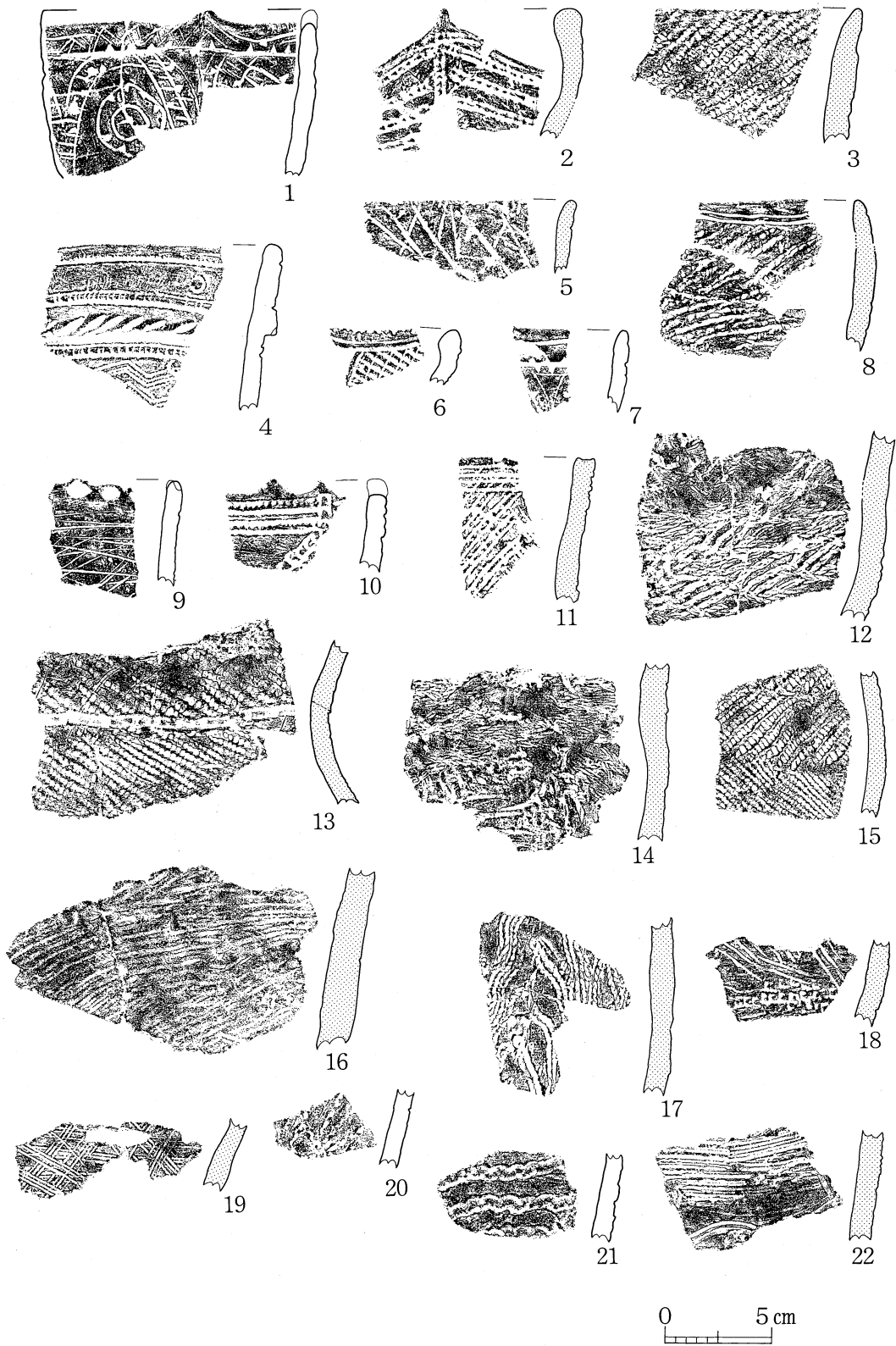


图107 05住出土遺物実測図(1)

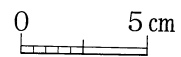
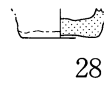
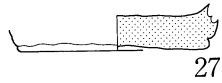
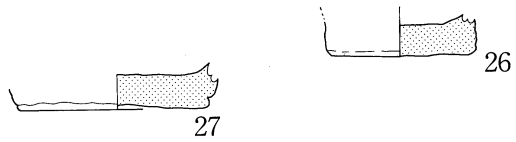
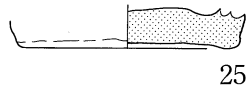
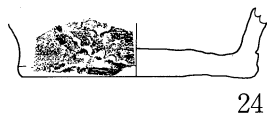


图108 05住出土遺物実測図(2)

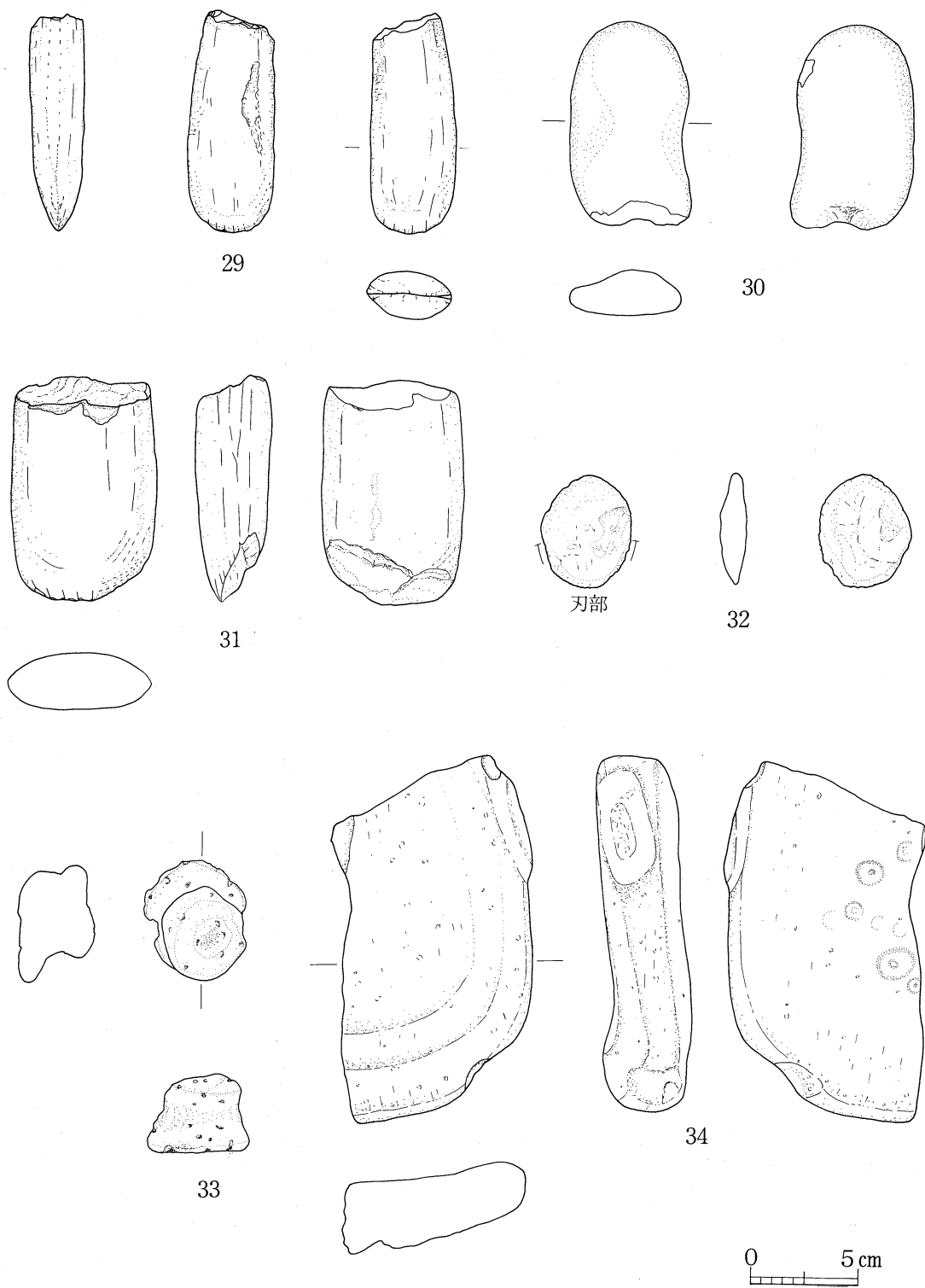


图109 05住出土遺物実測図(3)

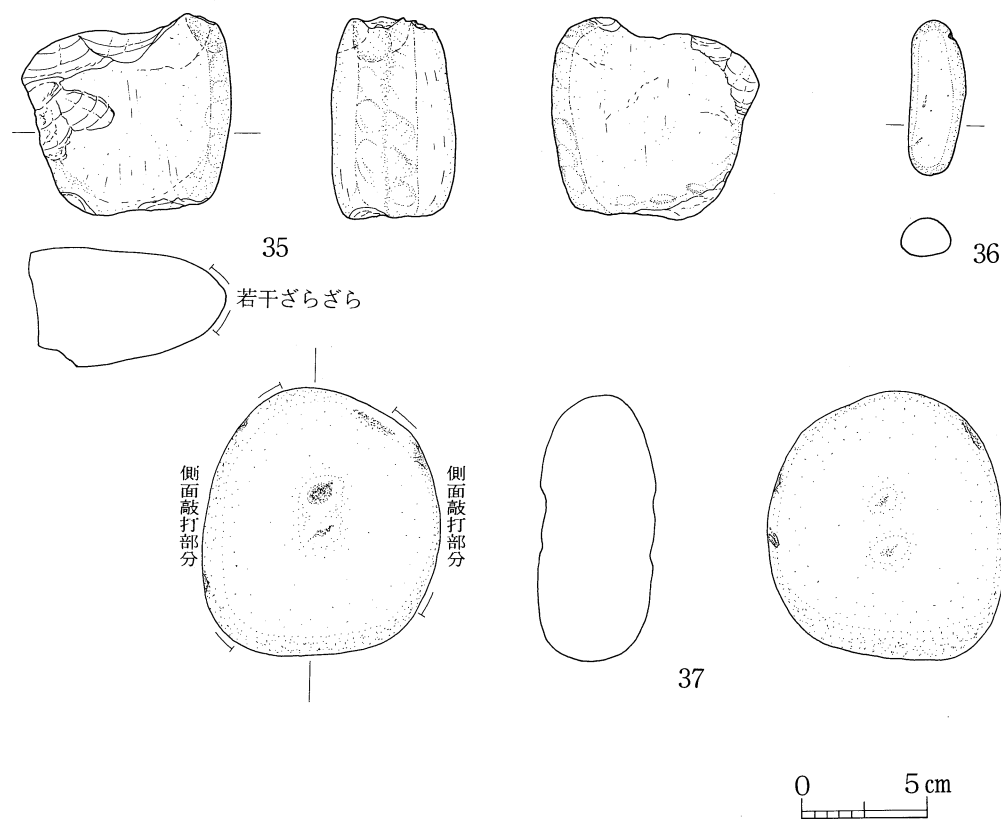


図110 05住出土遺物実測図(4)

に長石、雲母等の鉱物、繊維、砂粒を含んでいる。色調は淡褐色を呈する。**22**は竹管文による沈線文を施文する。胎土に長石、雲母等の鉱物、繊維、砂粒を含んでいる。**23**はほぼ完形に近い土器で口径20.0cm、器高29.5cm、底径9.5cmを測る。単純口縁の深鉢でやや内湾ぎみに立ち上がる。文様施文は単節斜縄文が器面全体をおおう。胎土は繊維を多量に含んでいる。**24~28**は底部一括したもので、**24**以外は胎土に繊維を混入している。底径は**25**が8.3cm、**26**が5.6cm、**27**が7.3cm、**28**が3.0cmを測る。**29~37**は石器を一括したものである。**29**は基部欠損の乳棒状石斧で遺存長10.3cm、幅5.0cm、重量177.7gを測る。刃部は両面からよく研がれている。石材は凝灰岩を使用している。**30**は裏面を磨石、片側先端部を敲石として使用している。全長9.6cm、幅5.7cm、重量186.1gを測る。石材は流紋岩を使用している。**31**は大型の磨製石斧で基部及び刃部先端を欠損する。遺存長10.4cm、幅7.8cm、重量418.1gを測る。石材は蛇紋岩？を使用している。**32**は扁平な石の半分近くに刃部を取りつけている。礫斧？であろうか。5.3cm×4.2cmで重量29.7gを測る。石材はホルンフェルスを使用している。**33**は軽石製の浮子でくびれ部を持つ。6.1cm×4.8cm、重量9.8gを測る。**34**は石皿の欠損品で遺存長17.0cm、幅9.3cm、重量763.8gを測る。周縁が若干高い、側面に突起が2ヶ所、裏面に凹みが3ヶ所程度有する等の特徴が見られる。石材は安山岩を使用している。**35**は磨石の欠損品で8.1cm、重量406.7gを測る。側面はややざらざらしている。表裏面は良く磨られている。破損面もまた磨られている。石材は安山岩を使用している。**36**は全体に滑らかな面を持つ石片である。全長6.2cm、幅2.3cm、重量28.0gを測る。石材は流紋岩を使用している。**37**は表裏面を磨石として、側面を敲石として使用している。10.7cm×9.3cmで重量722.8gを測る。表裏面中央に浅い凹み面をもつ。石材は砂石を使用している。

b. ピット

概要 本遺跡において検出したピットは12基を数える。この内明らかに性格の判明する遺構は落とし穴状遺構と炉穴である。前者はP-13、17が該当し、後者はP-9、11、14、16、20が該当する。その他のピットは人為的掘り込みのみで性格は不明である。

P-02 (図111 図版50)

位置 G2-16Gに位置する。

規模 3.58m×1.45m×深さ0.35mの2ヶ所に底部をもつ楕円形を呈する。主軸方向 N-52°-W

所見 覆土は暗褐色土中心となっている。遺物なく時期不明。

P-09 (図111)

位置 H3-6Gに位置する。

規模 1.6m×1.55m×深さ0.48mの不整形を呈する。主軸方向 N-18°-E

所見 覆土は暗褐色土中心に褐色土を混入する。部分的に焼土粒を含む。遺物出土せず時期不明。

P-10 (図111)

位置 G2-12Gに位置する。東側を溝状遺構に切られる。

規模 1.4m以上×1.11m×深さ0.24mの楕円形を呈する。主軸方向 N-75°-W

所見 覆土は暗褐色土中心となっている。部分的に焼土粒をごく少量含む。遺物は前期の土器片が出土している。

P-11 (図112 図版50)

位置 G3-10Gに位置する。

規模 1.2m×1.06m×深さ0.65mの円形を呈する。主軸方向 不明

所見 覆土は暗褐色土中心となっている。最上層に焼土粒をごく少量含んでいる。遺物なく時期不明。

P-13 (図112 図版50)

位置 G2-7Gに位置する。03住のコーナー部分を切っている。

規模 1.56m×1.58m×深さ2.50mの円形を呈する。主軸方向 N-62°-W

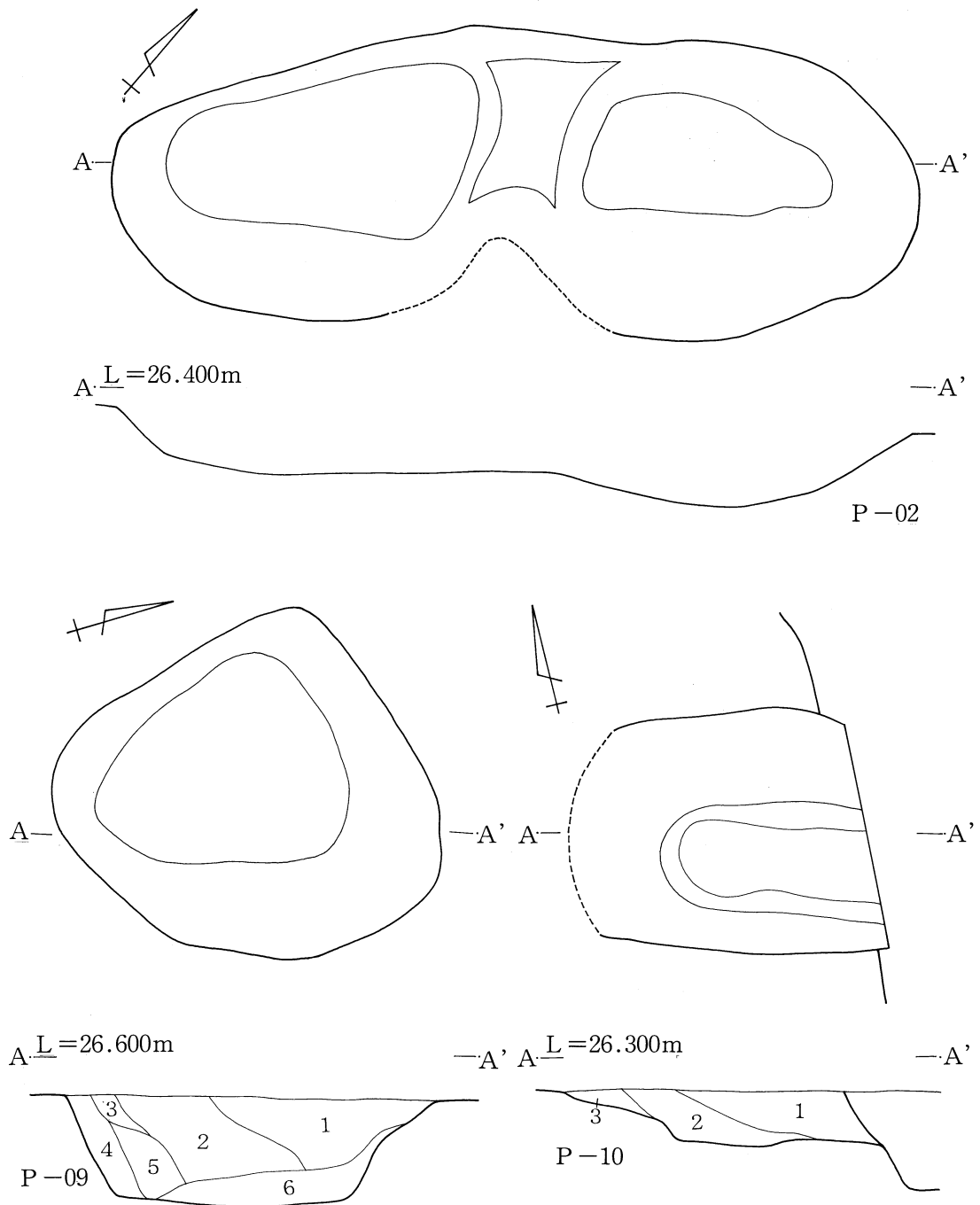
所見 覆土は上層において黒褐色土で下層は褐色土のようである。断面形状は上面で1.7m、底面で0.7mとそう細くはならない。遺物なく時期不明。

P-14 (図112)

位置 G2-3Gに位置する。

規模 1.25m×1.05m×深さ0.33mの不整形円形を呈する。主軸方向 不明

所見 覆土は焼土粒を含んだ暗褐色土主体に堆積している。底面には0.78m×0.50m×厚さ0.11mの範囲で焼土粒主体とした暗褐色土が堆積していた。遺物は早期の土器が出土している。



P-09土層

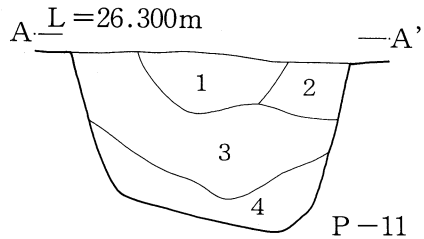
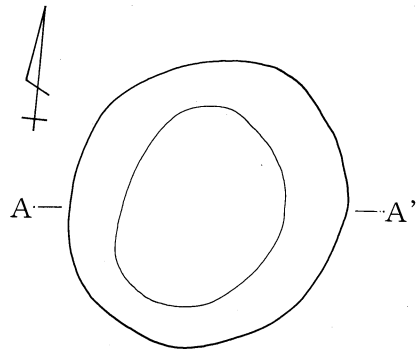
- 1 暗褐色土 褐色土主体にローム粒、ロームブロック少量混入。
- 2 暗褐色土 褐色土、ロームブロック、焼土粒少量混入。
- 3 暗褐色土 褐色土、ローム粒少量混入。
- 4 暗褐色土 褐色土少量混入。
- 5 褐色土 暗褐色土、ローム粒少量混入。若干ぼそぼそ。
- 6 褐色土 暗褐色土、ローム粒多く含む。しまり、粘性あり。

P-10土層

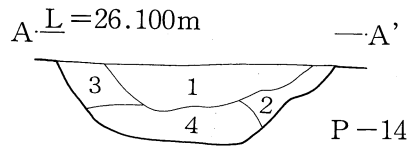
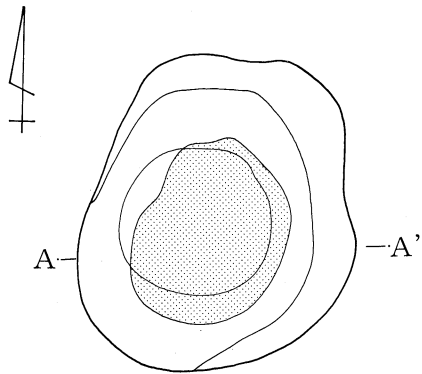
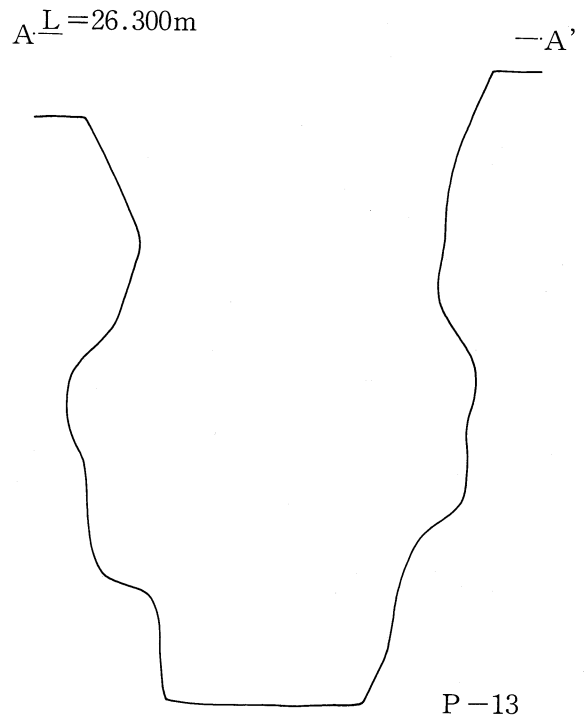
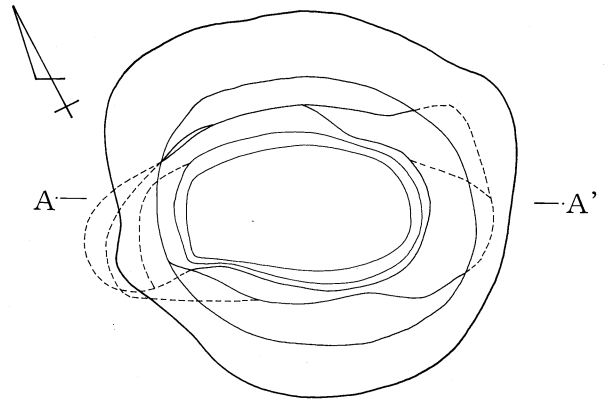
- 1 暗褐色土 褐色土斑点状に多く含む。ローム粒、焼土粒少量混入。
- 2 暗褐色土 褐色土斑点状に少量含む。ローム粒少量混入。
- 3 褐色土 暗褐色土の混入多い。ローム粒少量混入。

図111 P-02.09.10遺構平面図





- P-11土層
- 1 暗褐色土 褐色土を少量含む。ローム粒、焼土粒わずかに混入。
 - 2 暗褐色土 褐色土の混入多い。ローム粒少量含む。
 - 3 暗褐色土 褐色土斑点状に多く含む。ローム粒多量に混入。
 - 4 褐色土 ローム粒若干含む。



- P-14土層
- 1 暗褐色土 褐色土斑点状に含む。ローム粒、焼土粒多量に混入。
 - 2 褐色土 暗褐色土、ローム粒、焼土粒少量混入。
 - 3 褐色土 暗褐色土少量含む。ローム粒、焼土粒微量混入。
 - 4 赤褐色土 焼土粒主体に、暗褐色土少量混入。

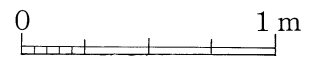


図112 P-11.13.14遺構平面図

P-16 (図113 図版50)

位置 F 2-10Gに位置する。

規模 1.76m×1.26m×深さ0.22mで2ヶ所が張り出した不整形を呈する。主軸方向 不明

所見 覆土は上層が暗褐色土、下層が褐色土となっている。底面からやや浮いて焼土が検出された。範囲は西側が0.45m×0.40m、東側が0.24m×0.17mとなっている。遺物は小片のため、時期不明。

P-17 (図114 図版50)

位置 F 3-9Gに位置する。

規模 2.17m×1.45m×深さ2.31mの楕円形を呈する。主軸方向 N-23°-W

所見 覆土は上層で暗褐色土と黒褐色土となっている。遺物は覆土最上層から中期の遺物がまとまって出土している。

P-18 (図113 図版50)

位置 F 3-10Gに位置する。

規模 0.65m×0.68m×深さ0.38mの円形を呈する。主軸方向 不明

所見 覆土は暗褐色土と褐色土となっている。遺物出土せず時期不明。

P-19 (図113)

位置 E 2-11Gに位置する。

規模 0.83m×0.83m×深さ0.15mの円形を呈する。主軸方向 不明

所見 覆土は黒褐色土となっている。遺物は前期の土器が出土している。

P-20 (図114 図版50)

位置 E 3-2Gに位置する。

規模 1.75m×0.85m×深さ0.38mで張り出し部をもつ楕円形を呈する。主軸方向 不明

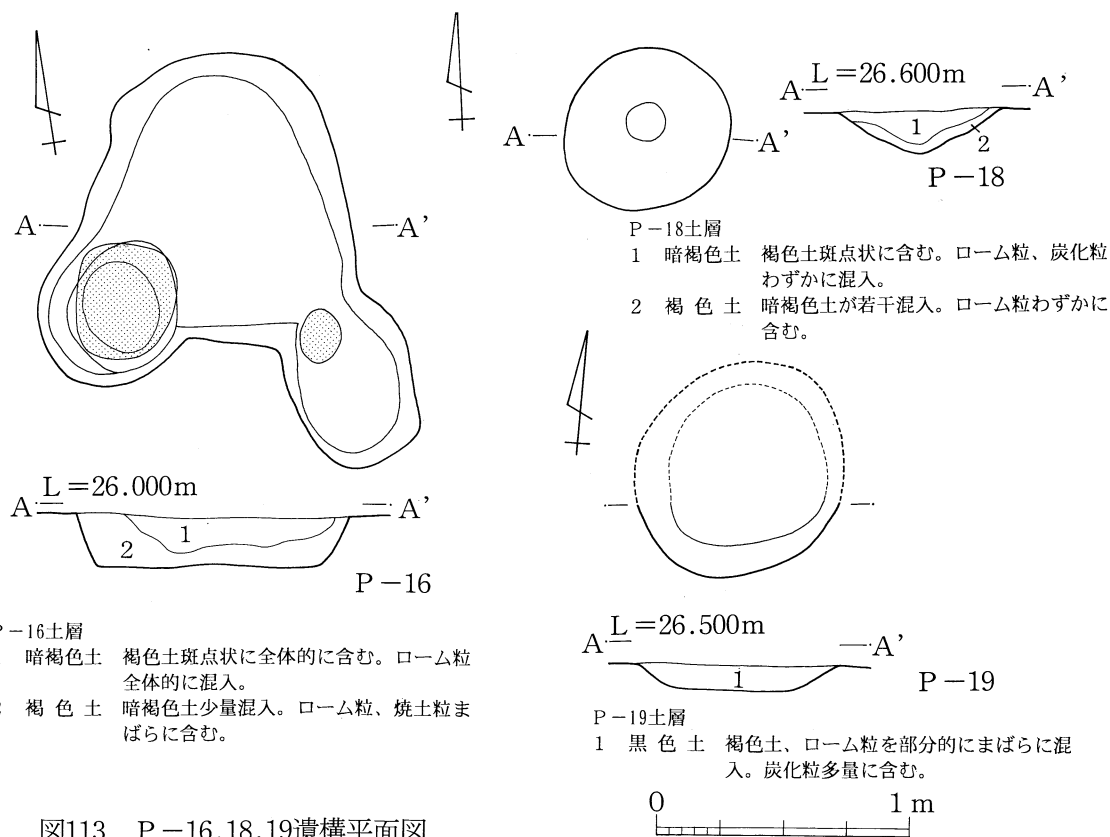


図113 P-16.18.19遺構平面図

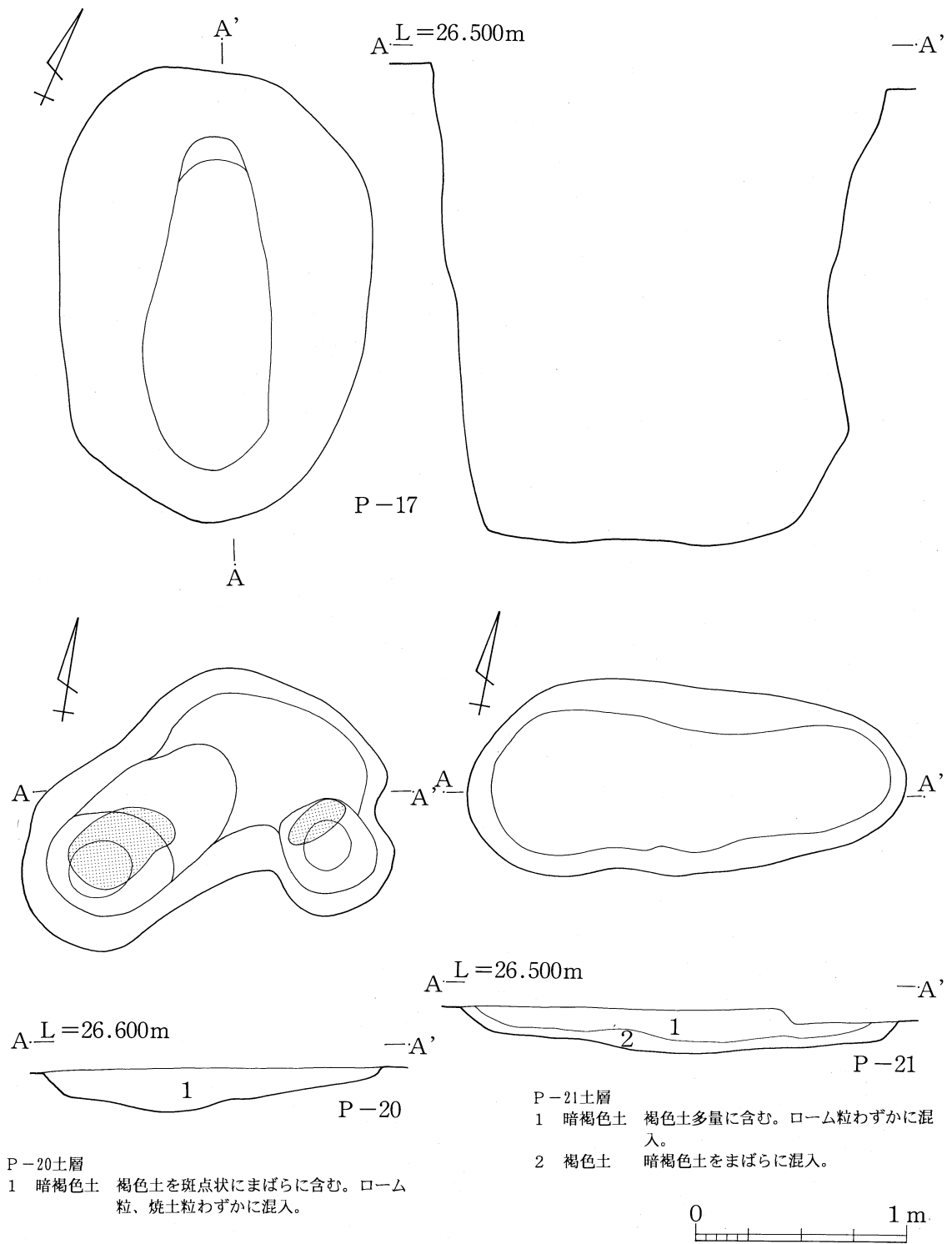


図114 P-17.20.21遺構平面図

所見 覆土は暗褐色土でわずかに焼土粒を含む。2ヶ所において焼土混じりの暗褐色土を検出。遺物は17点程度で早期の土器が出土している。

P-21 (図114 図版50)

位置 E3-1Gに位置する。

規模 2.08m×0.9m×深さ0.22mの楕円形を呈する。主軸方向 N-79°-E

所見 覆土は暗褐色土となっている。遺物は前期の土器片が出土している。

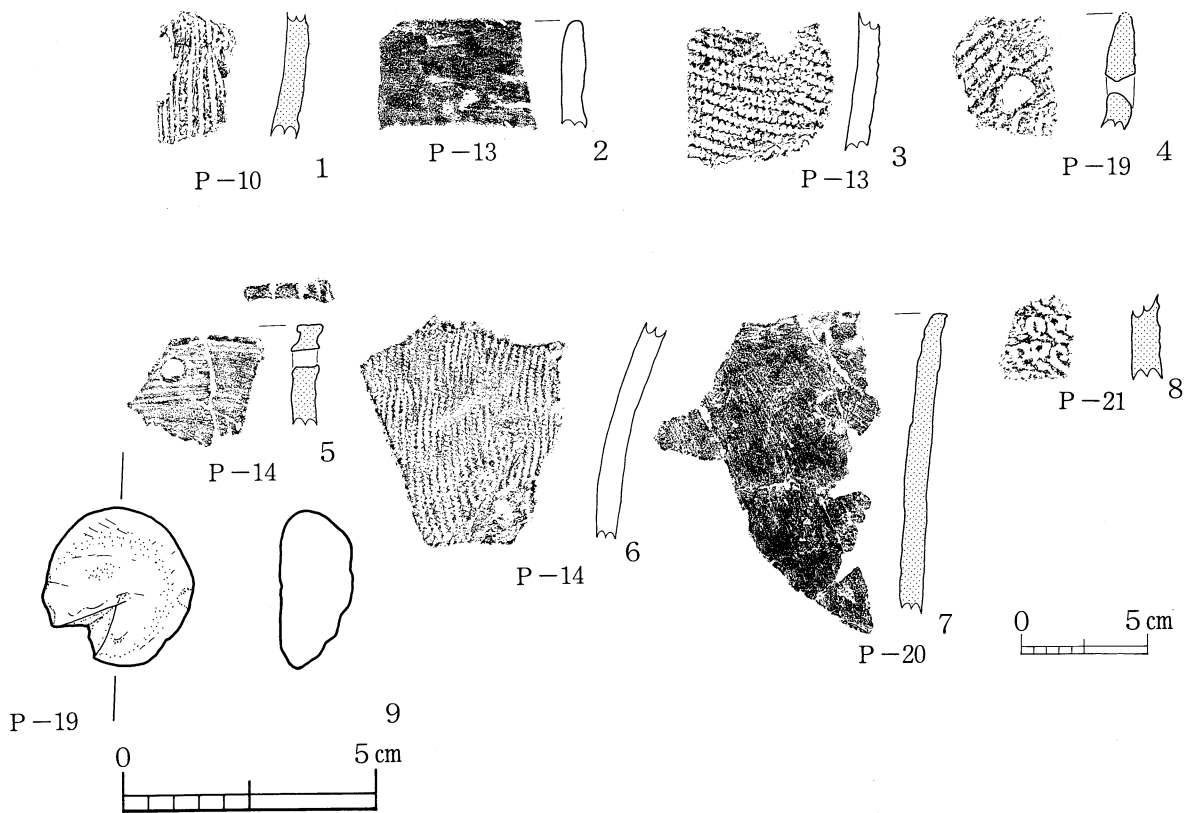
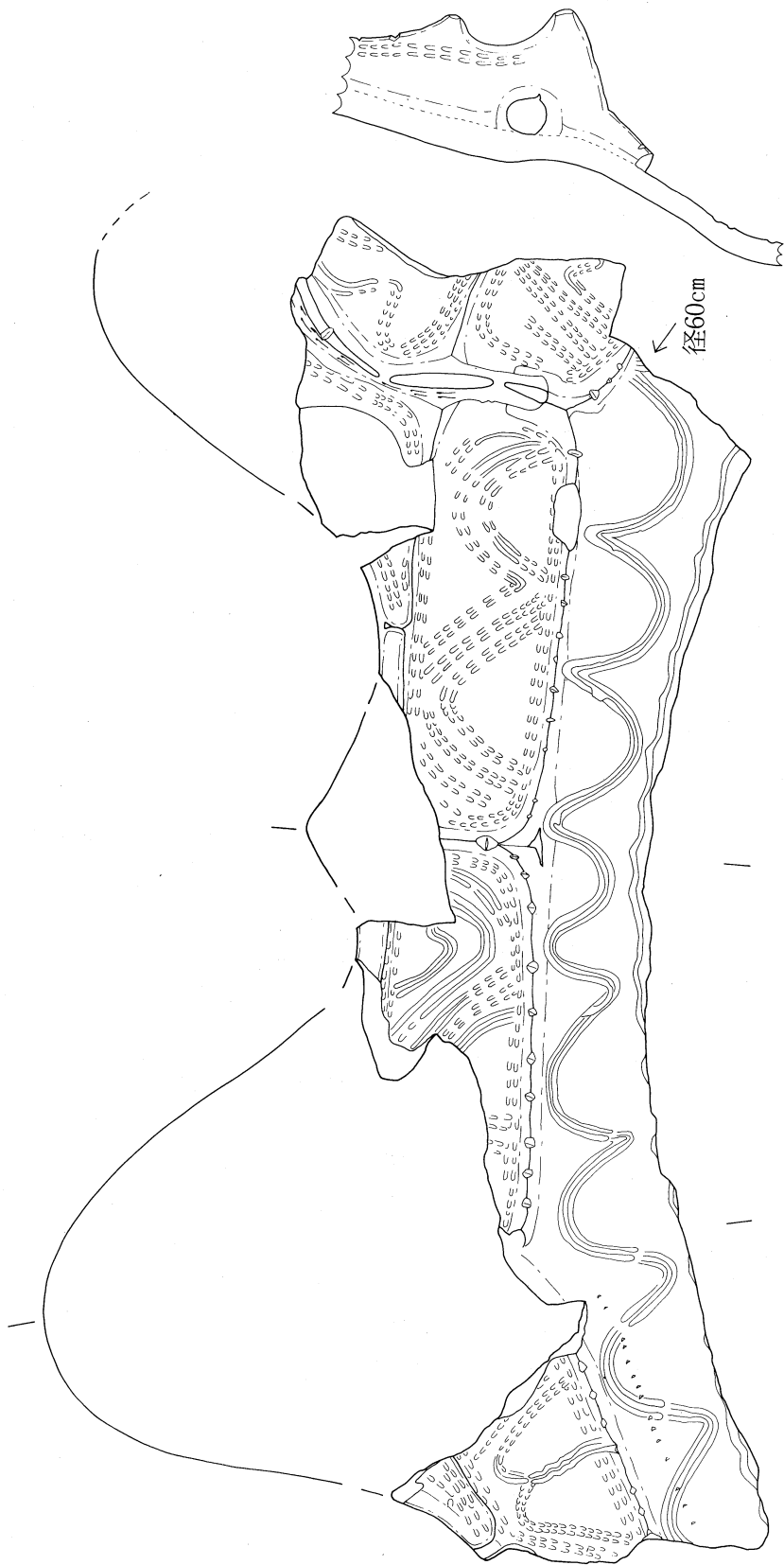


図115 ピット内出土遺物実測図(1)

ピット内出土遺物 (図115、116 図版58)

1はP-10出土の土器で竹管文による沈線を施文する。胎土に繊維、長石を混入する。2はP-13出土の土器で口縁部が遺存する。特に目立った文様施文は見られないが外面に輪積痕が明瞭に残る。胎土は長石、雲母、砂粒が混入する。前期後半か? 3もP-13出土の土器で単節縄文を施文する。胎土は長石、雲母、砂粒が混入する。2、3共混入遺物である。4、6、9はP-19出土の遺物である。4は口縁部が遺存する小片で無節縄文を施文する。焼成後の穿孔がみられる。胎土には繊維を混入する。6は目の細かい単節縄文を施文する。胎土には長石、雲母、砂粒を混入する。特に雲母の混入は顕著である。9は長さ2.8cmで重量14.4gを測る。V字状の刻み目をもつ石器である。刻みは1カ所のみで対とみられる部分は片鱗もみられない。5はP-14出土の土器で口縁部が遺存する。口唇部の形状はコの字状を呈する。頂部に刻み目が3カ所、口縁下に焼成前の穿孔が2カ所見られる。器面内外面全体に横位の条痕文が施文される。胎土に長石、少量の繊維を混入する。焼成は良好で黒灰色を呈する。7はP-20出土の土器で口縁から胴部が遺存する。口唇部の形状はコの字状を呈する。外面においては弱い縦方向の条痕文、内面では部分的に横方向の条痕文を施す。胎土に繊維、少量の長石と雲母を混入する。焼成は良好で、外面暗橙褐色、内面暗褐色を呈する。8はP-21出土の土器で小片である。この遺跡ではあまり出土していないループ文を施文している。胎土には繊維、砂粒を混入する。10はP-17出土の土器で遺構確認面において出土している。遺構とは全く関連がない。混入遺物である。遺存は波状口縁部分から胴部上位にかけてである。胴部境での復元径は60.0cmを測る。口縁は小波状と大波状によって構成される。文様は隆帯に沿ったかたちで2列1単位の竹管状工具による押し引きと同工具による3重の円弧様の押し引きによって有節線文を施文している。また隆帯より下には半截竹管文による波状沈線文がみられる。胎土には雲母を多量に含んでいる。焼成は良好で淡橙褐色を呈する。



P-17 10

図116 ヒット内出土遺物実測図(2)

II 遺構外出土遺物 (図117 図版58)

1は竹管文の先端による沈線文を施文する。胎土には少量の繊維を混入する。2は半截竹管による平行沈線文とコンパス文を施文する。胎土には繊維を混入する。3は口縁部が遺存する。竹管文による粗い沈線文を施文する。4は口縁直下に隆帯をつくって二重口縁としている。文様は棒状工具による刺突文と燃糸文を施文する。胎土には繊維を混入する。5は口唇部がやや内弯ぎみに立ち上がる。縄文を地文として竹管文による沈線を施文する。胎土に繊維を混入する。6は隆帯と竹管状工具による沈線文を施文している。胎土に雲母、長石を混入する。7は胴部に角押文を施文する。胎土は長石、雲母を混入する。外面は黒灰色を呈する。8は隆帯にそって有節線文と貝殻文?を施文する。胎土に長石、雲母を混入する。焼成は良好で内外面共淡茶褐色を呈する。9は口唇部が遺存する小片で竹管状工具によるコンパス文を施文する。胎土に繊維を混入する。10も8に類似した文様をもつ。11は隆帯上に刻み目を施す。有節線文と沈線文により施文される。胎土に雲母を多量に混入する。12は口縁上部に刻み目、胴部内面に横位の条痕文を施文する。焼成以前の穿孔がみられる。胎土に繊維を混入する。13は石鏃で全長2.5cm、幅1.7cm、重量0.9gを測る。石材は黒曜石を使用している。14も石鏃で全長2.2cm、幅1.3cm、重量0.7gを測る。両面とも細部まで調整される。石材は珪質頁岩を使用している。15は分胴形ないし短冊形の打製石斧である。刃部の調整は粗く裏面は欠損後再度加工して使用している。刃部幅7.3cmを測る。石材は安山岩である。

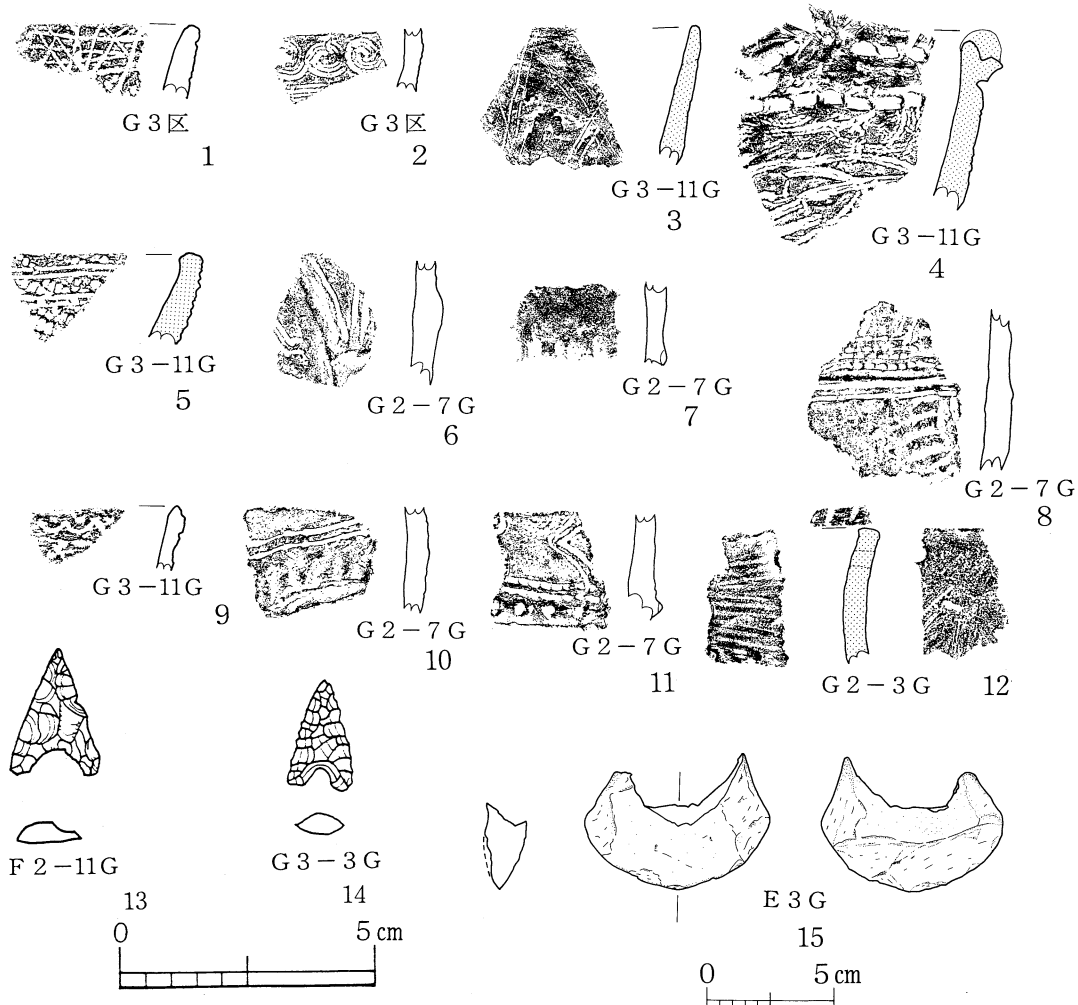


図117 遺構外出土遺物実測図

Ⅲ 小結

縄文時代 検出した遺構は早期の炉穴3基（P-14、16、20）、前期黒浜式期の住居跡4軒、前期の用途不明ピット2基（P-19、21）、時期不詳の落とし穴状遺構2基（P-13、17）、その他時期、性格不明のピット5基が検出された。

住居跡の基本データ

| | | | | |
|-----|----|--------------------|------|---------|
| 01住 | 規模 | 5.48m×4.92mの隅丸長方形 | 主軸方向 | N-12°-W |
| 02住 | 規模 | 2.93m×2.8m以上の隅丸長方形 | 主軸方向 | N-31°-W |
| 03住 | 規模 | 5.22m×5.20mの正方形 | 主軸方向 | N-39°-E |
| 05住 | 規模 | 6.22m×5.70mの長方形 | 主軸方向 | N-37°-W |

全て黒浜式期の住居で規模からは01、03、05住と02住に大別できる。占地は各住居を結んで円弧状となっている。遺物は02住を除いて覆土中において前期後半～中期初頭の土器群が出土する。ただ、各住居跡ともその主体となる土器は、胎土に繊維を含む、縄文施文、縄文と竹管文の組合せ等の特徴を有し黒浜式期でも前半にはいかないまでも中葉頃の時期を想定できると思う。また、平面形態も正方形、長方形で4本ないし6本の支柱跡や炉跡の規格性を考慮して関山式期に近い状況が窺えるのではなかろうか。

ピットの基本データ

| | | | | |
|-----------|----|----------------------------------|------|---------|
| P-14 (炉穴) | 規模 | 1.25m×1.05m×深さ0.33mの不整円形 | 主軸方向 | 不明 |
| P-16 (炉穴) | 規模 | 1.76m×1.26m×深さ0.22mで2ヶ所が張り出した不整形 | 主軸方向 | 不明 |
| P-20 (炉穴) | 規模 | 1.75m×0.85m×深さ0.38mで張出し部をもつ楕円形 | 主軸方向 | 不明 |
| P-13 (落穴) | 規模 | 1.56m×1.58m×深さ2.50mの円形 | 主軸方向 | N-62°-W |
| P-17 (落穴) | 規模 | 2.17m×1.45m×深さ2.31mの楕円形 | 主軸方向 | N-23°-W |

炉穴の立地は標高約26.5m～27.0mの等高線上台地先端部分に位置する。平面形は16、20が類似性をもつ。出土遺物は14、20で広義の茅山式（子母口式か？）の土器片が出土している。

落とし穴状遺構はとくに立地に規格性は見られない。けもの道沿いであろうか。平面形は円形、楕円形と異にしている。埋没時の遺物にP-13では前期後半、P-17では中期阿玉台式期の土器片が出土している。時期はそれら以前の所産である。

報告書抄録

| | |
|------|--|
| ふりがな | ちばけんやちよし なかのだいいせき・をいのさくいせきほか ——にしやちよとうぶとちくかくせ いりじぎょうにせんこうしたまいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしよ |
| 書名 | 千葉県八千代市 仲ノ台遺跡・ライノ作遺跡他 ——西八千代東部土地区画整理事業に先行した埋蔵文化財発掘調査報告書 —— |
| 編著者名 | 森 竜哉 |
| 編集機関 | 八千代市西八千代遺跡群調査会 |
| 所在地 | 〒276 八千代市大和田新田312-5 TEL.0474-83-1151 |
| 発行年 | 西暦 1996年12月15日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---------------------------------|--|-------|------|---------------|----------------|---|---|------------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| なか 仲ノ台遺跡 | やちよし 八千代市 おおわ だしんでんあざなかの だいい 大和田新田字仲之台 1122外 | 12221 | 158 | 35度43分 37秒 | 140度04分 50秒 | 1987.1.19~ 1987.5.1 1988.1.11~ 1988.3.23 1997.2.23~ 1997.2.27 | 14,600m ² 490m ² | 区画整理 事業 |
| 芝山遺跡 | やちよし 八千代市 おおわ だしんでん 大和田新田899外 | 12221 | 159 | 35度43分 44秒 | 140度05分 03秒 | 1987.5.8~ 1987.6.30 | 3,500m ² | 区画整理 事業 |
| ライノ作遺跡 | やちよし 八千代市 おおわ だしんでん 大和田新田900外 | 12221 | 162 | 35度43分 37秒 | 140度05分 08秒 | 1987.7.1~ 1987.7.31 1988.7.18~ 1988.7.26 1988.11.16~ 1988.11.17 1988.12.1~ 1988.12.3 | 18,000m ² 6,510m ² 1,910m ² 2,240m ² | 区画整理 事業 |
| ライノ作南遺跡 <small>さくみなみ</small> | やちよし 八千代市 おおわ だしんでん 大和田新田911 | 12221 | —— | 35度43分 33秒 | 140度04分 58秒 | 1988.5.6~ 1988.6.18 | 2,000m ² | 区画整理 事業 |
| 八幡藪遺跡 <small>はちまんやぶ</small> | やちよし 八千代市 おおわ だしんでん 大和田新田1029-3 外 | 12221 | —— | 35度43分 16秒 | 140度04分 23秒 | 1988.6.29~ 1988.9.2 | 19,600m ² | 区画整理 事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---------|-----|------|----------------------|----------------------------|-------------|
| 仲ノ台遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 | 住居跡16軒、土坑62基 | 縄文土器、平安時代土師器・須恵器、土錘等 | 旧石器時代包含層2か所 |
| 芝山遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 | 住居跡3軒、土坑9基、 炉穴1基 | 縄文土器、縄文時代石鏃、平安時代須恵器等 | 無し |
| ライノ作遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 | 住居跡2軒、土坑12基、 炉穴4基 | 縄文土器、縄文時代石鏃・磨石・ m状土製耳飾等 | 無し |
| ライノ作南遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 | 住居跡4軒、土坑14基 | 縄文土器、縄文時代磨製石斧・石 鏃・石皿・磨石 | 無し |
| 八幡藪遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 | 土坑1基 | 縄文土器 | 無し |

遺跡全景 1



仲ノ台遺跡東側地区 全景

図版 2

遺跡全景 2



仲ノ台遺跡西側地区 全景

遺跡全景 3



芝山・ライノ作遺跡 全景



ライノ作南遺跡 全景

図版4

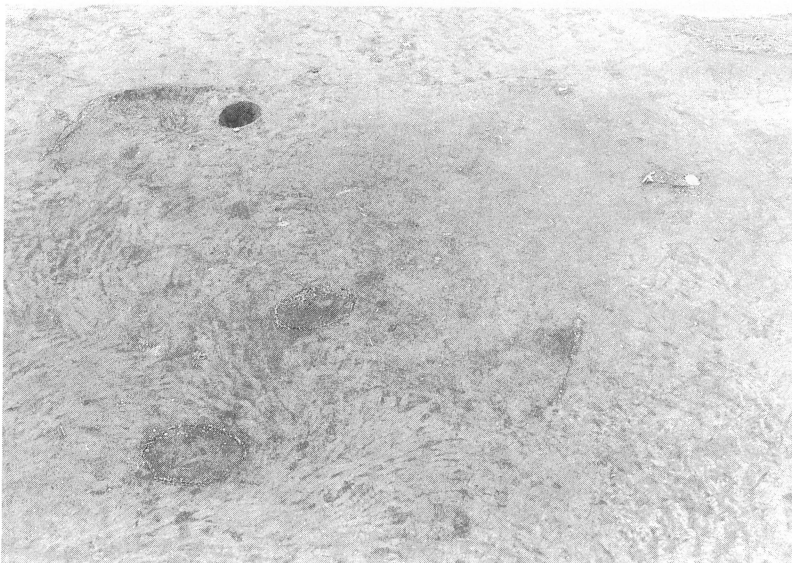
仲ノ台遺跡1



01住 全景



02住 全景



03住 全景



04住 全景



04住 カマド全景

図版6
仲ノ台遺跡3



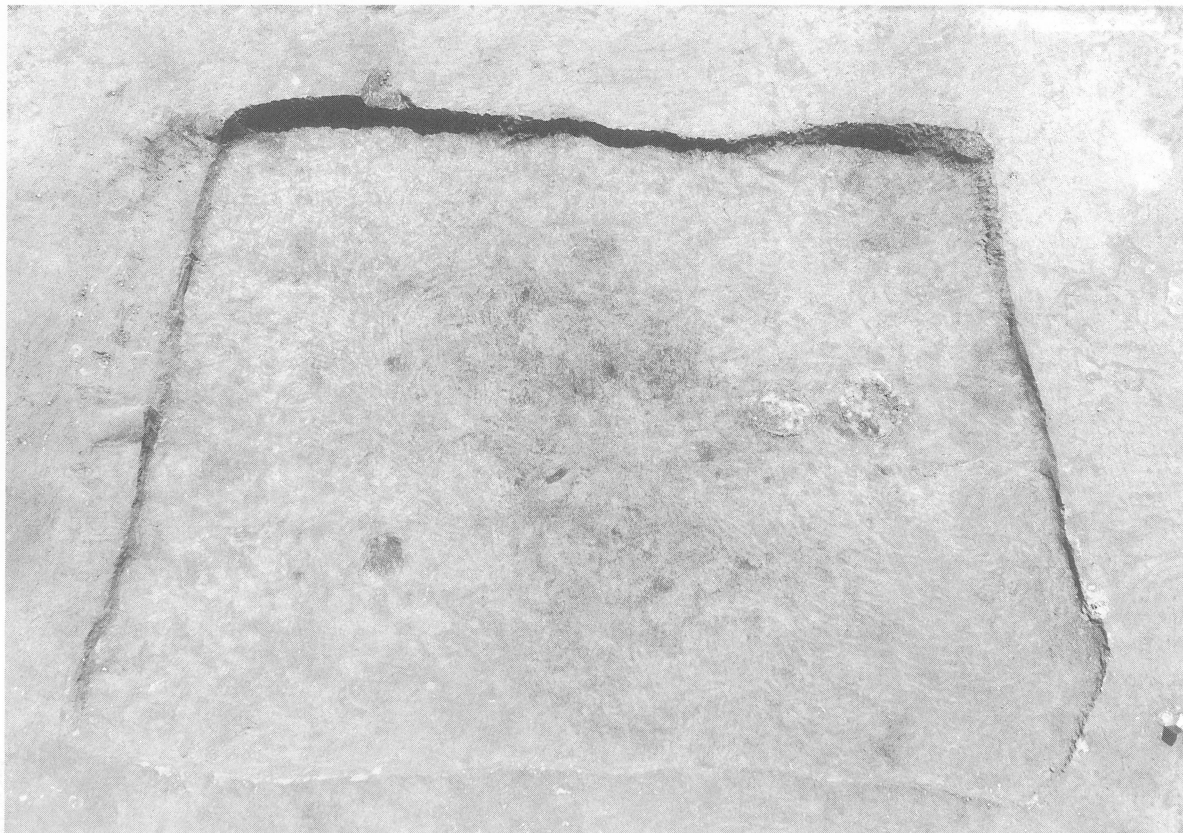
05住 遺物出土状況



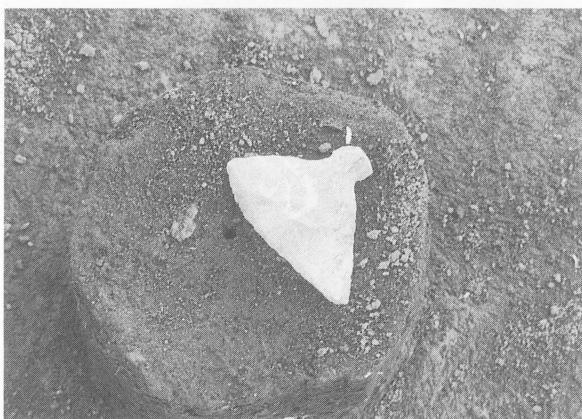
土器出土状況



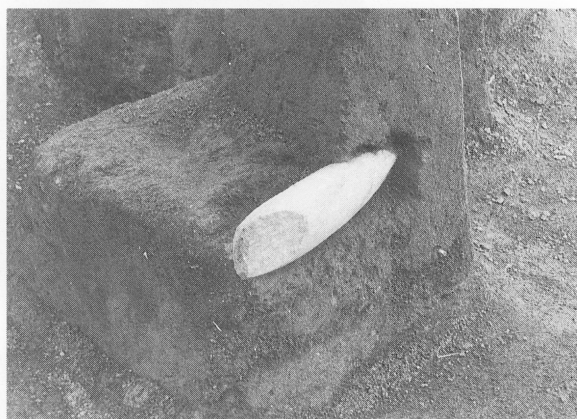
05住 全景



06住 全景



石七出土状況



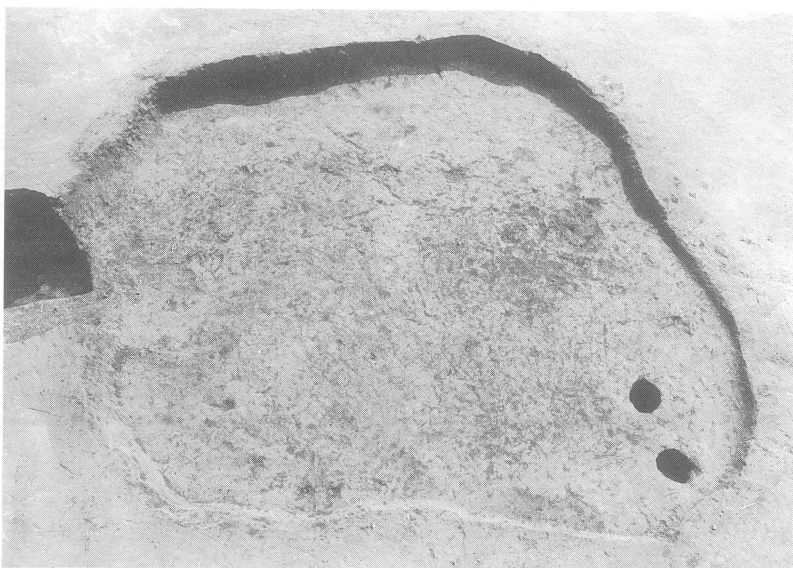
石斧出土状況



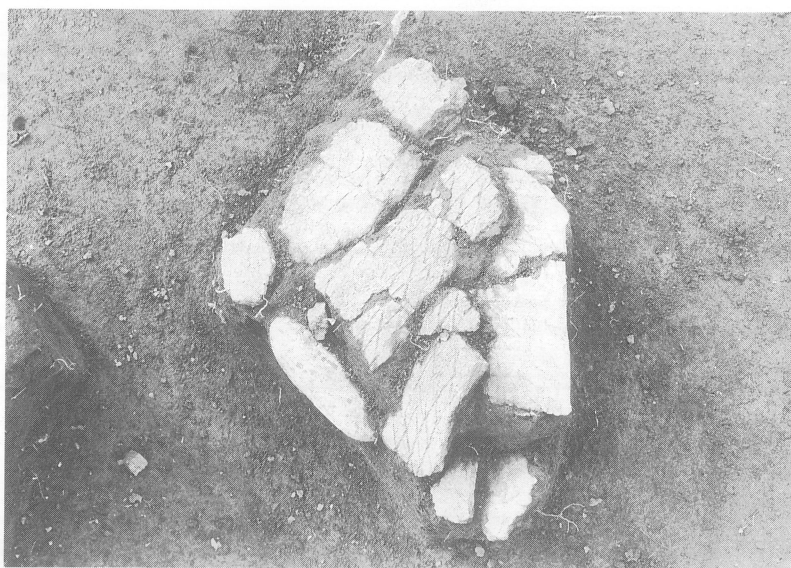
土器出土状況

図版 8

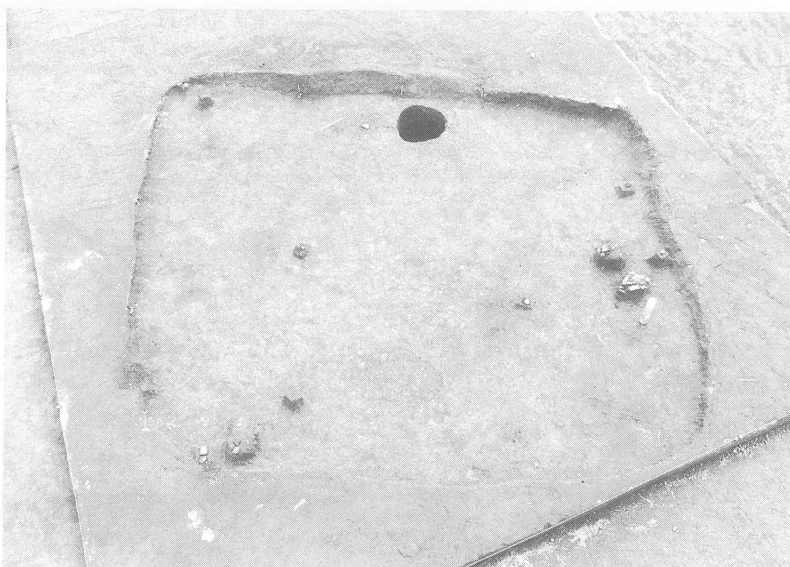
仲ノ台遺跡 5



07住 全景

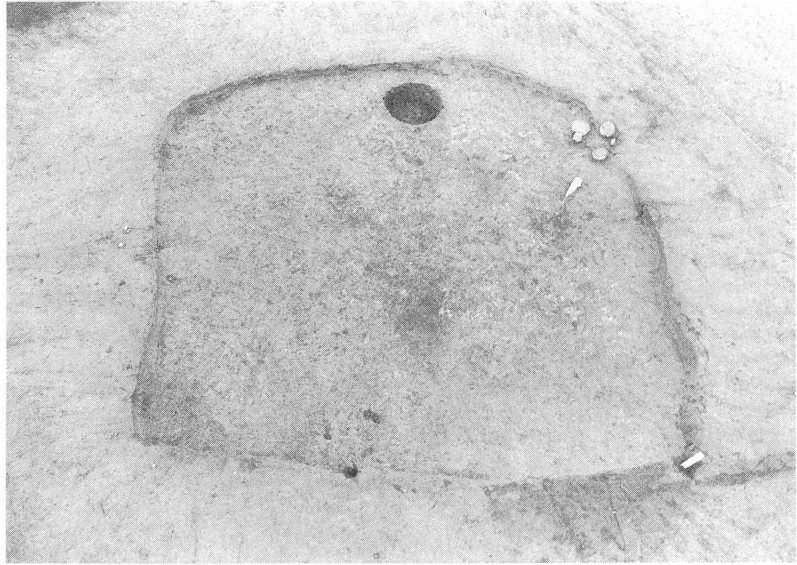


08住
遺物出土状況

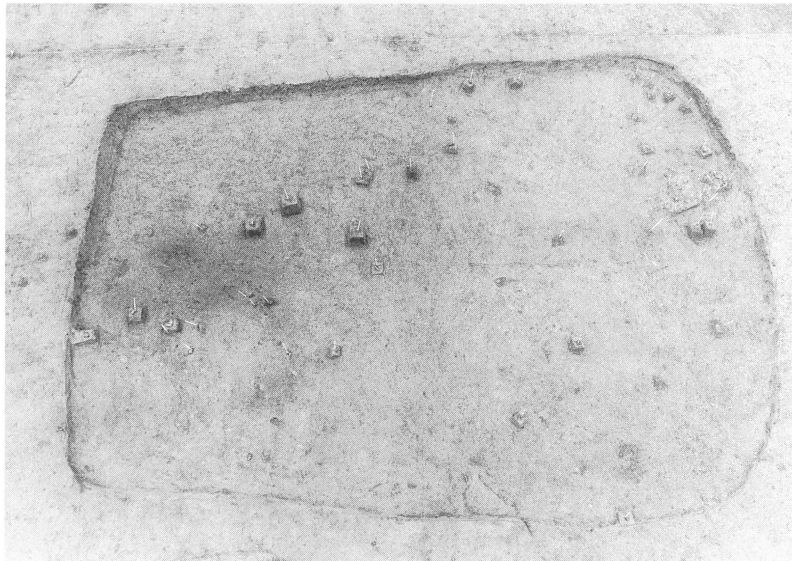


08住 全景

仲ノ台遺跡6



09住 全景



10住
遺物出土状況



10住 全景

図版10

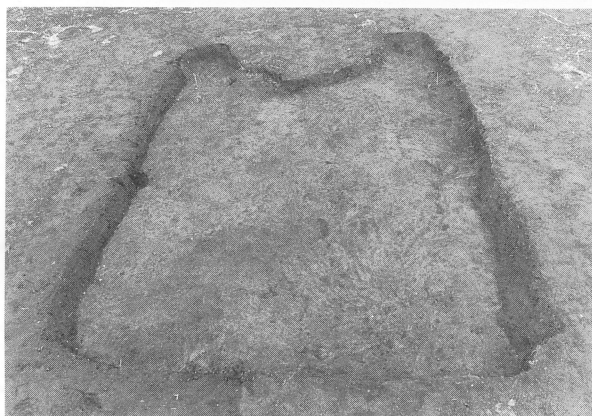
仲ノ台遺跡7



12住 遺物出土状況



12住 全景



13住 全景



14住 全景

仲ノ台遺跡 8



01号遺物集中地点



01号
遺物集中地点



02号遺物集中地点

図版12

仲ノ台遺跡9



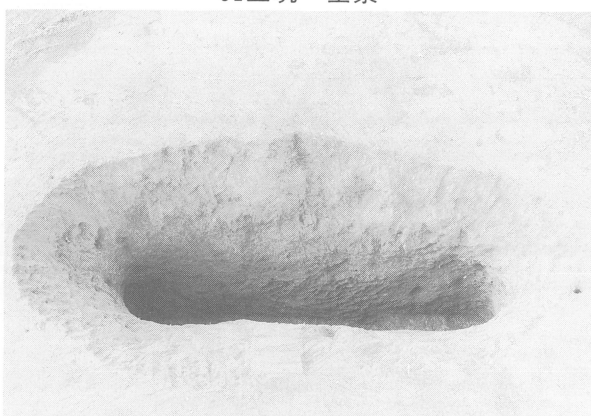
01土坑 全景



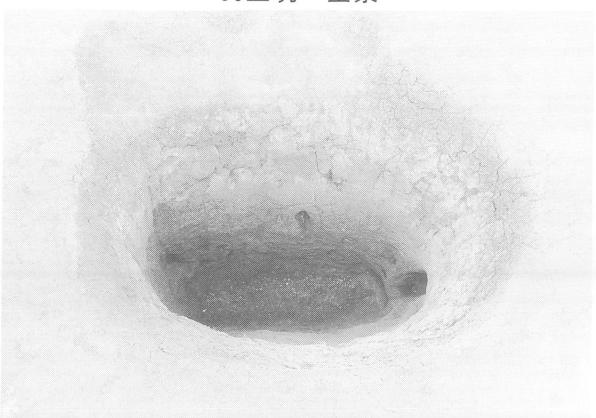
02土坑 全景



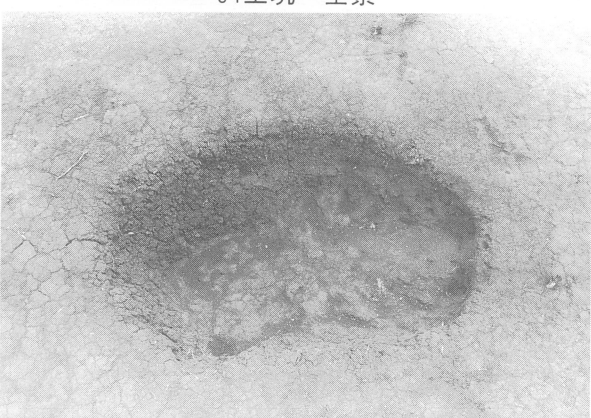
03土坑 全景



04土坑 全景



07土坑 全景



08土坑 全景



09土坑 全景



11土坑 全景

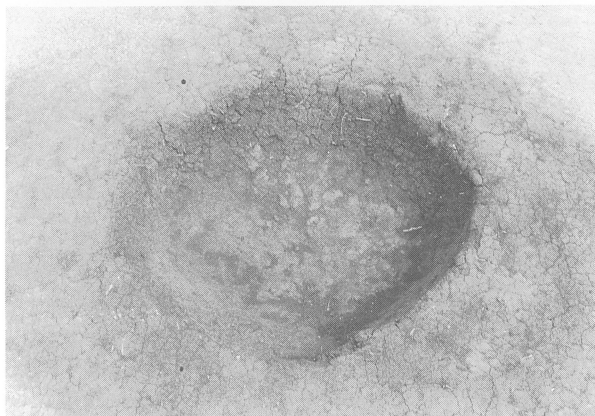
仲ノ台遺跡10



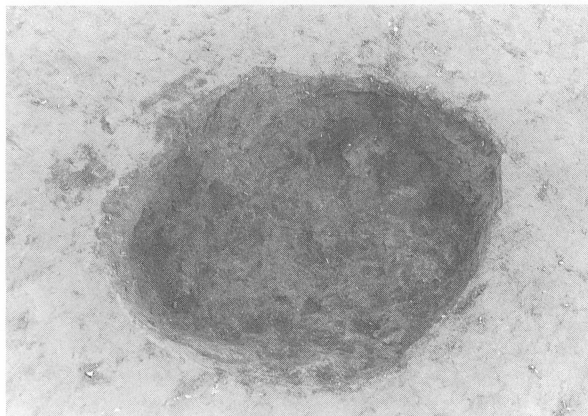
10土坑 遺物出土状況



10土坑 全景



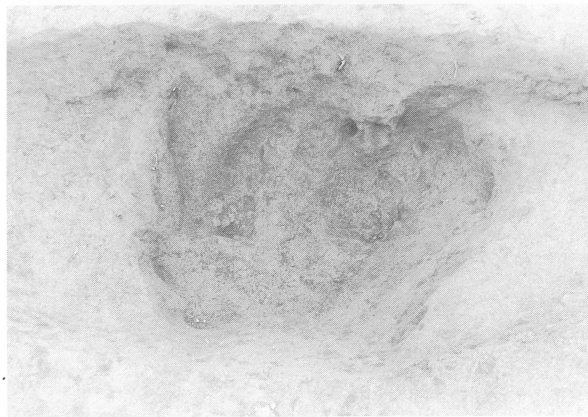
12土坑 全景



13土坑 全景



15土坑 全景



17土坑 全景



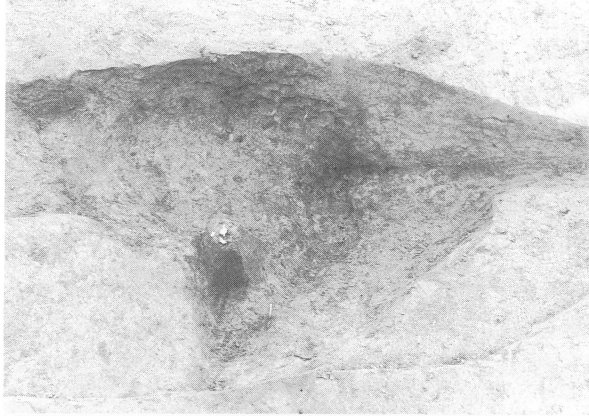
20土坑 全景



22土坑 全景

図版14

仲ノ台遺跡11



23土坑 全景



26土坑 全景



28土坑 全景



32土坑 全景



27土坑 全景



29土坑 全景



30土坑 全景



34土坑 全景